明治三十六年四月五日發行
毎月一回五日發行

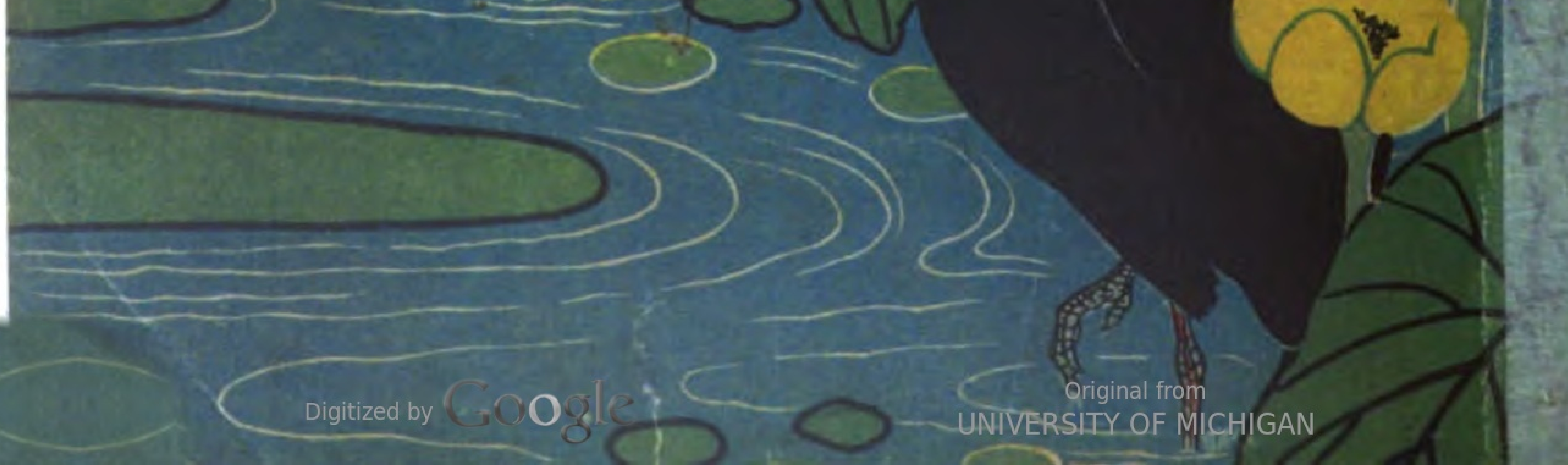
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第三巻第五號

口繪

- 山階宮妃殿下
- 明石舊城
- 羅馬の舊城
- 跡見女學校と友會
- 漁村の風景
- 貴婦人
- 朝鮮の家屋
- 支那の風俗
- 臺灣の人物
- 北白川宮御銅像
- 櫻花
- 割烹會
- 菜の花、春艸
- 其他



女學世界 第拾卷第五號 目次

文藝倶樂部第六號定期增刊

本書の特色

▲表紙（石版摺精彩畫）……武內桂舟君筆
▲色則是空（木版畫極彩色精緻優美菊判形四頁大）……富岡永洗君筆
▲花十句……聽雨窓竹冷君自泳自筆
▲女十句……內藤鳴雪君自泳自筆
●女十姿……山中古洞君筆
▲花十枝……片山春帆君筆

發兌元　東京市日本橋區

●一夜草……寺田露伴君
●春霄……川上眉山君
●花下の一夜……巖谷小波君
●花？女？……江見水蔭君
●花ことば……長田秋濤君
●女本位と花本位……坪谷水哉君
●京都の花……中川霞城君
●京都の女……中川白峯君

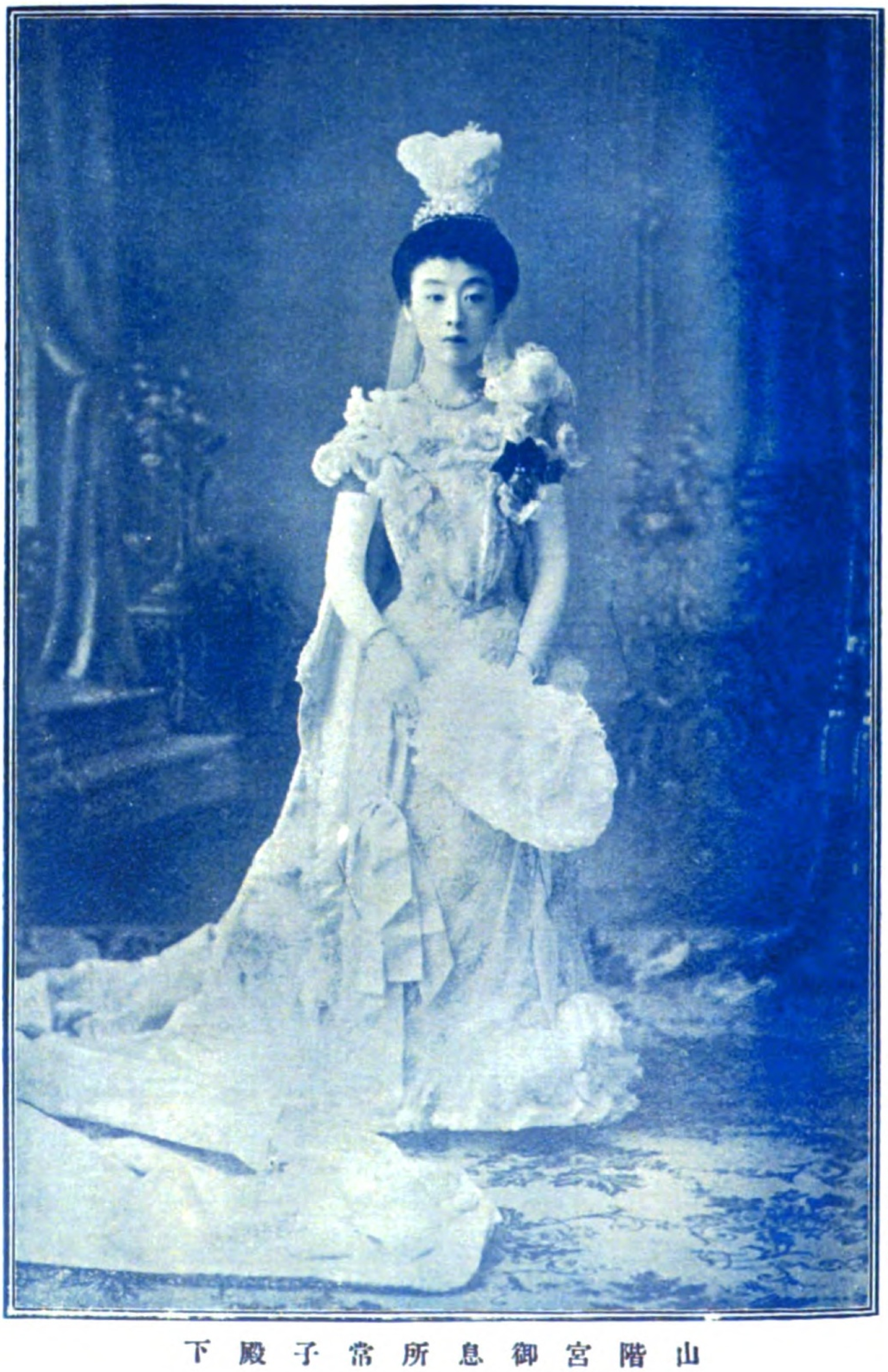


四月十五日　發行
正價貳拾五錢
郵稅貳錢五厘

記事要目

博文館　本町三丁目

●大坂市の花と女……渡邊霞亭君
●名古屋女……新田靜灣君
●神戸須磨春の錦……齋藤溪舟君
●馬關の花と女……米光關月君
◎桃すもゝ……柳川春葉君
●天なる星地なる少女……田山花袋君
●婚禮と處女……小林蹴月君
●世界婦人觀……武田櫻桃君
●花心……木村小舟君
●花と少女……太田玉茗君
●花の姿……岩田烏山君
●花摸樣三人女……田村松魚君
●嫁八人……石橋思案君



（博進社工場印行）

山階宮御息所常子殿下



日本の城（播州明石舊城郭）



西洋の城（東羅馬時代の城壁）



跡見女學校校友會

新刊豫告

文學士 久保天隨先生著

東洋通史

分本十二册

一册紙數二百八十頁
總計三千五百ページ

隔月一回
發行和綴
菊判美本

天隨先生、年少氣鋭、才力雄傑、研鑚すでに久しく、蘊蓄又頗る深く、學は天人の際を貫き、識は古今の表に出で、加ふるに、雄文宏辭、一世を籠蓋するの槪あり。先生曩に四書新釋、文章軌範精義の二書を出され、今又此書を著はさる。上は漢族の移動、三代の興亡より、下は日清の葛藤北京城の攻圍に至り、黃禍の豫測を以て之を結ぶ。上下五千年、縦横八十五萬方里、先づ上下兩巻を分ち、四大時期を劃し、章を連ぬる無慮數百。治乱興廢の跡、必ず原委を考へ、終始を綜べ、鉅、闔せざるなく、細、函せさるなく、神輿の中葉にその文化を波及し、印度歐羅巴の人文と相並んで鼎足の勢を爲せる東亞ッラン人種の起伏消長は、實に本書に於て、之を審かにするを得べし、刻下の學界、稀に見るところの一大撰述なり。且其文の如き瑰廉雄奇の趣を極め、光焔萬丈、善く人の眉目を燭す。かの『天爲めに粟を雨らし、鬼爲に夜哭す』といふもの豈に獨り蒼頡の造字のみならんや、本書に於て亦た然り。敢て學者文士及び經世家に一讀を勸む

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

The English Student.

所載概目

英學新報

社説（英語英文學研究社論其他一般青年學生を補益すべき倫理教育社會等に關する社論）寄書（社會一般の事項に關する内外の寄書家の意見）通信（英米學生の通信）講義（新業大家の講説）

訪問（英語英文學研究等に關する大家の實驗談）時報（内外の新事件）逸話（歐米帝王名士最近の逸話）會話（純真なる談話語になる會話及びダイアロゲ）

註釋（英米大家の詩文拔萃詳註）飜譯及作文（諸家の和文英譯、英文和譯の模範●和文英譯指南（新道の大家に依頼す）和文英譯英作文答案修正●懸賞和文英譯及英作文）

讀者（の隨意英文）雜説（英語研究上に注意すべき事項、作文要訣、故事故語、熟語等）尺牘（各家の尺牘○作例○答案修正）商業書簡文（講義）

笑話（古今名士の滑稽譚、笑話）小品（從來の改作小話の他に近時英米新聞雜誌に見ゆる彼國大家の健全なる小品文に註釋を附す）雜録（近時の文學界○大家修學談○神話○海外文壇）

○英語謎○我國英學界○編者の机上○讀者の領分 質疑解答（書籍十數種の質問に應じ且つ直接講話者に限り、通信解答を與ふるの特典あり、）挿畫等

主筆 新渡戸稲造。津田梅子

定價（定價金拾錢郵税壹錢○半ヶ年（十二冊）郵税共壹圓貳拾錢○壹ヶ年（廿四冊）同貳圓廿八錢）

（毎月二回一日十五日發行）

發兌元 東京神田 東京堂

業務擴張

東京堂は多年書籍雜誌の大取次を營み來り候處世上の御引立を蒙り業務益々盛大に趣き賣捌方其他の設備も大に擴張致し候に就ては此際一層の勉強を以て各位の御便利を相圖り可申候尚本年度よりは更に歐米諸國の出版者と特約を結び書籍雜誌の類は何種に拘はらず廣く大方の御註文に應じ精々廉價迅速に御取次可致候間何卒倍舊の御愛顧を以て續々御註文被成下度奉懇願候

東京堂發賣 **書籍雜誌目錄**（三月改正）

御望の方は郵券貳錢封送申込あれば出來次第送呈す

委託販賣部

書籍雜誌御發行の御方にして一手販賣方御委託相成候はゞ諸事御便利を相圖り弊堂獨特の擴張法を以て賣捌方は勉強可仕候間御發行前に御相談被成下度候

圖書雜誌大販賣

東京神田表神保町三番地
特電話本局貳百四拾八番

東京堂書店

（甲の二）

(甲の三)



北白川宮殿下銅像原型

貴婦人



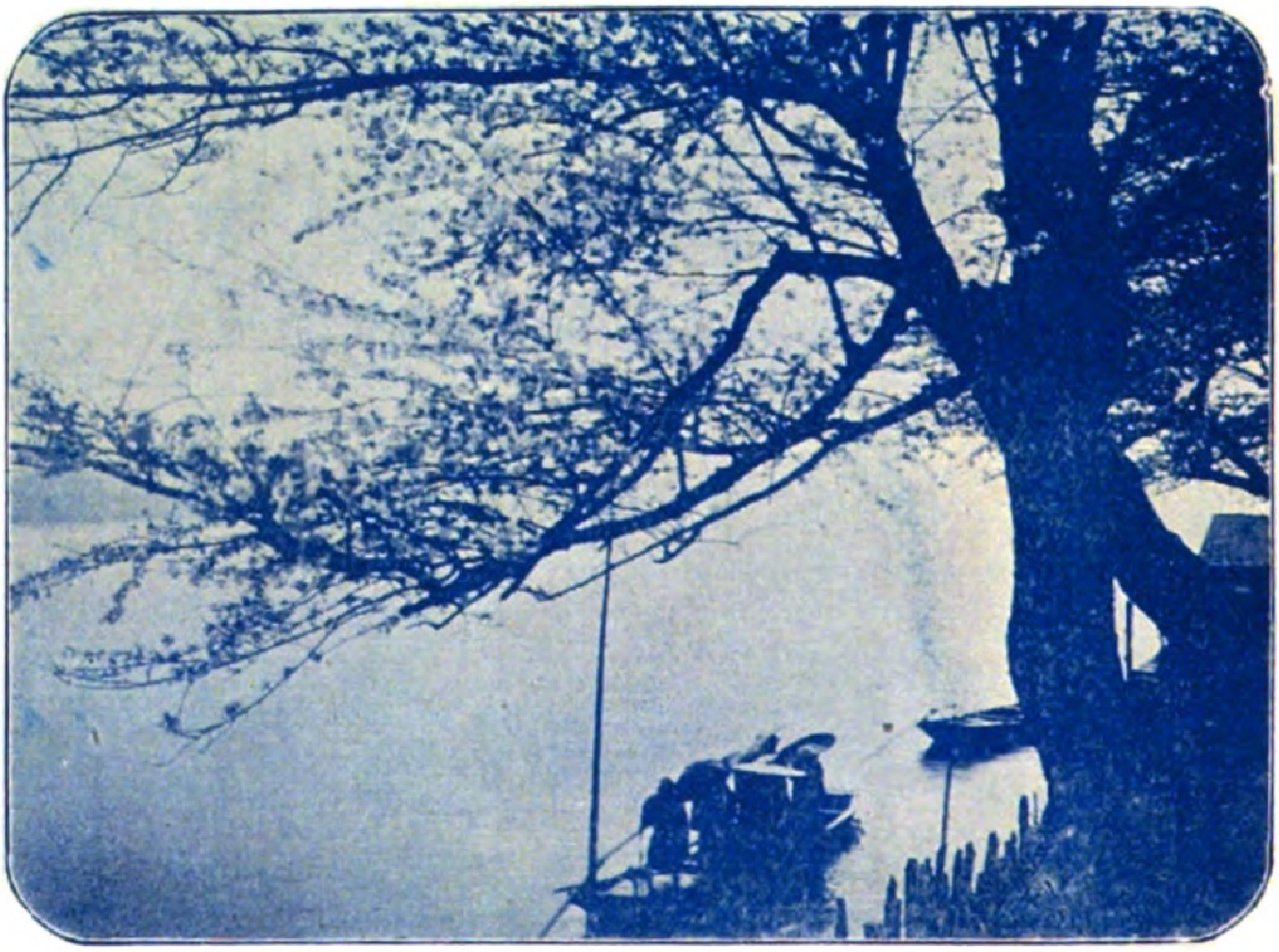
石原白道筆

臺灣人物

台灣北蕃タラナン酋長總盟主夫婦



櫻樹





福地櫻痴居士新作

歌舞伎座新狂言

肥後武士江戸藝者

花盛劇楓葉

今を距ること四十六年前の事なり安政四年江戸猿若町守田座（今の新富座）にては天竺徳兵衛の劇を演じ頗る大入の盛況なりけるに頃は三月（實は四月）五日看客中に肥後藩士藤倉岩之丞といへる武士あり徳兵衛が父宗觀の遺志を繼ぎ心を異國に寄て日本を顚覆するの謀を爲し剩へ其母を刺殺すの場を見て大に憤怒し賣國の賊不孝の者と叫び刀を脱て舞臺に走り徳兵衛を殺さんと擬し爲に數人の死傷を出し實際に慘劇を現したり當時徳兵衛に扮したるは市川市藏といへる人氣俳優なりければ世間囂々藤倉の粗暴を罵詈す時に芳町に奴の小金といへる藝者あり俠氣に富て稍々事理を知る獨り藤倉の意中を憫みて同情を表し其歸國に際し送りて皎州に到る人傳へて美談とす居士之れを脚本に作り三幕となして歌舞伎座の場に登す壯雄濺々正奸相閲き兩性相照し眞に當時の狀を見るが如し蓋し居士晩近の傑作なり市川權十郎は藤倉に扮し中村芝翫は小金に扮し其他市川八百藏片岡市藏尾上松助尾上梅幸の諸優各々適任たれば此脚本を一讀して其劇を見んには妙味益多かるべし

全壹册

正價廿五錢　郵税四錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（乙の一）

最新英文教科書

津田梅子女史校訂

英文二都譚

洋裝全壹册　正價金四拾錢　郵稅四錢

これぞヂツケンス作中、最も長く後世に傳りて文壇の寶典たるべきもの。これ彼が一時の興に乘じて筆を輕妙に馳せ諧謔を縱にしたる他作の類に非ず、叙する處佛國革命の腥風は鬼氣人に迫り、殺人身を以て他に代りて斷頭臺の露と消ゆるは人の情心に沓ち無情冷酷なる修羅の巷に至情至誠の美花を點綴して人をして泣かしむ。蓋し歷史上最も演劇的なる時代を最も巧に描き出したるものと云ふべし。彼翁が得意のユーモアを缺くも端嚴巔襟を正しうせしむるものあり。然れども書中往々にして蛇足の感あるものゝ存せるは世の既に認むる處、即ち本社は此書を精査し改訂を加へ全書の半となし、其精髓を摘し而も全篇の趣味聯絡を害せず以て好良なる英文學敎科書となし、江湖に薦めんとす。

櫻井鷗村君校訂

英文シーザー物語

洋裝全壹册　正價金參拾錢　郵稅四錢

羅馬史は歐洲歷史の本源にして、シーザー大帝は羅馬史の中心なり此書は平易なる文章を以て此巨雄の一生を叙し、且つ挿むに多くの地圖等を以てして、一見當時の國勢及風俗を知らしむ。されば之を用ゐて三リードル程度一學期間の敎科書とすれば、學生をして多大の興味を以て此英雄に私淑せしめ、又た歷史研究の素を得せしむべし。

英文敎科用參考用書類

- 英文 倫理思想　ハーツホーン編木田教授解說　新刊發賣　正價金四拾錢　郵稅四錢
- 英文 名家小品　津田梅子編（訂正四版）　正價金參拾五錢　郵稅四錢
- 英文 逸事叢譯　櫻井彥一郎校訂（訂正五版）　正價金參拾五錢　郵稅四錢
- 英文 希臘神話　津田梅子撰（訂正三版）　正價金四拾五錢　郵稅六錢
- 英文 御伽噺　ベーコン渡邊光子兩女史編（訂正再版）　正價金四拾錢　郵稅四錢
- 英文 對話集　外國語學校敎授村井知至君撰（訂正再版）　正價金參拾錢　郵稅四錢　特製　正價四拾錢　郵稅四錢
- 英文 頓機翁物語　畔柳文學士解說津田梅子校訂（訂正再版）　正價金參拾錢　郵稅四錢
- 英文 法螺先生　ハーツホーン津田梅子共著（訂正再版）　正價金貳拾錢　郵稅貳錢
- 英文 富之福音　米國カーネギー氏原著（新刊發賣）　正價金參拾五錢　郵稅四錢
- 英文 實業之帝國　米國カーネギー氏原著（訂正三版）　正價金參拾錢　郵稅四錢

（各學校敎科用見本御入用の向は校印押捺東京堂へ御申込あれば直に送本す）

發賣元　東京日本橋區本町　博文館　東京神田表神保町　東京堂

（乙の二）

新奇發明 増酒資料(さけふやすもと)

壹斗の淸酒は即座に倍增し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり(附錄)腐敗酒直し法、醬油參倍增法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内…右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白化藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

血塊月やく 忽ち下る 確證新藥

本劑(調經丸)は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑三劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を一用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付き**姙婦**の服用を嚴禁すもし妊婦服藥せば**即座に流産**するを以てなり尤も本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に着目し購求あらんことを乞ふ

わきが(腋臭症) 根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**(電話本局五四六番)

(乙の三)

主筆 竹貫登代多君

數學講義錄

本講義錄（言文一致体にて算術代數幾何の三科を平易に講演せるを以て何人にても解し得べし

本講義錄（前號に掲げたる問題は何れも次號に詳解しゐるを以て自修者には最も便益あるべし

算術之部
第壹號
緒論、命數法、記數法
小數、整小、加減乘除

代數學之部
第壹號
緒論、記號、代數式、負數、整式、加減乘除

幾何學之部
第壹號
緒論、諸定義、直線、角、平行線、三角形

研究資料
既約分數に就て……寺尾理學博士
物理に關する數學問題…實吉理學士
方程式に就て……田中攻玉舍教授
省略算に就て……鈴木攻玉舍教授

本講義錄（質問應答の一欄を設けゐるを以て何人にも自由に質疑し又應問するを得べし

本講義錄（各部とも每一回三冊の發行にして壹年間拾貳冊にて完結し何れも研究資料を附す

各科定價
一冊……六十四頁 正價拾錢
三冊（三ヶ月）正價貳拾九錢
六冊……六ヶ月分 正價五拾五錢
十二冊……十二ヶ月分 正價壹圓
郵稅一冊五厘

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

【乙の四】



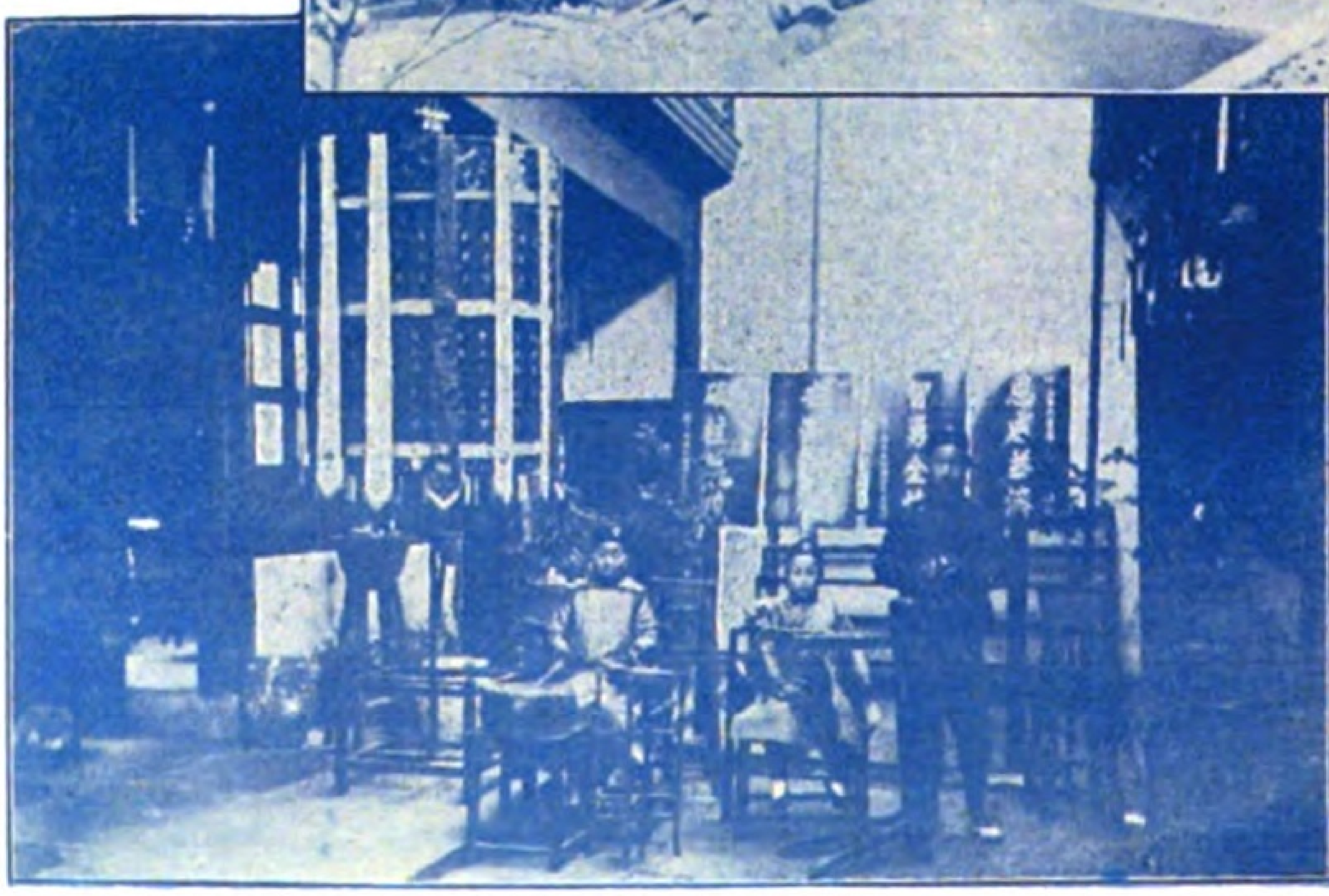
漁村風景 (肥後國飽託郡松尾村)

上海の公園



朝鮮の家屋





北京の正月



遠藤武者の墓碑 (奥州衣川村に在り)



割烹會

帝國百科全書

第九拾五編

仙臺醫學專門學校教授 須田勝三郎先生纂著

衛生化學

（近刊）

全洋装 壹冊

上製五十錢 郵税十錢
並製卅五錢 郵税八錢

一名飲食物嗜好物日用品檢査法

本書は教授が歐英の諸書を參考し多年の經驗により本邦及歐米の飲食物、嗜好物、日用品の性質製法、試驗法、鑑定法を纂著したるものにして特に從來刊行の衛生試驗書には本邦固有の飲食物を記載するものなきを慨し其歴史、製法性質、試驗鑑定法を詳述したるは最も本書の特色とする所なり且又普通の衛生試驗書に記載せさる鑛泉分拆法檢尿法をも詳述したるは衛生試驗に從事するもの丶最も便とする所なり醫學家、藥學家、藥業家、衛生行政官、税務監督局技術官科學担當教育家は勿論苟も衛生の必要を知了せんとする諸君には坐右缺くべからざる珍寶なり

續刊

第九拾六編 ●新撰動物學 理學士 會田龍雄君著

第九拾七編 ●日本文明史 文學士 大町桂月君著

第九拾八編 ●進化論 文學士 十時彌君著

第九拾九編 ●日本教育制度 文學士 玉木三郎君著

第百編 ●保險通論 法學士 奥村英夫君著

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

（丙の一）

教訓繪ばなし

第三編 海軍の巻

武田櫻桃君著　製本既成

●正價五錢　郵税二錢

日本は如何なる國でありませう、海でとりまかれて居る國ではありませんか、だから海軍といふ事は、皆さん能く承知して居なければいけません、此海軍の巻は、やさしく海軍の事を解いたものですから、海軍の事を知りたいと思ふ方は、早く買つてん讀て御覧なさい、ためになるのは請合です。

第四編 陸軍の巻

木村小舟君著　近刊

●正價五錢　郵税二錢

日本西洋の軍人の話、名高い戰爭の話、陸軍に關した發明の話、陸軍遊戯の仕方、陸軍軍歌など、毎頁皆奇麗な畵で、面白い話が凡そ三十幾種收めてあるのが、此陸軍の巻で御座います、大きくなつて軍人にならうとする幼年諸君は、是非御一讀ありたいものです

續刊

第五編▲動物の巻

第六編▲植物の巻

第七編▲ポンチの巻

第八編▲遊戯の巻

第九編▲地理の巻

第拾編▲歴史の巻

第拾壹編▲立志の巻

第拾貳編▲冒險の巻

正價●一冊五錢●六冊前金二十七錢●全部十二冊前金五十二錢●郵税一冊二錢づゝ

發兌元　東京本町　博文館

(丙の二)

少年商業文庫

第貳編

天城米海君著　大羽畫
（寫眞挿入）

商業の栞

全壹冊

洋装美本
正價十五錢
郵稅四錢

商業の思想を養ひ商業學の大意を說き少年者をして商業に入るの捷徑たらしめんとするもの即ち本書の目的なり僅々百餘頁の小冊子に此目的を達すべき總ての材料を網羅し而も趣味津々覺えず快を呼はしむるの結構は本書の特色なり一夜に商業の全体に通し直に活商人たらんとする者は必ず本書を讀むべし商家子弟の夜學讀本として補習學校の課外讀本として又一般少年の實益讀本として之に償するもの世未だこれあらず

第參編

天城米海君著　大羽畫
（寫眞肖像入）

世界金傑譚

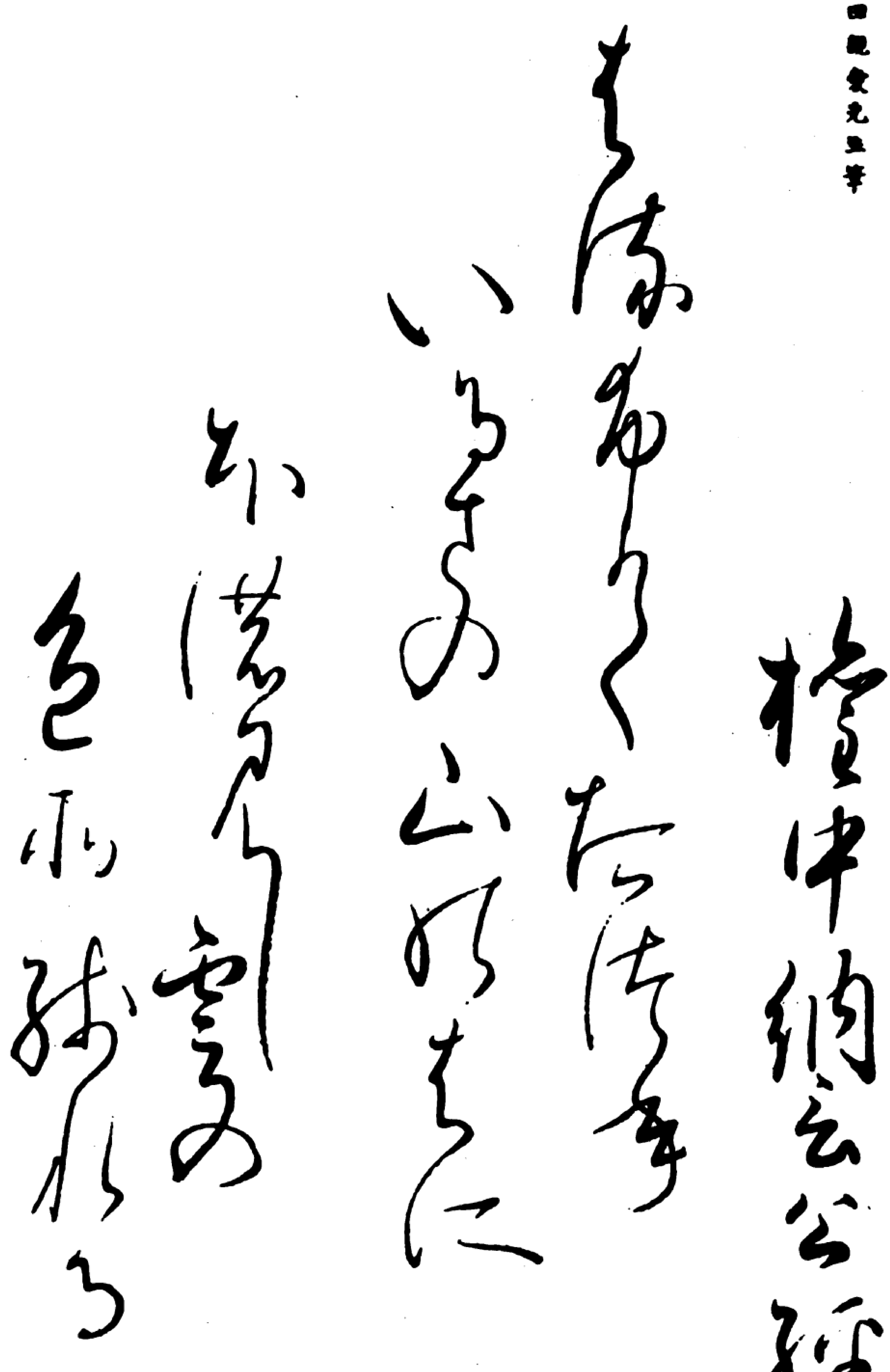
全壹冊

洋装美本
正價十五錢
郵稅四錢

古今歐米の富豪三十餘家を一編の中に收めて每章肖像繪畫を挿み著者獨得の妙技を以て家々立志成効の徑路を描出す實業立志編として眞に空前の好著なり少年者は固より讀まざるべからず青年老年の實業家亦讀みて意外の利益を得べし本書一たび出て從來の類書忽ち顏色なからん

（其の三）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館



多田親愛先生筆

多田親愛先生筆

山部赤人

百済野の萩のふる枝に春まつと
をりし鶯なきにけむかも

阪正臣先生筆

桃柳杏海棠

山吹雉子兒

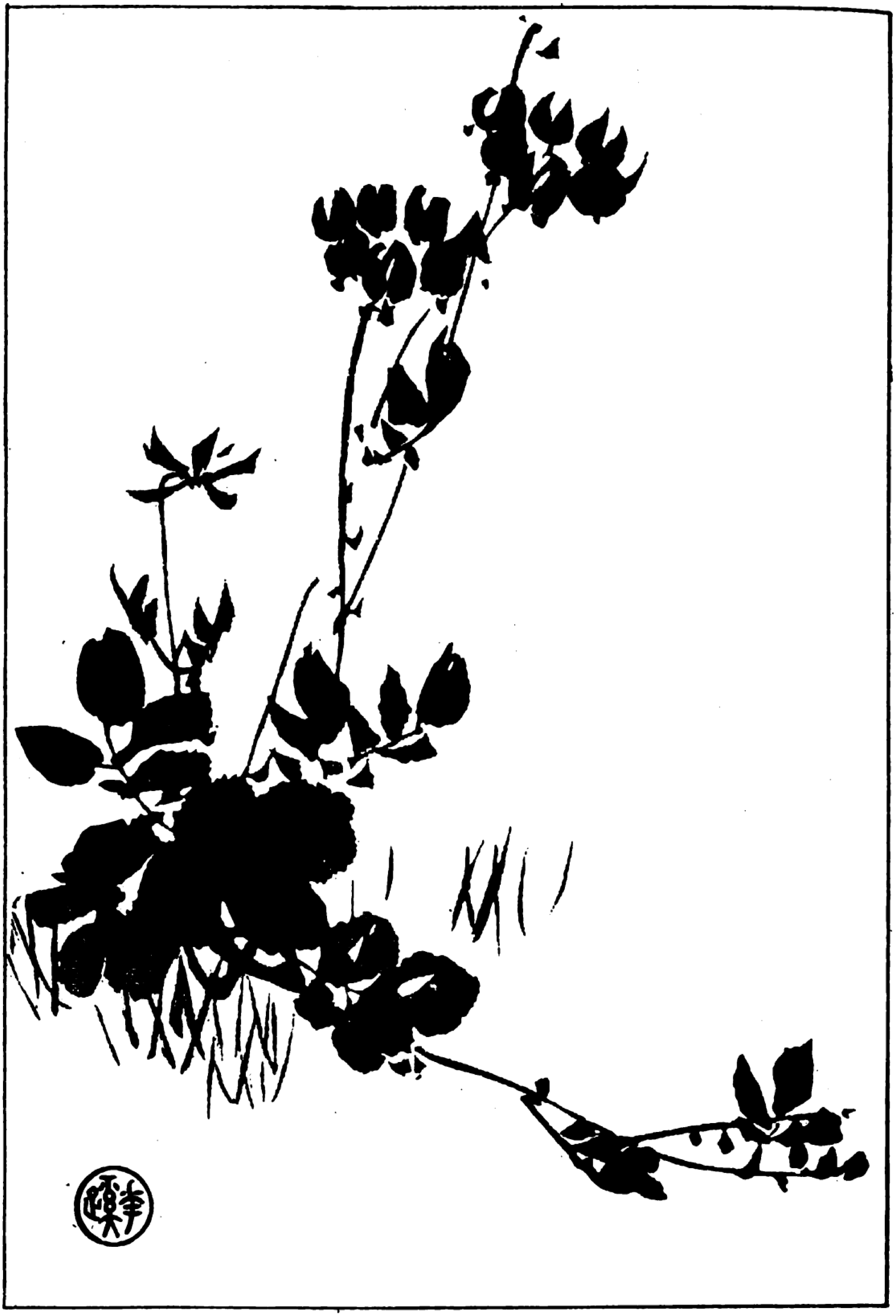
蝶灌佛會筍

百花爛漫の候

坂正臣先生筆

春風駘蕩とやら誠
によき時節と相成
申候就ては花見ごろ
に付小集の催申したく次の
日曜あさより御閑にいでば
つき枉駕下されたく候

紫雲英（れんげ）



跡見花蹊女史筆

菜花



跡見花蹊女史筆

野口小蘋女史筆



春草

野口小蘋女史筆



高等女學校學科程度新學期開始一ヶ年半卒業

會長子爵岡部長職君 ◎初號二號既刊 ◎三號四月三日

講師◎修身、篠田教授◎國語、佐方教授◎地理伊藤校長◎歷史、高木教諭◎理科、林校長◎家政、下田學監◎裁縫、喜多見舍監◎禮法、小笠原講師◎兒童心理、松本文學士◎女子衛生、鷲山校長◎割烹、赤堀講師其他名家の論說會員の文章和歌

一種獨特の通信教授 各科解釋付

女子學術講義

(目下入會の好時機)

女學世界廣告中の
割引券
入會金特に**拾錢**に減ず 但し四月中

(見本郵券**卅錢**)

我が教育會は女子の為講習を開き更に講義錄を發行す講義中難解の文字には別に注釋を加へ女子の讀み易く了解し易き◎講義錄なり◎入會金廿錢◎會費三ヶ月七十五錢六ヶ月壹圓五十錢壹年三圓一學期間四圓五十錢●入會者に會員證◉卒業者に卒業證書を授く

東京神田一橋通町帝國教育會內 東京府教育會附屬

女子講學會

◎歐米流行新化粧品

目下佛國巴里を始め、其他歐米諸國貴顯紳士貴婦人間に最も賞用せらる、優等品にして普通の者とは雲泥の相違なり

原名ヘヤーウツチ ●郵稅料各拾錢 (藥價)

●**毛髮發生增殖液** 全ヘヤーオミツト (藥價) 甲五圓 乙三圓 丙一圓 丁五十錢

●**毛髮脫毛劑** 全スフコスミン (藥價) 甲五圓 乙三圓 丙一圓 丁五十錢

●**美白光澤皮膚液** 全リ、オニース (藥價) 甲三圓 乙二圓 丙一圓 丁五十錢

●**面皰斑點整止液** 全サンシヱンナチユーアー (藥價) 甲二圓 乙壹圓五十錢 丙一圓 丁五十錢

●**口中含嗽芳香液** 甲一圓 乙五十錢 丙二十錢

●其他雲南產正眞麝香。清涼ふけ止め。しらが染巴里香水 香水入齒磨 其他數百種

內外藥種化粧品 **卸問屋** 東京市日本橋區本石町大通り角 電話本局二八六番 **博愛堂本店**

(丁の一)

最近發行

村井弦齋君著
●酒道樂（上卷）
正價五十五錢　郵税十錢

本書は村井弦齋先生最近の名著にして行文婉約讀て飽くを知らず其酒に關する社交及家庭の情態を寫さるゝ處眞に迫り興趣津々卷を措く能はさるなり

村井法齋君著
●繪入小僧讀本
正價十五錢　郵税四錢

口繪

第一 ●惡い小僧
第二 ●小僧の禁物
第三 ●小僧の心掛
第四 ●小僧の行儀
第五 ●小僧の貯蓄
第六 ●小僧の風儀
第七 ●小僧の勉學
第八 ●主人の撰擇
第九 ●小僧の辛抱

武田櫻桃君著
●家庭の卷
正價五錢　郵税二錢

家庭の卷はどんな小さな御兒さんでも平氣で讀める奇麗な繪の澤山ある本です、飴や御菓子を召し上るよりも爲にもなれば面白い、眼の藥にもお腹の藥にもなる

木村小舟君著
●お噺の卷
正價五錢　郵税二錢

本書は木村小舟君の作に係るものにして家庭の卷に續て刊行せらるゝ言々句々一々兒童の智育に注意せられたる良書なれは世の父兄諸君は是非一本を購ふて育兒の用とせよ

前田默鳳道人書
●書學捷徑
正價五十錢　郵税六錢

本書は言文一致体にて說明せし習字のはやみちです乃ち筆の遣ひ方より點畫結体の作方等一々證を擧けて書學に關することは編中に遺漏なし實に近來稀有の書學書なり

大和田建樹君著
●能の栞（卷の一）
一の卷　正價二十錢　郵税六錢

能を舞ふ人はあれども能を知る人は少なく能を見る人はあれども能を解する人は少なし此書一度出なば知る事も審に解せるとも速かなるを得ん實に斯道の舟筏か

發兌元　東京市日本橋區

（丁の二）

圖書廣告

柳田法學士 田山花袋君 校訂 ●近世奇談全集　正價六十錢　郵稅十六錢

本書は本邦古來の珍聞奇談を輯集したるものにして其一新著聞集其二老媼茶話其三想山著聞奇集其四三州奇談等何れも高想靈思より成れるもののみなり

幸堂得知翁校訂 ●短篇名家傑作集　正價六十錢　郵稅十六錢

本書は江戸作者の粹を集めたるものにして實に一讀再讀興趣彌々生す其婉麗の文姸約の詞或は泣き或は怒り或笑ひ或は哭し讀む人實に倦むとなかるべし

天城米海君著 ●勤儉貯蓄　正價十五錢　郵稅四錢

商業家第一の秘訣は是れ勤儉貯蓄の單純なる法則を實踐するに在り天城米海氏本書を著はし先つ商業入門の樞機一斑を示す記述懇切平易通暢讀下直に秘訣の奥蘊を詳知す

巖谷小波君著 ●お伽十番　正價十二錢　郵稅四錢

目次

坂本文學士著 ●世界史(下)　正價二圓　小包四百匁

坂本文學士の著に係る本書は本邦の最近に於ける大著述の一にして又邦文世界史中にありて其精密なる此書の外にあるものなし世の邦文によりて世界史實を研鑽するの士は是非とも本書によらさるべからず

竹貫登代多君著 ●新撰代數問答　正價二十錢　郵稅四錢

竹貫登代多君は當世有數の數學家なり本書は君が中學程度にある學生の爲めに著されたるものにして其叙述の簡約にして明了なる講學者の便はいふも愚か應試の便を與ふる一にして足らざるなり

本町三丁目　博文館

(丁の三)

(十ノ四)



第參卷第五號

婦人と勞働

人は働らく時に必ずその報酬を得るものなり、働らくものには「富」と「安心」との報酬あるのみならず身體の健康と、精神の愉快とを、その當坐に於て既に之に報ひらるゝを見るべし。

論より證據、人は相當の勞働をなし、有益に時間を用ゐたりとおもふ時には、その夕、休息するに及び、一日を追懷して如何に心身の快きを感ずるぞや、粗食をなし、水を飲みても猶且その甘味なる事限りなきにあらずや、

この如くして一日を有益なる勞働に用ゐて心身の快樂を得し場合には、その人の心意自ら暢々として、一家も又靄然たる和氣に充ち、天國も敢て遠きにあらざるを感ずるに至るべし、若しこれに反して一日を遊惰に過したる場合は其夕に於て自ら心に疚しく、何事か飽足らぬ心地せられて、不愉快限り

なく、隨て身體も又工合あしく、美味を食ふも旨からざるは逸樂の報ひといふべし。

されば勞働は人間に缺ぐべからざる勉めたるのみならず、精神の快樂と身體の健康をも併せて得るものなれば決して輕々に看過すべからざるなり。

諺に曰く流水腐ることなしと、人間も常に流水の如くに活動する時は決してその身を破ぶることなし、菜切庖丁も始終使はれてこそ錆びざれ、若し使はずして仕舞い置かば終には腐朽するに至るべし人も又この如し、過度の勞働は勿論健康に害ありと雖も寧ろ放逸遊惰にして健康を害するには優されり、況んや適度の勞働に於てをや。働らくは身の藥と古人も謂へり、人間養生の法は敢て藥にあらず滋養物にあらず。唯適度の勞働にありと知るべし。

然るに文明の進歩は兎角に社會生活上の安佚を増すものなるを以て、人は日一日と安逸に流れ、次第に勞働の不足を感ずるに至るは自然の勢なり、殊に中流以上の婦人が勞働不足の爲めに身體の健康を傷ふもの甚だ尠からず、身體の不健康は即ち心身の不愉快の一原因にして延て家庭の和樂を傷ひ甚だしき至つては居常憂鬱して、遂に一生を厭世に終らしむるものあるに至る、是の如きは是れ一身一家の不利益なるのみならず、一身一家の不利益は即ち一國の不利益にして國家の元氣を消磨し、社會の經濟を妨ぐるの不利も又尠少にあらざるなり。

されば人間は何人たりとも適度の勞働を取るべきものにして、たとへその身は上流社會にありて婢女を使役するの地位にあり、出づるに馬車あり、お手車あり、入るに亦樂椅子あり、緞子の茵ある身分たりとも、なるべく身家事に任じ自から手を下して日用の雜務を辨じ、時に洗濯をもなすべく、米をも磨ぐべく、時には庭の掃除もなし畑の草をも取るべく、時に取つては隨分時間の不經濟とおもふ事をも厭ひ、切つてなすべく、時には又無用の骨折とおもはるゝ事をも進んでなすべく、斯くして身に勞働の習慣をつけ置かばその日〳〵の身体精神上に爽快を覺ゆるのみならず、眞逆な時の役にも立つべく、如何なる缺乏にも堪へ得て、人間不測の災禍を自然に免かるゝのみならず、又麤飯粗菜といへどもこれを食して、從來曾て知らざる美味を發見するに至らんこと請合なり。

米國

女生徒の生活

櫻田節彌夫人談

曾て米國の高等女學校と題して本誌に紹介しましたオガンツ女學校の卒業生櫻田節彌夫人に就て、その學校生活の話をきゝましたからこゝに記載いたしましやう。

◎オガンツ女學校の莊麗なる建物に就ては、既に略記し置きましたが、此建物は元米國南北戰爭（南北戰爭といふのは米國の奴隷解放に就て南部と北部と意見を異にして遂に戰爭となりたるもの）の會計をつとめたといふので、一時は米國に鳴り響いたヂユエー、クックの住宅でありました。ソシテまた維新の當時、故岩倉公以下卅幾人の方々が、チヨン髷帶刀ではじめて洋行なさつた時にお泊りになつたといふ、我國とは不思議の因緣ある家で、加之その爲に我　天皇陛下より特に賜はりました、美事な毛氈と花瓶とは、今も此建物に屬する最も名譽なる紀念として、大切に保存されてゐるのです。

◎同校は五年卒業で、高等小學校の三年を卒へた人、即ち十四歳位の令孃がその初めの級に入學するのですまた同校は寄宿生百名、通學生五十名合せて百五十名と堅く人員を限つて居りますので、中には三年前に願書を出して初めて今年入學が出來たといふ人なども御座います。敎師の數は櫻田夫人のおいでの當時廿八名御座いましたが、凡て女敎師です。中に繪畫と音樂（唱歌樂器とも）の敎師丈が他の學校をかけ持する丈で、外は殘らず專屬の先生です。ソシテ校長をはじめ敎師の多數は、百名の生徒と寄宿舍生活を共にして居るのです。

◎學科の數が餘程あります。中で繪畫と音樂は初めより卒業までズット致させますが、主なる學科即ち腦髓を勞することの多いものは（文學、化學、歷史、地理その他種々）一年の間に三科目より學ぶことが出來ません。初めに文學と地理と歷史を學んだ人は、次には何々何々と云ふやうに移つて行くのです。その三科目

は生徒自身の隨意に擇びましたもので、毎年開校の日に於て、校長自ら一人々々の生徒に就てその擇ばうとする學科を尋ねます。多數のことでありますゆゑ校長は例年この爲に大抵九三日を費やすのです。

西洋の學校は大抵六ヶ敷い書物を可成多く敎ゆるといふよりも、少しの書物でも極く精確に敎へ込まうとする方で、習ふ方でもなか〳〵緻密に研究して居るといふことは兼ねて記して置きましたが、發育盛りの女生徒のことでもあり、腦を遣う學校を一時に澤山敎へても効能が少いといふ事から同校なども以上のやうにするのではないかと思ひます。私自身にも經驗が御座います。女學校の學科はあまり澤山ゴチャ〳〵して居りますから、特別に敎へ方の上手な先生に受持つて頂いたもの丈、少しハツキリして居りますが、その外のは殘らず頭の中で混つて仕舞つて、如何に初步だけを習つたとはいひながら、殆どその學科の概念すらも留めぬものがむしろ多いので御座います。殊に一週一度より稽古のないものは、次の稽古までに先のを殆ど忘れて仕舞つて、何の興味もなしに度毎機械的に敎へられて居たやうなものも御座います。併しオガンツ女學校のやうに一度にかためて習つて仕舞ふなら、習ふ時丈はハツキリしても、後には矢張同じやうに忘れて仕舞ふだらうといふ方もありますが、私はさうでないと思ひます、一度確に頭の中にいれたものは、從つてそれに就ていろ〳〵の興味もいで來り、また見聞するものにつけて、だん〳〵廣くその學科から得た智識を應用するやうにもなりますゆゑどうしても忘れにくからうと思ひます。

◎この學校は毎年十月の初めの水曜が開校日で、翌年の六月十日が終りです。即ち一年の中八ヶ月が稽古で四ヶ月が休みになります。一週の中日曜の外月曜も休み、そして土曜日にも矢張普通の稽古でなしに演說か運動丈で御座います。十二月はクリスマスの頃より一月のはじめにかけて矢張短い休みがあります。寄宿生の學費は一年(即八ヶ月)二千圓で御座います。ソシテ

各生徒の小遣もまた學校に預る樣になつて居ります。

◎毎日生徒の朝起きるのが六時四十五分で、七時半までにチャント仕度して、講堂のやうな所に參ります。その入口には校長が起つて居りまして生徒の朝の挨拶を一人々々に受けるので御座います。凡ての生徒が着席しますと、書記が各生徒の名前を呼びます、次に校長が鈴をならして一同定めの禮拜をなし、更に校長よりその日一日の心得を話されるので御座います。例へば今日はそれ／＼の日であるから、或は誰が見える筈であるとか、或は昨日コー云ふ事があつたけれど、是から決してない樣にとか云ふやうなことです。濟むと食堂にいりまして、九時には稽古が始まります。

◎稽古は九時に始まつて二時十分に終ります。それから三時まで遊戯時間です。此時は運動服をつけまして種々の遊びをするのでありますが、日本にもよく御座いますバスケツトボール（吊してある籠に毬を投げいるゝ遊び）のときなとは双方に別れて毬を投げこむ競爭など夫れは盛んなもので、毬を一つ入れるとその人の腕に白い切をまきつけなとし、校長は時々見に來られて、勝つた組と白布の澤山縛りつけられた人に御褒美が御座います。三時半から五時半までは自修時間で六時には凡て着物を着換へ髮をも立派に整へて、遊戯の時に走けまわつた方達とは殆と別人の樣に、夜の食堂に集ふので御座います、夜の時間は隨意でありまして、九時四十五分には床にいるのです。

◎日曜の午前は寺院に參り、午後はホームレターを認める時と定つて居ります　即ち兩親や兄弟のことを思ひ出して手紙を書くのです。夜は學校に說敎が御座います。月曜は前號に申した月曜會といふのがありまして廿人一組になり見聞するものゝ說明者に大學校からプロフエッサーを雇ひまして、修學のための遠足（併し多くは馬車にて）に出かけます。殘つた人は敎師が附いて買物に參りましたり、或は髮洗ひなどを致します髮洗には恰度日本の女髮結のやうなものが廻つて參りまして洗つて呉れるのでありますが、その代は二圓で御座います。また爪の垢とりも此日に參ります。是は

爪をシャボン水につけまして、奇麗に掃除し粉のやうなものをつけよく磨いて丸で寶玉のやうにいたしますその代は一回一圓で御座います。髪洗ひも爪の垢取りも大抵一ヶ月に一度か二度かが通例なさうで御座います。

◎火曜、水曜、木曜、金曜は前に申したやうな通例の稽古日でありまして、土曜日の午前は名家を聘して主なる時事問題に就ての演説を聞き、或は生徒から質問をするヿもあります。此日はまた聖書の研究會もありそれが濟むと運動で御座います。此外同校では時々名家を招待して敎場以外に生徒の智見を進める様に注意してあります。時には英國などから莫大の費用を出して態々名家をよぶヿも御座います。また一週一度位夜學校内で生徒の音樂會の催しが御座います。ソシテ折々前號にお話した假装會などもあるのでありますが、大小にかゝはらず此様な折のすべての準備などは皆生徒がいたしますので、敎師は常に監督して大體の指圖をする丈で御座います。假装會の來賓は各國公使などでありますが、その様な人を招くための招待狀もまた接待も殘らず生徒がするのです。

以上の通りであります故一週の間に普通の稽古が丸四日よりない譯で御座います。ソシテ毎日の稽古も九時から二時十分までその間に食事が御座いますゆゑ、唯四時間の稽古です。しかも一時間の間に十五分の休みがあるさうで御座いますゆゑ、日本の女學校の方が日に五時間つゝで中で十分の休みを以て稽古を續けるのに比べますと、オガンツ女學校の女生徒は一日に一時間と十分づゝ不足に稽古して居るのです。まして一年中には日本の女學校の倍以上も休みがありますゆゑ、いくらも習ふところがないやうですが、朝など精神の爽かな時に讀んだ書物は一枚讀んでもそれ丈の價値があり、疲れてからの仕事は何でも永くかゝつてよく出來ないヿを考へますと、長時間の稽古をしたからと云つて强ち澤山覺えるといふ譯でもなからうと思ひます。お醫者が經驗のある方でなければ、どれ丈の勉强が普通の女生徒の身

體と腦髓に適して居るが精密に知ることが出來ませぬ、けれど、米國の女生徒は日本の女生徒よりも一體に體力が優れて居りますのに以上の通りだといふとは私供の考ふべき事であらうと思ひます。最も米國の女生徒はその外の時間をボンヤリ遊んで居る譯ではなく以上の通り最も樂しく有益に費やしつゝあるのです。ツマリ敎場でありツたけの精力を用ひ切つて仕舞はずに充分の餘裕があつてありますゆゑ、外の種々の事が出來るのであらうと思ひます。ソコデ同校の組織では實際的の智識はむしろ敎場以外で得ることが多いであらうと思ひます。

◎食堂のことは前號にも記して置きましたが、一つの食卓か大抵六人程つゝで、中に敎師が一人づゝ居ります(校長も矢張生徒と食卓を共にします)。そして此食卓の一組が一週間か二週間毎に代りますゆゑ、生徒たちは或時は校長と食卓を共にし、また或時は數學の先生次には歷史の先生、化學の先生また生徒同志のいろいろの人と一所にな　ますゆゑ、此所でまた種々の智識を得るので御座います。殊にこの學校の敎師達は少くとも一二度外國に行つたことのない人はないといふことで自づと生徒を導くのにもそれ〳〵の專門以外に廣いところが御座います。

◎生徒の室屋の有樣はどうかと申しますと、一部屋に一人のもありますけれど、大抵は三人から五人でありまして、その一部屋と申すのが大概二室で此所に机や本箱また寢臺がついて居まして、外に風呂場と着物を着換へる所があるのです。風呂は大抵一週二度で御座います。

◎また生徒各々に毎日一枚づゝの品行錄のやうなものが渡ります。即ち一寸に一寸五分ほどの紙に時間をたしかに守つたかとか、部屋は今日一日奇麗にあつたかとかいふやうな凡て七ヶ條の箇條が印刷してありますので、生徒は寢る前に自分で反省して一箇條毎にイエスとかノーとかその所に書きつけるのです。ソシテ寢臺の隅に置いて寢ますと、部屋々々の受持の先生が後で見廻る序に集めて行つて校長に出すのです。

◎小遣は先にも申した樣に學校に預けて置きますが、併し小遣帳はみな各々書きつけます。ソシテ一月毎に先生の檢閲を經るのです。先生はその費ひ方を吟味して百點とか五十點とかいふやうに點をつけて返します小遣の額は一ヶ月百四十圓を超えてはいけません。また學校では學科の成績や品行を大抵二ヶ月に一度づゝ父母は通知いたします。ソシテ折々兩親を學校に招きまして勤めて家庭との連絡をはかつて居ります。なほ洗濯は西洋のとですから凡て洗濯屋にだすのですそれは一年即ち學校のある八ヶ月間で百圓と定つて居ります。ソシテ一週間に一人前大小合せて十二品以下とさだまつて居ります。

◎三時半から五時半迄の自修時間には、殘らずの生徒が三組にわかれます、一はスタデーパラーといふ所で敎師の監督の下に勉强する人、次はセコンドヲプトマとて自分の勝手のところで勉强する人、次はホルストヲプトマーとて勉强してもしないでも勝手であるといふ自由を得て居る人達です。スタデーパラーに居る人は新入生を其外敎師の監督がなければ餘り勉强しない所謂ノーテーガールス(いたづら娘)で、敎師會の時に各敎師商議の上、中でよさゝうな生徒を、數ヶ月に一度位づゝポツ／＼セコンドヲプトマーに移るのです。此時は誰々は明日からセコンドヲプトマーに入ることと貼り出されますゆゑ、友達は皆御目出度を申します、新入生で早くセコンドヲプトマーに上げられた人は最も名譽です、ソシテセコンドヲプトマーにいりますと衣服の襟に白とオガンツカラーと稱する赤えび色とをからみ合はしたリボンがつきます、更にホルストになりますと純白のリボンになるのです、是は校內に於ける最高名譽の標彰で御座います。

要する同校は米國に於ける最も上品にをとなし向きの普通女學校でありまして、卒業生は殊に音樂と繪畵にすぐれかつ常識を備へて坐作進退の優美なると上流の社交界にいるべき素養の出來て居るとなどその特色で御座います。

洋行の話

巖谷小波

大分洋行のはやる今日此頃、よし婦人自身は、さう手輕く出かけられずとも、夫とか、約婚郞とか、乃至兄弟、親族などか、或は公用で、或は自費で遠い海外諸國へ洋行の途に上ると云ふ事は、恐らく數々起る出來事であらう。其際に臨んで婦人たる者も、その洋行者が、如何なる用意をし、如何なる手段を執り、さて彼地に着いてから、如何なる生活を爲し、その間に如何なる心勢があり、又歸つてから如何云ふ志想に成ると云ふ事等を豫め承知しておく事も、決して無用ではあるまいと思ふ。

さて洋行！これは恰も地方の人士が、東京の都會へ出ると同じで、元よりその費用は容易で無いが、隨つてその得る所も、決して少くないのである。されば日本に在る程の者の、機會の出來る限りは、一度は首都の東京を見るが可く。世界に生まれ出た程なら、事情の許す限りは、そは文明の中心とも云ふべき、西洋諸國を見物に出かける樣にと、余は飽く迄も勸め度いのである。

が、元々風俗人情氣候共、大分異つた所へ行くのであるから又それ相應に

▲洋行の用意

が要るのだ。譬へば芝居を見に行くのに、オペラグラスを用意すると同じく。それ無しでも無論見て見えぬ事は無いが更に委しく見やうと云ふには矢張りそれを用意した方がよいので、不用意に漫然と出かけたのよりは、矢張り豫め用意して行つた方が、同じ觀察でも十分に出來る道理だ。

さてその用意とは何ぞ！即ち語學である。英米へ行くのなら英語、佛ならば佛語、獨ならば獨語と、それ〳〵の國語を修めて行かなければ、所謂啞の旅行に成つて、所詮十分の觀察は出來ないのである。

さう云ふと、世界各國の語

學を知らねば成らぬ樣だが、又必しもさうでは無い。先づ今日の所では、英、佛、獨三ヶ國の中、一ヶ國出來ればまづよい。尤も獨乙語は、まだ甚だ融通が利かないが、そこへ行つては英語が一番。これさへ出來れば、英米二國は云ふ迄も無く、支那、印度の東洋諸國も、英語なら大抵通れる。其代り歐洲大陸へ來ると、英語は案外通りが惡く、例へば伊太利、露西亞、瑞西の一部などは、佛語の方が遙かによい。

又露西亞へ行つても、英語よりはまだ獨乙語が通じるので、既にサイベリヤを通過した、ある獨乙人の談話に依つても、彼は自國語一點張りで、大した不便は感じなかつたと云つて居る。

それから瑞西、澳太利、洪牙利等は、獨乙語で差支は無い。西班牙は佛語で行かれるとか聞いた。

かう云ふ風で、兎に角その三ヶ國の中、何所か一ヶ國の言語が出來れば、まづ何うか斯うかやつて行けるが。若しこれがまるで不通であつたら、近視眼が眼鏡無しで歩行く樣で、折角の愉快もその半ばは損じられる理屈だ。

否、只その不便計りで無く、不經濟も亦之に伴ふ。例へば通辨を傭ふのに、少からぬ日當を取られたり、一寸物を買へばと云つても、よし掛價は云はれない迄が、剩錢をごまかされる恐はまゝある。

以上は言語上の用意だが、別に交際上の用意も要する。即ち日本人と西洋人とは、風俗作法が頗る違つて居るから鄕に入ては鄕に從へで、豫めそれを辨へて行かぬと、大いに不都合を感じるのだ。

尤もまだ洋行はせずとも、常から外國人と交際して居るものは、自づからその心得はあるが、その經驗のまるで無い者は、一通り誰かに聞いて置かぬと、心にも無い大失策を仕出來して、赤毛布の材料に成る事があるのだ。

まづ人と挨拶をするには、日本の辭儀の代りに、西洋では手を握り合ふ。これ等は誰も知つた話だが、倘委しく云ひ立てると、その握り方にも法があつて、只漫然と手を握つた計りでは、眞の禮にはならぬ事があ

る。日本の辭儀だつてさうでは無いか。只頭さへ下げて居れば、それで濟むとは云はれないので。その時の坐り方、手の付き方に、自づから法がある。その通り西洋の握手にも、脚の立て方、臂の張り方で、又敬意を示す様に成つて居るのだ。

他人の部屋へ入らうとする前には、必ず入口の戸を叩かねば成らぬ。それを叩かずに唐突に開けるのは、案内も無く玄關を入ると同じで、甚だ失禮な事に成る。

食事の間には、決して煙草を吸うては成らぬ。又卓子に臂をかけたり、高い聲で噯をしたり、他の者の席を離れぬに、自分計り先へ立つたりするのは、不作法千萬な事であるなとは、よく心得て居らないと、人の感情を害する計りか、遂には侮蔑を受ける基となる。

其他、髪や髭の手入、衣紋の注意などゝ列べ立てたら限りも無いが、それではハイカラ學の講義の様に成つて、この問題の外であるから、此邊で略す事として兎に角禮儀作法の事も、一と通り聞いておくのが、必要な用意の一である。

次の用意は、衣服調度の段に成るが、是等は行く先の國柄に依つて、自づから異ならざるを得ないから、迚も一概には云はれないが、余の經驗した所に依ると(余の行つたのは首に獨乙である)洋服も靴も、決して日本で仕込まぬ事、只途中で要る物だけを、用意して行くに止めてよいと思ふ。

それを、西洋では價が高いからと云つて、平常着から晴着まで、二着も三着も拵へて行くのは、徒らに行李を大きくする許りで、後に彼地に着いてから、思ひの外役に立たず、つまりは二重の雜用をかけて、大いに後悔する例は、屢々聞いた所である。

又、是等調度を入れる行李。これにも種々類があるが、これも余の實驗によると、なまじ高い金を出した西洋風のトランクよりは、却つて日本風の柳行李を、ズックで包んだ物の方が、廉くもあれば又輕くある。芝口の古道具屋などによくある、金具澤山の木造の大トランクは、見掛倒しで案外丈夫で無く、それに第一物の入れ工合も悪い。さればです彼の式のトランクは

西洋でも此頃は廢たれて、之に代へるに、厚い布張に木の帶を掛けた、輕くて而も丈夫なものを以てして居る。余は日本を出る時、丁度佛蘭西から歸つて來た人が、そのトランクを持つて居たので、それを借りて又出かけたが、それが二年の後、再び余と共に日本へ渡つて、而もまだ少しも損じは無い。

づまらぬ物だが、案外役に立つのは、ズック製の洗濯袋だ。これには洗濯物許りで無く、トランクやカバンの溢れた物を、片端から押し込んで、グッと口を〆めて置けば、運搬にも甚だ便利だし、且つは――これは内證事だが、稅關の手數を避けるにも好い。それは根が洗濯袋だから、稅關吏も大目に見て、中に貴重な物が入つて居ても、稅を掛けずに濟ます事がある。

序に勸めて置き度いのは、日本服も共に持つて行く事である。例へば袴羽織の用意があると、何か宴會の招待を受けた時、燕尾服より却て晴をする事もあるがよしそれ迄で無くとも、平常着や寢衣は、及び日本風の手拭は、持つて居て大いに便利だ。但しなんぼ日本人でも、日本服を着て大道を濶歩するのは、決して感心した事では無い。隨つて下駄や傘は、少しも用は無いのである」

それから西洋への土產の品、これも用意の中に數へてよからう。で、從來洋行者の持つて行く者は、織物絹ハンケチ、友禪染、錦繪、扇子、陶器、漆器の類であつたが、實を云ふと今日の所では、歐米の然る可き都會には、已に日本の雜貨を商ふ店が二三か所宛出來て居るから、彼地の者も大分眼が肥えて居る。又、價格も知つて居る。されば此等を持つて行く者も、豫め其邊に注意して調べないと、自分では大きに喜ばす心算でも、存外先方は已に持合はせて居て、さほど喜ばない事に成るだらう。

それとこの土產物に付て、今一つ注意しなければ成らないのは、例の輸入稅を掛けられる事だ。尤も西洋の稅關と云ふものが、思つたほど嚴重では無い。亞米利加は但しやかましいさうだが、たれでも官吏や學生に對しては、初めから信用を置いて、さほど深い穿鑿

はしない、と云つて、元々税を取られるのが、本來の規則であるなら、豫めその覺悟は無ければ成らず、隨つてあまり目に立つ物を持つて居ると、非常な高税を課せられて馬鹿に貴いものに成つてしまふ。

要するに、西洋は絹物の貴い所で又日本の絹類、殊に刺繍のある物を、非常に有り難がる所だから、これを持つて行つて贈物にすれば、大に嬉しがらせる事が出來る。然し、だれも大きい物には及ばないので、例へば一尺二尺、日本では何の用にならぬ物でも、西洋人はそれを以て、壁飾りやソーハの枕、ヒヤノの上の敷物、果は帽子の飾り、何にでも應用するから、決して心配には及ばぬのである。

（未完）

米國の体操女學校

米國の体操は六年以來大變盛んになりまして体操の學校も澤山ございますが多くは瑞典派を用ゐられて居りますが獨逸派も無いではありませんが御承知の通り瑞典の体育に力を用ゐます事は非常なもので政府も体育には及ぶだけの力を注いで居りますので瑞典派の体育は世界に行渡つて居ります程でございます妾の居りました學校も瑞典式でした体育がこのやうに發達して居ります米國でございますから女の兒などでも活潑なもので學校から歸りましても家の中に愚圖々々して居ります者はございませんで皆外へ出て男の兒と同じやうな遊びをして居ります冬は氷滑りなどをして荒過ぎはせぬかと思はれる程な遊びを致します赤兒でも運動をさせればならぬと申しまして日に一度は必らず乳母車に乘せて外を一廻りさせるやうにして居りますので妾の下宿して居りました家の娘は十でございましたが學校から歸りますと直ぐ四五人のお友達と自轉車で飛び出しまして一廻り乘り廻すのが毎日の例でございましたこんな風ですから女の兒の動作でも日本の女子とは丸で違つて活々して居りますのです

日本の女子の体操も追々は改良しなければならないものもございましやうがまだ妾は歸朝致しましたばかりで何いふ風に改めるといふ事は今申上げるわけにはまゐりません今女子高等師範學校の教授をしてお出の坪井玄道さんは妾の學校に居りました時分の先生で妾が米國へ渡航致しましてから一年跡に矢張体育視察の爲に歐洲各國をお巡りになつて妾の居りました學校なども參觀なさいましたから何れ坪井さんともお打合せをして女子の体操の改める所は改めるやうに致したいつもりで居りますのです　（井口あぐり女史談）

女の武器

大町桂月

烏賊の墨汁、いたちの最期屁、いづれも其身を護る武器なり。女にも、之に似たる武器あり。何ぞや。曰く、涙、是也。

白樂天賦して曰く、夜涙如㆓眞珠㆒、双々墮㆓明月㆒と。嗚呼、この可憐の媚態に接して、何人か腸を斷たざらむや。美人の涙にあざむかれし英雄豪傑、古來あげて數ふべからず。下りては、遊女の空涙にあざむかるゝ嫖客も少なからざるべし。力、山を拔く豪傑も、氣、世を蓋ふ英雄も、終に女の涙には敵する能はざる也。

諺に曰く、泣く子と地頭とには勝たれずと。さすがに男は長じて泣かざれど、女はいつまでも、泣く子の味を覺え居りて、泣いて、なだめたり、すねたり、言ひわけしたり、ねだつたりして、さま〴〵の用に供すされど、涙は必ずしも必勝の武器に非ず。理性の餘りに明かなる人や、意志の餘りに強き人は、涙に動かざる也。況んや、だゝつ兒的の涙に於いてをや。

人を見る心得

●一見直になれ〳〵しき人を、親切な御方と思ひて身をまかすべからず。多くはこれ輕薄才子也。

●はじめに情愛のありすぎる人をあてにすべからず熱し易きものは、さめ易ければ也。

●むつゝりしてお世事なきものを、いけすかない人と思ふべからず。親しく交れば、案外に情愛のふかきもの多し。

●口先のうまき人を、働あるものと思ふべからず、小才ありて、眞の智慧なきもの多し。

●材能あるものと、法螺吹くものとは、似て非也。沈勇あるものと、柔弱なるものとも、似て非也。見そこなはぬやうに注意すべし。

●女の前にゑらさうに見せかけるものは、概して世

間には幅のきかぬものなり。女の前におとなしき人、案内に世間へ出でゝは勢力あるもの多し。すべて、女に對して、ゑらがつたり、自慢したり、氣取つたり、めかしたりするものには、ろくなものなし。

●男の氣前よきは、氣持よきものなれど、取れば取るほど、金いりて、家政はゆたかならざるべし。しみつたれなるは、齒がゆきとあれど、食ふには困ることなしと我慢すべし。

●人の前に出でゝは、蟲も殺さぬやうにおとなしきも、妻子に對しては、傍若無人なるものあり。世人には冷かなるも、妻子にはのろきものあり。人はみかけによらぬもの也。

●しやれを言ふことと上手にして、かくし藝あるは、必ずや、學藝以外、多く金のかゝつた人なり。

●容貌風采を自負し、頭髮、衣裳、携帶品を氣にする人は、概して身持よからぬものと覺悟すべし。

◉情もろくして、智くらき人あり。情もろきも、智の明かなる人あり。意志強くして、利口すぎる人は、同情に乏しきもの也。

◉面前に惡口言ふ人は、根性案外によきもの也。眞に根性の惡き人は、決して人の前に惡口言ふものに非ず。

●追從云ふものは、必ずかげへまはりては、惡口言ふもの也。

◉かたき人は融通きかざれど、過なし。才氣ありすぎる人は、まかりまちがへば、大に失敗せむ。

●智能あるものは、必ずひと癖あり。全然婦女子のお氣にかなふものに非ず。毒氣なく、いやみなく、癇氣なくさつぱりして、小才あるものは、或は婦女子の氣に入るかも知らねど、たいした人にはあらず。

◉賴朝は大頭也、秀吉は猿面也、家康は黑面也、概して大人物には、好男子なしと知るべし。

たしなみの程度

女子は、たしなみあるを要す、しつけあるを要す。遠慮するを要す、謙遜するを要す。されど、程度のあ

ると也。

女子が大食、大飲するは、見て体裁のよきものにあらざれど、いやに体裁をかざり、空腹を忍び、食ひてよきものまでも食はざるは、愚の極ならずや。大食するを、おさんどん的、少食するを貴嬢的なりと心得て學校の辨當も、わざと小さくして、空腹を我慢するものあり。朝から晩まで坐つてのみ居らるゝ姫君ならばそれにてもよかるべけれど、一里内外の道を歩み、体操もすれば、種々の運動もする女學生の身には、衛生上、如何にや。

餘りべら〳〵しやべるは、品位をおとすものなれども、餘り謹しみ過ぎて、口を開かず、口を開くも、たゞ一應の挨拶應答のみにとゞまりて、毫も胸襟を吐露せざるは、社交上、よろこばしき事に非ず。之に反して、おしやべりとも云はるゝ女は、つか〳〵と人の惡口を云ひ、うかと人の秘密をもらすこと多し。これも褒めた話しに非ず。

槪して、女は猫をかぶるもの多し。邊幅を飾らずして、肺腑を吐露するの美風は、之を女子に求むべからず。たしなみの程度をすごせば也。

遠慮に過ぎ、謙遜にすぎ、禮讓の度を通りこして、虚禮となり、煩瑣となり、七面倒となり、形式となり眞情の疏通を妨ぐるためし、一々數ふべからず。すべて、過ぎたるは、なほ及ばざるが如し。女のおてんばにも困れど、おとなし過ぎるにも困つた者也。

屋家の注文

玄關の側に、應接室ありて、靴で上れるやうにしたきもの也。但し、急用の客のみを、爰に通すべし。ふるきなじみの人は、客座敷へ通さゞるべからず。

客座敷は、軸をかけ、花をいけ、置物を据ゑて、きれいにして置きたし。情けない哉、われら貧人の住居客座敷も、書齋も一所也、加之、寢室も一所也。

雪隱の置處には、こまつたもの也。臺所、食堂、湯殿に近づけるべからず。今の處、客座敷に接して置く

が常なれども、心地よきものに非ず。四間か、五間の家ならば、仕方なかるべけれど、七八間となれば、他に置處あるべし。

湯殿や臺所は、日當りのよき處に設くべし。湯殿や臺所は、濕氣あるが常なれど、日當りよければ、常に乾いて氣持よし。殊に湯殿に日當りよければ、わざ〳〵湯槽をかつぎ出して、日にさらすを要せざるべし。

客座敷には、極上等の疊を用ゐたし、絨氈など敷くは好ましからず。障子は、常に新しきを望む。

書齋はほしきもの也。日本の机と、テーブルと二種を備ふれば、衛生にもよかるべし。

注文は、先づこれだけにて、十分也。さて、一家をとりしまるは、主婦の役目なるが、とこの隅までも、とりちらさず、きまりをよくつけたきもの也。又何物も置場所を定めて、入用の時、大騒してさがさぬやうにありたきもの也。殊に主婦のしまりあるか否かは、臺所を見て知るべし。臺所をとりちらしたるは、必ず主婦のしまりなき也。

日本女子の古今

したはしき哉、日本上代の女子。世界萬國、歴史は男子の歴史にして、女子の歴史にあらざるに、日本の上代は、男子よりも、むしろ女子の歴史也。天照太神神功皇后の御事は申すまでもなし。男にゆはずの貢あれば、女にもたなずゑの貢あり。女子も男子とおなじく軍陣にのぞめり。大軍にかこまれて、腰をぬかし、にげ出さむとせし夫をはげまし、強ひて酒をすゝめて醉はしめ、自から侍女を率ゐて出でゝ戰ひて、大に勝ちたる女あり。從軍中、身を海に投げて、夫の危難を救ひし女あり。外國にて、夫、皇國にそむかむとせしに、大義、親を滅するの本文、皇國の爲めに、涙を揮ふて夫を斬りし女あり。天孫降臨の際、男子も辟易したりし外交の衝に當りし女あり。かばかり雄々しきかと思へば、またやさしき所あり。二人の男にしたひよられて、いづれの情もまさりおとりなく、いづれにもなびき難しとて、自から身を殺しゝもの、眞間のてこ

なを始めとし、一々數ふるにいとまあらず。君の一言を守りて、八十歳までも處女なりし女もあり。その他女子の美談逸話頗る多し。日本の上代ばかり、女子の活動したることあらず。而して女子の最も活動したりし時代は、國力の最も盛なる時代なり。降りて中世となるも、なほ文學は女子の掌中にありき。紫式部、清少納言の文、伊勢、和泉式部の歌、古今に超絶す。男子をして、後に瞠若たらしむ、源平時代以後、社會は男子の社會にして、女子の社會に非ず。歷史は男子の歷史にして、女子の歷史に非ず。尼將軍、淀君の如きあれども、むしろ女さかしうして牛賣り損ふの類也。ほめた話に非ず。娘は箱入娘、婦人は奥様にて、そとへは出でず。すべて、女は世間と遠ざかり、床の間の飾物となり、男子の玩弄物となりぬ。啻に女子のみの耻辱に非ず、家庭の不利也、社會の不利也、國家の不利也。

片言十語

●柔順とは、人の前に猫をかぶつて、かげで舌を出したり、惡口したりするの謂に非ず。

●儉約とは、必ずしも澤庵のしつぽのみをかじりて世間の義理を缺くの謂に非ず。

●身だしなみとは、必ずしもおしろいをこて／＼塗るの謂に非ず。

●愛嬌とは、妄りに秋波を注ぐの謂に非ず。

●すなほなる女とは、必ずしも、何でも、男の言ふことを聞く女の謂に非ず。

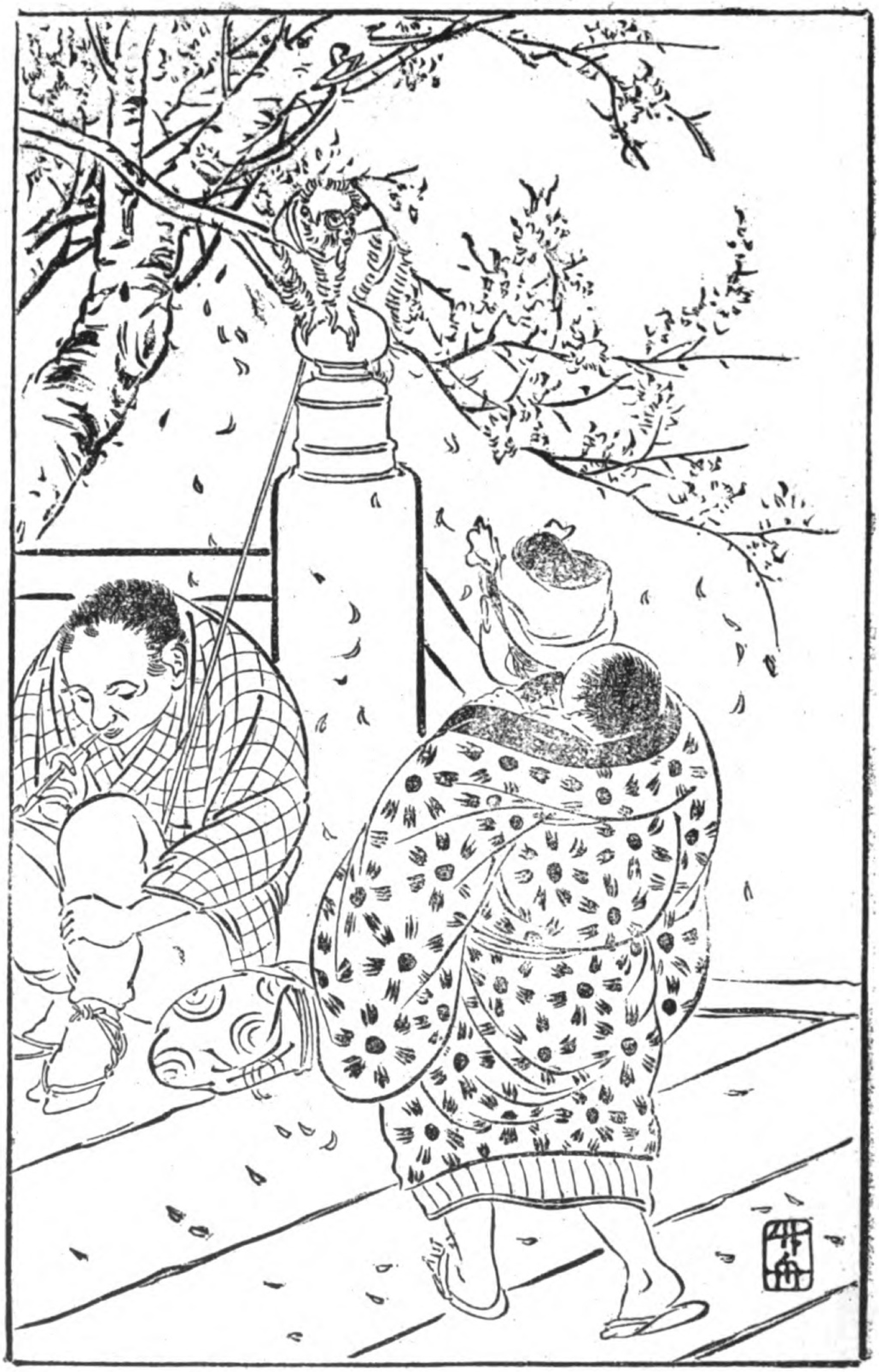
●しつけするとは、かみつくやうに叱るの謂にあらず。

●子に對する愛情とは、甘やかすの謂に非ず。

●禮義とは、むやみに頭をさぐるの謂に非ず。

●女子の權力とは、必ずしも亭主を尻にしくの謂にあらず。

●貴婦人の資格とは、必ずしも馬車に乘るの謂に非ず、金時計をぶら下げるの謂に非ず、琴をひくの謂に非ず、花をいけるの謂に非ず、和歌をよむの謂にあらず。



家庭

獨乙の下婢

稻澤ゑい子

獨乙の下婢について少々取調べましたから順序といふものもなくかきつけることにいたしました。

彼の國では一人の下婢をつかふことは、容易なことではありません、それゆえ主婦は力の限り立ち働きますが、中等の生活をいたす家になりますと、二階住ひか三階住ひで硝子窓が二十ヶ所位、間數が少なくとも五つ六つあります、其に幾つかの寢臺家具も大きなものが多くありますから皆此等を整理いたさなければなりませんゆゑ可なり用向がございます、獨乙主婦の最も心をこめて手入れをいたすところは客を御通し申す應接間と大抵は御考でせうが決して此處ではありません、で臺所の整備でございます、いかに獨乙主婦が臺所の整理に注意するかは、色々な方面から屢々世間に知れております、此は實際のとでございます、曾て現皇帝陛下が獨乙婦人は下の三個のkの文字に注意せよと仰せられましたが其第一はKirche(敎會)第二Kind(小供)第三Küche(臺所)の三個を御指圖になりました、殊に此國では上兩陛下は最も御熱心に家庭といふことに重きを置かせたまひまして公衆に活模範を御示しになりますから下人民は爭ひ競ふて此の良模範に倣ふとつとめます、本邦にて雜誌の口繪に折々此の皇室の御團欒の樣を拜しまつりますが實に兩陛下が好んでこれを御實行になるのでございます。

彼の國でも我が國と同じく、初め下婢を傭ふ場合には桂庵にたのみます、重に老婆の仕事で其時には傭主と

傭はる丶方と同じく一圓五十錢位の周旋料を拂ひます一度此の料金を拂ひましてからは試みといふが三ヶ月間で此間に相互に氣心がわかる又働き振も分ります。此期を無事に過ぎまして双方共に納得いたせば容易に出すの出るのといふわけにはまゐりません、其塲合には双方から四週間前にいひだして置くのでございます。

年齢は滿十四歳以上でありませんでは法律上から許しません、即ち義務敎育年限後の女でなければ下婢の資格がないのであります、大抵は農家の娘達で最初には料理法の心得もありませんが、此れには又相應な階段がありまして都合がよくなつております、先づ安給料で其家の主婦は萬事敎えるといふ條件付で約束ができます、獨乙婦人は料理法に重きを置きますゆえ、早く申せば授業料なしに下婢の職務を學ぶやうなものでございます、數ヶ月後は畧ぼ熟して一人前の下婢の資格ができますと其主婦から高い給料で雇ふ家に行けと進めます、此の時から下婢は皆一冊の帳面を持つて居りますが、此れは履歴帳とでも申しませうか、一々住み込んだ家の主人が其品行と解雇の理由を手記したものであります、そこで此の一冊さへ見れば此の女の性狀や何の働があるかといふことが、すつかりわかります、又次のやうな事もあります、たとへ或る主婦は此の下婢の惡行のため解雇いたしましたが不憫と思つて履歴帳へはよい加減の事を書きつけてやります、すると此の下婢が他家へ雇はれておりますうちに、第二の主婦が以前の惡行のあつたことを知りましたが履歴帳には何事も書きつけてありませんでしたから知らずに雇入れたのであります、此の塲合には第二の主婦が第一の主婦お告訴いたすことができます、即ち欺かれたといふ理由で訴へ出ます、現に折々起るそうでございます。

毎年四月一日と九月廿九日が國内下婢の代り日と定まつて居るそうでございます。

一日の仕事は本邦と然程ちがひはありません、先づ朝は第一に家中の靴みがき、部屋の掃除、朝飯の仕度(朝

飯と申しても格別手か入りません珈琲か又御茶をこしらへる位）市場に入つて日々の食料品及入用品を買ひとゝのへ、晝飯の仕度に取りかゝり後仕末ののちは間食までは手仕事などをいたします、客人あればとて一々茶菓やお酒を進めませんが、たまく親しい容のありましたときにはビールか間食時に來合せた客人に家族と共に茶をすゝむればよろしいのでございます、又夕食の仕末が八時位にすまさば九時頃からは自由の身となりますが、一日の仕事の順序や數が畧ぼきまつて居りますゆえ働きやう一つで、自分の身に餘裕ができるのであります、殊に彼の國風で前より約束をいたしたのでなければ、たとひ親戚の人が丁度食事時に參りましても、一切物をすゝむることかありません、併し招きました時は、鄭重な侍遇をいたします又多人數の客を招待して饗應するといふは他國に比して多いそうでございます、このやうに、日々を暮しますが大抵二週間に一度位づゝ大洗濯をいたします、御承知の通り、あちらでは白い物が多うございますから大勢の家内では、この仕事が一月中の大仕事で前日から下仕度をいたし置きまして當日は冬でも朝四時頃から初めます、洗濯女を雇ひますが汚れ物を煮たり、揉みましたり淸水でそゝぎまして乾いたのを、片端から火熨斗を掛けるのでございます。

給料は一月づゝに渡す家と三ヶ月毎に渡す家とがあります、安きも一ヶ年六十圓上は百圓位で、フランクフルトアムマイン市は流石有名な繁華な土地丈に安きも百廿圓以上でなければ容易に得られません。

食事は其一家族と殆んど差はございません、五人家族の處へ六人前を調へて臺所でいたゞきますちがひがあります。

衣服は日曜日用外出用の外は至て簡畧で飾りの少しもない、色の濃い袖も裾も極く短いものを用ゐます、其上にこれも色のじみな丈夫一方な大きな前垂をもちゐております。

二週間毎に日曜日の午後一時より六時までは休暇を與へられます、心がけのよいものは此の日此等下婢のた

めに開く集會に出席いたします、此れはキリスト教に關係ある一室に設けてありまして年若き牧師方の監督の許に音樂、將棊、談話、講談、讀書などいろ〳〵の催しがありまして自由に好むところを樂しむのでございますが知らず〳〵良い感化をうけらるゝやうな仕組になつて居ります、又或る者は思ひ〳〵に友と連立つて動物園博物館芝居などへもまゐり郊外散歩をいたすものもあります。

下婢の最も樂しみにいたして居りますのは十二月廿四日のクリスマスで主家より澤山に頂戴物をいたしますからであります、此の祭りは小供が重でありますが一家内では雇人も重なもので年額の四分の一か五分の一位な高の物をやります、こゝが主婦の注意處で常から何が彼の嗜好品でゐるか其望みのものは何かと心がけて、遣はします、下婢は思ひがけもなく重寶な物を頂きますから樂しみにいたしますのは當然なことであります。

遠來の客が逗留いたさば何程かづゝ氣つけをいたします、これは一般の習慣となつております。

二十年間一家に止まつて忠實に働いた者には其市町村役場より一時賞金が出ます大抵廿五圓内外だそうでございます。

主婦の注意でもありませうが下婢一般の習慣で給料は銀行へあづけますことになつております、必要品の重な物はクリスマスに頂きますから六七年間辛抱して働けば數百圓の貯金ができます、大抵はこの金を嫁入の仕度料といたします、一生獨立いたすものは旅館に雇はれて大宴會儀式用の料理給仕法を練習いたして出精の道を開きます。

家族と下婢との間には確然たる隔てがありまして小供等には悪感化を受けさせぬやうにし、又主婦は世間話などをいたして無駄言を話しあふといふ事は餘程一家の主婦たるものゝ品位を墜すといふ考がしみ渡つておりますが、前申述べました通り食物の事なり自由を與へるといふ點からは家族は注意を怠りません、大人は無論小供も自分で手の屆くだけは下婢を煩はしませぬ

且つ小供は下婢に對して不親切なことをいたしましたならば主婦は嚴敷叱ります、事をたのみました折などは小供はかろく、ありがたうといふやうな習慣をつけておきます。

或る家では娘達に外國語を練習させますためにわざと其國々から傭ひます大陸國で然程離れておりませぬゆゑ便利なことでございます。

本邦にまゐつて居ります獨乙人は屢々本邦下婢が彼の國のものゝ半分位より働かぬと申してつぶやきますが、氣候のため體力が堪えないかもしれませんが下婢の習慣及び制度がよく整ふて居らぬも一原因かと思ひます。

松前夫人の平生

もと子

貴族の夫人方で、婦人社會の種々の事業に盡力なさるは、毛利公爵母堂、鍋島侯爵夫人をはじめ、松前子爵夫人などで御坐います。そして公爵母堂は德望を以て侯爵夫人は絢爛の才華を以て夙くより聞えて居られます。松前子爵夫人に至つては、お二人に比べてズット御年若でもあり、婦人會に顏出しをなされましたのも近頃でありますが、一度贊成されたとには。必ず自身に周旋し奔走なされて、社會公共のために恰も當然なすべきことをなした斗と云ふやうなお心持で、少しの恩着せ顏もなさらぬと、その働き振りの深密に人と爲られた貴族の婦人として殊に目覺ましきが上に熱誠なる俠氣を以て居らるゝと、これらは慥に同夫人をして、實に短き年月の間に於て、わが婦人社會と嶄然として頭角を現はすに至らしめたる所以でありませう。

夫人の始めて婦人會に出席されましたのは、慥か小笠原子爵(長生)の御紹介で、大日本婦人教育會の會員となられたのが始まりであつたと思ひます。折から奥村五百子氏が戰後の支那を見て來られて、今の愛國婦人會の創設を熱心に貴婦人間に遊說して居られました。教育會に主として盡力して居られます山脇夫人は、松前子爵夫人を頼母しき方に思はれたものと見え、或時

奥村氏を夫人に紹介なされました。老女史の說くところ、一々子爵夫人を動しまして、夫人は衷心より賛成を表されましたが、愈々同會の設立を見るに及んで、何事も最初が大切であるからと、發會當坐子爵夫人は自ら手紙を認め或は馬車を走らして知人の間に入會を勸誘し、數月の中に數百名の會員をつくられましたには、流石の奥村女史も感嘆して、逢ふ人毎に夫人を稱讃いたしました。夫人の今日までに同會に紹介されました會員數は凡て六百名でありますさうで、今では愛國婦人會の柱石のやうに思はれておいでになりますものも當然で御坐います。

夫人は先般來保養のために銚子に行つて居られますので、早朝本所のステーションを發して同地に訪問いたしました。松前家では早くより同地方に別莊を求めて居らるゝさうでありますが、適當な家がないので町家の大きな家に假住居をして居られます。私の通されました部屋は二階でありまして、間もなく夫人は快く出で迎へられました。お髪はいつもの束髪でありましたが、洋裝して馬車に乘つて居らるゝとは、殆と別のお方かと思ふばかり、服裝なとも至つて淡泊に、

「遠方をようこそ――

と打解けたる御待遇、只管なつかしき心地を増すヿでありました。夫人は一切角張つたヿをお云ひにならぬ方で、お話なとも至つて尋常で御坐います。

「此地に參つて居りますと、實に呑氣でありまして、それ丈でも何より保養になると思ひます。」それに濱邊に行くとか何とか自然歩くヿが多いので、餘程丈夫になります。

食物で御坐いますか、シケでない限りお魚は澤山ですが、野菜もよくないやうですし、肉などは態々東京から取寄せる位のヿで、それだけは隨分不便で御坐います。

此のあたりの漁夫などは、親しめば親しむほど無邪氣なもので、羨ましいやうでありますが、また實に可愛相なもので、慥か新聞で御覽になつたでせうが此間もだき此の沖で漁夫が十七人も溺れたそうで御

坐います。それはシケを見かけて漁とりに出掛ると大層金になるのださうで、生活のために危いと知りつゝ無理をして、みす〳〵命を捨てるのだと云ふとです。世渡りの苦勞もさまでかと思ひますと、その當然などホト〳〵氣の毒で堪りませんでした。

此の樣な種類の同情は、實に夫人の著しき長所で御坐います。更に談話はお子達の教育の事になりました。

平生一緒に起臥を致しませぬゆえ、自然目も屆かぬ勝になりまして。例へば身のまはりでも可成一人でするやうに云ひつけて置きましても、何ぞと申しては女中達を使ふやうにもなり、「どうも宅では思ひ通に參りかねます所から、先頃より上の二人は石川といふ方に、下の二人は別々に學習院の先生にお預けいたしました。學校ですか——學校は四人とも學習院で御坐います。只今側に居りますのが、末の一人丈で、兄供の監督は悉皆先生にお任せ致して御坐います。先日鳥渡用事のために上京した節、久し振に先生方にも子供達にも逢ひましたが、行屆かぬながらにも出來る丈召使を煩はさぬやうに、教へつけて置きました故か、子供達も先生のお宅に居つて別に不便を感ずる樣でもなく、却て樂しさうに新しい境遇に就て物語つて居りました。先生方も思ひの外に我儘が少いので、一層責任を感ずると申して居られました。此冬休みには此方に參ることになつて居ますが、矢張家心のつかぬ中に成るべく早く歸してやろうと思つて居ります。

夫人はやがて、

「折角此地までおいでになつて、海邊を見ずにお歸りになるのは殘念ですから、是から御一緒に參りませう。

末のお子と女中一人をお連れになつて、道程の餘程あります犬吠まで(燈臺のある所)御案内なされました。御承知の曉鷄館といふ海水浴場のあるほとり、壯快なる波打際を逍遙して、御一緒に名に負ふ櫻貝など拾ひました時は、子爵夫人といふ御身分に對して、普通持つべきほどの御遠慮も打忘れて、唯々夫人の隔意なき

同情の中に包まれて居るやうな心地でした。滊車の時刻が急がれますので、間もなく御一緒に引返して参りますと、出掛に云ひつけて置かれたやうで、滊車中用の湯たんぽより、海岸を散歩して穿いて居た足袋が濕つぽいであらうといふ御注意から、そのはき換まで取揃へられてありました。その他數々、兼て松前夫人の人に接すると最も厚く、かつ寸分の隙もなく行屆いて居らるゝと聞いて居ました事柄を實際に感じまして、お別れ申しましたのは短き冬の日の暮れ近き頃でした。

松前夫人は客あしらひに實によく行屆いて居らるゝと云ふことから、其後或所で斯ういふことを伺ひました。

「三四年前までは松前さんをお訪ねすると、奥様はきちんと丸帯をおしめになつてでなければお逢ひになりませぬし、お正月など十日頃にあがつても、是非蒲鉾つきのお膳が出るといふやうな風で、實にお苦うに思はれたのでありましたが、發明な御夫人であられますゆえ、近來世間の風を御覧になるにつけて著しく家風を改良なされたのです。そして其改良に少しも輕率な所のないのは最も感服すべき點であります。」

との事でした。

餘談ではありますが、貴族方の普通の社會と交通せらるゝ利益は慥に斯る所にありますやうで、普通の婦人はまた貴族方と交通することによつて種々の利益を得るのであります。即ち今の不規則な我國の社會になつて貴族方はまだなか〳〵に机帳面にそして輕薄になりませぬゆえ、往來の間に私共が知らず〳〵幾多の善良なる感化を受取ることが出來るので御坐います。私供はかゝる意味よりしても、婦人會などに於て、貴族と普通の人々と交際の道の開けつゝあることを喜ばしく思ひます。

松前夫人の愛國婦人會に於ける働き振は前に申しましたが、その事の一段落を告げて以來夫人は間もなく、北海道土人救育慈善會のために音樂會を催されました。(昨夏)。他の發起者賛成者諸氏の御盡力も固より多

かつたのでありませうが、夫人のお働きはまた格別なものでありました。音樂會の準備は少くも普通二ケ月以上を費すのが常でありますに、咄嗟の間に殆ど他人の意外に思ふまでの好成績を得られ、しかも音樂會の結了後は、身分や位置のズット低い人達でも、苟くも會のために骨折つた向々には、夫人自ら禮まわりをなされました。そして更に九段の階行社に報告會を開き自ら主人となつて一同を饗應せられ、諸般の手配より報告まで少しも他人を煩はされぬのでありました。此時列席いたしました或人は、貴族の婦人ところか、大方の敎育ある婦人中にも、松前夫人の彼の時ほどの穩當な沈着な態度を以て、多人數の席上にその云ふべき所を盡し得る婦人は、現在に幾人あらうかと嘆美して居られました。

外に於てかく目覺ましき働きをなされます松前夫人はそのお家に於ても、大小の家事を人に任せず、大方御自分に所理せられます。裁縫なども子爵の召物、お子達のものまでも、大抵手づからなさるのが前から　仕來りでありましたが、近頃婦人會などに盡力なさるやうになつて後は、その爲に内を疎かにしてはならぬといふ所から、一層これらを御務めになり、子爵の御母堂に對しては、殊に丁寧な御介抱をお盡しになるといふことです。

夫人はかく萬事に注意なされますゆえ、普通華族の夫人に比べて自と人情にもお通じになる譯で、女中も皆夫人を慕ひ、已むを得ざる都合のために一旦さがつたものでも、再び奉公の出來る身になると、是非同家に歸ることを望み出るといふことです。

讀書に就て伺ひましたところ、夫人は單にその暇がないと云つて居られましたが、併し婦人雜誌や新聞は幾種類も御覽になるやうで御坐います。

また信仰に就ては、左の如く語られました。

「私は奥村さんと近くするものですから、本願寺の信者であらうと思つて居らるゝ方もあるやうですが、何れの宗敎にも一向緣の遠い方で御坐います。併し何等かの信仰を持つて居ることはよい事であらうと思

つて居ります。（羽仁もと子）

三輪田女史の平生

一日麹町四番町なる同校に、三輪田眞佐子刀自を訪問して刀自の日常を伺ひました。刀自近頃健康は餘りすぐれず。殊に御老年でもあるけれど、至つて快活で、非常に御繁忙である處から、殆んど自身の健康などにかまけて居る遑がないと云ふことである。

▲儒家の生れ

刀自は全体儒者の家に生れた人で。けれど、初めから決して學問を以て身を立てるとか、或ひは今日のやうな敎育家に成らうと云ふ考へは無かつたのです、故に別に深い素養があるとか、何れほどの學問をしたと云ふ人でも無い。が、生れが生れですから、多少の嗜好はあつたでせうが、良人は陽明學者で、机を持つて嫁に來るやうな人は嫌ひであつたから、嫁つて來てからも、別に何を學ぶと云ふことも無く、其の中に子供が出來る。それに、良人は外務省へ奉職して居られたので、經濟のことには極めて無頓着の人で、あれば有りたけ人に飲ませたり、喰はせたりして了ふと云ふ質で、隨分貧乏だつたさうです、而うして役所に居つても、他の長上や同僚と意見が合はんければ、即坐に辭表でも書く方だつたさうで、宦海の游泳術などは全然知らなかつたのです。ですから、急に良人が亡くなられた時は、赤貧全く洗ふが如しで、子供は有り、刀自の苦心は實に思ひ遣られました。

▲塾を開く

つまり然ういふ逆境に立つて、初めて職を求めると云ふのが、即ち獨立して子供を敎育して行きたいと云ふのが刀自の精神で、其の生活の方法として、子供を伴れて鄕里へ歸り、伊豫の松山で塾を開らかれたのです。その時は、まだ年が若いので、親類などでは危ぶんだものもあつたのを、構はず中年の男學生を集めて敎へる、當時のことであるから、一人の月謝が漸やく二十錢くらゐで、人の反對や、忠告を退けて、三四十

人の生徒を預ッて朝から晩まで、一切一人で遣つて脱けられた。

然し、その頃は今と違つて、尤も諸物價の安い時であつたから、今日二圓の月謝を取るよりは却つて樂であつたとの事です。けれど一切一人で遣られたから、先徒が歸つてからもいろ／＼の調べものや、又家政上のことや何やかやとなか／＼寢る間とては無いくらゐで朝も早くから起きなければ間に合はないから、夜は平均三時間くらゐしか眠なかつたそうです。けれども元來健康なたちで、それほど忙はしい中にも、自分の研究を爲たり。子供の教育をされたのであります。

▲外國語の研究

その後東京へ出て來て、早くも外國語を研究して置かなければ、大いに困る時世に成ると云ふことを考へて、子供が學校で敎はつて來ては、毎晩家で温習のを一緒になつて研究されたので、今日では大抵の原書は差支えなく讀み得られるのです。刀自は何でも人が隱居するとか、手を束ねて無駄に時間を過すと云ふやうなことは、大變に嫌ひであるから、よく人がこの年になつて、そんなに急はしく餘所の學校まで駈け廻はらんでも、少し老後の安靜を覓めたならばと云ふでもそんな事には決して應じられないのである。

▲先生は蒲團の上

それで、この前面白い話がありました。曾て刀自の家に居た女生徒に先生は毎日お宅で何をしてゐられますかと聞いたものがある、すると其人は娘心に成るべく先生をよく云ふ積りで、丁度繪草紙などにある、華族の御隱居さまでも見るやうに、先生は毎日何にもせず、綺麗な蒲團の上にチヤンとお坐りになつて、机に向つてお在なさると云つたのを、後で刀自がそれを聞いて、彼は幾年家にゐても、先生の氣を知ることが出來んのだと云つて笑はれたことが有りましたが、然ういふ無爲なことは刀自は嫌ひです。人は決して遊んでゐるために生れて來たのでなく、必らず働らくべき義務を以てゐるから、強ひて月給を取るにも及ばんから

慈善的に女學校の教師にでもなつて働かうとおもふ、そうしたならば大いに今日の女學校の改良にもならうと言ふてゐられる。然うなれば學校も餘り營業的に成らず、從つて生徒の信用も得られやうと云ふのが、刀自の平素の意見だそうです。

▲獨　立　獨　行

渾て獨立獨行と云ふのが刀自の主義で、三輪田女學校を立てられるのも餘程以前からの計劃で。方々の學校へ勉めてゐる中から、非常に節儉して寸暇もなく働らく傍ら、種々の著述をするとか、新聞雜誌の原稿を書いたりして、假令少しづゝでも貯蓄して來たのが、即ちこの學校の資本金となつたのです、故に總建築費用は二萬圓以上も懸つてゐて、更に他人の厄介にはならられなかつたのです。

經濟の點には、刀自は頗る緻密な考へを以てゐる人で、今でも少しの金も直ぐに銀行へ預けて、家には何にも置かれんといふ事です。たとへ幾等かの金があつたにしろ、今直ぐに使うと云ふことは出來ない。一々銀行から取つて來なければならない規則だそうです。

然し、そんなことは滅多に無いことで、日常の費要は一切現金で遣つてゐられるから、晦日が來たからとて、別に支拂ひする手數も無い。家族は悉皆で五十人ばかりですが、内、寄宿生が三十五六人ゐるので、後は刀自に元道氏夫婦と子供。それに奉公人です。

女子の職業にも、刀自はいろ〳〵考へておられる。手先の仕事や細かいことは、女子に適してゐるので、三輪田學校でも數學の教師は婦人ですが、なか〳〵よく出來ます。体操も女子の体操に男子の教師で遣るのは、甚だ不自然だと云ふので、今度女子の教師を傭ふことにされたで、又、家に置く女中なども、見込のあるものは十分教育して遣る積りで、現に今一人の女中は師範學校へ通はせてゐるそうです。

因にいふ三輪田女學校の目的は、女子に必要なる高等普通教育で、修業年限は五箇年である。科目は、修身、國語、外國語（英語）、歷史、地理、數學、理科、家事、裁縫、習字、圖畫、音樂、体操等で、外に英語は隨意課としてあるが、成るべく奬勵するので、亦漢文は別に科外としてあります。

然し、外國語と漢文を遣らんものは、其の時間に裁縫と他の手藝を課するのです。

第一年級の入學々力は、滿十二才以上にして高等小學の二年級を卒へたるもので、入學受驗料は五拾錢としてあるけれど、無試驗入學者は元より受驗料は要らんのです。束脩は壹圓授業料は貳圓。この貳圓の月謝は割合に高いやうですが、これは餘所から無暗に不正學生の入つて來ないやうにとの豫防策で、決して月謝を的に生徒の多からんことを望むのでは無く、少なくも着實なる生徒を養成する目的ですから、中には全く月謝を納め兼ねる生徒には、極めて秘密に相當の保護を與へてあります。

生徒の現在數は、百八十名ばかりですが、これは漸やく此頃開校式をしたばかりにしては、案外に多いので、入學豫定は三百名までゞす。（有木樵水）

家庭の習慣

山形縣女子師範學校長　津田元德

習慣ほど、大切で、研究の價値あるものはない、從つて、研究すればする程、これ程面白く興味あるものも少ない、何となれば、一度習慣となつた事は、恐るべき事でも、可笑しき事でも、平氣で、習慣とならざる者の目から見れば實に不思議な位である、先づ一二の例を云はゞ。

挨拶にしても、我々が、ペコ〳〵頭を下げて平氣で居る有樣は、西洋人の目から見れば、實に可笑いそうである、特に軍人警官など、擧手注目（手をあげて目をつける）の禮をなしつゝ頭をペコつかせるのは、如何に習慣とは云へ、我々日本人の目からにても、頗ぶる可笑い、之に反して、西洋人が握手するのを見れば我々には非常に可笑い、可笑い所ではない、吾輩若し我國の令孃夫人達に手を出して、突然其纎手（きれいなて）を握つたならば、恐らく非常の無禮として、叱責らるゝであらう。

或國では、貴人の前で、仰向きに仆れて足をピンピンと動かすを最上の敬禮となし、或國では、長い舌をペロリと出す事が、非常の敬意を表する事となつて居る、此等は、習慣とならざる國の人の目からは、如何に感ずるであらう。

其他、我國の人は、**物を投ぐるに**も、手を上にあげ

て、下向きに投げ、西洋人は之に反して、下より上向きに投げる、人を招くにも、我國の人は、掌を下に向けて手招きするが、西洋人は掌を上に向け二指を動かして招く、

又、此頃上下の大評判たる相撲(すまう)も、我國では、土に倒す事、一定の區域外に出す事を以て勝負を決するが、西洋では、此等に頓着なく、只管肩を地に付くる事を以て勝敗の分る丶所とする、數へ來れば可笑い事が澤山ある。

人を殺すモルヒ子も、少しづ丶注射して習慣となつてる人は、普通人の死ぬ程の分量を注射して何ともない、支那人の阿片纏足(纏足とは足をまきつけて小くする風俗なり)に於ける、西洋人の蜂腰(蜂腰とは腰をしめて小くする風俗)に於ける、習慣の力ほど恐るべきものはない、(注射といふのは針の先に藥をつけて人の體内にさし入れる事)

されば、我國家庭に於ける習慣に就ても、其利害得失を研究したならば、實に恐るべきもの、廢すべきもの、可笑きもの、改良すべきものが、澤山あるにちがひない、差當り、吾輩の見認めて最も早く改めて貰いたいと思ふ習慣は、

◎第一、幼兒をば何とも思はぬ習慣である。

大人が病氣にか丶るとか、死亡するかせば、政府も人民も大騷ぎで、一寸の傳染病にすら、何千何萬の金も惜まない、所が、此丈騷ぐ死亡數の比例は、たつた百人中二人〇九六にしか過ぎない、(明治二十二年より三十一年に至る十ヶ年平均)

然るに、百人中、八人と九〇六の多きは死產をなし漸く死產を免れた者も、百人中十四人餘は一ヶ年以內に死亡し、(同年間の比例)、特に近來は殆んと二十人餘の平均死亡數を示し、一年以内の幼兒死亡數は、明治十五年より三十一年に至るまで十七ヶ年間の統計によるに、普通大人の死亡數より、九倍餘に達し、云はば非常に慢性の大傳染病にか丶つて居るにも拘はらず、政府も、人民も、父兄も、母姉も、誠に平氣である、内のガキが無くなつた位の調子で、從て、墮胎壓殺な

とぞも何とも思はぬ、幼兒を人間とも何とも思はず、其養育法をも何とも心得ぬ、吾輩實に之を慨いて、幼兒心理學と云ふ書物を著はしたが、著書位では、此習慣はやまぬ何とか政府から取締法でも設けて貰はねばならぬと思つて居る。

我國ばかりでなく、他の國にても幼兒の養育法については、亂暴な所もあるが、それは何れも、文明の最上國ではない、其一二を云はゞ、

▲暹羅國では、黄色を尚ぶ習慣があつて、子供が生れると、黄色の繪の具を身體に塗る、且獨りで歩行するに至る迄は決して外出させぬ、隨分亂暴な習慣ではあるまいか。

▲西藏では生れると直ぐに、獸肉を乾かして鰹節の如くしたものを粉にして、獸類の血と混合して、



ドロ〳〵汁にして吸はして居る、誠に危險千萬である。

▲印度では風を引かない爲、阿片（毒藥なり）を豆粒ほどづゝ、子供に呑ますことがある、隨分ひとひ事と思ふ。

▲北海道のアイヌ人は、子供が生れると、多くは水浴で、多數の婦人が集つて、舌で全體を嘗めてやる。

▲亞米利加のマテー人は、小供を湯に入れても、手拭



かないから母親が嘗めてやる、其上油を塗つて、赤く光るまで摩擦して、野羊の皮をひろげて、仰向けに寝かし四隅から卷いて、風呂敷包の樣にして、忙がしい時には木の枝にぶら下げて置く。

▲又同じ、ホッテントット人は、分娩せんとする時、夫は屋外に立ち、隣女は、産婆として手傳に來り、紐

產するや否、其赤子を抱きて、彼の夫の立てる地上に置く、すると其夫は、其子と認めて、養育する事を欲したならば、之を地上より抱き上ぐるか、若し然らざる時は、抱き上げない。

▲南洋のボルネオでは、妻が姙娠をすれば、夫は諸事謹愼し、物を打つ事もしないで、腹の兒にさわらぬ樣にするが、難產をすると、惡い事をした報いだと信じて、普通の產婦よりは、一段下がつた取扱ひをなし、森の小屋に連れて行つて仕舞ふ。

▲ニユーギニーでは、婦人が產氣を催すと、川の側に行つて產み落し、直に川の中に這入て奇麗に始末して歸り。

▲オーストラリヤでは、子供を生むと直ぐ水で洗ひ、砂、枯草などで身體を拭ひ、宅へ連れ歸つて平氣な顏をして居る、所によると、子供が生れる時、砂をかき集めて、火を焚いて之を熱め、其中へ穴を掘つて、小供を入れ、首と頭とを出して二時間位平氣で居る、此等は、若し習慣にならない國の人から見れば、どんなに可笑く、又亂暴で、又危險であるであらうか。

▲我國でも、此幼兒を何とも思はぬ習慣から、醫師又は產婆の忠告も聞かないで、坐して產をさせたり、又力餅と稱して、產後直に堅いもちを與へるなど、數へ來れば、改良してほしい事が、澤山ある。

◎第二は、幼兒を堅く負ひ且嚴重に正坐させる習慣である。

此は、我國の前途について、餘程考へて貰ひたい、米國に行くと、エスキモー人が澤山居て、我々日本人を見るや喜んで禮をする、成程其容貌體格など、我國人に酷似してるから、同胞と思ふかも知れないが、我邦人は、此等野蠻人に同類視せらるゝを肩身狹く思ふも據ろがない。

然し、此肩身狹くさしたのは、何であらうか、種々の原因もあらうが、學者の說によれば、堅く負ひ、且ひとく正坐させるからだと云ふ、成程發達表を見ると左の通りで、幼少の時は、寧ろ我邦人の方が發達も善いが、成年に達するに從つて、段々發達わしくなり、

英人とは五寸もちがひ、露國人とは三寸、支那人印度人とは、二寸の差を生ずるに至るから、我國の人達はよほど此點に注意してほしい、特に身長のみならず、堅く負ふ爲に胸廓を壓して、實に恐るべき體格の劣等なものとするに至つては、相互に寒心すべきではあるまいか。

年齢／國別	初生	六年	十五年	廿年
日本人	一尺、五六一六	三、四四九六	四、九九五二	五、一六五〇
英人	一、五七二二	三、三七九二	四、八六七二	五、六三一〇
佛人	一、六〇〇〇	三、一五八四	四、八〇〇八	五、四三二〇
獨人	一、六〇〇〇	三、四八四八	四、七〇四〇	五、五二一〇

上表は我國の分はベルツ氏英國はロバートソン氏佛國はケトレー氏獨國はシユーエヒテン氏の調査とす。

◎第三は、小供が凡て人手をかりる習慣である、換言すれば、小供をして、凡て、人手をかりずに、自分で何事でもなす習慣を付けたいのである、我國古來の例として、何もせぬのをエライ樣に考へて、富み且貴くなるに從ひ、實に身體を働かす事がなく、凡て人を使役する事を名譽と心得てる事である。

印度の貴族が、一日英國の貴族の一心にテニスなどをして、汗だら〳〵の所を見て、あれが貴族か、なぜあんな事は家來にさせぬか、と云つた事があると云ふが、家來にテニスをさしても、主人に汗が出ればよいが、其ういふよき都合にはいかぬ。

我國の一寸とした紳士でも、御歸りと云ふ車夫の聲と共に、家內、下女、書生、玄關に平伏し、車夫が一方の靴を取れば、一方は書生がぬがせるともがき、細君は帽を取り、女中はかばんを持ち、本人は只拱手して大の字なりになつて居る、寢る時でも、寢卷の着替から、帶までさして貰ひ、人形の樣にころがれば、上より蒲團をかけ、枕も直し、四隅まで押へて貰ふ、其間一寸も手足を動かさず、恰も死人の樣である、是が良習慣であらうか、

西洋人は、日本の家庭は、病院の如しと云ふが、成

程西洋では、女中を寢室などに入れ、寢る時の世話までさせぬ、我國では、自ら病人になつて、人に世話をかけ、平氣で居るが、遂には眞の病人となつて早死をして仕舞ふ、

此う云ふ風で、一間歩めば、すむ用事も、臺所に働いてる細君を態々呼び立てる、某公爵は自ら筆立の小筆を取る勞はするが、其筆の「サヤ」を取らする爲に、態々呼鈴をならして、次に居る近侍を呼び立てる習慣であつたと云ふが、(これは或は形容かも知れぬが兎に角惡習慣の一例である)こういふ風では、到底我國が外國と對立出來ぬ、

とうか、子供の時から、自ら出來る事は、凡て爲さしむる習慣を養成し、自然に身體を鍛へ、自然に强壯となり、自然に經驗をつみ、自然に時間を節約し、自然に活動したいものである。

倘改良したい事は澤山あるが、凡て道德とか、倫理とか八ケ間敷詞をつかつて、其重んずべき事を喋々するも、元は皆此等の習慣に外ならぬのである、

倫理と云ふ詞は、英國にては、エシック、獨國にてはエチック、佛國にては、エシクーと云ふが、皆希臘語の、エスコス、拉丁語のエシクスなる詞より出で風俗又は習慣といふ事の意を有し、

道德なる詞も、英國では、モーラル、佛國では、モーラール、獨國にては、ジッテンと云ふが、何れも、モーレスなる拉丁語より出でたる、習慣風俗を意味する詞である。

從て、教育に於て、最も重きを置く、品性を作ると云ふ事も、畢竟人の良習慣が悉く集合統一して、一全體になつた狀態を云ふので、つまり、良習慣を作るに過ぎないのである。

されば、ロック氏も、兒童自らが築き立てた鞏固なる習慣ほど、最上の有力なるものはないと云ふて居るされば、兒童をして自ら爲さしむる習慣を養成したいと云ふもこゝである。

ルソー氏(佛國教育大家)も、兒童の性情に適せる自然の習慣を形成するが教育だと云ひ、ニイマイエル氏

も、整頓の習慣、清潔の習慣、端正の習慣、鄭重の習慣を養成せよと云ひ、クルトマン氏（獨逸教育大家）も秩序の習慣、注意の習慣、服從の習慣、惡習慣の打破をなせよといひ、ヘヒテル氏も、習慣は、非常に勢力ある教育だと、申し述べて居ります。

どうか、學校教育も大切であるが、家庭に於ける微細の習慣に就て、世の母姉父兄たる人に最上の注意を願いたいものである、從て我邦の兒童が、完全圓滿なる發達をなし、國威を發揚せしむるには、是非とも、良習慣を助長し、惡習慣を改良したいものである、孟母三遷の教へは、習慣の大切なる事を表明したる、好模範であります。

（完結）

一日醫者（其二）

糸　左　近

▲インフルエンザ influenza.

〔原因〕 病毒は「バチルス」なりとの說もあれど、未だ詳かならず。兎に角流行性に來り、さうして、四季の中では冬季が最も多くある。我が國での此の病の判然たる流行を認めたのは明治二十三年一月である。

〔病狀〕 急に惡寒がして、ガタ〳〵戰慄を發し、熱は遽に四十度以上にも上り、脈の搏つことが劇しく、呼吸苦しく、強い頭痛がする。重いのは精神が異常を起し、或は讝語を言ふ。これより涙が出でたり、鼻が閉塞つたり、喉が痛んだり、聲が嗄れたり、飲食物を嚥みこむに痛さを感じたりする。續いて咳嗽が出で、食欲が更に無くなり、中には食すれば直に嘔吐を催すこともある、又便秘して幾日も便通が無いこともある。さうして此の病は其の熱が不規則で、四十度以上あるかと思へば、急に三十八度位に下つたり、さうかと油斷すれば又更に四十度にも上る。此の初期の診斷は醫者にさへ六かしくて往々窒扶斯や間歇熱など〻間違ふことがある。故に素人は、尙更本病であるや否やの鑑定は甚だ困難であるが、唯流行時に右の病狀書のやうにあれば、さうであると斷定しても可い。又此の病

からして色々な他の病を誘ひ出すことがある、即ち第一に肺炎や肋膜炎を合併したり、或は心臟病や耳下腺炎などに罹ることもある。であるから、此の病だと思つたら、油斷をしてはならぬ。斯樣に他病を誘ひ出し易いからして、中には己れの不養生を棚に上げ、醫者のことを、彼は肺炎をインフルエンザと誤診してゐたとか、肋膜炎をインフルエンザの治療してゐたから此の通り重くなつたのであるなど〻怨む。これは醫者の惡いのでは無い、一つは病人の不養生からなり、一つは本病の性質であるからである。實に醫者といふものは人目は樂なやうで、其の内幕は仲々氣苦勞なものである。

〔療法〕　養生が肝要である。殊に老人小兒及び姙婦は尤も注意せねばならぬ。斯んな病氣位と思つて油斷すれば、それが爲他病を併發して死なぬとも限られぬ、又姙婦は往々流產することもある。一時も早く治療を加へねばならぬ。即ち熱が出たらば、直に床に就き、身を暖かにして　更に感冒を引かぬやうにし、淡泊の食物を取り、身體の衰へを防がんため、兼て少量の葡萄酒を飲み、又牛乳を用ゐるが可い。熱多くなり、頭痛の劇しい時は、氷を以て、頭腦を冷し、腦充血にならぬやうにせねばならぬ。便秘の時は左の藥を用ゐて便通をつけねばならぬ。

硫酸苦土十五瓦　稀鹽酸一瓦　温湯百瓦（半合）　白糖適宜

　右一日三回に分けて服むが可い。

便通が有つたら、直に服用を止めねばならぬ。熱を取るには、左の藥を用ゐなさい。

鹽酸規尼涅一瓦　飯粒十粒程

　右能くねつて、丸藥十二粒に作り、四粒宛一日三回に分けて服むべし。

咳嗽が劇しく或は痰の出るものは、左の藥を右の藥と共に用ゐるが可い。

　遠志根三瓦を、温湯半合を以て、十五分間煎じ、煎じつまつた丈、水を入れて更に半合とし、それに硼砂加茴香精一瓦半と、白糖適宜を入れ一日三回に分

けて服むべし。

◎脚氣

〔原因〕この病毒も、一種のバチルスならんとの說もあれと、未だ慥かでない。十五歲から三十歲まで位の人に多くある。小兒老人には甚だ少い。婦人は姙娠及び分娩後に多くある。職業上からの統計によれば、學生・坐商・兵卒・監獄人に多い。又或る醫者は魚食者に多いと言ふけれとこれは當にならぬ、何となれば漁者に必ずしも多く有るとも限られぬからである。又或る學者は米食者に多いといふけれと、これも餘り信せられぬ說である。兎に角余の經驗に依れば運動及び飲食物の攝生が惡い人に多いやうである。又天然に脚氣的の身体を有つてゐる人と、さうで無い人とあるやうである。されと何んな身体が脚氣的であるといふことは何うも余には分らぬ。四季の中では五月から八九月までの間が最も多く流行る、殊に霖雨後急に熱くなる時に尙多い。一度この病に罹るときは翌年も亦再發し易い、けれと大抵の人は年々病勢が衰へてゆく、中には尙一層重くなるのもある。實に原因の分り惡い病と言はねばならぬ。

〔病狀〕本病に三種類ある。即ち(一)乾性脚氣(二)濕性脚氣(三)衝心性脚氣である。(一)は下肢が倦怠くて步行が困難を感じ、身体を僅に動かせば忽ち動悸が高ぶり、脈が劇しく打つ、次で下肢麻痺れ遂に步行が出來ぬやうになる。これより腓腸筋は張り、手の指尖の感じが變になり、次に唇、胸、腹まで麻痺を起し、何れの部に觸つても、其の知覺が鈍くなる。(二)は(一)に能く似た起り方でそれに加ふるに、足背及び脛骨前面に浮腫を發し、指で壓へれば凹む。この浮腫が時によると全身に及ぶこともある。又これが爲に心臟病腹水などを誘ひ出すこともある。又小便の量大いに減るものである。(三)は(一)の劇烈なのである、その苦み方も一通りで無い、其の上惡心或は嘔吐があり、或は聲が嘶れ或は吃逆が出で、劇烈に呼吸苦しく、遂に心臟が麻痺れて往生寂滅消えて墓なき露となるのである、之を脚氣衝心と云ふ。すべて死ぬ時は苦しむには

相違無いが、殊て脚氣衝心で斃る丶のは、其の苦み樣が目も當てられぬものである。

〔療法〕　本病に向つて此の上無い良い療治は轉地である。實に不思議と言つても可い、私の門人（伊勢の人）に、東京に居れば、年中乾性脚氣に惱んでゐる者がある、されど鄕里に歸れば四五日經つと夢の覺めたる如くに癒る、そこで又東京へ出れば、四五日經つか經たぬに又麻痺れ始む。之を幾度實驗しても同じことである。又この人ばかりに限らず、誰でも皆土地を換へて成蹟の惡いのは無い、嗚呼轉地なるかな轉地なるかなと勸むるのである。併し世間の事は思ふ通りに參らぬもので、其の轉地は十人に八九人までは出來難い事情のあるものである。かゝる人は如何養生すれば可いかと云ふに、第一身体を安靜にして滋養物を食ひ、朝起せねばならぬ、滋養品中でも牛乳は最も効力がある。昔風の人は滋養物を食ふのは宜しく無いとて、赤小豆と麥飯との外何も食はないで、其の極端鹽斷までするが、併しこれは甚だ惡いことである、其の赤小豆と麥飯とは、實驗上効があるけれど、其の他の滋養品を取らぬのは、身体を益衰へさすばかりである。返すゞも大量の牛乳牛肉雞肉雞卵などを食し、腦力を費さぬやうに用心するが肝要である。又善良なる葡萄酒を小量に用ゐることも一方ならぬ藥である、初期には左の藥が至極良い。

硫酸麻偏涅曳謨十五瓦　稀鹽酸一瓦　白糖適宜　温湯半合

右一日三回に分けて服むべし

浮腫のある者は左の藥を、

醋酸加僧謨四瓦　苦丁一瓦半　白糖適宜　水半合

右一日三回に分けて服むべし（醋酸加僧謨は粉藥であるか封をきると直ちに水になり易いから買つた時栓をした瓶に入れて來ればならぬ）

〔豫防の實驗談〕　毎年夏に向へば、必ず脚氣に罹る者幾人にも、余の豫防法を勸め、實驗せしめしに、大抵好結果を得、仲には發らぬのもある。それは左の箇條書を守らすのである。

一、朝は五時前に起きて三十分間以上一時間内の散

歩すること。

二、牛乳の量を增して、他の食物はすべて幾分を減らすこと。

三、脂肪性の食物は極めて少量にすること。

四、酒は平生の三分の二に減ずること。

五、茶菓を嚴禁すること。

六、麥飯を實行すること。

七、夜は九時頃に寢ること。

八、腦力を費さぬこと。

九、房事は最も愼むべきこと。

十、室の内外を清潔にし、空氣の流通を善くすべし。

◀絛蟲(さなだむし)

〔原因〕この蟲或はこの蟲の卵を含んでゐる生肉或は牛煮の肉を食するに由る。さうしてこの蟲は重に豚、鹿、猿、牛の肉に宿るものである、又魚肉より來ることもある。

この蟲は集合一躰動物で、しかも一疋で雌雄の生殖器を有し子を生んでは續き眞田紐の形に幾萬疋でも連なるのである。

〔病狀〕食欲が減り、惡心或は嘔吐をなし、下利と便秘と交代し、鼻の孔が痒く、瞳孔(眼のひとみのことを云ふ)が大きくなり、時々恐い夢を見、心臟の動悸が高ぶり、段々重くなると身体が瘦せ衰へ、眩暈がしたり、癲癇を發したりする。

〔療法〕この絛蟲の腸内に在るや否やは、仲々六か敷診察で、醫者さへ鑑定に苦しむ位である。故に素人の方は其の絛蟲の幾分か、肛門から出て、始めて其の居ることを確むるのである。確めた後は、假令何丈の長いのが出ても例の通り僅か殘れば忽ち殖える奴であるから、これが退治法を怠つてはならぬ。即ち四五日間は滋養品や甘い物を禁じ、芥子葱咖啡の類を食せしめおき、更に二日間斷食を命じ、左の藥を與ふるが可い即ち

綿馬越幾斯三瓦を與へ、其の後三十分間乃至一時間程經て下劑を投するのである。

綿馬越幾斯は丸藥とするのであるが、此の製法は素人

の方に六か敷から、水三勺位に溶かし砂糖を混せて服むが可い。下劑はヒマシ油十五瓦を濃い茶の上に浮べてのみなさい。さうして何れも服みづらい藥であるから、味はひ無いでグット一度にのみ下さねばならぬ。果して絛蟲が居るものならば、この方法を用ゐて下らぬことは無い。又この二日斷食の間は仲々苦いもので菓子一つ位は食べても可からう、芋一本丈は差支あるまいと不知不識情慾に惑はさるゝやうになる。さうすると其の成蹟が惡いものである。身体を大切にと思ふ人は一時の饑を我慢するが肝要である。

右の次第であるから、肉類は能く煑能く炙らねばならぬ。さうさへすれば決して絛蟲などの宿るものでは無い。序に其の調理方を言つておくが、すべて肉類を煑るには、沸騰せる汁の中へ入れ、炙るには極めて強い火にかくるが肝要である。始めの熱が低いと、其の滋養品が汁の中或は火の中へ垂れて了ふものである。故にソップを製するには文火にて煑ねばならぬ道理である。

(以下續出)

料理の稽古

羽仁もと子

近來料理の稽古の段々盛に行はれるやうになりましたのは、誠に喜ばしきことでありますが、唯憂ひますのは何所の料理教場でも、中途に廢める方のみ澤山でありまして、實際役に立つまで習ひ込むお方の少いことで御座います。それには種々の原因もありませうが、主なるものは、私共はじめ最初の中は、今日習つたお料理が明日直ぐと役に立ち、二月三月と通ふうちには、嘸や家庭の食卓に稽古の効能が著しく現はれるであらうと云ふやうな希望を以て習ひ始めるからであらうと思ひます。

さて各々の臺所で實際にいたして見ますと、道具も材料も充分に整へてある教場で稽古した時とは餘程勝手が違ひます。よし凡てのものを注文通り要意するとの出來る方でありましても、料理の稽古をはじめた爲に

俄に賄費の増すやうなことでは、最初の希望の大きければ大い丈に、一層失望することになりますので、中途で廢める方の多いのも當然のことで御座います。

で、私は私自身の經驗よりして、料理をお習ひになる方に、左の數事をおすゝめしたいと思ひます。

第一に料理の稽古は、禮式の稽古などゝ同じこと、申さば方式を習ふ丈でありますゆゑ、一週二度ほどの稽古を少くとも一年は續けなければ、實際に應用するに至らぬものと覺悟してかゝらねばならぬことで御座います。

小笠原流を學びましても、お辭儀から起居ふるまゐソツクリ稽古の方式通りを、平生の動作に用ゐましたなら、實に煩雜に堪えぬでありませう。併し此方式を一年なり二年なり稽古して、禮の大体に就て會得するやうになりましてなら、數限りなき日常の動作の上に巧に應用して、自ら禮容に叶ふやうになるのでありませう。料理にしても缺かさず一年も經つうちには、きんとんの製法、茶碗むしのこしらへ樣など一つ〳〵の仕方の外に、調理一般に渉りて相應の會得が出て參ります。是に至つてはじめて家庭の勝手元相應に、習ひ得た料理のかたを應用して、常に家庭の食卓を賑すことが出來るやうになるので御座います。

以上の如くまづ少くとも一年は缺かさず通ふと決心をした上で

第二　教場で筆記した料理法は、必ずその日歸宅後に、その日の實地稽古と照し合はして熟考の上誤を正し、詳しく其の方法を暗記することが大切で御座います。

日本料理はまだしもでありますが、西洋料理などにあつては、殊に以上の事柄が必要で御座います――例へばホワイトソースは、初めに二匙のバタをソースパンにいれ、火にかけ、一匙のフラワーをいれて焦つかぬやうに注意し、煮立ちはじめたる時手早くかきまぜながら、半カップの牛乳を注ぎいれ、滑かになりたるとき、更に二カップの牛乳を漸次に加へて造るといふやうに――西洋料理は御承知の通ソース丈でも幾種もあ

りますので、最初は實に複雜に思はれますが、其の實土臺になるものはホンの數種類で、他はその上に多少の變化を施した丈でありますゆゑ、一つ〳〵ハッキリと記臆して行きさへすれば、次々に來る新しいものも存外早く呑込めるやうになります。獨りソースのみならず、一般の西洋料理もまた日本料理も、料理の大道即ち土臺と云ふものは、ソー〳〵數々ある譯ではありませぬ。けれども若しも一回毎に習つたものを記臆することをつとめませんなら、凡てのものが頭の中にまざつて仕舞つて、稽古の複雜になるにつれ、一層要領を得ぬやうになりませう。

第三は實地練習で御座います。即ち習つたものを自分でこしらへて見ることです。

或人はこの實地複習を以て、料理の稽古に最も大切なものと思つて居らるゝやうであります。勿論大切には違ひありませぬけれど、筆記帳を控えながら料理をしたのでは、あまり効能がないと思ひます。で、まづ實地複習をする前に充分調理の順序方法などを心の中に覺え込んで、即ち第二の暗記法を平生充分にして置いて、然る後試る樣にありたいと思ひます。殊に此復習のために餘計な費用のかゝらぬやうに、家庭一週間の獻立中に練習したき料理をほどよく加へて、時間の經濟をもはからねばなりませぬ。

最後に、料理を稽古なさる方ばかりでなしに、料理の先生にも聞いて頂きたいと思ふことが御座います。

それは他でもありませぬが、料理敎場に於て實地調理にかゝる前に、その用ゐる食品の性質或は擇ひ方或は價値などを出來る丈精密に知ることが大切であると思ひます。そして更に出來上つた料理の價も明かにして置きますなら、種々の場合に參考になると思ひます。

例へば今日は海鼠の酢に、筍のからし和え、外に西洋料理のオレンジプリンを敎ゆると致します。スルト先生は海鼠は何時より何時まで季節であつて、何所のが上等であるといふこと、筍の生物は目下なか〳〵高價であるが、罐詰を代用すれば値は殆ど三分一で上るを、

併し生物に比べてとう云ふ所が劣るとか云ふと、またオレンジプリンに用ゐるゼリチンは何程一度に買ふ方が割安であるとか云ふやうなことを、出來る丈細かに說明なさいましたなら、ドンナに習ふ人の爲になるか知れません。然るに大抵の料理の敎師は、思ひ出すまゝに時々此樣の注意をするとはありますけれど、それはホンの附たりで、唯調理法にばかり重きを措いて居るやうに思はれますのは、遺憾で御座います。

實費（敎場にて調理したる食品に要せし材料費）もまた何所の料理會でも計算にて、毎會徵集しては居りますが、これは料理品の價を知らすと云ふ趣意よりは、むしろ入費を取り立てる爲でありますゆゑ、其の日に出來たものは三品なり四品なり一纏めに勘定してありまして、例へば筍の芥子和えが幾人前で何程とか、オレンジプリンがとれ丈とか云ふやうな小譯は、少しも分らぬので御座います。

で、私の思ひますのに、まづ料理敎場に於ては調理法の說明にかゝる前に、その日の用材として購ひいれました食品を、殘らず卓子の上にでも持ち出しまして、敎師は洩れなく以上申したやうな事柄や、代價に就て話して下さるやうにありたいと思ひます。

なほ料理研究に就て一二の希望を持つて居りますがそれは後日にゆづります。

おざしきの話

近藤格齋

今こゝにお話する住家は大小七間と外に一棟の離れ小座敷を有する別莊風の木造家屋ですが、普通の住家に比べては床も軒も天井も高く從つて間數の割合には建物が多きく見へますから、例の居室改良には至極適當かとおもひます。

此家の用材は總檜造りですから一体に上品ですが座敷向の柱は檜のアテ丸太を用いてある。それで高尙な內に何處やら雅致が見へまする。屋根は庇丈は瓦葺で棟が草葺ですから一寸見た所で大層面白い。草葺は都會

ではいろ〳〵と建築上の制限や規則があり殊に關の市上に草葺は如何にも不釣合ですが海邊や山村などで松や杉の木立の間から草葺屋根の隱見するのは格外に風致のあるものです。

この家屋も矢張普通の日本風の家屋で疊敷、紙障子と云ふ座禮に便利な建て方であつて、その間取は斯樣である。先づ車寄を上れば十疊敷の受付の間があつて、この受付を左へ參ると十二疊の應接の間です、受付の次が二の間でその奥が三十疊敷の客間その後ろに寢室主婦の部屋，食堂、厨房等と連接した二重住居です。この家屋の居室の樣子を變ふる爲めに紙障子や疊はすつかり取り除いて、床は一面に寄木張りとして紙障子は硝子障子と取換へたのであるが場所に由ては透明硝子を用いた所と艶消硝子を用ゐた所がある。そして壁は土壁であつたのを張壁にした、勿論それは間に依つて違ふから間毎に之を述べませう。

先づ車寄に上つて應接の間であるが上り口の硝子の骨は蠟色塗、腰高障子、硝子は艶消しの一枚硝子。壁は金泥で蝶鳥を摺つた芭蕉布張付、それから正面の四枚立の襖、これは白の鳥の子紙張の襖、緣は溜塗、左の方開き戸に、應接の間に通してその外は總て張壁です。

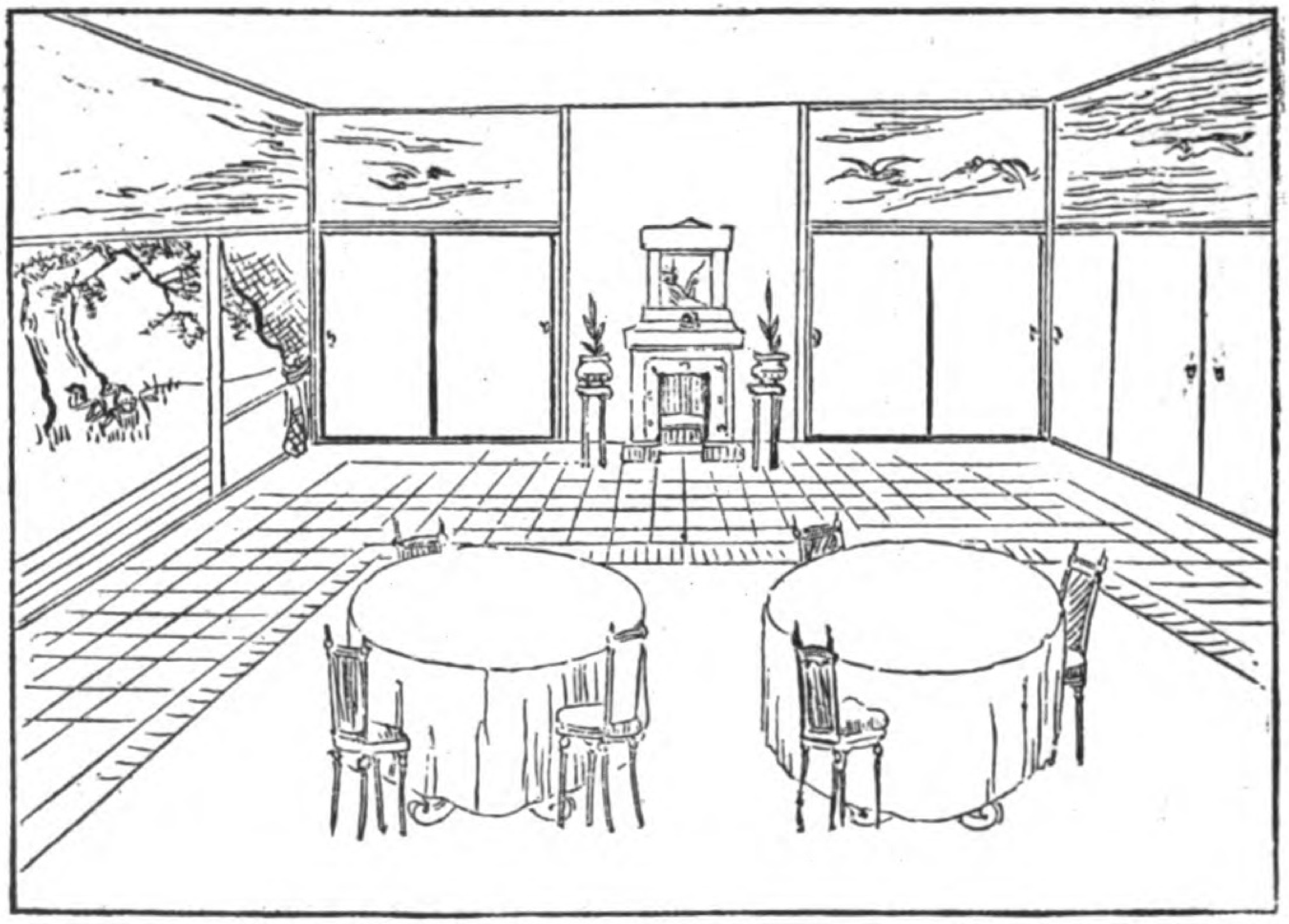
此の間の裝飾。正面の襖の前には金地に荒磯と旭日とを畫ける大衝立を置きてその前に舊日本形の置時計を飾る、右方には紫檀製長方形の卓を置きて受付用となし、左方には同じく紫檀製圓形卓子を置て來客の肩掛帽子等を載するの用に供する。此室の裝飾極めて淡然として居る樣であるが應接所などは是の位で充分である。

左の扉を開いて入れば應接所であつて東は張り壁、西は南に寄つた半分丈が嵐窓に成つて艶消硝子の塗骨の障子が立つて空色レースの窓掛を掛くる。南の方の庭に面せる所は九尺三枚立の腰高の硝子障子を立て丶朱鷺色緞子の窓掛と空色のレースを二重に掛けて眞紅の打紐を以て括り上る。

中央に圓形のテーブルを置て萠黃地に紅葉と櫻とを繡

り出した唐織の卓被を懸けて二三脚の紫天鵞絨張の蠟色塗椅子を置き、東の壁に沿ふて蒔繪の書棚を飾る上段には青磁燒一輪生小花瓶に時の花を挿みて、之に並べて銀製小形の置時計を飾る、中段には内外の新刊雜誌四五冊と二三の寫眞帖を置て、下段は中央に眞紅の紐を懸けた手文庫か何かを飾る。

別に床の間の設けは無いが東の壁に文晁の筆山水の双幅の白茶金襴象牙軸に表裝したのを掛くる。西の壁には藤樹先生筆細階の朱氏家訓を梅と櫻とを透し彫りにした緣をとつた三尺に四尺程の大額を掛け



ます。

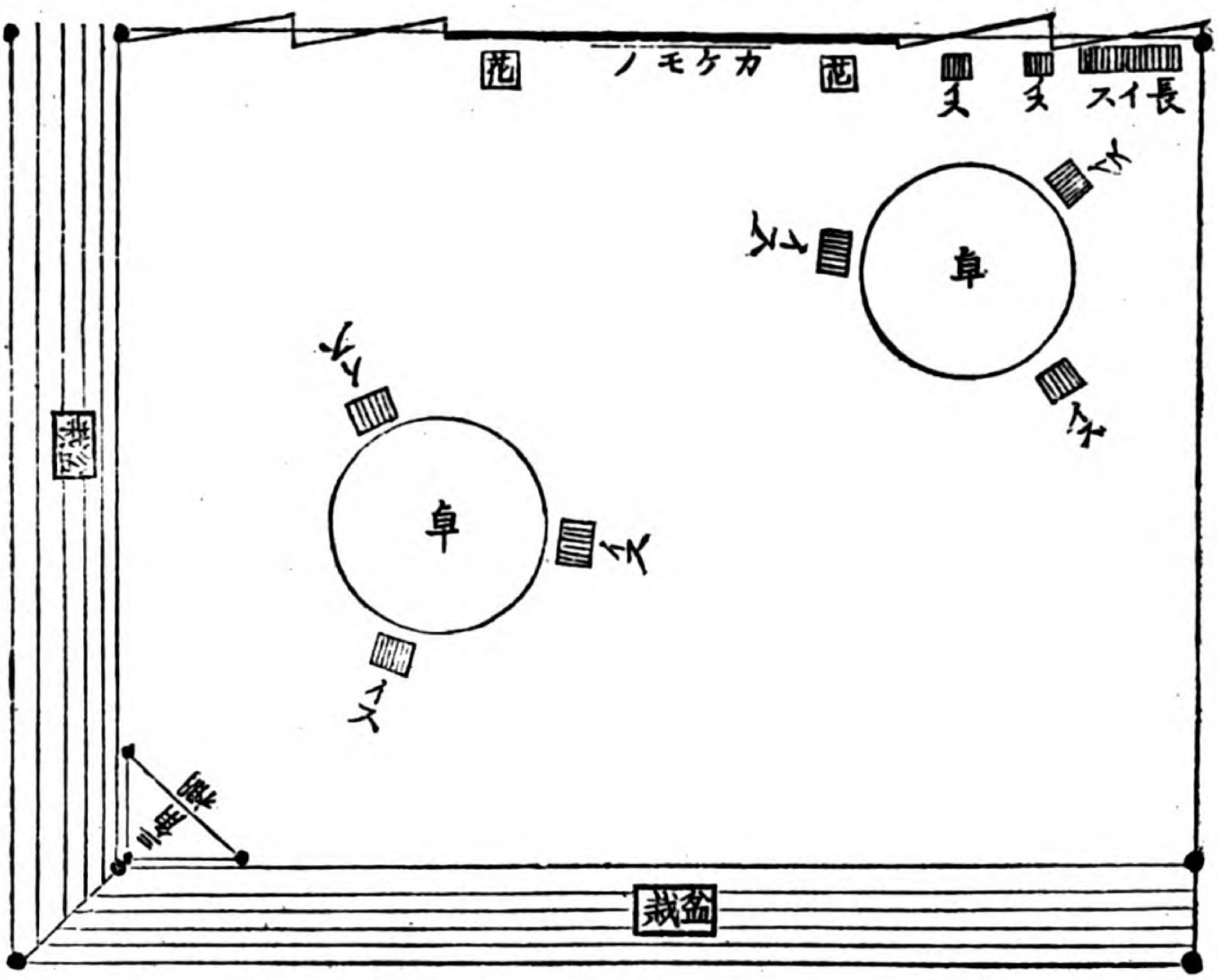
○○○この間○受付の間の襖を開くと直ぐこの間で南の方の庭に面せる方は木地骨の腰高障子大硝子を箝めたものを立て丶白茶地に薄紅梅色の大小の扇面を亂れ織に織り出した唐織の窓掛と空色レースとを二重に垂れて紫色の飾紐を以て括る。そして軒先には凡て伊豫簾を掛けます。

鴨居上は總て金張付で、東西北の三面は金無地に銀泥で花喰鳥を畫いた襖を建つ。北の襖に寄せて一脚のソファーと二三の裂張椅子をならべて中央には朱檀製楕圓形のテーブルを置き四五脚の椅子を以て

之を圍ましむる。卓上には卓被を掛けずして、上に銀製の烟草具と堆朱の烟草箱を飾る。

隔ての襖を開きて彼方へ出れば即ち客間であつてこの家屋中で一番廣い間である床は前に述る如く寄木張であるが中央には紅白段染天鵞絨氈を敷てある。天井は金銀の砂子を置た白の鳥の子紙で張つて、鴨居上金張付にして銀泥で梅花の散し摸樣を描く。

西と南の二方は廻り椽で、內に溜塗腰高の硝子障子を建て、例の如く窓掛を懸るその窓懸けは藤と山吹を浮



織にした純白の緞子織で銀絲の紐を以て括る、北方の中央に二間の壁があつて白の小鷹紙で張る、之は床の間の代りであつて掛物などを掛くる所で、中央の所に高さ三尺巾四尺餘の暖爐が塗り込んであるが、これは丁度床の間の床椽の樣に成るのである、そしてこの張壁の左右は一間二本建の襖で、金地に若松を描く。

この張壁——床の間代用の壁の中央に應擧の書諫鼓の圖を紺地金襴に表裝したのを掛けて左右に群鶴に稻穗の繪の長丈對幅を掛くる、之は若中の筆で同じ紺地金

欄表装象牙軸、そして其前には堆朱の方形高卓を置て銀瓶か古銅の對瓶時花を挿す、挿花も惡くは無いが、どちかと云へば盛花の方が見榮えがする暖爐の上には春日盆に銀火罩のかゝつた青磁燒の香爐を飾る、或は置時計などを飾るもよし。
西南の隅の所に蒔繪三角棚を飾つて種々の器物を置く上段には古銅製の小花瓶に黃薔薇花一二輪を挿したるを置き、中段には二三帙の法帖、繪卷物の類を盆に載せて飾る。下の段は盆栽――洋種の蘭か何かを置く、か手文庫の類を飾るもよし。
中央に方圓二個のテーブルを置きて、銀地に花いかだの摸樣を織出した唐織の卓被を懸け、上に煙草具を置く、之を圍む椅子は紅色緞子張でしたらばよからうとおもひます。

人生果して苦痛艱難ならんか、世上果して寒冷非情ならんか然らは、家に歸りて我か愛する所の幸福なる春親の光と健康の温暖とに浴せん豈愉快ならすや、
（サーウヰンラボツク）

西洋の謎々

白井準縄子

日本では謎と申すと全く子供だましか、又ホンの消閑の材料位にしか見ません、西洋では大さう之れを貴んで最も利益ある遊びの一つとして居ります、謎といふものは心の作用を能く進めるもので、丁度體操や舞踏や角力などをすれば、體の養ひになると同じ理屈である、尤も體操などは直ぐに効能はないものゝ平生身體の動作を鍛へて置くと、一朝事のあつた場合に輕快敏捷からだが立ち廻るのである、謎の遊びも之れと同じ理屈で、心の作用を鋭敏する効があるから、事に臨んでサツク甘い考が、浮んで來て禍を轉じて幸とするやうな頓智が出てまいります。
これは西洋の令孃必携と申す書物に述べてありますですから謎の種類も日本のよりもズツと澤山あります

のせ一々適當な譯字を付て申すといふ事には參りませんから、名前だけは原名のまゝと致して、種々の謎と其仕方とを申しませう。

▲リッデル

と申す謎は物の力とか形とかを種々に迷ひ易い樣に喩へて申して、其原物の何んであるかを命中させるもので、一寸例を掲げて見ると、

三つ足で立ては居るが、扨て一歩も他へ動くことが出來ぬので困る其れでも、隨分重い物を脊負ひまして、熱帶地方で生活して居ります、一體まア何故でしやう？……（五德）と申した樣の鹽梅なもので、又た、

▲シャラード

これは二字以上で或る意味をなして居る者を態と、一字づゝに剖いて其一字の意味を申して命中させるので、例へて見ると、

私の第一は木綿糸から出來ました、第二は第一の綱を繞ひ合せたもので、全體は誠に子供好きの爺であります、扨て何んでしやう？……（布袋）

と、

▲リーポスト

種々の名詞を集めて其名詞の頭字だけとか、尾の字だけとかで別に一つの物の名とするので、例へて見ると、

海を走るもの、
大工になくてならぬもの、
船頭になくてならぬもの、

此三つの頭字だけで何が出來ませう？と申した樣なものでこれは袋といふ答であります、

（一）は舟ですから頭字はフ　（二）は釘です　（三）は櫓です即ちフクロ（袋）

▲ロゴグリッフ

これは或る意味の言葉を一つの題として、此言葉をなす文字を轉倒したり差換たりして、他の言葉とするもので、例へて見ると、

小松菜、（コマツナ）といふ題である、之れを種々に置き換へまして、

獨樂、綱、（コマ、ツナ）
小鯰、（コナマヅ）

▲マナプラム

之れは問はれた言葉を直ぐに倒まにして答へる、其で何れも意味をなす様にするのである、例へば、

（問）狸（タヌキ）とは（答）砧（キヌタ）です
（同）霞（カスミ）とは（同）住家（スミカ）です
（同）夫人（フジン）とは（同）人夫（ニンプ）です
（同）機械（キカイ）とは（同）甲斐絹（カイキ）です

▲ブン

是は一つの諧謔である、例へば、茲に南辰子といふ姓名のお友達があると致せば、

「チヨイト南さん、貴女大層肥えて居らつしやるのネー」と申すのです、ソー致すと南さん乾度

「アラ否よ私しコンナに痩せてるわ」

「其れでも貴女はミナミ（皆な肉）ですもの」

謎の大体は先づ斯様なものです、次に今少し詳しく、實例を譯して仕方を御話し致しませう。

先づエニグマスから始めて見ませう、書物にはドノ謎も澤山例話が出て居りますが、こゝには唯二三の例を申ます、又貴女方が御自身で問題を工夫なされたらば、反て興味もあらうと存じます。

▲エニグマス

（一）私は顔と兩手だけ御座いますもので、常も貴女方の目の前で運動して居りますが、併し手だけの運動でして、躰は少しも動かしません、其れでも私が運動を休みますと世間が暗になると申します。まア何でせうか……時計

（二）生れたては四本足で歩行きますが、少し大きくなりますと二本足で、又た年をとりますと三本足で歩行きますものは何んでしやう、……人間

▲シヤラードス

之れは前に鳥渡申した布袋と同じ様に、一つの意味をなして居ります文字を種々に分けて、其の一字々々の意味で問ひますので、答へますものは之れを一つに纏めて考へます、

(一)私の第一は重に東洋の僧侶が拜むもの、第二は誠に美い香のする草花、第三は東の反對でして、本來は歐州でも有名な國です、……佛蘭西

(二)私の第一は貴女方であります、第二は兒童の務むべきものであります、第三はこの世の中でありまして、全体は貴女方の一番御好きのものであります、……女學世界

(三)私の第一は一つ目でして尤も尖つた尾がありますが手も足も顏もありません、第二は何處の指物屋でも一番澤山に造るものでして、全体は貴女方に平生可愛がられて居ります、……針箱

▲コンドラムス

華族方でキット御用ひになる魚は何に？（家令＝鰈）

魯西亞の欲がる鳥は何に？（七面鳥）

之れは英語を其まゝ譯して見ましたので、七面鳥は「トルキー」と申します、魯西亞は土耳古を欲しがつて居りますからです、

▲レボス

之れは前のリーポスト、と同じもので、名詞の頭字を幾くつか集めて別の名詞を作ります。

(一)第一は冬も枯ない樹、第二は伊勢で名高ひ處、第三は日本の極南の方にある少さい島國、此頭字を集めると村の若者などは、大層喜びます、答、(祭禮)

則ち松　津　琉球

普通の謎は先づ斯樣の種類に過ぎません、之れより一層手が掛ります謎になると「動作シャラード」と申して、身振で口をきかずに致して、何の眞似かを命中ます致法や、又た四人も五人も一處に立ち並まして、其々役割をして歴史上の重な所作を致して命中させるもの、曾我の夜討とか、楠公の子訣れとかも御座ります。





家庭談叢

倫敦の家庭（承前）

（家庭改良の好資料）

▲子女教育の事

乳兒の養育法に就て人乳が良いとか牛乳が好いとか云ふことは既に定論が有りますから申上げませぬ彼地では格別懇意の人が所望でもなければ子供を客の前に出しませぬから何處に往つても子供を見ることがない彼地の家は皆四階五階の建物になつて居るので子供の遊び場は最も上層の室を宛てチャンと危險の恐れがないやうに錠を卸し家庭教師又は保姆などが附いて室内で遊ばせます室内の壁には豪傑偉人の肖像を貼り附けるとか或は子供の嗜好に適した繪を貼るとか其他子供の喜ぶ玩具の類も皆一ヶ處に置いて諸所に持ち散らすやうなことは致させませぬ食事は子供だけ別に致して成るべく淡泊くて滋養に富み消化の好いものを擇びます夜間は六時若しくは七時には寢かせ年中一日も此規則を違へない家訓は實に嚴重であつて例へば子供の就眠前に母親が運動に出るなど丶云ふとき私も連れて往つて下さいと申しても「御前はモウ寢る時が來ませう」と言はれると「爾うですか」と悄々と寢部屋に這入つて往きます又寢部屋に這入つて早く眠り就かないとドンナに泣いて居つても母親でも保姆でも構はず錠を卸して出て來て仕舞ふ傍で見て居ると如何にも可憫想に思ひますが是れが矢張り獨立の氣象を養成する事になるでせう西洋人の教育が斯くの如き有樣ですから子供でも自然意志が強くて一寸見ると西洋の子供は情が強い樣に見えます女の子は矢張り人形を持つて喜んで遊びますが此遊びも決して無駄にはしませんで教師や保姆は始終之を應用して教へを施して居ります兄弟姉妹の遊んで居る處などを見て居ると巳に子供の時から男は始終女を扶けて落ちたものは拾つて遣るとか泣けば諭して遣るとか云ふやうにして居ます畢竟是れは自然の風俗に化せらる丶ので有りませう子供の小遣錢など

は態と極少なくして勤儉貯蓄を奬勵します私の知つて居る可なりの財產家の一人の男の子は十二三になつて一週間の小遣ひはいくらかと聞いたら十二ペンスと云ひました彼地の十二ペンスは此方の十二錢位にしか遣はれないのです此子が一度電話を掛けて見たいがソレには六ペンス要るから三四箇月貯蓄をしなければならぬと云つて話したことが有りますが萬事がさう云ふ有樣です其他にも家には佛語英語の敎師などを抱へて居る身分でも子供の小遣は一週間に日本のお金で十二錢です又彼方の風として誕生日を大變に祝ひますが誕生日にお祖母さんから錢入にお金を一シルリング入れたのを貰つたと云つて大喜びで居る子供を見たこともあります又子供の新聞がありまして其處で地理とか歷史とかの懸賞答案を募集し優等者には七シルリング乃至入シルリングの賞金を與れるのですが文章の練磨一ツには金の貴いとを覺らせる爲に親達も奬勵して競うて募集に應じさせます次に敎育を終りソレ〱獨立の道を得ました後は男女共親は少しも干涉せず放任して置く讓るべき財產があれば讓り自分の所有に係るものは消費しても別に咎めもしない只自分の一生は子の世話にならぬ用意を致します彼地では結婚すれば必ず新らしく世帶を持つのですが我々から見ると親はまるで他人の樣に其分限に應じて簞笥を祝ふとか金持は一の建物を贈るとか致します婦人なども親夫の在る中は兎も角もそれが死去すると忽ちに小さい家に移るとか別居をするとかして職業の嗜みあるものは申すまでもなく左もないものは驛遞局に出るとか造幣局に出るとかして獨立の生計を營みます必要に迫まらるゝからでもあらうが其斷行の早いことは驚くほどです

▲下婢雇入の事

多くは周旋屋に賴みますが日本のやうに桂庵が連れて目見えに來るのでなく仲働又は小間使が入用であると申して遣りますと周旋屋が恰好な希望者を選んで其者一人を寄越します希望者は主婦に逢ひまして此方で下婢を御雇ひになるさうですが家內は幾人で庖厨は何處だとか洗濯は何うする私の着物の洗濯はどうして下

さる朝は何時に起きて御飯は何時だとか一週に一度外出を許して下さるか日曜日に會堂に往くことは何ういふ都合にして下さるかとか中に甚だしいのはビールを飲まして下さるかなど色々の請求をしますから此方は夫れに答へて家内は幾人で庖厨は下階だとか洗濯はハンカチーフ下襦袢の如きものは自分で洗ひ他は外に出す何曜日に何時から何時まで外出を許すとか日曜は交代に出すとかビールは飲ませられぬとか申すとそれで厭だと口實を設けて逃げますし望があるものは宜しい承知致しました給金は幾ら下さると云ふことになつて談が纏まります最初に此約束を固くしないと後日間違ひが起ります而して此約束だけは實に能く守つて働きますけれども少しでも約束以外のことを言ひ付けでもしますと忽ち遣り込められます扨其働く順序は日曜は安息日ですから何もしない月曜は洗濯日として自分のハンカチーフと下襦袢の如きもの又は雜巾布巾（彼方では雜巾も布巾も一ッに遣ふ）を洗濯します火曜はアイヨンデーと云つて前日の洗濯物は悉く火熨斗を掛ける水曜日には二階座敷の掃除金曜日には玄關廊下の掃除土曜日には金物の掃除と云ふやうに大略用を定めますコックは又庖厨だけの整理を日を極めて致して居る斯う云ふ風ですから日本のやうに用の間に郵便を出して來い使に往け車を言ひ附けて來いと云ふ樣な遣ひ方をしたら恐らく甘んじて居るものはないところか是れだけの用事の順序を一日繰替をして呉れと云つても後まで都合が惡くなると云つて容易に承知致しませぬ而して爲るだけの用が濟むと後は部屋に這入つて本を讀むとか編物をするとか印紙を貼るとか或は自分で新聞や雜誌を取つて讀んで居ります　私共では夜食には日本食をするので私が手傳ひますけれども貴婦人は濫に庖厨に出るものでないとしてありますから三十分位前に今庖厨に往くからと申しますとコックは魚板など用意して俟つて居るが下女は平氣で濟まして手傳はうとも致しませぬ唯七時の御飯ならば六時半になると食卓を飾るとか御膳立をして運ぶとか致します夜は客があつても定め通りの時間が來ると寢て仕舞ふ其代り朝

は極めた時間に十分とは遲れない若し三十分も遲れますと時計が狂つて居つたとか捲くのを忘れたとか兎も角も申譯に來ます日本でも上流は爾うで有りますが中等の處では何處の女中は御愛想が好いとか惡いとか云ふ樣なことを申しますが西洋では女中が主人及び客に對して物を言ふのは大變に失禮だとしてゐる又客の方からも輕々しく奥樣は御在宅かなど丶云ふのは不可のですそれですから夜寢るときに御休みなさいと云ふでもなければ朝お早うとも申しませぬ食事は普通主人と同じものを與へます給金は御飯炊が年に二十四ポンド位で前掛又は家内帽子等は此方から遣ります（西洋の女中は始終白き帽子を被つて居ります）それで皆貯金を致し嫁入の支度をするとか親が貧乏して居るから其中のいくらかを贈るとか生命保險に掛金をするとかそれ〲獨立の基礎を固くすることに務めて居ります又彼方では下女雇入れの約束が出來れば必ず一箇月間は居るものと極めて居りますから下女の都合にて俄に解雇を申出づる時は主人へ向ふ一箇月分の給金を出すことになつて居ります又主人の方の都合で解雇するときは給金の外に下宿料（凡そ金十五圓位）だけは支給することになつて居ります又雇入れた上は其下女の身持働振等先の主人へ聞き合せるのは一般の風になつて居りますから自然不品行等のことはない從て不身持の者は何處にも往くことは出來ないことになるのです

▲禮儀作法の事

此事を詳しく申上げやうと云ふのはなか〲六箇敷いことで御座いますから極知れ切つたことで日本の人が好く遣り損ひますことを一つ二つ申しまするが立派な裝飾ある室で煙草を吸ふことは惡い喫煙は必ず食堂かスモーキングルームで爲ること食事中スープを吸ふのには音を立てぬやうにすることとナイフとフォークの置き所に注意することと食物を遠慮をして居るのは無論不可昔は殘さず食べる方が好いとしてゐつたが今はさうでもないやうです又亞米利加では紳士が座敷で兩足を組み又はテーブルの上に靴を載せたりして平氣で居りますが英吉利の紳士は決して致しませぬ魚肉は庖丁

を餘り遣はずホークを以て食べること客に對し食鹽を取つて上げるのは失禮になること友達と握手するには少しく腰を下げてすること而して長者から手を差出すこと男女ならば女子より出すこと以上のことは日本から來た方などでも時々遣り損ひをさるゝことが御座います接吻は一つの禮になつて居るのですが併し親子兄弟姉妹の外は男女同士では滅多に致しませぬ彼地ではクリスマスは盛に致して幸福クリスマスを互に祝し親しい間では品物の贈答を致しますが是れは多く郵便に託します下女などにも日常必要のもの又は嗜好などを考へて喜びさうなものをクリスマスの時に遣はします新年正月はスコットランドの方では祝ひましたが倫敦では餘り祝ひませぬ併し一二年以來新年御目出たう御座いますと申すやうになりました婚禮の時などは花嫁の知己友人が揃ひの衣服を着花飾をして一所に附いて參るなど丶云ふ事が有りまして人情を穿つて見ますと東洋も西洋も差して異つたことはないので御座います私は度々貧民部落に往つて見ましたが日本で申せば車夫とか大道商人とかの其日暮しの果敢ない境遇でありましても矢張り室内には詰らぬ陶器とか團扇とか云ふものを古道具屋のやうに並べ壁には繪などをベタ〳〵と貼つて置く有樣は丁度日本の裏店と同じ樣で御座います殊に生活の餘裕もあるまいと思ふのに狹い處に丹精して花などを培養して居る是れ又日本の貧民と能く似て居つて人が美を愛するの情は何處も變りがないものだと思つて見て居りました

デ餘り長くなりますから今日は此位に致して置きますが誠に淺薄のことのみで御土產にはなりますまいが御取捨は宜しく願ひます（故中井芳楠氏夫人談時事新報所載）

（完）



家庭日記

桂子

三月七日　曇　風ありて寒けれども今日は第一の土曜にて大阪より兄上の歸り玉ふ日なれば朝早く起き掃除をなし庭の白椿を折りて床に揷す

弟妹は兄上の出迎にとて學校より歸ると直ぐ打つれて停車場へゆきたり昨日縫ひはじめし母上の袷今少しにて仕あがるのなれど四時鳴りしかば夕餉の仕度に立つ暫くして兄上は二人に擁せられて歸りきましぬいつもの少年世界女學世界の外に弟にも學校帽妹と自分には美くしきリボン給はる皆々大よろこびなり

五時頃父上も役所よりおかへりになりたれば賑はしく夕餉しにゝむ桂さんのお料理は中々旨いなど兄上のいひ玉ふ夜はまとゐして兄上の一日に行き玉ひし博覽會のお話承る弟妹のやすみてより女學世界を見る例の口繪いと美はしく記事いづれも面白そうなり大町先生の婦女雜觀水原先生の處女時代の經驗何よりも先づよむ耳いたきことのみ多かりき十一時といふに日記をしるして床に入る

三月八日　晴但し午後少し雨がふる父上は弟をつれて遠足にとて出で行かる掃除終りてより妹の髮を洗ひやり自分も捲きて束髮をなす晝食は母上と妹と三人にて淋しかりき



母上の袷仕立あげて妹の袴にかゝる二時すぎ父上より土產にとて一尺餘りある鯉を持ちて歸り玉ふ夕食に料理してさし上ぐ

夜はまた茶の間に集まりてたのしくもの語るやがて父上の弟らに唱歌を注文したまひ兄上の銀笛自分の手風琴に合せて代る〳〵うたふ「桃から生れた桃太郎」と妹の聲はり上げてうたひたる殊に愛らしかりき終りに君が代の合唱これは父上母上も加はり玉ひき

明日兄上の大阪へ持ちゆき玉ふ物をとりそろへ置き女學世界の庖厨讀本家政小言などよみ日記帳をしたゝめて臥す

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

神谷　よし子

七日晴　土　定刻起床

先頃より朝な〳〵の愛らしき鶯の聲きゝつゝ雨戸あける芍藥もいや二寸計りのびたり

午後一時眞の燒昧出來し參る

夜福袢の袖つけゐりかけなどし肌着取かふる

二三日前より時事新報に連載せられた東北地方饑饉の情況一字一句涙の種ならぬはなしともあはれの極みなり諸帳簿つけ床につきし頃は早や十時

さて此一週間の總菜日記を引きて見れば

	朝	晝	夕
一日	わかめ汁	とうふつゆ	むつのにつけ ひたし物
二、	大根汁	じやが芋にしめ	牛肉 白魚うど 王子とち

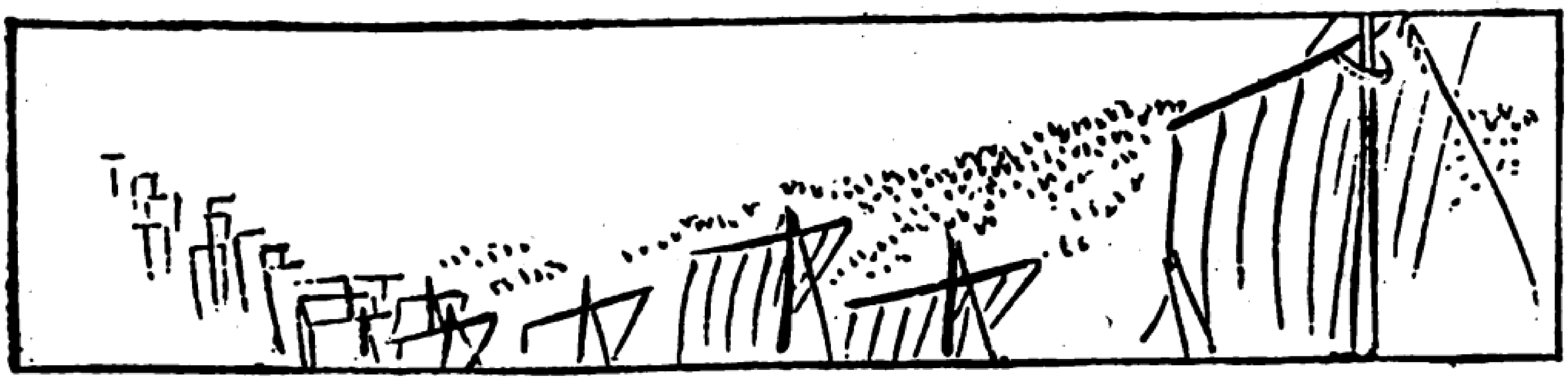
三、とうふ汁　くわゐ、はす、蒲鉾、など　わかさぎのぬた
四、小かぶ汁　きりほしあげ　にしめ　つみいれ白みそ汁
五、三ツ葉汁　けんちん　ロール　キヤベーツ
六、小松な汁　とろゝこぶと　ふのつゆ　さはしのてりやき　いりどうふ
七、とうふ汁　まめにしめ　豚のフライ　豚に野菜のにこみ
其他香物は澤庵初め京菜ほそ根大根などなり

奈良　前田　まさご

三月七日、晴、庭の紅梅眞盛なる下に、体操なし居りしを下女に見られて恥かしかりき、明日來るならんと思ひ居りし女學世界來りしは何より嬉しく口繪の曲水の宴いと風雅なり、文藝より先づ讀み初むるに支那の戯曲、露國皇帝の保姆めでたく終りを告げしはいと喜ばしく外つ國の女性のいと勝れたるに、大町氏の婦女雜觀この度はあまりにひどいと知らず呼ばれぬ、午後臺所の掃除す、心地よくなれり、夕、兄の兄上の許より手紙來る何時もなかしき事ばかり、夕、兄上へ返事認む、

この月雜誌へ出費、四錢二厘油揚七枚、同、拾五錢味淋三合、教育費二十一錢がんぴ紙五帖と記入す、九時半就床す。

三月八日、晴、けさ少し遲く庭の邊り散歩なし居れば朝日まばゆく輝き昇りぬ、あまりの長閑さに、妹に誘はれて、智ちやんと三人程近き野邊に出づれば土筆根芹など、まばら、まばらに生ひ出でゝいと面白く、取る間に籠は充たされぬ、歸れば先日より雇人の運び居りし粉いと多く積まれたり、かの重きものを、父上も日曜なればと、山を見廻りに行き給ひしに我ばかり遊び居てはと心とがめぬ、午後二時、妹の春袷、金子氏の案出になれる改良服裁ちながら出來上がりてよく似合ふ、けさ機に白木綿かけぬ、何も習ひおかではと母上の常々云ひ給へば織り習ふ、今日摘みし根芹など、料理して進む、父上の賞味し給ふ、夕一家まどゐの下に石井氏の下婢學校參觀記をよむ、父母上も笑ひ給へば下女も顏を赤くして笑ふ、母上のそは實際ならんかと云はるによく見れば架空の談とて二度笑ひ、



河内　池田　きん子

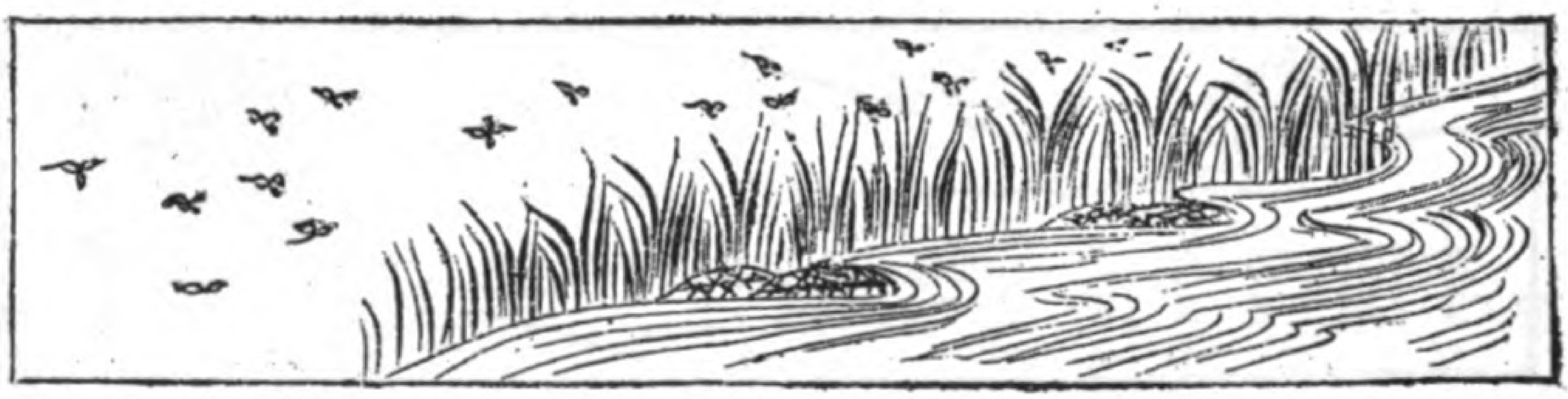
三月七日、朝より好天氣にていと暖かなり、きのふ今日はいと春めき來りて、今朝も鶯の音こゝかしこにきこゆ。朝大阪なる夫の君より御文來れり、山鳥の尾のなが〱しきを繰り返し〱つゝ拜見したり、女學世界けふは來らず。午後八時半出勤、けふは晝までなり、午後より明子さん智子さんと打連れ裏の山へ遊びにゆく。土筆はこゝかしこに頭をあげて、人まち顏なり、嫁菜のいと若きを籠に一ぱい摘む、胡麻あへがよからむ、おしたしがよからむなど明子さん爭とへるを、智子さんのきゝ給ひて、何にても歸りて後の相談にし玉へばよきにとほゝ笑み給ふ。谷を隔てゝ、こゝかしこの山腹に見ゆる櫻の老木三ツ、今しも花盛なり、松の綠の間にみゆるもいはれぬよき眺めなり、やがて日

も西に傾きしかば、歸途につく。歸りは山の麓の細道をつたゐて長樹橋にいでぬ。夕食には嫁菜の胡麻あへ膳をにぎたり。

三月八日、けふは日曜にてきのふにも劣らぬ好き天氣なり、前の白梅ははや散り初めぬ、愛らしき鶯はけふもいと早く音づれつ、杉井の美代さん遊びに來られたり、明子さんと南の椽にいでゝ編物に餘念なし、吾は裏の小川にて洗濯をなしたり、杉井の叔母樣より水菜を多く貰ひぬ。恰も漬物なかしかば半分は漬物になし半分は殘しおきたり。まちにまちし女學世界來る、大町先生の婦女雜觀棚橋先生の論說、糸左近の一日醫者、家庭小言、季節料理、家庭日記、新体詩などいと面白くよみぬ、黃昏ごろ戶外にいでゝ眺むるに、八日月の淸き空になき渡る雁の一群、日もくれゆくに、いづくの里へいそぐらむ、九日就床

長野市　こかげ女

三月六日、同上六時起床午後髮結來りけふの新聞にも昨日の續きの音樂會の記事あるに二葉とも病める東京の妹の許に送る十時ころ買物に行歸宅後裁縫をなす午後お茶のお菓子を造り見すやと、メリケン粉牛乳、玉子砂糖フクラシ粉など入れとかし有合の玉子燒器にて燒出來上りたれば母君に進め參らせつ己れもお相伴をなす母君この中に椒椒入れたりやと問ひ給ふに先の租菓子店にて求めしフクラシ粉入れたりと袋に殘りしを見せ參らさせしにこは（アンモニヤ）



ならずやされば分量の多きに過ぎし故にかくゑがらき味のするならんと敎へ給ひぬお茶うけの實地演習は見事失敗に終りぬ父君けふ六時の滊車にてかへり玉ふとの報知あり更に御机の塵など打拂ひ御召物などあたゝめ置間もなふに無事かへり來ましぬ下女相手にフライ和物汁、他に玉子酒を調へすゝめまゐらす殊の外の御機嫌にて寒からんとて玉子酒を造りくれしかさりとはいへに似ず氣の付きしよなと仰せ給ふにこれしくしこよひいへもよも食の進むをも覺ねざりき八時父君議會に行給ふ母君けふ靴下編初め給ひしにはや出來上る吾れは咲子の君に送る祝ひの物等包む九時過父君歸り給ひお茶など召し十時快ふ床に就かせらるけふの買物は

白ハブタへ一反名產庭時雨四十錢、砂糖一斤十八錢五厘）牛肉一斤三十二錢、玉葱三百〆九錢五厘、大根一貫匁四錢五厘）

家計簿記認め母君より先に失禮して十一時れむりに就く

周防　中谷　登羽子

二月八日晴天。博文館より郵書女學世界賞品の來りしなり嬉しさ云はんかたなし。十一時四十分發の列車にて姉上樣妹を誘ひて廣島の實家へ越かる停車場迄見送り行き。歸りに「ライチン」齒磨と郵紙五帖を買ひ求む。午後六時過ぎ夕食をなし。夜は伊勢物語をひもとき十一時前床に付く。九日晴天。今日は天氣よければ母君好み給ふ嫁菜たんぽゝな

と摘まんとて朝飯もそこ〱に家を出で高の畔迄辿り行けば同じ心にや隣の老婆かゞみし腰にびく重げに携へつゝ畑岸にたゝづみ居給ふもいとおかし。摘草なして歸りしは十時前なり。午後父上の繪入を繕ひ始め。六時に夕食の膳につく朝摘みし嫁菜の胡麻あへ、を母上のおいしいとて澤山めし上り給ふもいと嬉し。折しも待ちこがれし女學世界は來りぬ。嬉しさ堪かれ夜は十二時前迄讀みつゞけ母上に促がされて床に入る。十日晴天。縫かけの繪入とゝのへ午後母上と共に近守說教講聞に參る。夜は女學世界をよむ大町先生「婦女雜誌」の妻に代りて夫への注文に殊に面白くおかしく腹をかゝへぬ。十一時五分床につく。

日本橋　生方ひで

仝二日。思はず寢過し六時半起床。庭の梅二三枝手折りてみ佛に供ふ。七時頃富子の君、昨日の書籍態々お屆け下さる。朝飯后下女に、昨夜の雛人形を遠藤様に持たせてやる。御叮重なる御返りの玉はる。

午后　明日節句祝ひの料理原料調へる

蓮根三本(十二錢)。慈姑二升(二十二錢)。蒟蒻一束(十錢)。小豆三合(三錢)。玉子十個(二十五錢)。栄螺五個(十錢)。わかさぎ(十錢)。味噌(五錢)。　白砂糖二斤(二十二錢)。

總計金一圓十九錢

夜、兄上の御友達來らる。就眠十時。

仝三日。五時起床。お重母様と散歩がてら挿花を求めにゆ



き、桃。彼岸櫻。菜花など購ひ歸る。父上兄上お出勤の後直ちに煮物にとりかゝる、下女に昨日の買物の殘りを求めにやる

紅蒲鉾二枚(三十錢)　摘入れ二合(十錢)

つと豆腐(三錢)　伊達卷二本(四十錢)

總計八十三錢

十二時過ぎ漸く出來上る。去年は蓮根と慈姑と同じ味に煮ていたく不評判をとりしかば今年は蓮根を少し鹽辛く慈姑を甘味に其他それ〲一生懸命に調進しぬ。三時兄上お歸宅。今日は西洋料理を製らへるとて臺所に出て來り玉へど、兄上のは御大名料理とて、他人許り手傳はせ、あたり四方油だらけにして、跡始末に半日もかゝる事なれば下女と共に切におとめ申すされど折角の御心づきなれば父上のお歸りを待ちて、オムレツ。メノーエッグを製す、オムレツは度々製らへたればまづ無難なれど、スノーエッグは先日先生に教ねて頂きしまゝにて今度は初めてなれば加減分らず漸く出來上りたれどスノー色に上らず何やら外見きたなげにて「これではとてもお客様には上げられぬ」などの御小言を頂戴しぬ。

文藝

伊勢物語（文園落花錄の二）

女子大學講師
文學士　鹽井雨江

伊勢物語は、我が國文學史上に於いて、竹取物語と其の時代を同うして、平安朝のはやく製作せられたるものなり。作者は知られず。在原業平朝臣の歌や、舊き歌などを材料として、其の歌に合ひたる短きはなしを、いろ〳〵と作りて、書きあつめたるものなり。物語といへど、竹取物語の如く一筋のはなしにはあらずそれ〳〵の逸話をあつめたる如きものなり。歌を本としたるものなれば、見るべきは歌にあり、文章は歌のはしがきといふまでに過ぎず。

世にはいふ、伊勢物語は淫靡なるものなり、士君子の手にも取るべき物にあらずと。然れとも、これ、もと頑陋の腐儒、巧言の僞君子のいふところにすぎず。其の歌、多くは人情の美をうつし出だして、誠に愛すべきもの多し。其のはなしの如きも、多くは、もと常年の男女の間の情話に出でたれば、稀れにはみだりがはしげにきこゆるふしなきにあらねど、人情の上より見れば、愛すべきもの多し。殊に、左の數節の如きは、これを修身書の中に大書して、吾人人類が記憶すべく倣ふべき心の手本ともせむ美談といふべきにこそ。

○孝子の情

世の中に去らぬ別れの無くもがな、
千代もと祈る人の子の爲め。

歌の意は、此の人世、死別は誰れものがれぬ事なれと、あはれ、我が親は千年萬年長く生き給ふやうにと願ふ子供の爲めに、何にとぞ此の人世の死別といふ事の無ければよいといふ事なり。

作者は在原の業平朝臣なり。朝臣は阿保親王の第五

のみ子なり。母君は桓武天皇の皇女伊登内親王にて、長岡といふ所に住み給へり。朝臣は、京に出で丶、宮仕へしておはしければ、常に母君の事心にかけておはすれど、公務ある身の、しかも程遠く離れてあれば、思ふやうには訪ひ慰め給ふよしなく、いとおぼつかなく思ひ慕ひて過ごし給ふ折りから、一日、母君の許より俄かのおん使ひあり。何事と驚きて、おん文を披き給へば、「老いぬれば去らぬ別れのありといへば、いよ〳〵見まくほしき君かな」とのみ、唯だ一首の歌を記されたり。今は老衰の身、いつか死別の迫まり居ると思へば、可愛の我が子にあひたし、可愛の汝が顔が見たさへに堪へずとのお心なり。朝臣は、かくと聞き奉るや、涙になりて、取るものも取りあへず、馬にものりあへず、長岡へと馳せ出でたまへるが、途中もいとおぼつかなくいと悲しく思ひつゞけられて、あはれ死別のなくばと歎息せられたるなり。

　親となりては、何時何處、子どもに離れがたきは、これ親の情たり。何時までも何處までも子どもを長く共に見まほしきは、誠に親の至情たり。死別はのがれて難し。せめて、一目なりとも多く、片時なりとも長く、我が子を見まほしきは、これ實に親の至情よりの未練なり、此の未練なきものは、やがて、此の至情なき者なり。また、子となりては、何時何處、親に離れがたきは、これ、子たる情なり。千代萬代までも親の長壽を祈るは、誠に子たる至情なり。かくて、親の生前、我が孝養をつくさむ日の一日も長からむことを願ふは、誠に子たるの至情なり。さるに、人世死別ののがれがたきあり。孝子の恨みは、されば、實に此の死別にあり。こゝに、のがれがたき死別を恨む、こゝにのがれがたき死別の無からむことを希望す、これ誠に孝子が至情よりの愚痴なり。此の愚痴なきものは、やがて、此の至情なき者なり。

　此の母君の未練、此の業平朝臣が愚痴、いかに限りなき親子の間の愛情をつくしたる美談ならずや。此の親子が此の歌を、朝夕に愛誦して、此の親子の情愛を手本とせば、天下の人、皆よく人の親たるべし、人の

子たるべし。而して、親子の間の情愛彼此の淺深を較せば、彼の「親思ふ心にまさる親心」「とゞめおきて誰れを哀れと思ふらむ子やまさるらむ子はまさりけり」「古人が數へたる優劣は、これ自然なり。親の愛情は深く優されり。子の愛情は淺く劣れり。されば、人の子たる者、つとめて我が愛情を養はざるべからず。而して、親の愛情にしかざることなきやうに心がけざるべからず。業平朝臣の此の歌此の心、こゝに大に吾人等はならはざるべからず。

〇友愛の情

紫の色濃き時は、めもはるに
　野なる草木ぞ分かれざりける。

歌の意は、我が妻の深く愛らしくいとほしき故に、すべて其のゆかりの人までも、皆いとほしく思はるゝといふ事なり。我が妻を、紫といふ草にたとへ、さて、それを深く愛する意を色濃き時といひ、また、其のゆかりの人を、遙かなる野べの草木といひ、皆同じやうに愛する意を分かれざりけると譬へて言へるなり。妻の妹の許に、着物を贈りやるとて、言ひ添へたる歌なり古今集に、此の歌の作者を、同じく業平朝臣とせられたれば、この朝臣の逸話なるべし。朝臣の妻女に一人の妹ありたるなり。其の妹は、身分低き家に嫁ぎて貧しき生路を送り居れり。ある年の十二月の末なりきもとより足らぬがちの貧しきなれば、良人が新年の朝服、新しく調ふべきたつきも無し。さりとて、舊くやつれたる服にては、良人の心の中さこそと思ひやられて、妻の心にはいと悲し。せめて見ぐるしからぬやうにと思ふに、身をきる寒風をも厭はず、手づから舊きをときて、洗ひ張りなどして、やさしき志をつくせりさるに、もとよりさるいやしき業までは、ならはぬ身にしありければ、あやまちて、其の着物の肩になるべきあたりを、張り破りたるぞあはれなる。いかにせむとて悲嘆にかきくれてあるを、朝臣の聞き給ひて、いとゞあはれにもいとほしくもおぼえられ、直ちに、似つかはしき着物のなほ淸らなるを、我が許に見出でゝ、取り急ぎて贈りたまひぬ。此の歌は、その折り、

その贈物に添へたまへる口狀なり。

我が妻のいとほしき故に、妻のゆかりの人も皆同じやうにいとほしく思ふ我が心、おなげきを聞くに、誠に他事にはおもはれず。いとゞお氣の毒に堪へざればこの着物をさし上げますとの意なり。

緣者の人の不幸を思ひやりて、一領の着衣を贈る。人は言はむか、いふに足らざる些事と。妻の可愛き故に、妻のゆかりの人を同じく愛す。人は言はむか、たはけたるのろけ根情と。いふ人は見よ、冷やかなる今日の人の世を。いふ人は見よ、唯だ虛僞にすぎざる今日の言行の人の世を。我れは、實に、此の一領の衣服の友愛、此の可憐なるのろけの愛情の、なか〳〵に限りなくゆかしくおぼえざるを得ざるなり。のろけといはば言へ、此ののろけある人にして、はじめて友愛の情を知れる人たり。人間友愛の情理、實に此ののろけの中に存するにあらずや。兄弟の愛、同胞の愛郷國の愛、國家の愛、社會の愛、其の本をきはむれば、皆、この種の情理より出づるにすぎず。一領の衣服、もとより些細なる物にすぎず。然れども、眞の友愛の情理じより出づ。これ、いかなる喜憂苦樂をも共にわかつべき友愛の情愛を示したる贈物たり。われは、實に、此の一領の衣服、此ののろけの情を愛す。愛して、これを今日の人未來の人に語らざるを得ざるなり。

○貞婦の情

風吹けば沖つ白浪立つ田山、
　夜半にや君が獨り越ゆらむ。

歌の意は、此のもの淋しき夜に、おそろしき立田の山路を、我が良人の獨り越えゆき給ふならむか。さぞや淋しく恐ろしく苦しからむ。さても心もとなやといふ意なり。「風吹けば沖つ白浪」の句は、立田山を言ひ出づる序につかひたるにて、歌の意には關係なし。良人が山越えの夜路を氣づかひたる情吟なり。

大和の國に、夫婦の者のいと睦まじくて住みたるが多情なる良人は、いつしか隣國河內の一婦人に迷ひて度々其方に通ひゆくやうになれり。妻女も、やがてそれと知りたれど、更に恨む心もなかりけり。一日、良

人は例の如くうかれゆかんとす。妻女は、露髪はりたるけしきも見えず、懇ろに彼れこれと心を添へて出だしやりける振舞のやさしくもいさぎよき。うかれ心の良人も、いと不思議に思ひて、もしや他に心を移して我が留守をよろこぶにはあらずやと疑へば、やがて、そと前栽の茂みに隠れ居りて、妻の様子を窺ひぬ。人の見ぬ所にも、女子のたしなみは忘れざる妻女の貞操正しき、顔をつくり、姿をつくろひ、いとよく假粧して、獨りもの思はしげに、つく〴〵としばしはながめ居たるが、やがて、良人を思ふの情に堪へざりけむ、右の歌をくちずさみぬ。前栽に様子を窺ひ居たる良人も、これを聞くに、いとゞいとほしくなりて、妻女の心をよろこび、我がみだりなる行ひを恥ぢ、つひに、うかれ心は思ひ絶えて、また、もとの如く妻は一人良人は一人の睦まじき夫婦にて暮らせりといふ。

妻ある身にて他女に迷ひたる良人のそでなき心を、露ばかりも怒りも恨みもせず。しかも、良人がそでなき心の浮かれ歩行の夜路を氣づかひたる、いかにやさしくまめやかなる貞婦の情にあらずや。悋氣は女子の持病とばかりもいふ世の中に、さても、美はしく優れたる貞婦の心にあらずや。これを聞きて、其の心情の美德に感ずる者、決して此の良人のみにはあらざるべし。

此の温厚貞節、これ誠に女子が美德なり。女子の幸福は必ず此の美德の賜物たるべし。夫婦一家の破れ、やがて、人間限りなき不幸に陥らむとするの淵に立ちて、此の妻女が温厚貞節の美德、よく自から救ひて幸福なる境遇を送るを得たるにあらずや。此の美德や。また、これ、女子が家庭に立ち社會に居りて、よく天に命せられたる女子が人心美育の任務をつくすを得む道なり。道ならぬ空にうかれ迷ひたる心、人ならぬいやしき淵に墮落せむとする人を、此の妻女が温厚貞節の美德よくもとの、正しき道、もとの美はしき境に救ひ導くを得たるにあらずや。人心の美育、こゝに、女子が天に命せられたる任務なりといふ、人或はいはむ、奇怪なる僻見と。然れども、我れは固くこれを信ずる

ものなり。
女子が天に命せられたる第一の任務は、もと女子が天に授けられたる此の温厚貞節の美徳を以て、人心を美育するにあり。無趣味、殺風景なる此の社會に、益々非常の石木、殘忍なる虎狼に化しゆかむとする人類を、よく此の温厚貞節の美徳によりて、情やさしく心正しきはに養ひ導かむとするにあり、温厚貞節の女子は、社會の活きたる詩なり。活きたる美術なり。社會の人心に優美高尚の神韻を涵養するは、これ、必ず女子が世に出でたるの道なり。世につくすの任務なり天に反かざるわざなり。

古今集（平安朝の文學）

女子高等師範學校講師文學士　尾上柴丹

平安朝の初めには、漢文學が、盛んであつたことは、前に述べた通りであります。乃ち、平城、嵯峨、淳和の三天皇は、ことに漢文漢詩が御好きで、且つ、これに御堪能で入らせられたから、皇子にも、皇女にも、御上手な方々があり、臣下にも、英才が輩出いたし、漢文學は非常な勢を得た次第であります。されば、これらの人々の詩を愛讀せう、後世に殘さうといふ御考へからして、此時、三部の詩集が勅によつて選ばれました。それは、

凌雲集――嵯峨天皇の弘仁五六年の頃、小野岑守等が、勅を奉じて撰べるもの。
文華秀麗集――弘仁九年、藤原冬嗣、仲雄王等が、奉勅して撰べるもの。
經國集――天長四年、良岑安世が奉勅撰。

の三集であります。かく、漢文學が盛んであつたために、前代の奈良朝で、よく發達して、有名な萬葉集二十卷の美をなした長短歌は、非常に衰へてしまいました。されば、仁明天皇の御時、天皇が、御年四十二にならせたまうたのを祝ひ奉つて、興福寺の法師等が獻上した長歌のやうなつまらぬ物までが、珍らしがられ清和天皇の御時、天皇が文屋在季を召されて、「萬葉集

は、何時つくつたものか、と御尋ねがあつたやうな事もあります。が、日本人が、自分の考を充分歌はうといふのには、決して、外國の詩の眞似のみでは不可ない。矢張、日本語を用ゐ、日本的の詩形を用ゐるに限るといふやうなところから、清和天皇の頃より、歌は次第に頭を擡げて參ります。これから、古今集の序文に書かれて、六歌仙といふ名を得た六人の歌人、乃ち僧正遍昭、小野小町、文屋康秀、在原業平、大伴黒主、喜撰法師、また、此外に、在原行平、藤原敏行なと云ふ人々、前後して出て來ます。それから、前に盛んであつた漢文が衰へかゝると共に、この方は、反對の勢を得て、歌合、乃ち歌の競爭が初まるほどになりました。これにつれて、歌人は、ます／＼輩出して、醍醐天皇の頃には、丁度、紀貫之、凡河内躬恒及び、紀友則壬生忠岑などが居りました。天皇これらの中、前の五人に命じて、各々、其家集を奉らしめ、また、萬葉集に入らぬ古き歌を集めしめて、承香殿の東で、これを編輯せしめられました。これが出來上つて、名を續萬葉集といひましたが、重ねて勅があつて、之を分類して、二十卷となさしめ、古今和歌集と名づけられました。この出來上つた時が延喜五年四月と云ふことであります。かく、前の勅選の詩集が全く廢れて、勅選の歌集が起るに至つたは、全く、漢文學の威勢が地に墮ちて、國文學が、これに換つた故であります、猶云はゞ、外國の摸倣時代が去つて、國民の自信力の發達時代が來つたためであります。

此集は、從來、歌人が摸範として尊び、敬ひ、和歌の眞髓は、あつめて、此一書にあり、とまで考へてをりました。が、これも、今から見れば、議すべき點が少なくはありませぬ。元來、此集の歌は、萬葉集時代の歌とは趣が異つて、前の質朴な、勇壯な風はなく、たゞ、優しい、哀れな、上品な、女らしいところが多い且萬葉集時代には、目に睹、耳に聞いて感發すれば、直ちに、之を歌に咏み、別に、題を設け、思ひを凝したものは少ないが、此集では、句を練り、心を廻らしたものが多いやうであります。これは、いづれも、得

失はありますが、その中、此集で、語勢を滑にして、歌ひよいやうにして、やゝ複雑な考へを陳べ、露骨な淺薄な弊の少ない風のあるのは、萬葉集時代よりは、一進歩をしたものと云はねばなりますまい。例へて見れば、萬葉集の中にある古人の歌「古のふるき堤は年ふかみ池のなぎさに水草生ひにけり」といふのは、主人の沒した後の庭の有様を詠んだのであるが、たゞ、其有様を云うたばかりで、更に、巧んだところの無い、簡單なものであります。が、これと同じやうな考へで古今集の中にある「君が植ゑし一むら薄虫の音のしげき野邊ともなりにけるかなと云ふのは、たゞ薄と虫の音とをいつて、其家も、庭も、荒れ果てゝ住む人もない秋の哀れさを充分に余韻に托したところは、前のよりも、考も多く、云ひ廻しも巧みでありますやうな例は、此外まだ、澤山あります。これらは、一進歩といつても差支はありますまい。

されど、此集の歌の弊は、何でも、天地萬物をそのまゝに詠まない、必ず、一つ自分の考へも入れて歌にする、ことであります。無論、この考のよいのは、至極よいが、中に理窟がかつた、駄洒落がかつたのが多いのは、甚だ、面白いない。例へば、

年のうちに春は來にけり一年を
　去年とやいはむ今年とやいはむ、
春の日の光にあたるわれなれど
　かしらの雪となるぞわびしき、
春の夜の闇はあやなし梅の花
　色こそ見えね香やはかくるゝ、
吹くからに秋の草木のしをるれば
　うべ山風をあらしといふらむ、
血の涙おちてぞたぎつ白川は
　君が代までの名にこそありけれ、

いづれも理窟と、駄洒落とを云はねば、承知が出來ないと云ふ風があるではありませむか。これを、萬葉集の中の

春の野のすみれ摘みにと來し我ぞ
　野をなつかしみ一夜ねにける。

たての浦の底さへ匂ふ藤波を
かざして行かむ見ぬ人のため、

梅の花それとも見えずひさかたの
あまぎる雪のなべて降れゝば。

などの、理窟もなく、駄洒落もなく、あつさりとした中に、味があるのと比べては、餘程、劣等の感じがするではありませむか。

猶、此集に取らぬところは、長歌の全くつまらぬことであります。抑、長歌は、萬葉集には非常に多く、例の柿本人麻呂、山部赤人、山上憶良などの人々に名篇大作が數多くある、乃ち人麻呂の高市皇子、殯宮の歌赤人の富士山の歌、憶良の貧窮問答などは、ことに有名であります。これに反して、この集には、長歌の數は僅々五首あるのみで、しかも、その作者は、貫之、忠岑、躬恒等であるにも拘らず。不味い事は甚しい。ことに、萬葉時代の五七の調、乃ち、

わたる日の、かげもかくろひ、てる月の、ひかりも見えず

といひ來つたのが、此集では破れて七五調、乃ち、

九重の、うちにては、あらしの風も、聞かざりき

と變り、其他、對句の法も、枕詞、または序詞の用法も、非常に拙くなり、全く見るに足らぬものとなつてをります。

此集の歌數は、長歌、短歌、旋頭歌、合せて千百首ばかり、これを、春夏秋冬、賀、離別、羇旅、物名、戀、哀傷、雜体、大歌所と分けてあります。この中、物名といふのは物の名を歌に詠み込むことをしたものであります。乃ち

あきちかうのは(秋近う野は)なりにけり
白つゆのおける草葉もいろかはり行く

とて「桔梗の花」を詠み込む類であります。これも、歌が、すでに、遊戯の具となつたことを現して居ります、猶、此の集は、延喜五年に出來たものと云ひましたが、延喜七年の大堰川行幸の時の歌、同七年、七條后かくれさせたまへる時の伊勢の歌等があります。これ等は、恐らくは、後に補つたものでありませう。又

萬葉集に入らぬ、歌を集めたとはいふもの〻、猶、混入したものが數首あります。これは、編者の疎漏であります。序文は、國文と、漢文との兩様あります。國文は貫之、漢文は紀淑望の作と傳へて居るが、舊説には貫之が、序を書かむが爲めに、まづ、其養子であつた淑望に、漢文の序文を作らせ、これを本にして、國文のを書いたが、後に、此漢文の方も、此集の奥へ加へたものと云はれてをります。これに就いて、種々説があつて、いまだ、一定いたしませむが、矢張舊説の通りであらうかとも考へられます。全体の卷數は二十卷以後の勅選歌集、大方これに倣つてをります。此卷々に、源氏物語などの眞似でもしたものと見えて、種々の異名があります。それは、第一卷は「ふる年に春立ちける日よめる」と序詞がある歌が最初にあるから、「ふるとしの卷」。また、第三卷は、初めに「我宿の池の藤波咲きにけり」といふのがあるから、「藤波の卷」。第五卷は、初めに「吹くからに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ」の歌があるから「山風の卷」などと、名があります。猶、此集の註釋書、傳授の事などは、次に申しませう。(未完)

教訓文反故

塚越停春

人間一代仕合せの本は早起きの事

(一)

鷄鳴に起きされば日事に悔ありと申候事、我が身多年の經驗にて、如何にも意味窮りなき確言と存じまゐらせ候。

世に早起き程大切の事はまたもあるまじ。早起きは萬づよき事の本にして、家内安全息災延命の守り本尊もこれより外はあらじかしと存じ參らせ候。先づ早起きを致し候得ば、身体の藥にて、朝の間の清らかな大氣を呼吸致し、うす紅ゐに明け初むる空の景色を打ち眺めて、塒を離れいざわと誘ふ小鴉の飛び行く影の三つ四つ二つを數へ、豊さか昇る朝日子の姿を見て、身も

心もすが〳〵しく、立ち働くも輕やかに、家内の人は誰れ彼れとなく打笑み、顔の色さへ輝きて見えるもの御座候。

夜一夜安らけく休みて新に働らき申候ものから、其仕事は思の外にはか取り、家の内外も片付きてきちんと致し、庭の面に箒の痕の新らしく、塵一片を止めぬなど、得も言はれぬものに御座候。

斯樣に致し候得ば、汚らはしき念慮など起らん樣もなく、自然に家風は清健に相成り、勤勉風をなして、終には富み榮ゆるに至り申すべく候所謂。家内安全息災延命の守りとは、此の事を申すにて候。

はた又これとうらうへにて、朝な〳〵日たけ時移りてやう〳〵に起き出るやうに有之候ては、第一に氣分も惡しく、朝の掃除の濟まぬうちはや晝近く相成り、其日の仕事は次第に後れて夜に入れども片付かず、はては翌くる日にまでもかゝり可申、一家中誰も斯かれば起るものは癇癪ばかりにて、家内に波風絶間とてあるまじく存じ參らせ候。此の樣の家を營なひ候ものは、隙間漏る夜風と貧乏神とばかり、哀れ浮世の秋を泣き暮すより外あるまじく候。

一年の計は元日に在り、一代の家風は嫁入りの當座に仕出さねば成らぬことに御座候。早起きの家風を作るには、新嫁たる御身自ら先だゝずして、叶ふまじく存じ上げ參らせ候。御身が此度の婚儀を祝し參らせ、伯母が贈りものとしての一言、あら〳〵如此御座候。可祝。

睦月七日　伯母より

お春どの

（二）

人を動かす詩文の妙は、情眞の事

いつもながら御文嬉しく拜し參らせ候。仰せの趣御尤にて、詩文の妙は人を動かす所にこれあり、人を動かす所は情眞なる所にこれあり、雕琢推敲など申す事は、さて其次にてあるまじきやと、妾も兼々存じ居り參らせ候。古へ人の和歌俳句など見侍るに、

わたらしう子を思はゞや花の春。　丹野母

梅か香や慮外ながらも旅勢。　某女
手くり舟風は柳にまかせたり。　園女
いそがしや菫を摘めばつく〳〵し。　同
思ふこと伏籠にかけて朧月。　野里
男なら一夜寝て見ん春の山。　とよ
花の前に顔はつかしや旅衣。　園女
夜さくらや太閤さまの櫻狩。　同
我年のよるとは知らず花盛り。　智月
短冊や兒の年とゞく花の枝。　みつ
なぶらるゝ子持ながらや雛遊び。　朱芳妻
ゆく春のうしろ委歟藤の花。　去來妻
更衣みづから織らぬ罪深し。　園女
わら美し卯の花は誰が更衣。　同
戀死ば我塚で啼け郭公。　奥州
裏を着て寝よとの鐘か子規。　秋色
啼くにさへ笑はゝいかに郭公。　みつ
短夜や長いは夢の思ひ哉。　萬里
柏の香に蚣氣違ふ數やりかな。　某妻

御乳の人添寝ややさし枕蚊帳。　綾月
祭ちかし入帆につゝく幟かな。　園女
夕立やいとしい時と憎い時。　しづか
進出て瓜むく客の團吽し。　園女
涼しさや髮結直す朝きげん。　りん
簾さけて誰がつまならん涼舟。　秋色
負ふた子に髮なぶらるゝ暑かな。　園女
晝顔や雨降り足らぬ花の顔。　智月
乙女子かすべりて落よ雲の峰。　園女
見るもうし獨住居の玉祭り。　たつ
朝夕に見る子見たがる踊かな。　りん
兀山に秋のとりつく山もなし。　園女
風にかくせ小萩か露の置所。　湖降妻
身を眦よくねるとわれは女郎花。　秋色
一羽飛ぶ雁に哀の寝覺かな。　花鈴
名月や宵うさし入る簀の中。　せん
かつら男の懐にも入や閨の月。　八千代
腹の立つ時やきぬたの片拍子。　たゝめ

仁王にも寄り添ふ蔦のしげりかな。　園女
抱帯とかずに宿の夜寒かな。　たつ
牢人の肩尖りけり秋の暮。　そめ
かつら子の髪にさゝばやうす楓。　かな
いつはりとてちは思はじ初時雨。　みはの
兒の親の手笠いとはぬ時雨かな。　夕霧
我袖の蔦や浮世の村時雨。　薄雲
雪やけや夜毎に孫か手を吹かせ。　智月
雪見には殿達耻る心かな。　さよ
我子なら供にはやらじ夜の雪。　とめ
鉢たゝき夜更て道の廣さかな。　園女
年よれば鼠もひかず寒かな。　智月
わすれ花爽になく御乳の哀哉。　かね
水仙の花の高さの日影かな。　智月
あるほどの伊達仕盡して紙子かな。　園女
さゆる夜のともし火凄し眉の劒。　同
獨居やしかみ火鉢も夜牛の伽。　秋色
我形の哀れに見ゆる枯野かな。　智月

葉の音に犬吼かゝる嵐かな。　園女

など、何れも情異なる故に面白く候。又千代尼の
蕣に釣瓶とられてもらひ水
蕣や地に咲くことをわぶながら。
千なりや蔓ひとすぢの心より。
しぶかろか知らねど柿の初契り。
起きて見つ寝て見つかやの廣さかな。
蜻蜒つり今日はとこまで行たやら。
と云ふ句の惻々と人を動かす所も、同じく情の異なる
故に侍るぞかし。又古歌の

風吹けばおきつ白波立田山
　夜牛にや君がひとり越ゆらむ。
我もしかなきてぞ人に戀ひられし
　今こそよそに聲をのみ聞け。
身をつみて人のいたさぞ知られけり
　戀しかりけり戀しかるらむ。
いかにせむ都の春もをしけれど
　なれしあづまの花や散るらむ。

など、何れか情の異ならずやは。小田垣蓮月の歌の面白きも、同く情異なる所面白く存まゐらせ候。

山里は松の音のみ聞きなれて
風吹かぬ日は淋しかりけり。

宿かさぬ人の心をなさけにて
おぼろ月夜の花の下臥。

文月三日　文子

君子様

(三)

大なる子を生むは、大なる母の事

大なる母は多く大なる子を有つこと、其例し一にして足らず候。江戸中興の名將軍德川吉宗公の母など其の一人にして、此の人は紀州の百姓巨勢利淸と云ふもの丶娘なりしが、紀矦貞光卿に仕へて吉宗を生みたる也。後吉宗將軍と成るに及び、母に覲する每に、母はいつも『三萬石を忘れ給ふな』と申され候由に候。此一言にて其並々の婦人ならざりしこと知られ申候。三萬石とは、公の初め越前丹生三萬石に封せられたりしを申すにて、公は其れより入て紀藩を継ぎ、遂に將軍家を相續せられたる方に御座候。

三月十三日　父より

秀子との

(四)

事に當りて子を戒めしば、見識ある母の事

先便に申進じ候大なる母の事は、吉宗將軍の母公ばかりにては勿論無之、鎌倉の執權最明寺入道時頼の母安達氏なども、明に其一人とか申候。

安達氏は、秋田城介安達景盛の娘にて、障子の切り張りを致し候逸話もて名高き松下禪尼是也。尼か子時頼を戒めたる消息の由傳ふものに、

其元常に早く隱遁の志おはして、近來佛教を信じ、殊には宋朝の高僧異國より遙々本朝に遊化あられ、古今稀なる高德、貴賤渴仰の頭を傾けざるなし。其元にも信仰淺からず、每々參禪し、頗る禪の味を契悟せらるゝよし。自らにも隨喜に堪へず候。おもふに唐土梁の武帝の時、天竺より達磨尊者梁に入り、始めて禪宗の儀軌を示されし往事も斯くやらん。去りながら、武帝は本と聖賢の道を尊び、武道に遊せし君なりしに、彼に佛道を信じ、寺を建て、捨身の行をなし給ふ程に、上を學ぶ下のならひ、高位貴官より庶

人の賤きまで都て佛法に傾き、公卿大臣は罪人あれども佛の戒を破るを恐れて刑を宥め、訟の事あれども、辱れ御ることを慮り、天下の政道に闕あるを窺ひ、僕兼と云ふ者兵をし發て都を攻めけれども、武の備へ弱み、防くこと叶はず謀叛人に和談し、武帝は遂に沈みて崩し給ふ。國こそ亂れ斯る先蹤有れば、佛道は貴き教へなれとも、文武を以て政を爲し國家を治むへき身にて、此道に傾きては、政道立ち難からむか。御身隱道の志あるには、さてしもあらん。子孫に於ては、唯々經傳武備を捨てず、治國の要道を修せらるべし。斯く云へばとて、邪見を以て佛道の佛法を禁ずるに非ず、尊き道は尊信すへし、傾くへからずと申す義なり。扨近頃世の人殺生を事とし、遊漁を好み、鷹を臂にし、犬を牽き、山には罠を掛け、水には網を張り、獸は檻に囚へられて友を慕ひ、禽は籠に飼はれて雲を戀ふ。剩さへ巣を傾け胎を割くと承る。人ど物とは異りと雖、生きとし生けるが命を惜むは皆同じ。以ての外の曲事なり。十惡の中に殺生最も大に、十善の中に命を救ふを專らとす。生死不知の族は、物の憐れを辨へず、貪慾愚痴の人は罰の恐るへきを知らず。斯る惡ひを驗すは、佛の道に如くはなし鎌倉中の道場に説法せしめ、頑なるに善なるを教へ導かしめは、自から生類寛を得るに近からん。所存聊か申進じ候。穴かしこ。

ど申すが有之候。實に立派なる學者政治家の言葉にして、相應の學問あるにあらでは言ひ得べきものに非ず此の消息にして果して尼の消息ならば、尼は一個の思慮あり、才學ある婦人と可申候。可レ欽、可レ仰

四月三日　父より

秀子どの

（五）

床しきは、しとやかな振舞の事

最も馨しき花は、羞ち且謙ると申候。御身達常に之を記して可也。不宣。

一月十日　兄より

時子樣

上古の女傑

栗島狭衣

上毛野君形名の妻

西洋にはジアン、ダークのやうな男優りの女傑も多くありますが、東洋には餘り其例を見出しません、けれとも我日本は尚武の國體でありまして、勇壯武烈の勳を重んじましたから、自然名高い女丈夫といふものも現れました。それは御承知の通り武家時代の巴、板額、

さては靜といつたやうな氣象のすぐれた人々、で、何れも當時の女傑には相違ありません。けれとも其活動した舞臺が悲しいかな至て狹い、たとへば一國一城のため但しは一身一家のためであつたのに過ぎない、どうしても之れを以て西洋の女傑に較べる事が出來ないのであります。

ところが我が上古の婦人になりますと、王政の世の中でありました丈けそれ丈け、活動した舞臺もひろくなつて、大君の爲め國家のためといふ大きな義務のために活いて居りますから、隨分さびしくしい談話が歷史の上に遺つてをります、殊に茲に掲げました上毛野君形名の妻にいたつては、恐らく彼のジアンダークにも劣るものではあるまいと思ひます。さて此事柄を述べるに先つて聊か當時の蝦夷といふものを說明いたしておく必要がありますから、次に其大勢に就て記しておきます。

蝦夷は我が天孫人種に追ひまくられて、本土の東北へと逃げ込んだ未開の人種でありますが、時々勢を盛返して來て、良民を惱ます事も一度や二度ではありませんでした、されば景行天皇の時には日本武尊が御征伐になりまして悉く其巢窟を戮れました、尤も武內宿禰が東國の巡回をした時、東夷の中に沃壤な土地があるといふ事を奏上しました事があります、それは日本紀に

二十七年春二月武內宿禰自二東國一還之奏言、東夷之中有二日高見國一、其國人男女並推結文レ身爲レ人勇悍、是總曰二蝦夷一亦土地沃壤而曠レ之、擊而可レ取也

とあります。されば蝦夷等は地の利に據りまして、天資の勇悍に任せて暴戾を働くのでありますから、朝廷でも隨分持て餘されたには違ひがありません、そこで景行天皇の二十七年に武內宿禰が奏上した後、四十年六月になつて東夷多叛といふ事が同書にも見えて居りますので、此時が日本武尊に征伐の御命令を下された、朝廷最初の蝦夷征伐であつたのであります。而してこれが、鎭定した以後しばらくの間は其叛亂を聞きませんでしたが、敏達天皇の十年二月になつて、蝦夷數

千竄二於遠境一といふ事が紀にも見えて居ります、此時には天皇御自身に蝦夷の魁帥たる綾糟といふものを御召になりまして、仰せられたのには、爾蝦夷は景行天皇の世に、殺すべき者は殺し、赦すべきものは赦してやつたのであるが、今朕も前例に遵がつて爾等の元悪を誅戮するに定めた、爾等よろしく其覚悟をいたして居よとあつたので、元悪なる綾糟はいたくも懼れ縮んで仕舞ひました、そこで綾糟は泊瀬川の中流に舟を出し、三諸の山に向ひまして、嗽ぎ手洗ひ、清浄潔白に身をきよめて、固く後来を盟ひました。臣等蝦夷は子々孫々の末までも、潔い心をもて天闕へ御奉公をいたして、決して御詔に逆ふやうな事はいたしません、とうぞわが、諸神及び天皇よ臣等の罪を宥して、臣等の種を滅ぼす丈けは御止り下さいと申上げましたそれがため天皇も綾糟の罪を宥めて御ゆるしになりました爲め、これから以後又少時の間は鎮定して居つたのにも拘らず、舒明天皇の九年三月になりまして、又々叛亂をおこして朝儀を怠りました、さて此時に追討の大將軍となりましたのが前に述べた大仁上毛野君形名といふ人であつたのであります。それ故この時の蝦夷といふものは、叛復恒なき無頼團で、中々手剛い者共であるといふ事は誰しも合點のゆく事であらうと思はれます。して見ると上毛野將軍も隨分苦戦をしたのには違ひないので、結句蝦夷等のために散々と敗られたのでありました、已むを得ず全軍を引退て壘のうちへ迯げ込みましたが、賊は勢に乘つて追撃してまゐりまして、壘の周圍を八重二十重に取卷いて仕舞ましたので、兵卒は散り／＼に迯げ失せる、壘のうちは殘兵尠になるといふ仕末でありました。そこで流石の上毛野將軍も途方にくれて、今は策の出づるところを知らずといふ有様になりましたが、もう斯うなつては一身を保つの途が肝要であると考へたか、日の暮れるのを利用して壘の垣を乘超えて迯げ出そうと決心しました時にこの軍に隨從して居りました形名の妻は、本夫の決心をそれと早くも察しまして、なさけない事であると嘆息しましたが、これは引込んで居るべき場合では

ないと心を勵まして、本夫の前へしづ〳〵と進みましたが、さて物柔かに申します樣『われ〳〵の祖先は天皇の御下に仕へて、いつも武功を樹てたもので御座ましたのに、今こゝで勝甲斐なく蝦夷等のために滅されて仕舞ひましたならば、どの位後の世の物嗤ひになりませう、どうぞ雄心をふるひ起し遊ばして、この難關をお破りになれば、屹度蝦夷等の一軍は潰て仕舞ふに相違御座いません』と實に健氣なことを謂て本夫の勇氣をさそひました。かくて酒を暖めて本夫にすゝめ、强ひて數杯となく飮せた上『先づ一眠り遊ばしたらよろしう御座ませう』と靜かに寢所へ導いた後、自分は本夫の劍を佩き、弓十張を取つて、多くの女人達に各自ひかせました、殊に自分は其中に加はつて弦を鳴らしては、虛勢を張る事につとめましたので、今まで勝氣に乘て居つた蝦夷共は、此音を聞いて不思議の事よと耳を欹てましたが、此時寢處に熟睡して居りました形名は、ふと弦の音に夢を破られて起出て見ますと此有樣でありますから、ハツと許りに雄心をふるひ起しまして、殘兵を卒ゐて壘を討て出ました。されば聞く耳立てゝ弦の音を怪みながら、或は壘中の兵氣衰へずやと胸おどらせて居りました蝦夷等は、この不意伐にさては軍卒多勢なりとおもひ過して、一太刀も合はせず命から〳〵逃げのびましたので、形名の一軍再びふるひ、前に逃げ匿れた者共までが、われも〳〵と加りましたから、忽ちの中に蝦夷を討ち平げて偉功を奏する事が出來ました。

あゝ大丈夫の形名ですら一時は勇氣を喪つて、おぞくも蝦夷等の爲めに累代の武名を汚されやうとしたのを身はかよわき女でありながら、奮然として其雄心をよびおこし、斯くまでに勢をふり返させたといふのは、たゞ怪力を以て誇り、武伎を以て名を得たる者と、同日の談ではないと思はれます、殊にどこまでも女のやさしい性質を失はず、妻なるものゝ正しい道を忘れずに、本夫の爲め國のため、身を挺でゝ盡したといふのは、千古にかゞやく譽の龜鑑で、たしかに我國第一の女傑と申しても差支はありますまい。

源氏物語梗概

文學士　尾上柴舟

本誌第一號に出でたる中内君の「源氏物語」なる一篇にて、讀者諸嬢は、源氏物語の、いかなる書なるかを會得したまひしなるべし。されば、今より、其卷々につきての梗概を述べて、王朝文學研究の一助たらしめむとす、たゞに王朝文學に志す人のみならず。苟も、我國の婦女子たるものは、其祖先の一才媛が、いかにして、我國の大作家たるの譽を得しか、また、我國、古往今來、唯一の好小說は、いかなる趣向より成れるかを知るべき義務あればなり。

されど、諸嬢の中、すでに、全く、讀み了りたまへるもあるべく、或は、幾分を讀み得たまへるも多かるべければ、最初の桐壺の一卷の如きは、殆んど、記述するの要なきが如し。しかも、順序は亂さざるべからず。桐壺を除きて、帚木よりせば首なくして行かむとするにも似たらむ。故に、まづ、桐壺を略叙し、而して、順次、宇治の卷々にも及ばむとす。

桐壺（光源氏一歳―十二歳 卷の名、更衣の局の名より來る）

天皇更衣を寵し給ふ。……皇子生る。……皇子の御着袴……更衣の病惱……同退出及死去……更衣の葬送……靫負命婦更衣の母を訪ふ……第一皇子の立坊……皇子の書始……高麗人皇子を相す……藤壺入内……源氏の元服……源氏左大臣の女婿となる……藏人少將……二條院の修理、

いづれの天皇の御時なりけむ。御覺えことにめでたき一人の更衣（女官の名）ありき。同輩、または其以下の女官達、貶しめ嫉むこと甚しかりければ、遂に、病をも得るに至れり。此人の父は、大納言なりしが、早く失せて、母北の方一人あるのみにて、他に、後見すべき人もなければ、心細きことゝも、いと多かりき。かくてあるほどに、前の世にも御契りや深かりけむ。此腹に玉の如く淸らかなる皇子生れたまへり。天皇いとゞ喜ばせたまひて、急ぎ參らせて御覽ずるに、世に儔なき御容貌なり。此時、第一の皇子、すでに、右

大臣の女の女御（弘徽殿の女御）の御腹に生れさせたまひしが、人々、或は、此度の皇子の、是に超えて、皇太子にもならせ給はむかと疑へり。

更衣は、皇子の御誕生より、ます／＼、人々の嫉みを强くしたりしかば、天皇いよ／＼、これを憐ませたまへり。かくて、此皇子、三才になりたまへれば、花やかなる御袴着の儀式あり。皇子の御有様、御心ばへ、世に有りがたきほどなれば、かゝる人も、世に出でたまふ事有るものかと、驚嘆する人もありき。この年の夏、更衣は、病また篤くなれば、里に下りむとす。天皇、暫時待てとて、留めさせたまふ間に、いよ／＼、弱り行けば、せん方なく、退出せしめ給ふ。常より、美しき人の、面瘦せて、物をもえ言はず。眉もたゆげに、打ち臥したるさま、いとあはれなれば、天皇は、いかになり行くらむか、と覺束なく思されたり。此夜は、露もまどろます。明し兼ねさせたまふに、夜中過ぐるころ、御使、更衣の果敢なくなれるよし還り奏すれば、何事も思し分れず、悲しませたまへり。皇子は母君の忌服なれば、例に任せて、宮を出てたまへり。更衣の亡骸は、愛宕と云ふ所に葬りたるに、天皇は、三位を贈らせたまへり。かくて、日頃過ぎゆくに、天皇は、せん方なく悲しく思されて、涙てひぢて、明し暮させたまひしが、野分立ちて、俄に、はだ寒き夕暮靫負の命婦を使として、故の更衣の里を訪はしめたまふ。命婦行きて見るに、草高くおひて、月影のみ明らかなり。南面より入りて、母君に逢ひて、仰言を傳へ且、御文をも示す。母君、え見も果てず、やう／＼御返事上りて、猶「故大納言、今はとなるまで、此人を宮仕へせさせよ、とかへす／＼、誡めたりしかば、出でたゝせたるに、かく、果敢なくなりしは、いと／＼口惜しく、却て、御志のほどを、恨めしくも思ひ侍る」など云ひ續くるほどに、夜も更け、月も入方になれば命婦は、急ぎ歸りて、此有樣を奏す。天皇は御返事御覽して、いよ／＼、打ち歎かせたまふ。夜はます／＼更けゆけば、夜御殿に入らせたまひしも、まどろませたまはず。起き出でたまひても、朝餉も氣色ばかり觸

ませたまふのみなれば、人々思ひ煩らふ。皇子は、服も果てたれば、宮に參りたまひぬ。天皇は、例の、めで愛くしみたまひたれど、流石に、第一の皇子をば棄てかねさせたまひけり。されば、翌年の春、この第一の皇子を立て〻、皇太子としたまひければ、母の女御（前に云へる右大臣の女の女御）は、心を安んじ給ひけり。さて、皇子六才になりたまふ年、御祖母、北の方は、失せたまひぬ。七才になりたまへば、讀書始あり、聰明なる御性質なれば、上達もいと早く、天皇も恐しきまで思し召したり。其頃、高麗の國より、賢き相人來りければ、天皇は、皇子を、右大辨なる人の子のやうになして、相せしめたまふ。相人驚き怪しみて「天皇となりて、上なき位に上るべき相あれども、さにもあらず。朝廷の堅めとなりて、天下の政を輔くる方にて見れば、又違へり」と云ふ。天皇は、かねて、思し置きたる事ありしか、この相人の云ふ處と符合したりければ皇子に源姓を賜ひて、直人になさむと定めたまへり。

さて　天皇は、故更衣に似たる人もやと求めさせたまふに、先帝の第四の皇女、御容貌優れたまへる由噂ありければ、懇に聞えさせたまふ。皇女の御兄の兵部卿親王なども、勸めたまへば、皇女は、内裏に參りたまへり。藤壺と申す。皇子は、御母更衣によく似たまへりと云へば、若き心にもいとゆかしくて、常に參りて見奉らむ、と思したり。皇子の御有樣比ひなく美はしければ、世の人光君といひ、藤壺をもかゞやく月の宮と聞えたり。

皇子、十二になりたまへば、天皇は、元服の儀式を擧げさせたまへり。内藏寮、穀倉院などより愚ならず、仕う奉りたれば、清らを盡したり。左大臣加冠をなし大藏卿理髮をなし奉る。この日より、いよ〳〵、臣下となりたまへば、階を下りて拜したまふに、皆人、涙墮したり。左大臣には、一人かしづきたまふ御女、（葵上）春宮よりも御召しありけれども、奉らであるがありしが、この時、此君の御副臥にと定めたり。事果て〻、源氏は、左大臣の里に、宮中より罷出でたまふ。

女君は、すこしく年上なれば、耻しと、覺したり。この大臣は、天皇の御覺えもいとめでたきに、北の方は天皇と一つ后腹なり。加ふるに、この源氏の君さへ、かく、婿となりたまひたれば、右大臣（東宮の御叔父）の勢も、到底、及ぶべくはあらざりき。御子數多あるが中に、藏人少將（後頭中將）なるがあり。此人は、父大臣とは、中善からぬ右大臣の第四女の婿となりたるが、源氏とは、隔てなく交はりたり。さて、源氏は藤壺の御有樣を、類なしと思して、かゝる人をこそ得め、左大臣の女君は、あしとにはあらねど、心に染まずと、苦しきまで覺えたまへり。されば、内裏にのみ候ひて、左大臣の方には、稀れに出でたまへと、左大臣は御心につくやうなる遊をして、いたはりかしづき給ふ。故更衣の里の殿は、修理職、内匠寮に宣旨ありて、改めつくらせたまふ。木立、築山 池など、めでたく造り騒げば、源氏は、かゝる處に、心に思ふやうなる人を置きて、住まば樂しからむ、と歎き思しけり光君といふ名は、高麗人の、感でてつけ奉りけると言ふ。（桐壺終）

湘煙日記を讀む

英文山ざくらの著者を以て有名なる藤生貞子の君、近ろその編纂になる湘煙日記を寄せらる、これはこれ巾幗政事家の稱ありし湘煙女史中島俊子が病中の日記なり。

女史は明治年間閨秀の一偉才にして此政事家として又教育家として又交際家として既に一方の雄たるを失はざるに加へて更に詩歌文藝の才を以てし、蓄財家政の能を以てす、この日記表面より見る時は唯病中の事柄を記したるに過ぎずと雖も、その中に含める文字を仔細に味はふ時は實に是れ一種の人生觀にして、以てよく女史の平性を知るべく、又女史の眞價を知るに足るべし。抑も女史が天眞の批評眼はその病蓐に在りて一層の鋭を加へ尋常一様なる病氣のもよう、家人の動靜、訪問客の品評、食物、器什に對する些々たる事柄も一たび女史の批評眼に映ずる時は忽ちその眞相を呈露して醜美を隱すこと能はず、蓋し鬼神の工を奪ふものといはんか。男子にありては正岡子規、女子にありてはこの湘煙、眞に薄命なる才人の一對にしてこの書又子規の遺稿と共に出版界の双絶といふべし。

（本郷育成館發行）



女子と俳句

雨谷一栞庵

（一）婦人の詩想

男子は突兀たる奇峰の蒼穹に聳ゆるやうな風であつて欲しく、婦人は平静なるを彼の瀞八町の水の如くならんことを望むのは皆世人の首肯する處であらうと思ふ。

婦人は平静だといふばかりでも濁つて居ては困るし又潦水の如く浅くても困る澄んで深く其上に静であつて欲しい（Shallow-Waturmakes a noise）といふ俚諺がある、浅い水は喧しいといふのである、我邦のみならず。婦人の多くは此諺に該當するの性を有して居る、其性を矯むるには詩想を養ふやうにするのが第一であらう、夫れには和歌でも好い、然し理屈は如何か知らぬが、和歌は餘り好結果を齎さぬやうである、静に過ぎると不活潑に成る餘り悲觀的になる。俳句は其様な弊が無いのみか俳句に於ける詩境に和歌よりもズント廣く拘束といふものは至つて少い。夫れ故俳句の上から婦人詩想を養ふやうにしたならば非常な好結果を奏するであらうと信ずる、順次俳の婦人教育に必要なものであるといふ事を述べ立てゝ見やう。

（二）文章と俳句

女は兎角一寸手紙を書かせても廻りくどい多字を並べる一つ事を幾度も重れて繰返へすといふやうな弊があつて往々全体の意味が那邊に在るのやら少しも判断されぬので閉口させられるとも少く無い結局女に簡潔にして達意の文字を望むのは不可能な注文と見てもよい位である簡潔にして達意の文を學ぶには俳句の稽古をするに勝つたものは無い、

我國で最も簡短で想調共に面白く纏めた文を求めたならば俳句に過ぎたものは無い俳句は僅五七五の十七字を以て組立てられる處のもので其内に文章としての主賓の格も明に掛り結びも整然とあるのである夫れも平の文字ならば左程困難であるもあるまいが、是れで詩ある丈けに而も面白く言ひ顯はすやうにする千萬言にして言ひ盡されぬ程の想を十七字に顯はすといふのが俳句の上の働きで換言すれば俳句の詩といふやうな意味も持つて居るのである、作つて見た人は皆誰れも合點の事であらうか言ひ盡されぬ意を十七字にコンデンスしやうとするのであるから、大抵の骨の折れるでは無い和歌に於ける足曳の山鳥の尾の尻垂尾のなどゝ優長な事を言ひてはなかなか居らぬのである假名一字の爲めに全体を活したり殺したりするなは作句のには普通の出來事であるのだ彼の俳文と稱する一種の氣の利いた面白い文章が生れて來たのも俳人苦心の餘緒で俳

何を學ばぬ者には到底俳句は讀る事が出來ぬと斷てよい。

婦女に俳句を學ばせる結果は必ず其文章の上に偉大の功を顯はして簡潔明亮なる文を見る事が出來るやうになる此一事でも充分であるの に智育上の効能を述べるとも。

(三)俳句より得べき常識

婦人の教育の主眼とする處は何であるかといふに自分は常識を養ふに在りと斷言して決して誤つて居らぬと思ふ、婦人と常識之れ最も肝要なる問題にして常識に富める婦人則ち賢婦たるに相違無いのである。

原來婦人の性は偏し易いものであつて家庭の圓滿を害ふのも原因は多く此點に在るなと認められる、普通の婦人であつて俳句の心掛が無い人で俳諧歳時記の一冊丈けでも物を知つて居る婦人がありとしたならば必ず女としての大學者である 大抵は 雛も祭る 七夕も祭が、何故祭るのか其理由(わけ)を知らぬ世間で祭るから祭る家例だから祭るといふに過ぎないやうである香散見草が梅であるやう匂ひ鳥が鶯やら御祓が何月で 西行忌が春か秋かも御存じ無いと思ふ。

然るに俳句を學べば自然天時から禽獸虫魚草木飲食神佛の祭禮故事何でも一通りの智識は小百科全書ともいふべき歳時記から學び得るのである俳句は嫌ひだとしても婦人には此歳時記丈けは知せて置く必要がある夫れが世に立つて交際するにも家庭を整理する上にも何れ程役に立つか門外漢の一寸氣のつかぬ處であらふと思ふ夫れから今一つ道念を保つ上に就いて一言して置きたい。

(四)娯樂と道義心

婦人に道義心といへば則ち節操である婦人操を誤つものゝ多いのは實際衣食問題から來るものより娯樂といふ點から來るのが多いやうに思はれる娯樂といふと弊害があるかも知らぬが、慰籍である慰籍は實に婦人の生命ともいふべきのであれば其操を破り、不貞の名を招ぐも其裏心は一に慰籍を求むるに急にして不知不識正邪の道を判別する能力を失ふに依るのである今和歌俳句の如き適當の慰籍を得るの價がある以上、之れを人に求むるといふ事はありとしても極の稀であらう之れは手藝の慰籍なざゝは自ら誤つて居るも區であるし和歌俳句等に遊ぶ時は又自ら一種の人生觀といふものが生じて來る、則ち自ら大悟さる處がある巧言令色なざに心を猥りに動かすやうな事も尠くなるとは論余である。

(五)交際的娯樂

俳句の娯樂として道念を養ふ上に効力の尠く無い事は前述の如くであるが、交際上又大に喜ぶべき結果を見る事が出來るのである。

今日婦人の交際的娯樂として數ふべきものは實に日限界會ならざる程に過ぎぬ隨つて婦人連の交際といふものが何處迄も井蛙的で、中流以上の

婦人する時に會合する事があつても、其話柄に上るものは芝居の評判俳優の月旦流行品の噂他人の陰で自慢話などいふ種類に過ぎぬのである、若し此等の話柄を取去つたならば彼等は呆然として流石の喋舌も弄するに途なきを見るであらう。

此點に於ては和歌も決して尠くはない至極結構であるが、俳句らしい俳句なる作よりも和歌らしい和歌を作るのは困難な事情が多い、素養からして充分でなければならぬのであるが俳句になると呼吸さへ呑込めば其才氣一つで隨分名句を出來るやうになさる丈けの相違がある、結局(つまり)才氣さへ勝れて居るならば素養と言つてもいろはのいの字の曲げ方を知つて居るといふ丈けで充分俳句を作るの資格を有して居るのであるが、和歌はさうは行かぬ、

其上現今の勢で見ると和歌には自ら門派が分れて居て甲門乙派互に側線の形を爲して、他流試會などいふやうな事を好まぬ之れ交際的娛樂として至極親切なものであり乍ら普く交際場裡に應用する事の出來難い故であると思ふ。

兎に角素養の爲無門派の甲乙を論ぜず多數が樂み得べき俳句が和歌よりも交際的娛樂として適當のもの であるといふ點には何人も駁論の無い事であらふと思ふ

(六)考察力の修養

又婦人が考察力を養ふの上に於て偉大の效力を有するものは俳句の研究であらふ物の調和配合といふのは、殊に婦人の養に心得べき大分の事であるが俳句研究の上に於て此二つは最も緊要の事としてある。

假令ば玆に梅と櫻と柳との三ツがある季に依つて分ては皆春のものであるが梅に調和すべき景物必ずしも櫻柳に調和せぬ櫻に調和するものにして、梅柳に調和せぬ場合も尠くない去れば句を作す上に於て最も大切で最も苦心する點は柳には如何なる景色如何なる物か調和するのであらふかといふ一事である、すると調和するといふ事は或一物と他の一物をも配して其二物の間に新なる趣味を産み出させるといふのに在るので、畫家が繪具のの配色に苦心すると俳人か句の調和に骨を折るのと少しの相違も無い故に婦人にして俳句の上に遊ぶ時は知らず識らず日の事常則ち座敷の粧飾衣類の配色等に迄でも其影響を及ぼして一種高種なる趣に富むやうにもなるし一方には自ら考察力を養ひ隨つて婦人に乏しい決斷を涵ふするやうになる。

此外にも效能を述べると慈悲心を養ふ事だとか頓智に富むやうになるとか數限りも無い、是非婦人には俳句の修殊をして貰いたいものである小にしては趣味ある家屋を造る事が出來大にしては、趣味ある國を造る事が出來やうと信ずるからである。(完)

英語實習

麻生貞子

消息文

(往信の部)

Bancho. Tokyo.
March. 9th 1903.

My dear friend.

I think you are studying very hard now for the coming examination, I am very busy too.

When my examination is over, my elder sister and I are going to spend this spring vacation at Kamakura. Do you not like to go with us? If you can go, then we shall be so happy.

Please let me hear from you soon.

from your loving
friend,
Mitsu. Ito.

番町 東京
三月九日 千九百〇三

私の愛する友人、

私はあなたが只今來らんとする試驗の爲め一生懸命に御勉强なされて居らるゝと存じます、私も又大變いそがしふございます、試驗がすみましたら私の姉と此の春やすみに鎌倉え參いらうと存じます。あなたは私共と御一所にいらつしやいませんか、若し御出で下さるなら、私共は信に幸ひと存じます。どうぞを早く御返事を願ひます。

あなたの愛する
友なる
伊藤ミツ より

(返信の部)

Shiba. Tokyo.
March. 11th 1903.

My dear friend.

Thank you for your kind letter, I am quite busy now for the coming examination. I have asked my parent whether I can go with you to Kamakura or not and I am so glad to tell you, that they said I can go, so please let me know when you start and I will meet you at Shinbashi station.

Yours in haste
Kane, Sato.

芝 東京
三月十一日 千九百〇三

私の愛する友人、

あなたの御深切なる御手紙を有難く謝します、私は來る試驗で隨分いそがしふございます、私は兩親にあなたと御一所に鎌倉え參いられるかとふか聞きましたらうれしひ事には宜しひと申ました其れ故とふかいつお立ちかお知らせくださいい新橋のステーションで御目にかゝりましよう。

とりいそぎて
佐藤カ子

英　和　對　譯

（原文は津田梅子女史校）

Beauty and the Beast.

美女とけもの

There lived long long ago, a rich merchant who had three daughters. The youngest was beautiful and good, and was called Beauty. The two elder ones were ill-tempered, and they hated Beauty because she was prettier than they.

むかし昔、あるお金持の商人がございましたが、之に娘が三人居りました。一番としのしたなのは美しくて性質も良く、名を美ゝ子と申しました。姉にあたる二人は根性わるで、美ゝ子が自分どもよりも奇麗なものですから、それを憎みました。

But the merchant lost his fortune, so he took his family to live in a cottage. The elder girls grumbled, but Beauty set to work cheerfully to make the house comfortable for her father.

ところが、此商人は財産をなくしてしまつて、家族ひき連れて小屋がけのやうな家に住まふ事となりました。姉の娘たちは不平をこぼして居りましたが、美ゝ子ばかりは快く立ち働て、お父さんの爲に家内を愉快にしやうとして居りました。

After a time, the merchant heard that a ship was bringing him home some goods, and he started for the neighboring city. The elder girls were wild with joy. "You must buy for us rich gowns and jewels," said they. But Beauty asked only for a white rose.

それから暫くたつて、商人は、船便で貨物が幾らか自分の所へ來ると云ふ事を聞きましたので、程遠からぬ町へと出掛けました。姉の娘たちは大喜びでキヤキヤ言ふて居ました『きつと善い衣物や寶石を買て來て下さいませよ』とせぶりました。併し美子は唯だ白の薔薇をお土産にと申して居りました。

When the merchant reached the port, he found that the ship had sunk and his goods were lost, so he started for home as poor as before. As he journeyed, a wild storm arose; the wind blew, the snow fell fast, and it grew so dark that he lost his way. He was almost frozen, when he came to a great castle, brilliantly lighted.

He led his horse into a fine stable, and then went into the castle. Here were many large rooms filled with the most beautiful things, but nowhere could he find any-one whom he might ask for food and shelter At last, being tired and hungry, he sat down to a table spread with rich food, and helped himself. That evening he was lulled to sleep by soft music. as he lay in bed in a luxurious room.

Next morning the merchant found at his bedside a handsome suit of clothes, in place of his own shabby ones. He dressed, and looking from the window, was surprised to see, not snow and bare trees as he expected, but a beautiful garden, in which flowers were blooming and birds singing. Then he ate a good breakfast at a table spread with food, and went to find hir horse. On the way to the stable he passed through an avenue of rose-trees, and remembering Beauty's wish, he picked a white rose for her.

(*To be continued*)

その商人は港へ行きましたが、船は沈沒し、貨物は皆なくなつたと聞きました。それで、矢張り前の通りの貧乏の儘で家路をさして出立しました。其途中で、俄に大嵐が起り、風は吹く、雪はドンドン降る、そして暗くなつて來て、遂には此男は途を迷ひました。で、おほかた凍へてしまつた時、ふとガンガンあかりのついたお城へ着きました。

其男は馬を奇麗な廐へ引き込みそれからお城の中へ、はいりました。こゝには廣い室が澤山ございまして、美しいものが一杯ありました。併しどこにも人は居りませず、食事と宿を頼む事も出來ませんでした。しまいには、疲れてお腹が減り、御馳走の列べてある机へ、へたり込みまして、勝手次第に食べました。その晩は、やさしい音樂に心もとけて、立派な室のうちの臥床に横になりますと、其儘いつか眠つてしまいました。

翌朝、臥床の傍を見ますと、美しい衣物が一組ございまして、自分のぼろの衣物のかはりに置てありました。で、身仕度をして窓から外を見ますと、これは又何事でしやう、思ふたやうな雪やら葉のない樹などはなくて、花咲き鳥啾ふといふ美くしい園生でした。そこで商人は、食物のならべてあるテーブルで、うまい朝飯を濟ませ、さて自分の馬を見に參りました。廐へ參ります途中で。薔薇の木の植へてある徑を通りました所が、例の娘の美子が頼みを思ひ出しまして、白い花を一輪つまみ取りました。 (つゞく)

WIT AND HUMOUR. 一口噺

Salesman: Have you seen our new patent noiseless baby-carriages, sir?

Weary-eyed Father: No; a noiseless baby would be more in my line, thank you.

商人: がら々々と音のしない新發明の小供車を、御覽になりましたか。

わぐみ果てたといふ目つきの父親: いや、それよりも、やかましくない小供の方が、私には望ましいのだ。折角だが。

〔註〕親父は小兒の、やかましく泣き騷ぐに困りはてゝ斯く云へるなり、in my line は"己の意にかなふ"といふ義なり。

A: He told me I was the most beautiful woman he had ever met.

B: Don't you feel afraid to trust your whole future to a man who could tell such a barefaced falsehood?

甲女: 私は今迄見たうちで一番の美人だて、そうあのひと(男)は言てゐましたよ。

乙女: まアそんな眞赤な嘘をいふ人に、これから生涯つれ添ふて、あなた氣遣はしいと思ひなさらないの?

Teacher—I was compelled to punish your son. He persisted in swinging on the gates in the vicinity of the school house, after I had repeatedly told him not to.

Parent—Really, I can't see anything terrible in that.

Teacher—It is very annoying to the neighbours.

Parent—Very likely: but I'm a dealer in hinges.

學校敎師: 余儀なく御子息を罰しました。學校の近くの門でブランコをして仕様がないんですもの、して何程いふても可かないんですから。

親: そうですか、そら別にわるい事とも思はれませんが。

敎師: 近所の者にやかましくて困りますもの。

親: 御尤もで。が、私は蝶番の商賣です。

(蝶番が損ねると自分は金儲が出來る)

科學

さくらの話

理學博士　伊藤篤太郎

支那の洛陽と申すところにては、牡丹を花の王と云ひ西蜀にては、海棠を花の王と云ひ、西洋にては、薔薇を國の花としてをります。我日本に於きましては、サクラを花の王とし、百花の代表者としてをりまして、花と云へば、サクラのことを申すのであります。實にサクラは我國の名花でありまして、紀貫之は、此花を賞するの餘り、

さくらよりまさる花なき花なれば

あだし草木の物ならなくに

と詠じました。拾遺集には、

日の本にさけるさくらの花みれば

よその國にもあらじとぞおもふ

と賞讃してをります。また、清少納言は、「繪にかきておとる物」とさへ云はれました。實にサクラは我國の文學上に淺からぬ關係のある花でありまして昔時、允恭天皇のこの花を愛で玉ひて、

花ぐはしさくらのめで、ことめてば、

はやくはめです、我がめづる兒等

の御製あらせられしより以來、いやが上にも名歌出で、在原業平は、

世の中にたえてさくらのなかりせば

春の心はのどけからまし

と述懐し、本居宣長は、

しきしまのやまと心を人とはゞ

あさひに匂ふやまざくらばな

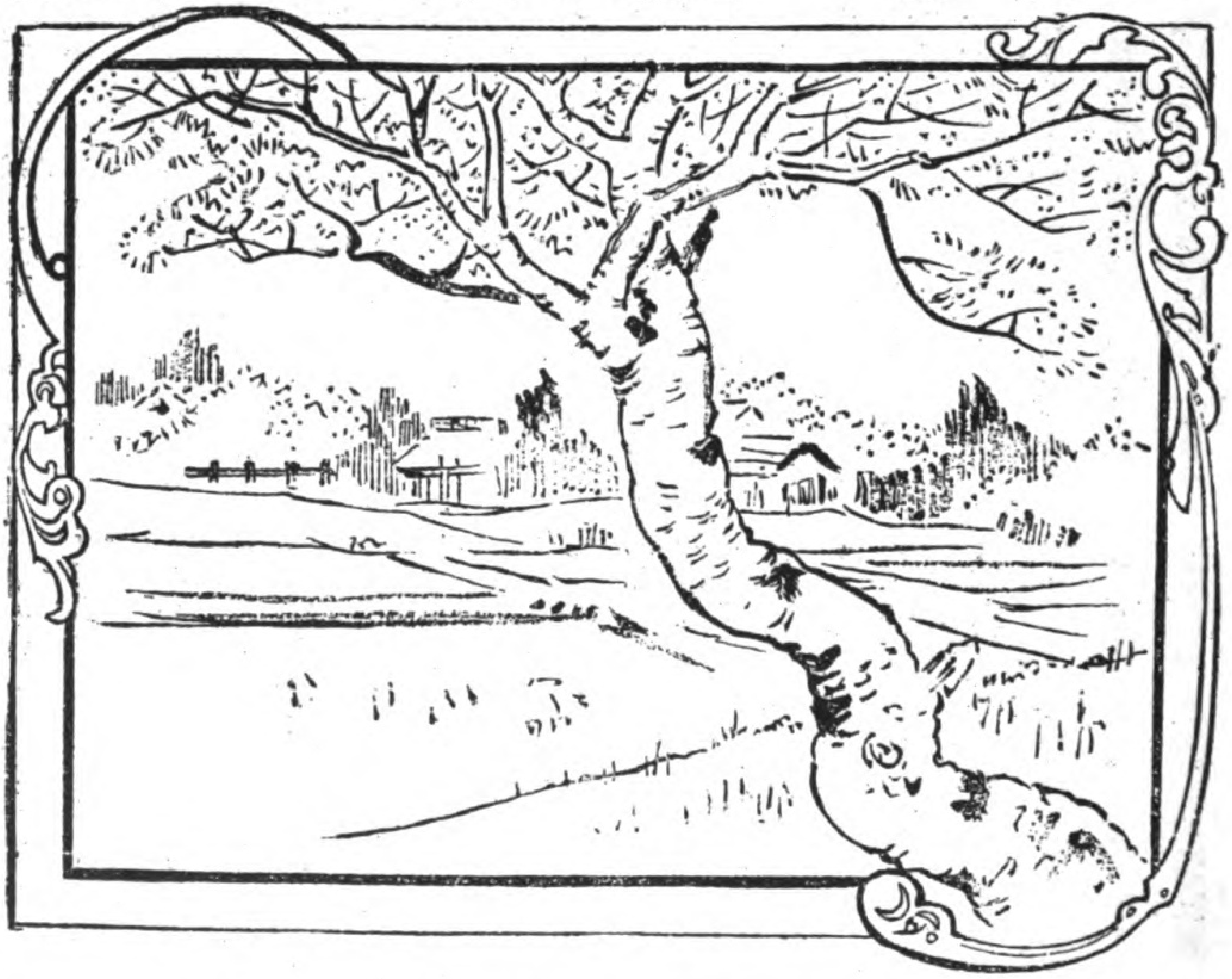
と詠ぜられました。是等の名歌を始め、和歌に、詩に

さては、文に綴りなどとして、文學上、サクラの花を賞讃したることは、實に非常に盛なるものでありまして若し文學上、サクラに關係して居る材料を、廣く古今に渉りまして、有らむ限り蒐集して見ましたならば、實に夥しきものでありませう。更に、美術上よりサクラに關する材料を集めて見ましたならば、これも亦、非常に夥しきものでありませう。例へば、繪畫に、彫刻に、其他、あらゆる美術の材料に、サクラの花を應用したることは、實に莫大なるものであらうかと思はれます。若しまた、園藝上からサクラを論じましたならば、これも中々、一朝一夕には述べ盡すことが出來なからうかと思はれます。其他、種々の方面よりサクラを論ずるも、その材料は何れも豐富でありまして、興味も隨て深からうかと思はれますが、今回、私は植物學上から日本にありまするサクラの種類に就きまして、簡單に述べて見やうかと思ひます。

古來より我國に於きまして、サクラの品類を記載致しましたる文書、圖畫の類は、實に尠からぬのであります。今より二百二十餘年前に出版になりました、水野元勝と申す人の著はしましたる『花壇綱目』には、四十品擧げてあります。それから、寶永七年（即ち今を距る百九十三年前）に出版致しましたる、江戸染井の種樹家伊藤伊兵衛の著はしましたる『地錦抄』と申す小册子卷之三には、四十六品載せてあります。次に今より百九十年前、即ち正德三年に寺島良安の撰みたる『和漢三才圖繪』には、五十四品載せてあります。同じく正德年間に於きまして、有名なる本草家松岡玄達の撰みましたる『櫻品』には、七十二品載せてあります。寶曆七年（即ち今を距ること百四十六年前）に至りまして蘆田純水と申す人、此書を修正增補致しまして、『怡顏齋櫻品』と題し山崎闇齋の著はしたる『櫻辨』を加へて出版したるものゝ中には、六十九品の圖說が載せてあります。また、文政十年、即ち今より七十六年前に、植木屋の金太と申すが著して出版致しましたる『草木奇品家雅見』には、サクラの番附が掲げてありましてこの番附には、凡百五十品の名が載せてあります。其

他、サクラの品類を集めて彩色したる圖書を記載致してゐる寫本類は間世に散見するところであります。

私は數年來、古今の書籍等に記載してありまするサクラの品類を蒐集して、一部の稿本と致し、參考に供して居りますが、この稿本に登錄してある品類の數は凡三百六十餘品となりました。若し今少しく精密に取調べて增補致しましたならば、四百品以上となるでありましやう。さて、此三百六十餘品は、古來種々の場合に於きまして、命名せられたるものでありまして、其



中には、學術上、眞正の種と認定し難きものが大部分を占めて居ります。然らば植物學上より、眞正のサクラの種と認定すべきものは、幾種であつて、また、それは何々であるかと云ふ問題が起るでありましやうがそれは、後に詳細に述べることゝ致しまして、先づ古來より今日に至る迄、世人の一般に唱へ來りつゝあるサクラの諸品種中、著名のものを左に擧げて見ましやう。

桐ヶ谷　一名車返、又八重一重とも申すは、サクラの中では第一等の品でありま

して、一枝の中に、八重と一重とが雑りて咲きます。其中、八重の花は多けれど、一重の花は少ないと申します。此花は、もと、鎌倉桐ヶ谷より出でたるが故にそのまゝ、此花の名として呼んで居ります。又、車返と云ふわけは、曾て後醍醐天皇、住吉神社に行幸あらせ玉ひたるとき、此花餘りに珍らしかりしにより、再び鳳輦を返させ玉ひて、御覧遊ばされたる故事によりて此名をば得たるやと云ひ傳ふれとも、また、一説には二人の男ありて、此花を見て、かへるさに、一人は八重なりと云ひ、一人は一重なりと云ひて言ひ爭ひ、議論決せずして遂に二人、車を返して観たるに、一枝に八重と一重とが雑つて咲きて居たるにより、兩人共、申分たちて、そこで、此花に車返の名を付けたりとも申します。

泰山守君　花の色白くして、葉は緑色であります。むかし、櫻待中納言、この花の散るを早きを惜みて、泰山府君の祭をなせるが故に、斯く名付けたるものであると申します。また、萬葉集にも、この花の盛、七日は過ぎじと見えて居ります。

塩竈櫻　これは、花も葉も紅を帶びて居ります。花のみならず、葉まで(濱で)見ると云ふ心にて、塩竈と名付けたるものであると申してあります。

伊勢櫻　淡紅を帶んで居る八重咲であります。攝津國伊勢寺より出でたりと云ひ傳へてあります。又、一説には、この花、サクラのをはりに近き頃、咲くが故に斯く名付けたるものと申してあります。その心は伊勢はをはり(尾張)に近いからであると申すのであります。

姥櫻　花の咲くこと最も早く、葉無くして花咲くが故に、老ひたる姥の齒なしとの意にて、斯く名付けたりとか。

旗櫻　一名帆掛櫻、花の色白くして、淡紅を帶べる、八重咲の中輪であります。花の内に細き花瓣が二枚、丁度、帆を掛けたるが如く出て居りますから、斯様に名付けたるものであると申します。また、一説には、むかし、八幡太郎源義家が奥州を打ち平げて、凱旋の

際、常州久慈郡端龍村と申すところにて、暫く兵をとゝめしとき、一株のサクラの樹下に旗竿を建てゝ、そのまゝ遺して置きましたるを紀念として、後に彼のサクラの樹を旗櫻と呼び傳へたりと申します。

題詩櫻　美作國行在所の舊跡にあるサクラであります。昔時、兒島高德が詩を題したる木なりと申傳へて有名であります。

熊谷櫻　花は八重咲の小輪であります。花瓣の先が尖つて居りまして、蕾のときはその先が少しく紅を帶んで居ります。滿開後は漸く白色となります。この花は他のサクラに魁けて咲きますので、彼岸櫻よりも早く咲きます。熊谷直實と平山武者所とが、一ノ谷で魁を爭ひたる古事に譬へて、斯く名付けたりと申します。

南殿櫻　又左近櫻とも申します。紫宸殿の南庭にありまして、御階より東の方にあるによりて、世に之を左近櫻と申します。其始めは梅でありましたのを、桓武天皇御遷都のとき、更にこのサクラを植えさせられましたと申傳へてあります。

楊貴妃　八重咲の中輪であります。花瓣は紅でありまして、先が白く御座ります。むかし、興福寺の僧玄宗と申す人の愛したる花なるが故に此名ありと申します。

照君櫻　一重咲の大輪であります。花瓣は廣くして厚く、また、花梗は長く御座ります。楊貴妃よりは色濃くして美しければ、斯く名付けたるものであると申します。

雲珠櫻　雲珠とは、唐鞍をかけるとき、馬の鞍のうしろに附ける飾でありまして、此花の形ちが丁度、これに似て居るところから、斯く名付けたるのであると申します。此花は京都鞍馬山にあります。權中納言安賴卿集に、

　これやこの音にきゝつるうすざくら
　　鞍馬の山に咲けるなるべし

普賢象　千瓣咲でありまして、細き葉に變じたる二本の雌蕋が、丁度、象の鼻の如く突き出でて居ります。鼻と花とは同音でありますから、斯く名付けたもので

あると申します。この花、白くして大なれば、菩薩の乘る白象の鼻に譬へたるものであると申します。

八重櫻　一名名奈櫻、これは、名奈の都の八重櫻であります。花は淡紅色の小輪にして、甚だやさしく、花梗は細くして長く、雌蕊は二本ありまして、一花にして二個の果實を結びます。淸輔袋草紙に上東門院の中宮と申せし御時、伊勢大輔はじめて參る。或人の八重櫻を奉りければ、伊勢が前にさしつかはし玉ひ、檀紙御硯を前に置き、同じくさしつかはし玉ふ。時に人々目を付けていかゞ申すと見あへるに、とばかりありて、硯ひきよせて、墨をとり、靜におしすり、歌をかきて之を進む。御堂殿とりて御覽ずるに、きよげにかきたり、

　いにしへの奈良の都の八重ざくら
　　けふ九重に匂ひぬるかな

殿を始め各々當意即妙なると萬人感歎し、宮中鼓動すと。斯樣に記してあるのは、此花のことであります。

九重櫻　花形桐ヶ谷に似て、花瓣多ければ、九重と申してあります。

秋色櫻　上野公園淸水堂の傍らにあるのがそれであります。秋色と申す少女が、一年、花の頃、その樹下で

　井戸ばたのさくらあぶなし酒の醉

と云へる秀句を讀みましてより以來、少女の名を彼のサクラに付けたるものであると申してあります。此花はもと楊貴妃であると申すことであります。

二度櫻　二段咲の花でありまして、一度開花の後、その中心から再び蕾を出して花が咲きます。隨て開花の日數も長いと申します。

アサギザクラ　が名ウコンザクラ、花の色は黃褐、又は黃綠でありまして、一重のものも、千瓣のものもあります。綠葉に花が雜つて咲きます。

ウスズミザクラ　花は一重にして小く、色白し。單瓣にして瓣細し。莖葉共に靑くして薄墨の如しと申してあります。

墨染櫻　藤原基經が死去の後、深草の山に葬りたるに上野峯雄といへる人、悲みて詠める歌、

深草の野邊のさくらし心あらば
今年ばかりは墨染にさけ
深草に墨染櫻あるは、此時より始まると申してあります。

不斷櫻　一重咲の白花であります。四時、花が咲きて斷えぬが故に名ありと申してあります。

遲櫻　桐ヶ谷の八重咲で、花形稍小く、また紅色を帶びて居ります他のサクラに遲れて咲くが故に歌にも「青葉隱れの遲櫻」と詠んであります。

香櫻　花は千瓣で紅色を帶びて居りまして、香氣が至て高く御在ります。

其他、兒櫻、殿櫻、芝山櫻、逆手櫻、帆立櫻、駒繋櫻、小櫻、一文字櫻、江戸櫻、法輪寺、江戸法輪寺、櫻間櫻、海棠櫻、千本櫻、爪紅、毬櫻、糸括櫻、有明櫻、大提灯櫻、小提灯櫻、五所櫻、虎尾櫻、異櫻、外山櫻、曉櫻、瞿麥櫻、鳳來寺櫻、名島櫻、大膳櫻地主櫻、時雨櫻、右衛門櫻、靜櫻、下馬櫻、西行櫻、辨慶櫻、大石櫻、月夜見櫻、規櫻、狩場櫻、赤芽櫻、拾櫻、白妙櫻、醍醐櫻、芝山櫻等、實に枚擧に遑がありませむ。



以上は、何れも有名なるサクラの品類でありますが、世人は是等を皆、サクラの種類でありと申して居ります。さて、是等の所謂種類なるものは、如何なる點を標準として名付けたるものであらうかと云ふに、花形の大小とか、花瓣の單

後とかでなければ、花色の濃淡であるとか、花時の遅速などを標準としたるものでありまして、或は又、歴史的因緣によるとか、或は場所とか、或は歌を詠んだとか、詩を吟じたとか申す度毎に、一々新たに名を付けたり、甚だしきは、何々と名を付けたるその心は、斯樣であると、丁度、落語でもするつもりで、新に名を付けたと云ふ樣なる滑稽的のものさへ、尠からぬのでありまして、こんな風で、サクラに色々の名を勝手に付けたものでありますから、前に述べましたるが如く、サクラの品類なるものは、今日では既に三百六十餘品もありまして、實に夥しきものでありますが、その大多數はわけもなく、無暗に名を付けたるものでありまして、サクラの種類を蒐集して比較研究の上、區別を明かにし、而して後、名稱を定めると云ふ樣なることは、從來致さなかつたのであらうかと思はれます。夫故、純粹なる學術上の研究に基きまして、植物學上より、サクラの種類を分類して見ますれば、今日、我邦にありまする、サクラの眞正の種と申すものは、通常世人のサクラとは全く別物として、サクラの種類とは思ふて居らざる、ニハウメ、ユスラウメの如き植物學上から、サクラの種類であると認定すべきもの迄、悉皆、込めましても、私の研究致しましたる結果によりますれば、僅かに十三種に過ぎないのであります。又、この十三種を總括して、之をサクラ區と申します。サクラ區とは、之を東京市に譬へて見ますれば、先づ日本橋と云ふた樣なるものでありまして、其外、之に近きスモヽ區、ウメ區、モヽ區、ウハミヅザクラ區、バクチノキ區のありますのは、丁度、日本橋區の附近に、神田區、京橋區、麹町區、淺草區、本所區、深川區等があると同樣でありまして、また、サクラ、スモヽ、ウメ、モヽ、ウハミヅザクラ、バクチノキの六區が集りてウメ屬をなして居るのは、丁度、日本橋區、京橋區、神田區等の十五區が集りて東京市が出來て居るのと同樣であります。また、サクラ區中の十三種は日本橋區内の大道路とも申すべき、通、南傳馬町、本町、室町、大傳馬町等に匹敵すべきものでありますか

ら、その町名いや、種名を左に擧ぐると致しました。

(第一)ヒメザクラ　假名　Prunus bogonostyla.
臺灣產

(第二)タカサゴザクラ　假名　Prunus formosana.
臺灣產

(第三)ニハウメ　Prunus japonica.
和產なし、支那より傳來せしものならむ

(第四)ユスラウメ　Prunus tomentosa.
和產なし、支那より傳植せしものならむ

(第五)イトザクラ　一名しだれざくら　Prunus pendula.

(第六)ヒガンザクラ　Prunus Miqueliana.

(第七)ミヤマザクラ　一名みれざくら
Prunus nipponica.

(第八)マメザクラ　Prunus incisa.

(第九)ヤマザクラ　Prunus Pseudo-Cerasus.

(第十)ヨシノザクラ　Prunus gedoensis.

(第十一)カンザクラ　一名かんひざくら
Prunus campanvlata.

(第十二)メシロザクラ　一名ちやうじざくら
Prunus Cerasoides.

(第十三)シロザクラ　Prunus Maximowicziana.

右は植物學上からサクラの種類の區別致したるものであリまして、現今普通に東京邊に培養してあるものは、イトザクラ、ヒガンザクラ、ヨシノザクラに入るべきものを除きますれば、其他は大槪ヤマザクラの變種か左もなくば、園藝的變化を致したるものでありまして、例へば、ヤヘザクラなどは、皆、このヤマザクラ中に入るべきものであります。實にサクラの變種品類の夥多にして、殊にその艶美なる花容花色の千變萬化して彌生の春に花の都を裝飾するの狀は、思はず人をして

見渡せば柳さくらをこきまぜて
都ぞ春のにしきなりける

と感歎せしむるところであります。

(完)

人眞似する動物

佐藤禮介

人類は萬物の靈長であつて智力の進度といひ腦の發達といひ他の如何なる動物も及ぶものがない殊に言語の能力は全く人類の特有である、斯樣に人類は特有の諸能力を持つて居る故、從つて人の眞似をする動物が甚だ少ない、動作や身振の眞似をするものは猿類だけであつて言語の眞似をするものは鸚鵡である、今是等の動物について少しくお話をしやうと思ふ

▲身振の眞似者　（猿のはなし）

人の身振りを眞似すると云ふことは大に智力を要することであるから、智力の甚だ發達した動物でなければ之をすることは出來ぬ、猿が人眞似をすることの出來るのはつまり智力の優れて居ることを證するものである、併し人類にも文明人と野蠻人とがある樣に猿類にも智力の優れて居るものと劣等なるものとの間に甚しい差異がある狒々や大猩々は性質荒々しくて決して人に馴れない只人に馴れ人眞似をするのは先づ獼猴と猩々位である

獼猴は我が國で芝居をなさしむる猿であつて人眞似をすることが最も上手である、此の猿は日本ばかりでなく印度、マレイ諸島や支那の南方などにも棲んで居るもので身の丈は殆ど二尺位ある、毛皮は灰色で少しく茶色を帶びて居る、顏面には毛が少しもなく皺が多くて色は極めて赤くある、頰と顎との間には頰嚢といふ一種の袋があつて其の處に果物や他の食物などを匿して置くことが出來る、臀部には臀胝といふものがある是れは毛のない、皮の堅い部分であつて据はる時に地面に接く處である

身體の構造が能く人類に似て居るからして今より二千年前に羅馬の名醫ガレンといふ人が人體解剖書と云ふ書を著はしたのは、全く獼猴の人體に基づいたものであるさうだ、是れ西洋では大古から紀元千三百年頃まで人體の解剖を嚴禁して居つたからである。

此の猴は群居を好む性質であつて常に百疋も二百疋も群集して生活する、平常は山林の中に棲んで居つて果物などを食物として居る。而して樹の枝を渡り行くことは極めて敏捷であつて此處に居たかと思へば暫時の間に遠く逃げ失せる位であるから容易に生捕ることは出來ない、叫び聲は鋭くて一種の物凄い調子である。支那の南方及び印度などで此の猴の多い處では橙樹無花果樹などの果園や甜爪番茄などの野菜畑の荒されることが屢である斯樣に園や畑に入り込んで果物類を盜む時には極めて用心深いものである即ち多くの猴どもは其の墻垣の處から園の中の最も良き果實のある處まで一列となつて並ぶのである、そこで列の最先に居る猴は大急ぎで果物をもぎ取り、之を次の猴に渡し次の猴は又之を第三の猴に渡し次第に一列の猴の手を經て速かに澤山の果實を垣根の外の安全な處まで持ち出し其處でゆる〳〵と甘い果物を澤山飽食するのである、斯樣な場合には二三疋の猴は垣根の上や近所の高い木の上に登つて四方を眺め番兵の役目をするのである、若し農夫や獵師が近寄つて來る樣な徵候が見えればギャッ〳〵と叫び聲を出すのである。さうすると全體の猴は列を亂して蜘蛛の子を散らすが如く吾先きさえと一瞬間に逃げ去るのである



獮猴を捕へて芝居を敎ふるには出來る丈け幼少なるものを捕ねばならぬ若し年老ひたるものであれば性質狡

猾となつて到底叢を救へ込むことが出來ぬ

次に猩々のことをお話しやう、猩々は東印度諸島の内マストラ、及びボルネヲなどに居り重に濕地に繁茂せる晝猶暗き樣な深林に棲息する體毛は粗く長くて赤茶色である、顏面は鉛色で毛がなく裸出して居つて顎の下には鬚の樣な長い毛の總がある、頸は甚だ短くて其の胸に續ける處に一つの嚢がある此の嚢は喉頭に續いて居つて之に空氣を充てれば膨脹して其の叫聲を高く響かしめる効がある、身の丈け四尺餘であつて臀疣や頰嚢は持たぬ後足は短いけれども前足は長くて之を垂るれば地面に達する其れ故に立ちて歩む時は腰を屈め時々に前足を地面につけ丁度人が杖を使用する樣にし體を左右に振りながら進む、此の猴は重に果實を以て食物として居るけれども鳥の卵、昆蟲、蛙の類をも好んで食する、

木に攀ぢ登ることや枝渡りをすることは甚だ巧みであつて馬の走るにも劣らぬ程の速さである、筋力は非常に強く獵師之を捕へやうとする時は怒つて其の銃身を捩ぢ折ることがある、其の生活力も至て強く、たとひ傷創を受け死に瀕する時になつても之に近寄れば突然躍り上りて抗敵することがある嘗て博士タラーク氏がスマトラ島の北西海岸を旅行した時猩々を捕へた事を書いて居るのを見るに其の時博士等の一行は樹の上に居た猩々に向て數發射擊した猩々は五發の銃丸を受けながら猶樹の枝を握つて落ち來らぬ然るに火藥盡きて最早射擊することが出來なくなつたからタラーク氏は從者に命じて樹を切り倒さしめたが、樹の倒れかゝるや否や猩々は急に一躍して他の樹の枝に跳び移つたそこで又止むを得ず又其の樹を切り倒してやう〳〵之を地上に落したが猩々は死に近づいた有樣でありながら再び起き上つて從者を突き出して槍の柄を握り之を折り碎いたまゝ既に力盡きたものと見え直に斃れたといふことである、其の瀕死の際まで猛力を表はすは實に驚くべきことである、斯樣に大なる力と勇氣とを有して居るものであるから老成した猩々を生きながら捕へることは殆んと出來ぬのである、けれども其の幼稚な

ものを捕へれば容易に人に懐き種々な技藝を教へることが出來る。

▲聲の眞似者（鸚鵡のはなし）

鸚鵡は熱帶の地方に產するものであつて其の種類甚だ多い併し人の聲の眞似をすることの最も上手であるのは灰色鸚鵡である今は此の鸚鵡について重にお話をしやう

嘴は大きく强くて上の嘴は烈しく下の方に曲つて居る、舌は厚く多肉で動かすことが自由であるのみでなく諸鳥の中獨り鸚鵡ばかりが味感を有するものである、脚の趾は四本あつて二本は前に向ひ二本は後に向つて居るから樹に上ることは甚だ上手である併し飛び翔けることは餘り巧みでない、是れ鸚鵡は非常に繁つたる森林の中にばかり棲息して居るもので只枝から枝に渡り行くのみで飛ぶことが餘り必要でないから飛ぶ力が發達しないのである、



鸚鵡は多少群居をなすものであつて森林の中にて喧しく鳴く時は遠方に於て其の反響を聞くことが出來る程である、繁殖の時期になれば群居から離れて雌雄一對が相助けて子を育てる、雌は卵を樹の洞穴又岩窟などに生む、雛は生れた時には全く裸かで少しも羽毛がなく三ヶ月を經ればやう〳〵全身が羽毛で被はれる樣になる親鳥は雛を育てるのに甚だ親切であつて若し他の動物が其の巣に近づけば怒りて之に抗敵し之を追ひ退けるのである、

鸚鵡は重に果實を食とするものであつて原産地では棕櫚、椰子などの果實を食とする、果物を食する時は一足で枝上に止り他の一足で果物を握り之を嘴に持ち運んで之を啄むのである、人に飼はれゝば全く雜食となる、即ち主として麻、玉蜀黍の種子、槲の果實などで飼はれるけれども其の他麵麭も食へば生な獸肉や料理した肉類をも食べる特に骨の付いて居る肉を與へれば之を突きながら食べることを甚だ好んで居る、砂糖も亦此の鳥の大好物である、苦扁桃とおらんだせりとは此の鳥に甚だ有毒であつて之を與へれば往々死に至らしむることがある屢水を呑み、且つ水に浴することを好む夏には水に入りて羽撃をすることを非常に嗜んで居る若し弱き酒を與へて飮ませる時は人類の樣に酩酊の有樣となり擧動が活潑不規則となつて且つ甚だ多辯となる、

鸚鵡は極めて饒舌で喧しいものだにも拘らず人に愛されるのは物眞似することが甚だ上手だからである、偶然に聞いた他の動物の聲でも種々なる樂器の響でも又教へられた短語の談話でも驚くべき程上手に眞似するものである、或る硝子商店に飼つて置いた鸚鵡は自分で誤つて器物を毀はした時は何時でも自ら「トンマナ鳥ジャ、何時デモ惡ロイ事バカリ爲ル」と叫んだ是れ自分が常に番頭から叱られる言葉を覺え居つて器物を毀せば何時でも左樣な言葉を云ふものであると思つたのであらう、

佛蘭西の動物學者バッフオン氏の話した處によるに西部亞非利加から船で歐洲に送られた一疋の鸚鵡は船中

で一人の年老ひたる水夫に養はれてゐつたが常に其の老水夫の粗野なる音調と咳とを聞き覺えたものと見え其の後此の鸚鵡は年若き人の手に渡されて種々の新しい言葉を敎へられたにも拘はらず時々前の老水夫の野粗な音調と咳とを繰り返すことを止めなかつたといふ、

注意して飼へば鸚鵡は甚だ長命を保つものである、レヴアイラント氏の話に據るに或る鸚鵡は九十三歲に達したものがゐつた併し六十歲からはだん〳〵記憶力が衰へ始め六十五歲になつてからは記憶力が甚だ不正確となり尾の羽毛は若き時は深紅色のものであつたが此の歲になつてだん〳〵黃色に變じた九十歲になつた處で極めて老耄した動物となつた此の時には殆んど盲目となり音聲も發し得ない樣になつて斃れたといふことである。

（そはり）

歷史を學ぶ心得

若溪女史

歷史は我々人類が進步發達して來たところの事蹟を知る一ッの學問でありますから、これは男女に限らず、よく學ばねばならぬもので、殊に婦人は家を修め、子を育つるの責任を持つものでありますから、人間の進步、社會の變遷。國家の興亡盛衰をした譯柄をくわしく承知して居らなければなりません。それ故いづれの女學校でもこの歷史は重なる科目として敎へて居りますが、他に普通の學問として學ばねばならぬ科目も多いために、歷史のみに專務にかゝつてゐる譯に行かない處から自然とその學び方が等閑になッて參ります、然るに、歷史は、幾千年といふ長い間の事柄を記した學問でありますから、歷代の興亡、革命やら戰爭やら、人物の出現した跡などが、雜然として、宛から大海に波濤の起伏してゐるやうに見へまして、初學のものは動もすれば中途で迷ふ事が多いのであります、一たび

迷ふと年代を取違へたり、時世の關係を誤ッたりして折角の學問を滅茶々々にして仕舞ひますから、何でもそれを學ぶには、抑もからの關係を正して、大體の要領を得て置くのが肝腎であります、それには一定の秩科書といふものがあッて、長い年代の間にそれ〴〵時世の區別を立てゝ誰れにもよく腹に入るやうに説いてありますけれども、あまり書物をたよりにする處ろからして讀む時だけは僅かに覺へて居りますが、一朝書物に離れると、遂に又茫然となッて仕舞ふのが多いのであります、それ故是を學んで要領を得るには、どうしても自分から一ッの法則を作り出して、歷史全體をその法則に當てはめて覺へて行くのが一番の近道であります尤も自分でこの法則を立つるは多少の弊害もありませうけれども、初めて物を學ぶには是非ともこの法則に依らなければ、手早やく物を合點する事が出來ません、そこで大体の事柄だけを自分の記臆に留めて仕舞へば、後にどんな、錯雜した事柄に出逢ひましても、それから先は皆その記臆の範圍に這入ッて仕舞ひますから、決して途中で踏み迷ふて難義をするやうな事はありません。即ち歷史の大体を自分の腦髓の帳面にチヤンと附け留めて置くのですから、後日に及んで譬へ何程、こみ入ッた事柄に出會しても、その帳面をくりかへして見れば、どんな事柄でも皆なその帳面の中へ秩序正しく這入ッて仕舞ふのであります。尤もこの法則を立てるのは單に歷史を學ぶ上ばかりでなく、地理を學ぶにも又必要でありますが、歷史は地理に比較して興味の多いだけに又錯雜した關係が多いから、是非とも法則を立てんければなりません。そこでわたくしは今この法則を立つる事に就て少しく述ませう、法則の案はわたくしの立てましたものなれど、これを實地に應用なさるのは皆様が銘々の御工風でありますから、その遣り方はどうでもよろしいのであります。

第一年代の區別を立つる事

歷史には日本歷史を始めとして西洋歷史、東洋歷史なとの種類がありますが、いづれの歷史に於てもまづて

の年代の區別といふものを立てなければなりません。即ち、太古、上古、中古、近古、近世といふやうな別ちですこれは歴史を學ぶの第一着で、たとへば家を建つるに地ならし、畑を作るに畝ごしらへ繪をかくのに輪郭を取るのと同じ事で大体の法則です。假りに今之を日本の歴史に應用して見ると、神代の世が太古で、天の御中主神から天照太神の世を歴て、神武天皇以前まで俗に神代の時世をいふのであります、

次は上古時代といふので、神武天皇即位から天智天皇以前まで、大むかしの世の中を一とまとめに見做したらばよからう。

その次は中古時代、天智天皇以後奈良朝、平安朝、時代を歴て源平盛衰の時代までを一とまとめに見做して嘗日本中古の時代と定むるのであります。

その次は、近古時代これは頼朝公の覇業に始まつて戰國の終りに至るまで、鎌倉の北條氏執權より南北朝の合戰、足利十三代の世を經て織田、豊臣の世に至るまでとする。

その次は即ち近世で、徳川家康の幕府創業に始まつて明治維新までとするのであります。

こういふ按排に一とつゞきの歴史に區別を立てゝ考へると錯雜した事柄もハッキリとして勉強するのに大變都合がよく、まづ年代の前後上下が判然として物わかりがよく、たとへば人物の上に就て見るに和氣清麿は中古の時代の中ほどに出た人物である、新田義貞は近古の時代の中ほどに見はれた人物である、又事蹟に就ていふと、應仁の戰は近古時代の末の出來事で、八幡太郎義家が前九年の戰は中古時代の末の出來事であるといふ事を記臆するのであります、こうして年代の前後を判然と、わが腦髓の帳面に記載して置く時には、後日如何なる歴史上の出來事、いかなる歴史上の人物に遭遇ましても、この事柄は何の時代、この人は何時頃の人物といふ事が、自然と自分の思考力に解釋がされてまいるのであります、それは丁度曇つた鏡を磨きたてゝ自分の顔を映したやうで目鼻があざやかに見へて來る、これは歴史を學ぶに尤も簡便な法則、又尤も徑

捷な覺え方であります。
勿論この區別は自然と時世の段落によつて別たれたもので、殊更人爲で以て別けたものではありませんから、この段落をよく腹の中に呑み込んで置けば、自然と社會の變遷、發達の跡までもよく合點されて來るのである。

尤も太古、中古といふやうな區別ではあまり漠然として、記臆上不利益とおもへば、更に別な方法によるのも妨げはないのです即ち二千五百年の歷史に第一期、第二期、第三期といふやうな小別をして時勢の變遷に判別を立てるのです、たとへば

第一期　國民興起の時代（上代）
神武天皇より、雄畧天皇の朝に至る約一千年

第二期　佛法傳來の時代
推古天皇の朝を中心として前後約一百年。

第三期　唐朝摸倣の時代（近江朝廷、奈良朝）
孝德天皇大化の改新より奈良朝を經て桓武天皇朝に至る。

第四期　藤原氏攝關の時代（平安朝）
文德天皇朝より鳥羽天皇朝に至る迄藤原氏全盛の時代

第五期　鎌倉武權時代（鎌倉）
源賴朝の覇業より後醍醐天皇の建武中興に至る

第六期　南北朝時代

第七期　室町時代
足利氏の覇業十三世に至る

第八期　戰國時代
足利氏の末世より豐太閤の統一に至る

第九期　德川幕府時代（上以）

第二　時世の變遷を一目瞭然にする事

歷史は丁度一と流れの川のやうなものである。その始めは山から落つる一と筋の小流れであるが、流るゝに從つて幾所の水を集めて次第に川幅を廣め、末は何十間の大河となつて海に入る、その間淀んでは淵となり、旋つては瀨となり。岩を嚙み、岸を擊ち、溪に陞つては急湍激流となり、野に出でゝは、緩流となるやうな

ものぞ、時世にも又急流あれば緩流あり、急湍變じて靜波となり。山と山と重り合ふた隘い間を流るゝ時代もあれば又、廣々とした野原を流るゝ時代もあり。森の中を潜る事もあれば又人家に沿ふて流るゝ事もある。即ち歴史に時代のうつり變りを見るのは河流に淵瀬のあるのも同じ事である。この歴史上の淵と瀬を一目瞭然に合點して置くのが又習學上の必要な件で、上古には上古を通じた時世の特色があり近世には近世に通じた時世の特色がある。更に詳しくいへば奈良朝には奈良朝、平安朝には平安朝、鎌倉時代、室町時代、戰國時代いづれもその時代に通じた歴史上の特色がある。大體に於てこの區別を立てゝ、よくその時世の色彩を自分の腦髓に判然せしめて置かねばならぬ。それから此の時世の特色を區別して置くのみならず、同時に又時世と時世の移り變りの境目をも併せて心づけなければならぬ。即ち封建と郡縣政治との移り變りの境目に當つた大化の革命、王朝と武權との移り變りの境目に當つた革新、幕府倒ふれて王政維新となつた明治の革新、是れは歴史上の大きな結び目であるから、その結び目の處ろを十分に注意して明瞭に心に了解して置かなければならぬ。歴史を學んでも唯のべたらに史上の出來事を記憶してゐるといふ丈けでは何の役にも立たぬ。時世の變遷とか、時代の特色とか、革命とか、變化とかいふ事柄に深く注意をして自分の心に一角の見識を立てゝ置かなければ、百萬冊の書物を讀んでも死學問で一向に價はない。よしや歴代にあらはれた細かい事柄は知らずとも、この歴史上の大眼目さえ腦髓に取り込んで置けば。他の詳しい事柄は後日の見聞によつて自然と補ふて行けるから、格別憂るには足らないが、この肝腎な歴史上の區別がまだ判然としない内に、いろ〳〵な細かい事柄をつめこむと、終にはいろ〳〵と迷ふて仕舞つて何が何やら薩張り譯が分らなくなつて、折角の苦學も骨折損になるのであるから、この區別は第一に立てゝ置かねばならない。

そこで今假りに此區別を立てゝ皆さんの御參考に供しませう。

▲大化の革新――これは上古から中古に移るの際で、孝徳天皇の御代に出來た事今日より殆んど千三百年前、この時の改革は支那唐朝の文明を輸入して天朝の制度を改めたので大体に於てまづ明治維新の改革と稍似たものでありました。そこで始めて日本の國民が日本の政府に依て統治され、中央政府には八省百官が置かれ、租税の分限も定まり、天子の統治權が大層强くなつてまいりました。而してこの制度、この改革は專ら唐朝を摸したものでありました。

扨てその次の變革が、頼朝の覇業でありますが委しい事は後段に於て追々御話しをいたしませう、兎に角、時世の變遷、國家制度の改革といふ處ろには歷史を學ぶもの丶眼目として注意をして置かねばなりません。

第三　歷史上の大事件を記念する事

以上世紀の區分と時代の變遷が十分に判別されたならば、今度は歷史上の重大なる事件を順序正しく年代に隨つて記念する事が肝要である、是又歷史を學ぶの最大捷徑である、例令ば

（一）東夷征伐
（二）三韓征伐
（三）佛法傳來
（四）大化の改新
（五）壬申の亂
（六）天慶の亂
（七）保元平治の亂
（八）承久の役
（九）元寇
（十）元弘の亂（建武中興）
（十一）南北朝の戰（足利氏覇業）
（十二）應仁の亂
（十三）朝鮮征伐
（十四）關ヶ原合戰
（十五）大坂陣

此外歷史上に顯はれたる反逆戰亂の著るしいものは數多あれど、國家の大局に關係した事柄はまづこんなものである。是等の大事變を年代に依つて順序を正し

くを記念して置けば、國運の盛衰時勢の變遷を鑑みるの一材料となるのである。是等大事件を記臆の外に置く時は歷史は無味乾燥なものとなつて仕舞ふのである。

第四　時代の盛衰と覇業の興亡に注意する事

以上歷史上の大事件（反亂）を記したらば更に時代の盛衰、覇業の興亡に注意して見ねばならぬ、さすれば人心の向背も分り命運の消長する處も自から明らかになつて、歷史が我々に與ふる處ろの訓戒の意味も自然に悟る事が出來るのである、一体歷史を學ぶのは何の爲である、唯昔しの事柄を知るのみでない、古人の爲し來た事柄を知つて話しの種にするばかりではいけない。これを知つた上に、更らにこれを今日の世の中の實際に當てはめて考へ、そうして自分の一身上に應用して世間に立つ工風を考へる材料にする丁簡でなければならぬ、我々の祖先がして來た歷史上の事柄は如何であつた。いつの世はどうして榮へ、いつの世はどうして衰へた、何人の覇業は如何にして興り、何人の天下は如何にして亡びたか、大なる國家を小さな一身上に引くらべて考へて見る、例へば藤原氏の天下は如何して興り、如何なる勢力を以て天下に立つてゐたか、源氏の覇業は如何にして興り、どういふ時勢に向つて活動したか、北條氏、足利氏は如何にして天下を取り、如何なる政治を施して末はどうして亡びたか、豐臣氏は如何なる時世に起りどうして天下の主となつたか、德川氏の亡びた原因は何であるか、一口にいへば驕る平家は久しからず、源氏は武力を以て起り、北條氏は仁政を以て九代つゞき、足利氏は武將の人望を以て天下の主となり、その亡びたのは奢侈贅澤の致す處ろであつた、大凡そこれ等歷史上の盛衰興亡の大体を心に會得して仔細に吟味するのは非常に興味のある事で、後世人々のよき訓戒となり、人の常識を養ふ處ろのよい食物である。歷史を學んで唯漫然と事柄を知るばかりでは何の益にも立たぬ、兎角盛衰興亡の跡を吟味して篤と心に悟る處ろがありてこそ、始めて學問した甲斐もあるのである、

第五　人物の出現に注意すべき事

家を起すものも人物なれば、國を亡ぼすものも又人物である、國家に大事蹟を殘し、大功業を立つるものも人物なれば、大戰爭を爲し、大反亂を企つるものも又人物である、されば人物は歷史といふ舞臺に躍る處ろの役者であれば、この人物を除いて歷史といふものはないのであるから、歷史を學ぶには必ず人物の出現に就て十二分の注意を置ねばならぬ。上は神武天皇より下は今上天皇に至るまで歷代百二十六世、二千五百年の間に日本の歷史上に顯はれて出た人物は幾千萬人と數は限りないが、その中に就て歷史上に大關係のある人物、即ち、國家に大功業を立てた人物、大野心を起して大反亂を企てた人物、大戰爭に與かつた人物、國家の盛衰興亡に關係のある人物は、それ〴〵その時代に依て區別し、その時代を見る眼を以て又十分にその時代に出て來た人物を看定めて置ねばならぬ。即ち日本武尊、神功皇后、聖德太子、天智天皇、藤原の鎌足、聖武天皇、光明皇后、吉備眞備、菅原道眞、平將門、紫式部、巨勢金岡、紀貫之、弘法大師、下つては八幡太郎義家、源爲朝、平淸盛、西行法師、源賴朝、木曾義仲、源義經、藤原の定家、北條泰時、日蓮上人、北條時宗、後醍醐天皇、楠正成、足利尊氏、北畠親房、親鸞上人、足利義政、上杉謙信、毛利元就、織田信長、豐臣秀吉、德川家康といふやうな年代の順序で、いづれも歷史上に燦爛たる光輝を放つた處ろの大人物で又惡名を千載に殘した處ろの臣民或は國家に大功業を立て或は大戰爭を起し或は社會人文の進步發達に裨益した處ろの人物であります。

（以下續出）

天然の智識

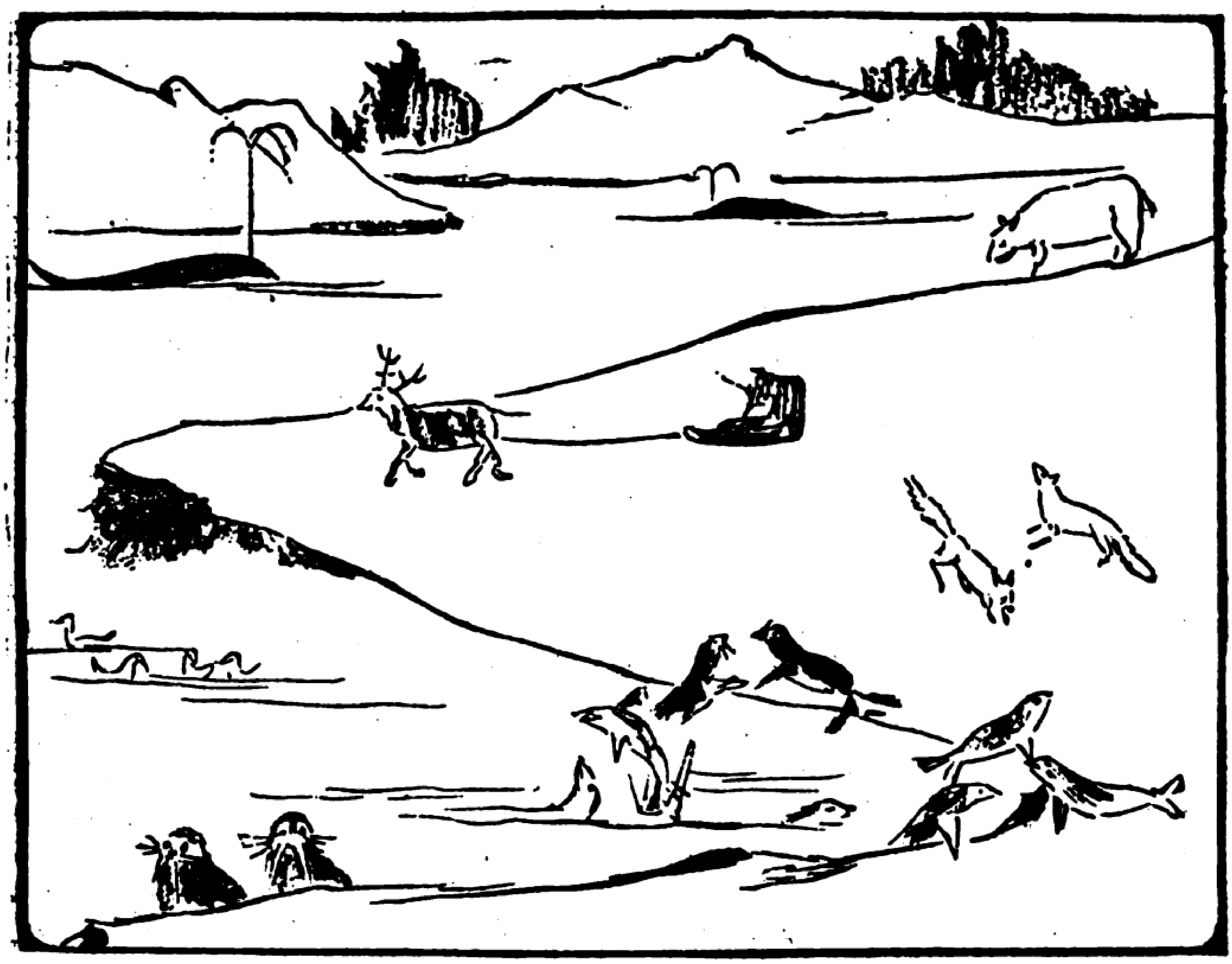
林　壽　祐

太陽鮮かに輝きわたり、萬物靜に、遠近の山岳玲瓏として、河に水流れず海に波起たず、皚々たる白雪は隙間もなく降り積り、寒風肌を劈き、山に綠草なく野に紅花なく、唯見る茫漠たる銀世界、是れ寒帶國の槪景にして、即ち極端に近き地方なり。斯くの如き地方に

も、人類は立派なる部落を爲し安樂に生活せり、夫れ動物は植物及び肉を以て食とし、植物は養料よりは主に熱と水とにより生長す、寒帶國は太陽の光線斜射するにより、溫氣甚だ低く、水は固形体となり、草木の生長に適せず、僅に石茸、地衣類の如く、極めて矮小なる下等植物あるのみ、故に草葉木皮果實を以て、餌食とする獸禽蟲類は生存する能はず、勿論吾人の食料とする穀物、蔬菜の如きは、到底培植するを得ざるなり、然らば穀類なくして尙は人類の生活するとは、甚だ奇なりといはん、否决して奇とするに非らず、此地方の住民は、常に獸類魚肉を以て滋食に充てり、縱令米麥の如き穀類豐饒なるも、寒國人の食料には適合せざるなり、夫れ人の食物を要するには必ず二樣の方面よりす、即ち造成分と發溫分是れなり、凡て人類に限らず、牛馬野獸の如き動物は、運動して筋力を使用すれば、必ず結合して筋肉を成せる細胞を減消するなり、故に食物を用ゐて、再び細胞を造成し、消耗を補ふなり、發溫とは筋肉及体内諸機の運動をして敏活ならしむる要素なり。動物は食物を用ゐ、其中に含める炭水両素を燃燒せしめ、以て溫熱を發生するなり、寒溫中庸を得たる地方にあつては、造成分と發溫分とを等分に食すれば可なり、然れとも寒氣烈しき北國にあつては、勢ひ造成分より發溫分を多く用ゐざるべからず、而して獸類鳥類の体中には窒素質及脂肪多きを以て、鳥獸の肉を食すれば、脂肪は直に發溫分に變じ、窒素質は造成分と化するなり、佳い哉寒帶地方には、鯨、海豹・膃肭獸の如き海獸及數多の鳥類夥しく蕃殖せり、故に食物に於ては毫も差支なきなり、聞く北極人は專ら鯨、海豹の脂肪を以て、永き寒期の飲料となし、体溫を保全せしめ、又油.及骨を燃燒して暖氣を取り、或は燈火に供すといへり。

寒國の人民は動物のみ食とし、生理に適すとするも、牛馬の如き負荷獸生存する能はざるにより、交通及貨物の運搬には、甚だ不便ならん、然り食草獸なく、滊車滊船の通ずべき路なく、甚だ不便なれとも、亦此に代るべきものあり、何ぞや馴鹿及犬是れなり。馴鹿は

寒帶地方に特有なる家畜にして、僅に雪の下にある地衣等を食し、能く生活するを以て、飼養頗る易し。性柔順强力にして、巧に氷雪の上を奔馳す、故に土人は橇を曳かしめ、交通の便とす。犬も亦主人の命令を守り、數頭一列に連なり、橇を曳き縱横に驅け走り、能く勞働せり、是等の獸類を以てすれば、四五十里の道程は一日にして達すべし。且つ是等の獸は唯に交通の機關となるのみならず、肉は滋美なる食となり、乳は飲料となり、



毛皮は衣服、敷物、靴、帽子、夜具となり。其他骨、角、筋等の拾つべきものなし、實に北寒國には、欠くべからざる貴重の獸類なり、彼の羅巴蘭、西伯里亞、加奧察加、樺太の如き寒地にては、盛に畜養せり、即ち北寒國人の資產にして、飼養數の多きものを以て、富者と稱せり。

寒帶國には、棉麻の如き衣服用の植物なく、寒氣を防ぐに甚だ不便ならん。是又食物の如く、縱令綿布絹布麻布あるも、溫暖を保には適合せざるなり。夫れ溫國人といへとも、冬期に至れ

ば織布麻布より、毛布の方身体に適するなり、又柔密なる毛皮は毛布よりも温なり、今此理を擧げんに、爰に四斤の綿あり、一は紡績して織物となし、衣服に製し、一は綿のまゝにて衣服の間に入れ、何れか温なるやといはゞ、勿論後者は前者より温暖なるものとす、故に寒國に植物性の織物なくも、美麗なる獸鳥の毛羽を以て、衣服に製するを以て、毫も困難する事なし。而して獸類は自然暑き時は、體毛を減じ、寒ければ體毛を増すを得る生理上の便あり、故に熱帯の猪豚は裸體の如く體毛薄けれど、北方に至るに随ひ、體毛漸々濃密となれり。又現に印度亞弗利加に産する象は、殆んど裸体なれども、古昔西伯里亞邊に棲める象の一種は、皆長き密毛を覆はれたり。是れ寒を防ぐが爲めなり。温國の獵師は夏季更に獸類を獵らずして專ら冬期に於てす、是れ夏期の毛は薄く、防寒具とならざるに因るなり、斯の如く獸鳥は寒季に際し、己の身を保護せんが爲め、毛羽を増加するの性あるを以て、北方寒國に産する禽獸は何もれ濃厚なる羽毛を覆へり、殊に海獸の如き、水中に潜行するものは、頗る濃密なるものとす、而して北方寒國に比較的水棲の禽獸多きは、住民の爲め、誠に幸福なりといふべし。

又寒帯國の人民は、寒氣烈しきを以て、若し靜止する時は、体内の温熱發散を避けん爲め、皮膚に存在する細孔は閉塞す、随て血液の循環活潑ならず、遂には痲痺するに至らん。然るに是等の國人は鳥獸を獵らん爲め、常に茫漠たる曠野に奔走し、絶えず體温を興奮せしめ、血液の運行盛となり且つ脂肪質を多用せる彼の消化器をして、大に敏活ならしむ利益あり。

夫れ北方寒國には、食するに美味にして脂肪多き、海獸水禽あり、往來するに輕快なる馴鹿、犬あり、着くるに濃密美麗なる毛皮羽皮あり、是を於て寒暖計の水銀も凍りて用を爲ざる程の酷寒地に安堵し、日月の光を仰ぎ、敢て他國に移るを願はす、家族團欒し、樂しく生活せり。是等の住民は概ね倭小なり、是れ氷板を以て築造せる家屋に起居し、多數の衣服を要する地に於ては、却て便益あるものなるべし、寒帯國の住民は

性強壯にして、能く業務に勉勵す、然れとも常に食物の捕獲と寒氣の防禦とに忙はしきを以て、深く脳力を他事に用ゆる能はず、開明の域に進む能はざるは、亦已むを得ざるなり。

太陽赤く輝き、地上の萬物は、炎々たる光線を反射し、熱風むすが如く、殷雷轟き、白電閃きて、氷雪の如きは、夢にだも見る能はざる處あり、之を熱帶國と稱し、亞弗利加・南米、濠洲の如き國々をいふ

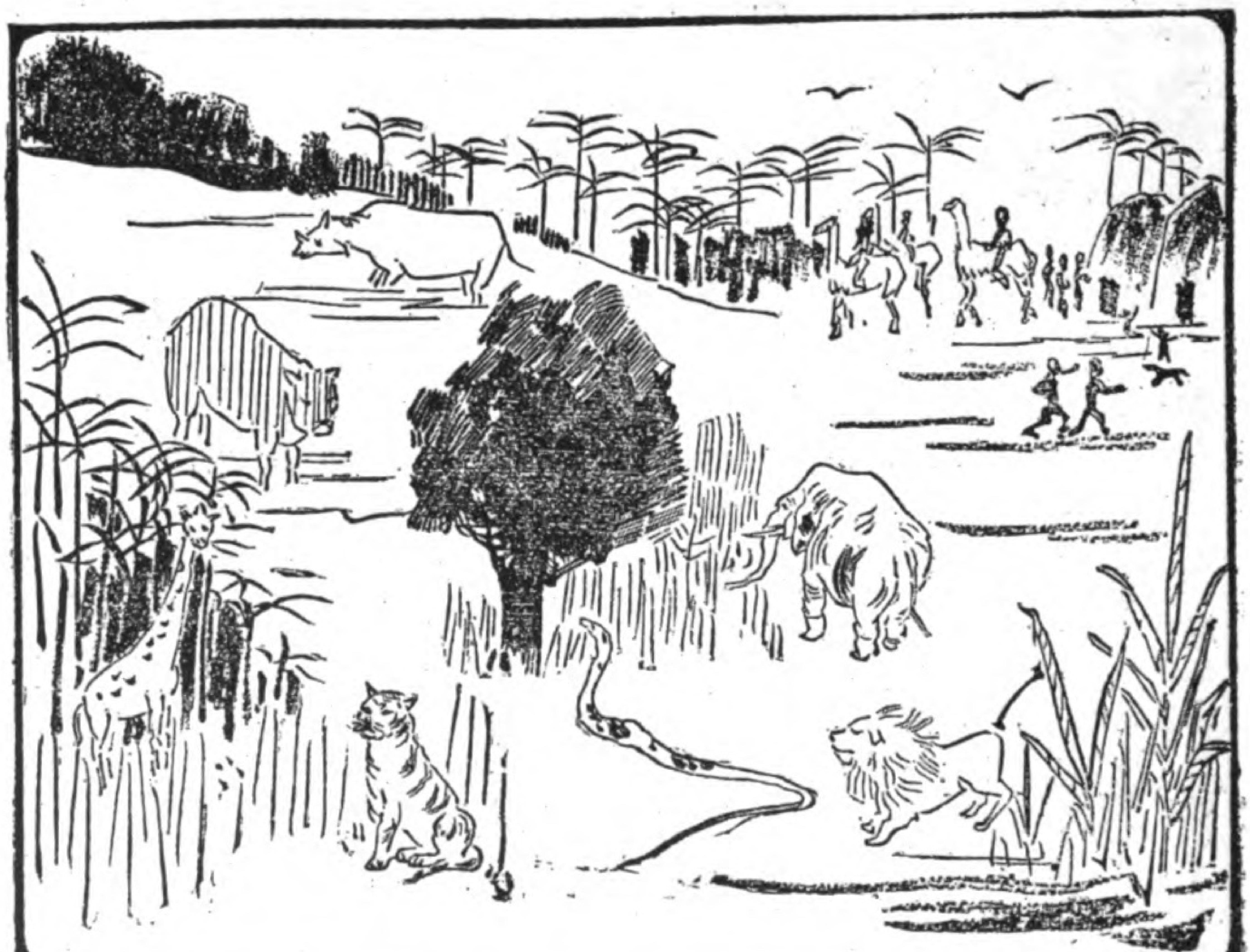
夫れ植物は熱と水とによりて生長す、熱帶國は土壤肥沃にして、草卉樹木繁茂し、椰子、芭蕉、蘭類の如き、頗る巨大なるものあり、仙人掌の如き高さ四丈に達す、隨て多汁なる果物到る所に累々たり。

我國の如き氣候温和なるも、猶夏季に於ては梨、西瓜、葡萄の如き、清涼甘味なる果物は、頗る口に適し、牛豚等の脂肪性食物は、肉臭を嗅ぐだに、不快を感ずるなり、是を以て熱國の人民は、專ら熱氣消散と滋養收得の爲め、多汁清涼なる果實を以て常食に供す、而して呼吸するも、極寒國人の如く酸素の攝入多からずして、燃燒作用に於ては、敢て脂肪質の功能を見ざるなり。又人心は暖氣に於ては、寒氣に於けるより惓惰となり易く、多くは、勤勉力を失ふものなり、然り熱國の人民は勤勉力に乏し、然れとも一歩山野に出づれば、椰子、麵菓樹、橄欖、波羅、西瓜の如き、美なる果物あり、別に勞働せざるも、容易に天產物を獲るの利あるなり。

衣服に就ては、氣候酷熱なるを以て、身体に纏ふの必要なく、概ね裸體にして、晝は樹蔭に横はり、或は河水に浴し、或は泥中に身を埋めて酷熱を防げり。凡そもの困難に際すれば、種々の工夫をめぐらし、事物を發明するは自然の數なりと雖も、熱帶國人は前述の如く、食物及衣服に於て、毫も憂ふる所なし、唯猛獸、毒蛇の危害を防禦するのみなれば、更に智力を出すの要なし、故に今日に至るも依然として、猶は野蠻の境に沈淪するものなり。

以上は野蠻人に就て謂ふ所なれとも、一朝開明人が此地に移住せんか、大麻、亞麻、棉、頗る繁盛するを以

て、夏服を製するに適し、且つ少しく耕作に向ひて、手を下だせば、穀物、蔬菜、胡椒、棗及び多くの果物、或は珈琲、肉桂、鴉片、甘蔗、藍、蘇木の如く、製品に適するものを收獲すべし、又家畜には象、駱駝、水牛の如き有益なるものあり、就中駱駝の如きは、亞細亞、亞弗利加の砂漠地方には欠くべからざる動物なり、太陽赫々として直射し、焼ける砂石は深くして其熱を射り反し、水絶え植物滅せる、數十或は數百里の砂原に於ては、



他の動物は決して奔馳する能はず、然るに柔順にして茫然たる駱駝は、長脚を揮ひつゝ飲まず食はず、孜々として進行す、世に是を乾海の船と稱し、地中海に沿へる、巴爾加、里波的諸國の遠く中部亞弗利利土民と、貨物を貿易し得るは、一に駱駝の効力といはざるを得ず、象及水牛は前後兩印度及び其近島に於て、專ら遊獵及農作に勞働せり。炎々として熱く、勤勉心乏しき人民には、天賦の產物ありて生活に差支なからしむ、然れども住民をして、更に開明に導かしめず、造

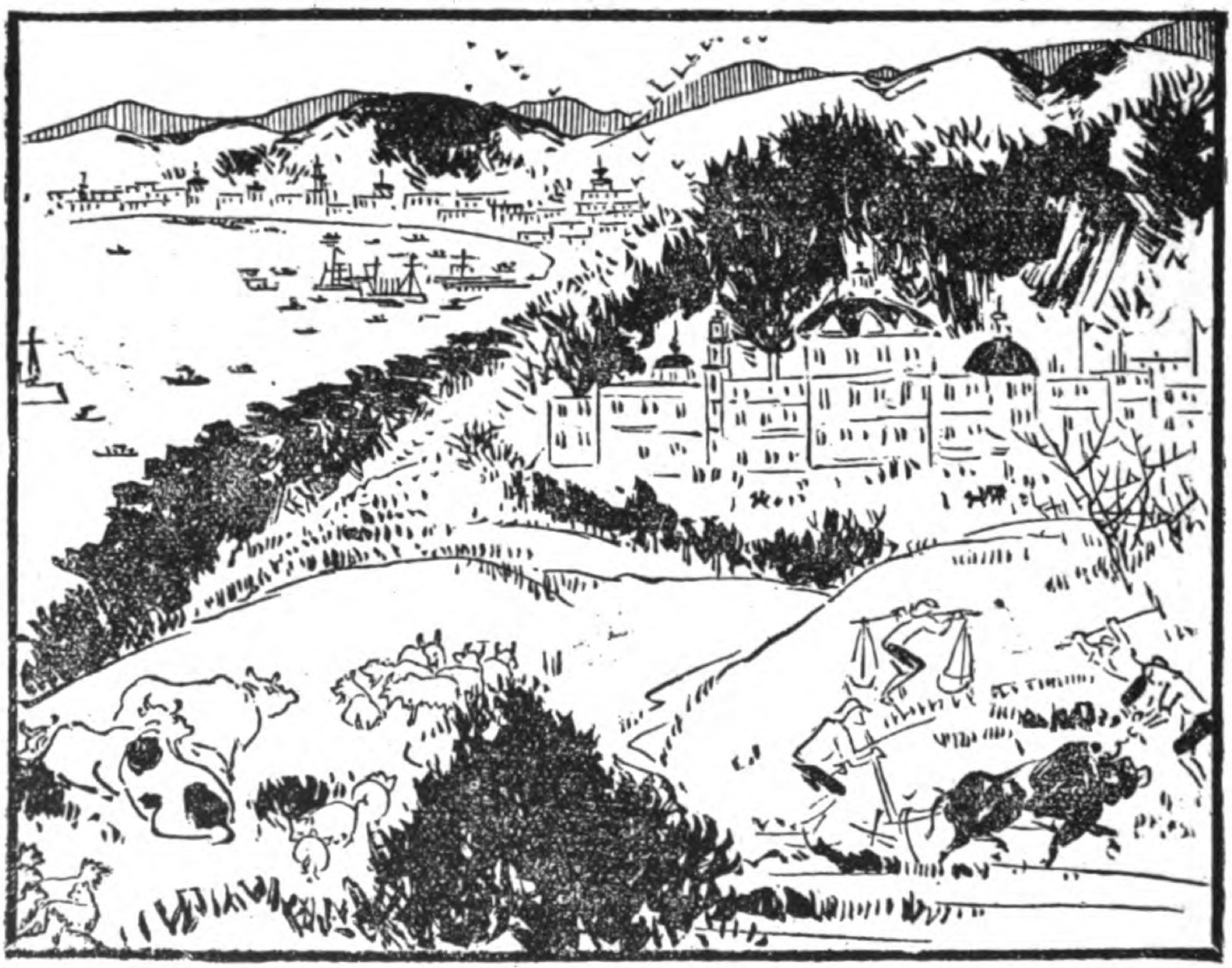
化の意、抑も何處に存在するや。

* * * * *

空氣清淨にして、春夏秋冬の四季に分れ、寒烈ならず、暑酷ならず所謂中庸を得たるもの、之を温帶國と稱す、即ち日本合衆國及び歐洲の國々なり。是等の國は氣候佳良なるを以て、人心自ら爽快となり、体質強壯にして勤勉力に富めり、動物も植物も熱帶國の如く、高大なるもの無けれとも、人間の爲めには、概して有益なる種類多し。亦寒地の動植物も、熱地の動植物も、蕃殖し得るにより、動植物の種類頗る多し。植物には五穀、茶、麻、膠樹、藍、甜菜、馬鈴薯、甘薯の如きものあり。松、杉、桑、檜、欅、樅、檞、楡、山毛欅、黒檀の如きものあり。薔薇菊、海棠、梅、櫻の如きものあり、動物には牛馬の如く温順にして能く勞役に服するものあり。羊、豚、鷄、鵞の如く絨毛多肉のものあり。鹿、兎、猪、雁、鴨、雉、山鷄、鴫、田鷄の如く美味なるものあり。而して是等の動物は、熱寒兩地に產せざるに非らざるも、体質甚だ劣等なり。殊に熱國には斯の如き温和なる動物少く、獅子、虎、豹、蟒、鰐等猛獰なるもの棲息し、人畜を殺害せり。是れ熱國人は餘り智力を要せざる故、造化は土人をして猛獸、毒蛇を防禦せん爲め、種々の工夫を爲さしめ、以て智識を增進せしめんとの意ならんか。

温國人の衣服は、四季氣候の變遷に隨ひ、身体に適する樣製作せざるべからず。此地方には絨毛、綿、絹、麻等の產出多ければ、暖涼何れにも適應せらるべし。食物は熱寒國人と異り、植物性と動物性とを雜食するを以て、身体に適合するものとす。而して温帶國人は自然動植兩性を雜食するの性を有す、例へば鷄或は牛の肉を食する時は葱・菜の如き植物性のものを添ゆるを欲するものなり、又單に米、麥、粟、蕎麥、大根、蓮、菜、馬鈴薯のみ食用し。或は牛豚、猪、鹿、鷄、七面鳥、鯛、鮪、鰹、板魚、鯰鰻、鯰、鯉のみを食用するより、是等の動植を混食する方、遙に美味を感ずるものなり。温國に於ては、少しく勞働せば、動物能く蕃殖し、植物盛に繁茂するものなり。

温國人は熱國の如く、天産物のみに依り生活する能はず、且つ有用なる動植を收獲するには、常に勤勉せざるべからず、勤勉するにも熱國人の如く、倦怠を來さゞるの氣候なり。凡そもの工夫すれば必ず智識を增進するものなり、温國人は裸体にて凌ぎ難きを以て、衣服を工夫し、風雨を防ぐべき家屋を工夫し、善良なる食物を得ん爲めに田畑を耕作し、植物を撰び培養を改良す、夫れ種を蒔き、將に來るべき累々たる果穀を豫想するは、



抑も智識の啓發といふべし、亦耕作に次いでは、日常手にする農具漁具を工夫し、工夫相重れは不知不識の間に於て、他の事物を發見し、遂には文明開化の人間と進歩するなり。

温國人は、工業美術製造に從事すれば、是に使用せらるゝ鑛物にも富み、銅、鐵、錫、鉛の如く、石炭の如きは、其產出遙に他の寒熱兩帶國に勝れり、造化は勤勉なる人民にのみ、殊更に賦與したるやに思はる。

* * * *

噫美なる哉、造化の意匠よ、寒冷甚しく、植物繁殖なき

所の住民には、多脂豊肪なる獸魚と、濃毛密羽なる鳥獸とを産せしめ、以て衣食に不足なからしめ。氣候中和にして、勤勉なる人民には改良せらるべき動植を與へ、其動植を雜食せしめ、有用の鑛物を與へては、工藝を盛ならしめ。熇熱炎々として暑く、怠惰なる住民には口に叶ふ樣、多汁甘味の菓物を與へ滋養と爲さしむ。總て温血動物は羽毛を以て、體面を被抱し、熱帶にあつては粗薄となり、寒帶にあつては濃厚となり、温帶にあつては季節に隨ひ、脱落或は密生し、以て體中の官能を保護せり。人類は頭部の外概ね裸にして皮膚強剛ならず、故に寒暑を防ぐ能はず、然れども智力を用ゆれば、天賦の被服より、却て自在便益なる衣服を製出するを得、是を以てこれを觀れば、人類は被服の上に於ても、決して他動物に劣る所なきなり。（完）

流行の花見衣裳

上野の彼岸櫻ちらほらと咲そめてこゝしばらくは花の世界となりぬ、今流行衣裳の一斑を記せば十七八歳の令嬢向、色合は納紫根、小豆色の類にて上着の地質には風通御召、紋御召、模様は櫻に楓葉、菊の竪桁、牡丹花等を染出し下着は重に友禪染にて紅の入らぬものなど好し又小紋縮緬の少し派出なる型の二枚重れか上着御召の織物袢入にて下着は更紗縮緬を用ひ蹴廻しには縮緬にて花葡萄又は濃き小豆等の色物を用ふる向きも多し、長襦袢は紅色の絞り紋羽二重にて模様は踊り桐、又は櫻の吹寄等或は紅地友禪縮緬の淡泊としたる型等、帯地繻珍の需用最も多し厚板を好む向もあれどそは第二位なり色合は黒地茶地等多く少し派出にすれば葡萄色なるべし模様は茶地に大輪の菊或は四季の花丸を織出たるもの若くは紫根地の唐織にて鳳凰散しの中へ光琳風の四季草花を織出したるもの等なり△二十五六歳の婦人向　この年頃の好みは其人によりて派出なると地味なるとの二様あり今其二三通りを記さんに上着地質は小紋縮緬にて其裾へ模様を白抜きに染出し而して其小紋の型にする方孫模様に相應し配合よしとて好み多し模様は大樹の松に金泥にて蔦を繡ひ付け或は其の蔦を陰陽に染出せるもの又は銀泥入の波を染出したる類も好し下着は同様の小紋にて胴抜仕立なり長襦袢は淡藍鼠の山繭縮緬にて蝶鳥の模様を絞りに染出したるもの又は紋羽二重に友禪の絞り風に染出したるなど總體に地味なるもの流行せり袖裏は從來の如く紅を付けず共裏なり、帯地は繻珍、幽谷織、厚板の類を多く用ふ厚板は茶地に金と白絲にて菊花模様又幽谷織は茶鼠に牡丹唐草に鳥を織出したるもの等なり、晝夜帯は厚板、繻珍、紋博多の類にて其片側は唐繻子、博多等を合せ用ふ但しこの厚板織は市松型にて金銀の散箔に織出し又は木綿にて金入の舊更紗模様のもの黒唐繻子を合せたる等多し又近來吉野御召を晝夜帯地に織成したるものあり拵合は黒格子破格子の如き織物なり



愛の光

(上)

小説

柳川春葉



彼岸櫻が咲初めてから、風も無い日和が四五日續いて、春は益長閑に成つた。毛氈のやうに刈込んだ芝生が生々とした青味を持つて、其間には名も知らぬ春の小草の赤い花が咲いてゐる。

裏庭の切戸口から手を曳き合つて出て來たのは八歳ばかりの、被布を着た女の子と、漸く六歳位な洋服の男の子である。眞丸く肥えて落ちさうな頬のあたりから、目許口つきの誰が見ても笑ひかけずには居られぬ程愛嬌を湛へたまで、寸分違はぬ姉弟である。

「姉さん其樣に疾く歩いちやあ可厭だよ。僕は轉んじまふから。」

弟は右の肱を引張られてフラ〳〵歩きながら言つた。

「亨さんは何故こんなに弱虫なんだらう」

「僕は弱かあ無い。」一生懸命に大跨で歩いたが、それでも躰の中心が取れないので、足が碌に地に着かぬ。

「姉さんが餘り引張るからだよ。」姉は一寸立止まつて、
「だからお前小さな靴をお穿きつていふのに、父樣の靴なんか穿いて來るんだもの。」
如何にも亨は自分の足の三つも入りさうな古靴をガラ〳〵引摺つてゐるのであつた。
「其樣な物を穿いたつて歩けるもんですか。」
「だつて姉さんが疾く來い〳〵つて云ふんだもの、僕は急いで來たんだ。」
「今の俥の音は然うでは無かつたのだねえ、お隣の御門へ入つたのだわ。」
「それでは五郎さんの處へ來たお醫者樣だらう。」と弟は目を丸くする。姉は頷いて、
「乾度然う、違ひ無いよ。今日はお醫者樣が來るつて然う云つたから。」
「五郎さんの病氣は最早可いの？」
「あゝ、直に可くなりましやうつて彼處の小母さんが云つてらしつたよ。」
「疾く直れば可いのにな。五郎さんが病氣が惡くなかつたら今日は乾度僕等と一緒に迎ひに來るよ。姉さん大助さんは何時來るんだらう。」
「三時頃には連れて來るつて父樣が云つてゐらしつたから、今度俥の音がすれば來たに違ひない。」
「ぢやあ御門の外に行つて待つてゐやうか。」
弟は姉の手を振放して驅出さうとする。
「お待ち〳〵。御門から勝手に出ると又呵られますよ。父樣が一緒に歸つてゐらつしやるんだからね。それよりも此處で待つてゐましやう。」と長い袂を前で合せて、芝の上へ徐と腰を下し、
「さあ亨さんも此處へおゐでなさい。」

「ハイ。」と深く返事を爲て亨は兩方の衣兜へ手を突込んだまゝ、バタ〳〵と姉の前へ戻つて來たが、
「大助さんは滊車で來るんだつてねえ。」
「アヽ、遠い處に一人で居るのだもの、彼の滊車に乘つて來ても朝からお正午頃までかゝるんだつてね。」弟は默つて聽いてゐる。
「而して大助さんの居る處つて云ふのは山ばかりの田舍だとさ。」
「何うして其樣な土地に居るんだらう。」
「だつて大助さんのお父樣も、それから母樣も死んでお了ひなすつたのだもの、何とかいふ家に居るんだとさ。だけとも大助さんのお母さんは家の父樣の御兄弟だもんだから、家の母さんが他所へ遣つて置くよりか、家へ連れて來れば大變に可いからつて、それで今度父樣が態々呼びにゐらしつたのだとさ。」姉は流石に種々の事を知つてゐて、親切に說明する。
「然うかい。ぢやあ是から大助さんは家の子に成るの？」
「然うよ。」
「姉さんは其子を知つてるんですか。」
「大助さんかい――否知つてゐるものですか、遠い處に居て一度も東京へ來た事は無いのだもの。けれどもねえ、父樣の御兄弟の子だからお前達にも兄弟と同じだつて母樣が仰有つてよ。」
「ぢやあ幾歲なのだらう。」
「年は知らない。」
「僕より下かねえ。」亨は美しい蝶が飛んで來たので、其方を見上げながら聞いた。

「あら、お前さんよりか年が下ならば赤ン坊だわ。」

「赤ン坊。」と目を丸くして「嘘だ。赤ン坊ならば滊車で來られるものか。」

「だからお前よりかも上だらう。」

「僕は赤ン坊ぢやない。」と不平らしく獨語いたが、急に思ひ出して「では姉さんとは何方が上だらう。」

「其樣な事は最早知らないわ。」姉は然も面倒らしく言ふ處へ、急に頭の上で皷翼の音が爲て、赤と黒の鞍懸の家鳩が二人の前に飛下りた。

「ヤア此奴までお近に來た。」亨は嬉しさうに叫んだが、軈て其方へ近寄ると、鳩も能く馴れて、急に飛上る氣勢も無く、手輕に足の先を歩き廻る。

「赤や〳〵此方へおいでなさい。」

姉が呼ぶと、亨は面白半分に態と其前に立塞がつて、

「赤なんぞは來るな。僕の黒は好い子だな。姉さんの赤より強いな。」

「好ござんすよ、何でも搆はないから赤や此方へおいでなさい。」と姉も立上つて掻分ける、弟は退くまいとする、爭ふ機に二足三足前へ驅出たので、鳩は流石に驚いたか羽音高く飛上つて、裏庭の塒へ一文字に逃げて行つた。

「そら御覧なさい、亨さんがオドカすものだから逐々逃げて行つて了つたわ。」

「僕よりか姉さんが蹴飛したんだよ。」

「お前さんですよ。」

「可いや、其樣なら喧嘩すらわ。」亨は小な肩を聳した。

「アラ又お前は怒るんだもの、喧嘩なんぞ爲るとお母さんに叱られますよ。其からねえ亨さん今度大助さんが來てもね、決して喧嘩なんぞしては可けませんつて母樣が仰有つてよ。」

何も云はずに亨は頷く。

「私達は二人だし。大助さんは一人なんだからね、それにお父樣もお母さんも無いのだから可哀さうなんだつて。」

「僕は……僕は……。」と云ひながら又衣兜へ手を突込んで姉を見上げてゐる。

「ぢやあ仲好く爲ましやうね。」

「アヽ。姉さん大助さんの俥は未だ來ないぢやないか。」

「裏の畑の方へ行つて見て來やう、ね又一緒に行きましやう。」

「鳩の家へ行かう。」

「鳩の家へも行きたし。それからベチの家へも行かう。」

「アヽ。」亨は飛上つて「だけともベチは家に居るかしら。」

「居なかつたら玉の家へ行きましやう。」

「玉の家は無いよ。」

「有りますとも、お竈の上！」

「アヽ然うだ。」亨は又面白さうに足踏を爲て「ぢやあ行かう。」二人は睦しげに手を組んだが、

「サア是から唱歌を謡つて行きませうね。」

「唱歌！唱歌！」

亭主は例の片方へ身を傾けながら、大きな靴を引摺つて、バタリ／＼と歩いて行く。

（中）

兄弟の物語つた通り、大助といふ孤兒は其不幸の生涯に生れ落ちると直に上州の親戚に引取られて、今年九歳に成るまで眞に哀れな月日を送つてゐたのであるが、今度思ひもかけぬ此家の主人に救ひ出されて、暖い家庭に引取らるゝ事とは成つた。

大助は此家の二人の子供より年上である。唯にそれは一歳二歳の違ひといふばかりでは無く、其の悲慘の境涯に育つた爲に、何の情も無い人の手に身を委て、二六時中亂暴な取扱ひを受けてゐた爲に、彼は普通の子供よりは遙に年を取つてゐる。未だそれのみならず、一種の悲觀、それに供ふ僻見、萬について自身の爲に常に起る恐怖心等は其無邪氣な天性を曲げて了つたのである。

然し彼は自分の躰が世の中の小兒よりも不幸であるとは思はぬ。何人も自分の如くであると思つてゐるので、流石に酷く打たれたり、小突かれたりする時には、辛い悲しいと思はぬではないが、その苦みが必ずしも自分のみに限られて居るとは夢にも知らぬ。而し唯彼は旦暮に、自分に父母があつたならば何のやうに樂しからうといふ事だけは感じて、私に他の子を羨む事もある、けれども其父母なる者が何の位子に柔しいかは知らぬので、恐らく彼は死んだ父や母が萬一蘇生つて來てくれても今養はれてゐる田舎の主人夫婦位にしか己を愛してくれぬのであらうと信じた。

で、今度彼が東京の叔父に引取られた事も、決して嬉しいとは考へぬ。寧ろ今迄顔を見た事も無い人が何んで自分を連れて行くのかと疑ふ位、彼の恐怖心で測ると、或は此親切な人が自分を連れて行つて、此處に居るよ

りは烈しい呵責のもとに追遣はうとするのではなからうかと案じた。

親切といふ事の何たるを知らぬ大助は、田舎の家を出る事を嫌がつて泣いた程であるが、それを叱り付られ、慰められなどして、漸く死にでも行く氣に成つて、叔父に連れられ東京へ上つた。停車場も初てゝあるし、汽車も意外である、況して上野へ着いて繁華な下谷の市街を見た時には、彼は夢ではないかと呆れるばかりであつた。

叔父は來る路々も、種々機嫌を取つたり、面白い話を爲て聞かせたけれど、彼は其話ぶりの和いだけ、反て恐怖の念を高めて、碌な笑に事のさへ無かつたのである。

腕車に乗つて本郷の家へ着くと、例の靜子といふ姉娘と、亨といふ弟は何事も放り出して一目散に歓迎したが、是も大助には意のある處が解らなかつた。叔母も抱き上げむばかりにして介抱してくれる。此後は三人とも兄弟のやうにして、叔父叔母は親だと思へと云はれたが、それが果して何れ程の厚意であるか大助は少しも感じなかつた。

意外な處へ來て、今迄知らぬ事ばかり見たり聞たり爲たので、非常に心を使ふた揚句、大助は眠く成つた樣子、叔母は氣を利かして、二人の子と共に次の間へ寢かしてくれた。彼は坐睡を爲す時に打たれなかつたのと、寢床の柔いのを覺えたが、然し是も今夜一晩だけの事であらうと考へた。

「大助さん〳〵。」耳許で呼ばれたので、足勞れに眠込んでゐた彼は不圖目を開くと、最早夜が開けて、靜子も亨も枕許の窓を明けて、遊んでゐる。

「疾く起きないか君、鶯が鳴いてゐるよ。」亨は無遠慮に揺起す。

「お止しなさい、未だ疾いんだよ。お前だつて何時でも睡てゐる時分ぢやあないか」

靜子は氣の毒さうに云ふ。大助は年下の二人に魁られたので、恥しさうに、それでも巧者に急いで衣類を着たが、今にも叔母に呵られは爲まいかと、直に例の怖氣が出る。

「君來て見たまへ。鶯が鳴くから。」

「然うかい。」大助は小聲で云つて「ア、顔を洗ふのは何處？」

「いまに糸が然う云つて來るわ、餘り早く臺處へ行くと呵られるのよ。」

「然う？」大助は縮みあがつて了つた。」

「呵られるもんか、其樣なら僕が行つてやらあ。僕は可恐くも何ともありやあしない。」

「又亭さんは彼樣な事を言ふよ。」姉



は女らしく靜にしてゐる。

「君、大助さん。君の方には鶯といふ鳥は居るかい。僕の家の庭へは毎日來て鳴くよ。姉樣が學校へ行くまで、ねえ。」

「アヽ。」靜子は嬉しさうに頷いて

「妾を起しに來るんだよ。亨さんは起きないから。」

「僕は鳥なんかに起して貰ふものか。」

「ぢやわ糸に起して貰ふの？、」

「然うでも無い。」といふ處へ飼犬のペチが主人を見付け、勇しげに尾を掉つて窓の下へ來た。



「アゝ僕はペチに起して貰ふんだ。ナアお前起して御覧！サア吼へろ、ワンと。」犬は首を揚げて高く吼へたので、今まで聲を張揚げて謡うてゐた鶯は衝と隣の家の庭へ去つた。

「アラ鶯が。ペチだよ。」と静子は然も口惜しさうに「お前が彼様な事を爲したものだから、妾の鶯が飛んで行つて了つたわ。」

「ワーイ鶯なんて弱虫だから、直に逃げ出すんだ。ペチ追蒐けてやれ。」

「追蒐けられるものですか、鶯は羽がありますよ。」

「羽が有つたつて弱いから駄目ですよ。アゝ此度は五郎さんのお庭で鳴いてゐる。五郎さんは起きたかねえ。」

「知らないわ。」静子は不平らしく熟と遠くを見てゐる。

「姉さん怒つたのかい。」

「怒りは爲なくつてよ。」

「怒るんなら可いや。」亭は手持無沙汰に大助の方を見たが、又極り悪氣に「怒るんなら僕は可い……僕は謝罪らわ。」

其調子が可笑しかつたので、大助は思はす噴出した。

「何だい君。」亭は訝しげに

「否、此犬は好いねえ。」大助は漸く口を出した。

「アゝ父様が廣尾へ行つて買つて來たんだねえ。」静子は頷く。

「君、種々な藝を爲るよ。それからね、父様が鐵砲を撃ちにゐらつしやる時は屹度一緒に行くの！鳥を趁つて此奴が啣へて來るんだつて。」

「君は鐵砲を撃ちに行かないの？」
「僕かい。」亨は目を丸くして「僕は行けるものか、直に足勞れて了ふんだから。十五に成つたら鐵砲を買つてやるつて、而して一所に連れて行くつて父様は仰有つた。其時は君も行き給へ。二人で鶯やなんかを撃たう。」
「父様は鶯なんか取つていらつやらないよ。」
「それは上手だからさ。雁や鳩を撃つていらしやるけれど、僕や大助さんは下手だから。」
「否大助さんはお前より上手だよ。」
「嘘だい。ねえ君。」
「僕も下手だらう。」大助は遠慮して答へたが、彼は今迄交際つた事の無い此兄弟と一所に成つたので、僅の間に何と無く氣が晴々と爲て、美しい春の日に逢ふ若草のやうに、何とも云へぬ喜びに充ちたのである。
「オヤ最早皆は起きてゐるのかえ。」
襖の外から覗いた二人の母親、三十餘の品の好い人は驚いて入つて來た。
「母様お早う。」
「お早う。」亨は勇しく、然も誇かに叫んだ。
「ハイ。」母は莞爾しながら「大さんは足勞れたから嗽眠かつたらうに、乾度二人に起されたのだらう。」
「否。」大助は急に例の悴々が出て小く成つて退いた。
「然うではないの？、其様ならば皆顔を洗つて、それから牛乳を飲んで、お庭へ出て遊ぶが可いよ。」
「アヽ僕が一番だ、大助さん疾く來給へ。」
亨は一散に臺所へ馳けて行くのを、大助は呆れて打目成るのである。

（下）

「サア〳〵今俺が面白いお話を爲てやるぞ、何が好いな。」

父親は四十を一つ二つ越した。福々しい人で、鼻の下に薄い髭を生してゐるが、如何にも柔和に氣が大きさうである。何時も役所から歸つて來て夕飯が濟むと、子供を對手に他愛の無い話を爲るのが何より樂みである。二人は夕方になると父の歸邸を待ち構へる、歸邸と食事の濟むまで、側に居て疾く〳〵と促されるので、是が一番閉口であると父は常に愚痴を云ふが、それでも遠さけずに膳を片附けると直、其ゆつたりした話を初るのであつた。

大助は家中で一番叔父を恐れてはゐるが、然し今は初めのやうに何事にも怖れを抱いて、顏色を窺ふやうなのではない。唯此人は主人で一番大事であると、可懐しく思ふからであつた。

「何の話が可からうな。」主人は卷煙草を一服喫ふて、亨の方を見る。

「僕は鐵砲の談が可い。」

「否ですよ父樣、妾は他のが可いわ。」靜子は首を振つて云つた。

「困るな。お前と亨は好みが違ふから。何うしたものだな。大助は何が可い。」

「僕は何でも。」と謹んで答へる。

「何でもは猶困るて。」

「大砲の中へ入つて月の世界へ行つたお話が僕は一等好だ。」

「月の世界は長くつて行かん。それではお父樣が或處へ行つた時に大きな蝙蝠を捕た事を話さうか面白いぞ。」

「妾は可厭！」靜子は猶且反對する。
「お靜さんは何です。お前は姉さんの癖に其樣な勝手ばかり言つては仕方がありませんよ。面白いお話をお聽なさい。」と母親は傍から口を出す。
「可し〳〵。それでは今日はお話は止にして、蓄音器を聽かせやう。」
「エヽそれが妾一番好だわ。」靜子は待つて居たといふ風である。
「其がお好か、亨は何うだ。」「僕も好だ。」
「オヤ〳〵お父樣逐々蓄音器に負けて了つたな、それでは糸に然う云つて持たしてよこせ。」
「私が持つて參りましやう。」大助が立たうとするので、
「否々、お前には持てんから止せ。其樣な事を爲なくつても可い。」
「眞實に大さんは皆と一緒にお客に成つてゐるで、妾が運ぶから。」
母親は次の間から道具を運ぶ。父は早速調子を整へて、喇管を挿入れると、
「さあ一番初め君が代だ。」軈て劉喨として鳴る音樂と共に君が代の唱歌を謠ひ出す器械を見て、大助は愕然として驚いた。彼は今迄斯んな不思議を見聞した事は無い。
「君も一緒に謠はないか。」
「何うして鳴るんだらう。」大助は唯呆れてゐる。
二人の姉弟は何時か調子に乘つて節に合せ、聲張揚げて謠ふのであつた。父親は種々と管を代へ、其間に說明を交へて親切に遊ばしてくれたが、時刻がやうやく遲く成つたので、今はと器械の運轉を止めた。
「最う是でお了だ。お前たちは又明日の朝疾く起きて鶯の歌でも聞くが可い。」

「お床を取つて置いたから仲好くお休み！大さんもお寢よ。」
「ハイ。」二人は素直に大助を連れて次の間へ立つたが、
「君、彼の器械は面白いね。」未だ不思議に堪へぬので亨に聞くと、
「ア丶彼の車の中に人が入つてゐるのだとさ。」亨は睡がつて最早欠伸を爲てゐる。
「嘘ですよ。今父樣がお話を爲て下すつたではないか。お前は眞實に嘘つきだよ。」
「然うかい。」と素直に自分で云つて、亨はゴロリと横に成ると、何時の間にかすや〱と眠つて了つた。靜子も續いて夢に入つたが、大助は未だ目が冴へて、此頃の自分の有樣が變つた事を喜んだり、此家の人々が樂しさうなのが嬉しく思はれたり。叔父が可懐しかつたり、叔母が戀しかつたり、蓄音機が不思議だつたり、何となくそは〱として何うしても睡られぬ耳に、二人の安らかな鼾聲が微に響く。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

物の卅分も過ぎたと思ふ頃、眞暗な室の外でパッと燈の影がさしたので、彼は又一種の怖氣が出て、目を細く明けたま丶寢た風を爲ながら樣子を見てゐた。
軈て襖を徐と明けて、片手に手燭を持つたま丶靜に入つて來たのは叔母であつた。何を爲るのかと大助は胸を躍らせてゐると、叔母は一人々々寢てゐる三人の子等の上に顏を寄せて、何事も無く熟睡する躰の愛らしさを打目戍り、嬉しさうに笑を漏したのである。
何とも云へぬ可懐さが込上て、大助はパッチリ目を明たが、それとは知ずに叔母は又徐と襖の外へ出て行つた。
「ア丶母樣！」と大助は靜子や亨の氣になつて低聲で呼んだ。今迄は此和しさを知らなんだ不幸の孤兒の上に、初めて親の愛てふ光のさしたのは、そもそも此時からである。

（完）

牛拾首

佐々木信綱

牛を追ひ牛を追ひつゝ此野邊に
我世の半はやすぎにけり

春風に乳うる家の旗見えて
燕とびかふ川そひのむら

七つ八つ繋ぎつれたる牛追の
寒さちまたをゆく夕べ哉

我ゆけば我ゆく跡につゞき來て
牧の小牛の人おぢもせず

いとせめてミルクをだにとすゝむれど
やせし面てを打そむけつゝ

家も賣り小牛も賣れと殘されし
父の負債のなほ多くして

引く牛は霧にかくれてだみ聲の
罵うた遠くとほざかりゆく

病みませる夫に代りて此稚兒の
牛追ふ年にいつかなるらむ

積みためし黄金にかへて引く牛の
主人と我もなりにけるかな

牛に似ておのが歩みの遲くとも
行くべき限行かむとぞ思ふ



梅

霞たつ向の岡の梅林
咲きみちぬらむ風かをるなり
三宅貞子

打むれて手まりつく子の振袖に
かをるもゆかし軒の梅が枝
大澤國子

燃ゆる火に匂をそへてストヲブの
かたへの梅の花咲きにけり
大竹いせ子

紅に去年さきそめし梅の花
匂ふりせず春風の吹く
加藤ひな子

吹風に谷の氷やとけぬらむ
鶯來なく窓の梅が枝
板倉止子

おひ羽子の行方もとめて思はずも
咲そめし梅を見出づるかな
板倉藤子

原田時雨子

新玉の年立つ今日も咲初めて
かをるか軒の梅のはつ花
鳳木春子

惜みつゝ折り折らざりし梅の花
友の爲めには折りて送らむ
大澤園子

武藏野に若草もゆる春くれば
霞みそめけりちゝふ甲斐の嶺
有賀晴子

花もよし雪も又よき吉野山
眺めはわかぬ景色なりけり
市田とよ子

紅葉せし去年の姿もなかりけり
同じ様のはるの山の端
松浦しま子

打つれてせとの小山に來て見れば
しとめ花咲きすゝき
瀧山三雲子

大君の恵と共に動なき
世の實なる道の山々
末松庄子

むら山は霞の袖におほはれて



ひとり匂へる不二のしら雪
大河内桂子

木枯のあれてあれたるみ山とは
見えずもあるかな櫻花さく
佐藤朝ゑ子

花にわけ紅葉にとひしふるさとの
山の姿のなつかしきかな
久保花子

ゆく人にふまれけがされ道のべに
殘るもはかなあたらしら雪
森田妙子

いかめしきすがた日毎にくづれつゝ
形のみ殘る雪だるまかな
坪論柳子

さく梅の香をなつかしみよる人に
ふまれて消えぬ花かげの雪
澁谷朝子

なづみたる人のあし跡其儘に
雪こそこはれやぶかげの道
長江清子

梅もやゝほころびそめし山里に
心ながくものこるゆきかな

春の花ぞの

宮澤すみ子

あれは紅の霞か、まことや紛たる其眺望、芳翠滴ゆる如きは緋桃の一むれにして、曉露滴らんとする如きは是桃花なり、もとより言いはず、人に謂るの顔なしといへども、下自ら蹊を成して、我等は春のたまものに酔ふべくや、いざやこれより花ぞの日記かいつけん、

○櫻

春のチヤームたるこの一枚にあつむらん艶姿嬌態、いとほこりかに旭にむかひ、朧月に對する風情の、たとへは天が下のる火を我一人といへる面の紡からずや、まても林に満れば雲の如く、地にしくは雪の如くにして、高きも美、低きも美、生なほ美なり、死いよゝうつくし、狂風一陣こゝ、春もさはげるけはひなく、ほろ／＼と委すや地上に乃ち錦をつくりて、これが紛靡は蓋しならぶるものなけん、櫻よ緋桃よ、汝等の美は、みじかき精の栄のみ、うれしきは櫻よ、汝は死して猶深き粧をこらす、汝は不死不老なり、今にして知りぬ、我が日の本の現在過去にたまた未來に於ける理想のマドーなるを、櫻花よ年々歳々我等人間は生と死ありて、今年の我は來年の我たるや否やはかり難しといへ共、而も汝の美永遠にほこりあれな挨し我等徒らに爾が美を妬むものならざるなり。

○李

殊更の粧はなけれど、緋桃白桃と共に綱をうたはれて、あやしき賤が垣根のほとりまた捨てがたき趣あり、ましてこのもと、息ごもりたる女の立離れ難う、やがて小さき實のほろ／＼と落つる頃しのばれて、聊か餘をいやすべくや、我けふのそゞろあるきに何の關するところあられど、その上の事共おもほへて、一首こゝに是をいふ、こも亦思出の一つに數へしまゝ。

○歸雁

廿四絃夜月に彈ずる佳人はなきや、満山の花、雲の霞の盛粧をこらす中、空にこゑあり、歸雁の一むれ、瀟湘に誰がかけし玉章やと見ゆるあはれさ、世は漸う數をよびおこして、百鳥の囀々嬉しきにひきかへ、いづちをさして歸るらん、きくならく越路に行くなりと、汝はまことに悲観的なり厭世的なり、水はみどりに砂は明らかなる春の小川に、汝は影うつす事を欲せざるや、花のさかりを歸りゆく雁金、我は汝を送るに一滴の涙なき能はず、うらむ我佳人となりて夜月に彈箏爾を止むるの風雅なきを、こゝ信濃は爾が故里に隣れり、碓氷をこして春の來るや遅し、我は細なき情の箏にしばし爾をとゞめんか　雁數行、我が訴をきかずして再び空にこゑぞきこゆる。

○梨花

梨花一枝春の雨を帯ぶ風情の凄婉たとふべくもあらず、楊貴妃が古事はいはずもがな、たとへばあてなる玉人の憂ひ悲しめる姿に似て、げにや玉容寂寞涙闌干のうたさへおもほへつ、長閑なる春の野に於けるさびしさの斑點、憂世の狀態を自然のまゝうたひて以て、我等に同情をよするから

○橋

ぬるく流るゝ春の水を渡せる橋の名おもしろからずや、京に四條五條の思出うつくしきがあり、あふひ橋何ぞ優なれや、都に名高きそれ等よりも、田舎道に怪しの假橋、そこにさまざまの名付せられはをかし、我が故里の別府原といへるが中程に地獄橋といへるさへ怖ろしきを、まことは狭き石二つ並べられて、下ゆく水のちよろちよろと岸などいふも名のみ、腕白者が一またぎの隔、しかはあれど、やさしの草花いろいろ咲き亂れて、怖ろしき橋の名をしらず顔なるもをかしう、始めてきゝしほど、其もとには燃ゆる釜の掛られて、罪多き人をこの世の罰など思ひしが、漸う慣るゝに從ひ、何とも思はずして、往來するやうになりぬ、又いづこの國なりけん君待橋といへるがあり、こもまた優しき名ならずや、全國ならずとも、住む里々の橋名しらべたらんには興ふかき事ならんと、かの相生橋のたもとにて思ひしまゝを。

○海棠

小さき池のほとりに咲ける海棠、そが淺紅愛すべき色、高き梢の花の姿に恥らひてや、長き枝を下さまに垂れて濃き臙脂を徒らに動かすさま、たとへば世心知らぬ處女の、何をかゆめむらんあどけなさに似て、猶それよりも罪なきが如し、これは花中の神仙、人の世の垣根に咲くべき類とも思はれぬは、エデンの花かあらぬか、誰か移せる罪ありて、暫し人間の眼にふるゝらんよ、あまりに美く、あまりにうつくしやと、花辨にくちづけせんも勿体なし、唯戀しとのみながめつ。

○蝶

双蝶、花の垣根より出でゝ野外に飛ぶ、童子來りて是を捕へんすること切なり、蝶は高く又低く舞ふてこゝの花、かしこの葉にとまり、終に童子の手にはゐらざりき、忽然田の畔より子猫一匹現はる、白き前足を擧げて蝶をねらふ其さま可笑し、而も蝶去つて菜の花の間にかくる、猫も亦、黄金色の中に狂ふ、我はおもしろさに得堪ずして、其行方を守る事久しかりき、双蝶終に離れて、一つは東へ、他は南へ、ひらひらと舞ひ去りぬ、我は拙ける詩篇讀みたりき

○麥畑

一面の畑、尺に足らぬ麥の青々と、これやまことに風致にして草芳の夕ならん、西さす日の次第次第に西へと傾けど、ながき春日の未だくれず、草を拾ふの少女子嘻々として家路に向ふを忘れたる如し、こゝに一軒かしこに一軒の茅屋、皆めぐるに花ならざるはなく、我は恰も翠帳紅閨に春のうたを歌ふこゝちして、鳥の嚶々となくは、詩人が遺しおきけん言葉のそれのごと我を誘ふの麥の青は、又何等のさゝやきに似ていとなかしき聲なりき。

雑録

精神病院を觀る

せい子

春日和の寒い朝、巣鴨邊を散歩の序に、庚申塚に近頃出來た精神病院を見舞ひました。院長はまだ出て來られぬさうでありましたから、醫員の方になりとも面會を乞ひ、併せて參觀を依頼しました。頓て一人の方が見えまして廊下を此方へと云はれますゆゑ、定めて應接間にでも通さるゝとであらうと、うつかり從いて參りますと、暫くして廊下の端の重さうな戸ががたんと開けられました。ハット心づいて見まするると、其所にはハヤいろ〳〵の精神病者が澤山に歩きまわつて居るのです。不意の事であつたので私は思はず身慄しました——飛びかゝられはせぬかと云ふやうな氣になつて——併し案内者は勿論醫員でありましたから、危險なところにお連れになる筈はないと、やつと落附きわたりを見ますと、兩側はすべて病室で私の今立つて居る所はその間の廊下なのです。

病室をのぞいて見ますと頭から蒲團をかぶつて居るもの、机帳面に坐つて仔細らしく書物をして居るもの、何やら絶間なしに話して居るもの、それは〳〵種々でした。折曲つて太い格子をはめてある方はよく見ませんでしたが、暴れる患者を置くところのやうでした。此中の人達の凄く恐らしいと、一番さきに目に入つた廊下を徘徊して居る患者などは、これに比べて餘程輕いまた温和しい人達であつたのです。

次に婦人の病室を見ましたところ、矢張廊下には大勢出て居りまして、多くは痩せ衰へた青い顔に髪をふりみだして、男の方よりは一層悽いのでありました。

中にもその時診察をうけて居た一人の婦人は『今日も赤坊を生みましたか』とお醫者の問に『生みました、お辨當をたべたらモット生みます』と申して、赤い枕を大切さうに抱いて居ました。この婦人或は子を失つた悲しみなどのために發病したのでもありませうか、いつも『私のお腹に三千人も赤坊が居ります、毎日〳〵三十人も生むけれどまだあります』と云つて居るさうで御座います。

九時になると運動時間で輕い患者は庭に出ると聞きましたゆゑ、一方の廊下から見て居りますと、醫者は頓て『運動ですよ』と云ひながら方々の病室の裏の木戸を開けました――廣い庭を、三方は病室一方は醫員たちの居る部屋々々で圍んで居るのです。私はこの醫員室の廊下から見て居りました――スルト間もなく一方の戸口から眞先きに驅け出したのは男の裸坊です。醫員のお話しに此人は衣服を着せると糸のやうに破いて仕舞ふのださうで、夜も熟睡するのを待つて看護婦がソツト夜具を掩つてやりますけれど、朝はまた目覺めぬうちに除けておくのださうで御座います。ドーカしてこの人の起き出るまで忘れて居ると、厚い夜具でも忽ち例の糸同様になつて仕舞います。或時厚織で手まで隠れる着物を着せましたけれど、それすら口でトウ〳〵ぼろにして仕舞つたといふことです。ソシテ寒いかと云へば、霜日和の朝など少し涼しいと答えるさうでありますが、それでも風ひきは決してせぬさうで御座います。人間の神經と肉体との關係は不思議なものだと思ひました。私は驚きながらも此裸の人は何をするのかと見て居りますと、廣い〳〵庭の周圍を譯もなくチヨコ〳〵走りに駈けまわつて、塵芥を拾ふので御座います。手の中に拾つたごみは後から〳〵落ちますがそれには一向搆はぬらしいのです。

次に他の木戸から出て參りましたのは、三十六七の陰氣らしい痩せた婦人で、南天の小さな枝を恰度天神様の笏のやうにれい〳〵と捧げ持ち、庭の中を靜々とあるきまわるのです。その中あちらからも此方からも種〳〵の患者が出て參りました。一人の年寄つた婦人はブ

カ〜〜と醫員室の窓際によつて來て、實に情ないやうなごぼすやうな口調で『煙草を一本下さいな〜〜』とねだつて居る。それから少し隔つた木の蔭には若い男が義太夫を語りはじめる。庭の中央の床几には一人の女が三味線を持出して、唧つやうな哀音を巧みにかなでゝ居るのです。また別の方には浮かれ切つた小男の春雨を躍つてゐるもの、懷手でブラ〜〜して居るもの思案するもの、唸るもの千態萬狀でありますが、その樣が如何にも思ひ〜〜で、此人達の心の中には他人といふものは殆どないらしいのです。どの樣な煩悶苦惱がこの人々をかゝる有樣に到らせた事かと思へば實に氣の毒に堪えぬのでありました。

醫員の話に『發狂の原因は強ち煩悶苦惱ばかりでなく遺傳その他いろ〜〜の事柄が遠因になり、わづかの機會に氣の違ふ人もあります。當院に三月ばかり居りまして先日全快なつて歸つた人（男子）などは、火事場にかけつけてそれなりに發狂したさうで、癒つて後に聞いて見ますと、苦心して貯へた家具も家財も一夕の炎のために灰燼になるのだと思ふたら、俄に心細くなつて來たのだと申して居ました。また先刻の運動時間に獨りうかれて躍つて居た男ですねえ、あれはさる所の織物商でありますが、不景氣つゞきで種々と苦心の末思ひついた事が圖に中つてトン〜〜拍子に儲ると、つまり嬉しさが込み上げて發狂したといふやうな工合です。で、譯もなく鷹揚に浮き〜〜していつも目の前に金殿玉樓を描て居るのです。圍の中に入れてある病人で御坐いますか――あれは獨り暴れる患者ばかりでなしに、臆病なものも隨分あります。即ち他人が始終自分に危害を加へるやうに思つて居る人などをいれまして、此所には誰も入ることが出來ないのだと申して安心させるので御坐います。運動場でも御覽になりましたでせうが、發狂者に殆ど共通の癖といふのは、自分ばかりを中心にして少しも他人を眼中に置ぬとです。はたが泣かうが騒がうが平氣なもので、たゞ一心に自己の考へに耽りましてその考へを實行するのです。それが愈々治療の結果、少しでも自分の行爲を他と比較する

やうになりましたなら此方のもので、一つ分り二つ分り遂には全く快癒ることになるのです、例へば王樣だと申して威張つて居る病人が居ります。狂人と云ふものは非常に自信の强いもので、あなたの考が間違つて居るなどゝ云つたところで聞き入れはしませんですが、そこにまた一人同じ種類の患者が來合せます。此樣な場合に於てさきの患者の氣分を見計ひ、ドーデス向ふの人もあなたのやうに王樣だと云つて居ますが、ソー幾人も王樣の居るのは妙ではありませんかとでも申せば、ハテナと怪しみはじめることがあるのです。スルトそれからそれと疑はしくなつて來て、今度は患者の方から此方にいろ／＼の問を發するやうになります。此樣なことが多く狂人の正氣にかへるもとになるのです。當院現在の患者は九十三名でありますが、その中男子は六十三人婦人は三十名で御坐います。これは狂人に男子の多い譯でなく、男子は多く一家の働き手である所より、病院にでもいれて是非なほさうと致しますが婦人の方はとちらかと云へば等閑にされてゐるからであらうと思ひます」などその外いろ／＼のことでした。

私は運動場の有樣とこの話をきいて思ひました。智情意の最も圓滿な發達を遂げたところの理想の人類と比べましたなら、私供の今の有樣の調子外れであることは少しも發狂者と違ふ所は無いのです。ソシテ私共は此精神病院の運動場の樣に社會てふ舞臺に於て、自分勝手思ひ／＼の振舞をして居ることも隨分多いであらうと思ひます。天を戴き地を踏みながら更に悠久なる自然の樣に氣もつかず、同じ人類と棲息しながら自分の外には殆と何人も目にいらぬやうなこと、狂人ではなしに私共自身の中にも始終あることと自ら恥かしく思ひました。それのみならず私共は或は火事を見て取り逆せた人のやうに、また儲かつて氣の違つた人のやうに、ホンの僅のことのために常識を失つて淺間しき思ひや行ひをすることも決して少くないと思ひます。

（完）

木食上人の話

糸左近

府下王子の町はづれの阿彌陀寺に、木食上人が、所謂閑に耕し寂を釣つて、更に此の世の羈絆に繋がれず、朝に夕に木魚の聲ポン／＼と響かせて、米が高からうと、薪が安からうと、それには一向用が無いといふ狀態である。それも其の筈、米などゝいふ結構なものは言ふに及ばず、すべて火にかけたものは、湯さへも飲まず、唯松のみどり櫻の葉などを、恰も馬牛のやうにモリ／＼と食ふばかりであるからである。故に他人は名もあらうけれど、唯木食上人と呼んでゐる。つれ無き秋風が・この上人のために、一片の青葉を留めぬ時に至れば、已むを得ず密柑の皮や、甘藷或は人參午蒡或は大根菜葉の類を生のまゝ食つてゐる。かゝる有樣であるから、一身を支ふる生活費は幾らも要らぬ寺の收入金は、大抵赤十字社或は育兒院などへ寄附して了ふ。實に澆季の今日、有りさうも無い珍らしい人である。余は今この上人の來歷を述べて、終りに倫理と衞生との批評をして見ようと思ふのである。

指折り數ふれば、十八年も一昔即ち明治十九年の七月、余は余の知つた良山といふ坊さんが、小石川傳通院に修行戒行して居るのを便つて出京した。丁度其の時に、彼の上人は、十太郎といふ名の寺男であつた。余は用がてら折々良山師を訪ねてゆくと、無骨な十太郎とのは、糸君失敬などゝ、書生言葉の眞似をしては能く笑はせた。或日余に向つて喞つには、寺男はと世につまらぬ者はあるまい、朝は早く起き、夜は遲く寢ね、魚類は食はれず、拭掃除は嚴重である、それで給金が安くて、多くの坊さんに叱られる、何の因果で、此の寺に來たやら、併し御前（住職のこと）は實に慕はしい人である、側へ行くことは出來ぬけれど、湯のたつ時、背中を流しに行くと、色々の敎へを聽くのが樂しさに、我慢して居るのであると、余は奉公は何れも苦いものだなど、慰めてやつた。けれど彼は常に不平で堪

らぬ。遂に住職の敎へも打ち忘れ、ナニ奉公口は、此の寺ばかりでもあるまいと、斷然辭職して了つた。これより毎日市中の東西南北を奔走し、桂庵といふ桂庵は悉く尋ねて見たれど、何うも思はしい奉公口が無い、其の間は木賃宿に居て、午食時は必ず蕎麥屋か飯屋へ行つた、根が能登の土百姓であるから、人並はづれた大食である、故に隨分入費が要る、或日日本橋の或る牛飯屋へ這入ると、一椀一錢で仲々の大盛、三椀を食すれば、如何なる者も充分である、故に客も甚だ多く、家は如何にも繁昌してゐるらしい。時に十太郎先生忽然膝を拍つて、嗚呼我れ過てり、我れ過てり、常に御前が、施せば廻わりと言はれたのはこれであるこの家は斯樣に安くするから繁昌する、我は給金の安きを不服に思ふたから、今この流浪がある、如かず過ちを改めて、謝せんにはと、早速足を元の傳通院に向けた。

歲月は火鼠の裘が燃ゆるかの如くに、メラ／＼と、鱗かたもなく過ぎ去つて行く。嗚呼高徳なる住職松濤僧正は、涅槃の岸に隠れられ、（この僧正の偉な讀者に紹介することもあらう）續いて良山師も故郷の寺に住職せらるゝこととなり、隨つて余の足も傳通院の地を踏まぬことになつた。

時は明治三十四年六月十三日に、久しく無沙汰してゐた眞珠院といふ寺の住職を訪うた。ところが十太郎先生袈裟衣の姿で、コップの水を飲みながら、盆に盛り上げたる松のみどりと櫻の葉とを、ムシャ／＼食つてゐる。余は實に驚いた、一別以來の挨拶どころでない早速に、まあ何うして其の樣にと質問の矢を放つた。これより來し方行末の話。左に、

私も二度目の奉公から能く心を改めました、時に思ひますには、この位な給金では、幾らも人に施すことは出來ぬ、去りとて我の樣な者が、將來何をして金儲け仕ようも無い、又何をして御國の爲に盡しやうも無い、それで御國の物を食ひ、御國の物を着てゐるとは實に勿体無い、我が飲食するものを金に積れば、假りに一ケ月平均五圓として、この先四十年生きるとしたら、二千四百圓を費す勘定、これに利息をつくれば、

大きなもの、責めてこれだけなりとも、人に施さば、何程の功德か知れぬ、どうか佛力で食はずに生きる方法が無いものかと、御前に伺ひましたら、

「無いでも無い、けれど餘程心を練らねばならぬ、我が淨土宗は他力であるから、左樣な行は要らぬけれど、古への高德は巖窟の間に雲を飲み、大木の朽穴に霞を食つてゐられたのが澤山ある、これ等は皆慾念といふものを放れて、眞如の月を樂んでゐられたのである、今凡夫が之を眞似したら、十日を經たない中に死んで了ふ、これを一寸聞けば怪しい虚言談のやうであるけれど、心と身との關係は、不思議なものである、何か祈願事があつて、寒中赤裸になり水を浴びても、感冒をひかぬけれど、今何事も思はず熟睡してゐる者を起して、水をかけ十分間裸体にしておけば必ず病氣になるやうなものである、汝若し果して、功德を施さうといふ心から、我が飲食する物まで斷たうとならば、先づ最初に　煙草のやうな冗物から、順々儉約して行け」

と云はれました。成程それに違ひ無い、さうして古への高德ぢやとて、木で製へた体でもあるまい、我れとても矢張同じく人間だ、次第々々に修行したら、其の位置に達せられぬこともあるまい、と思ひ、第一に煙草を斷ち、次に酒と魚類を禁じ、次に朝飯を止め、次に夕飯は甘藷一本とした、かうすることが半年も續いたれど、左程身体に影響は無い、けれど煙草だけは時々吸ひたくて堪らぬことがあつた、又思ふには、これでは普通人と左程異なることが無いと、これから此の米を生で食べようと稽古し始めた、が併し仲々苦い、他人が炊たての飯に、海苔など副へて食ふところを見ると、何うも堪らぬ、一層のこと行も止めようかと、箸を投げては見るものゝ、又思ひ返して、此の樣な値の無い体、今直ぐ死んだとて、何の惜しいことも無い、行の出來る處まで續けて、眞如の月を眺めようかと、又々鹽斷をし始め、これも半年程續いたから、この分では愈やり通されぬことは無い、死ねば直ぐ淨土で無いかと樂しくて堪らぬ、ところが元日の

朝禮式だから一杯の酒を飲めと、勸められましたから餘儀なくやると、氣が面白くなつて來て、又々俗界の樂しみが感せらるゝ、仕方が無いから枕をすれば、色々の感じが起る、止めようか、待て施しは福の本、何程の施しが出來るか、止めよう否眞如の月、眞如の月などは高徳な人の眺むべきもの、無學の我止めよう、否極樂淨土、淨土は行ばかりで行くところで無い、止めようと彼是してゐる中に醉が醒めた、否迷ひが覺めた、覺めて見れば飲んだ一杯の酒が悔しくて堪らぬ、死死死なうか、否死んで行ける極樂では無い、眞に懺悔の良心を起せば、昨日の大惡も今日は菩薩、この罪滅ぼしに火食を斷たう、さうぢや〳〵と、これより他人が何と非難しても、湯も飲まぬことにし、これも半年程遣り通しました、こゝに於いて、又考ふれば、成程普通人の用ゐる煙草、酒、肉類、鹽、火食までは止めたとは云ふものゝ、矢張食ふところの品物は、唯鹽を入れずに、火にかけぬまでのことなれば、入費の點に於いては左程違はぬ、おやと言つて今の樣に奉公してゐては、何も食はずに、身体を働かすわけにも行くまい、嗚呼何うしたら善からう、山中に籠らうか、併しまだ霞を食ひ雲を飲むといふ境界では無い、して見れば其の順序として、今日より他人の惜まぬ木の葉或は果實の皮などを食ふことにしやう。頃は夏の初め、傳通院山は萬木翠を滴らしてゐる。そこで第一に櫻の葉を食ひ始めた、が併し此の時程困難な事は無い、幾ら生でも米や甘藷は旨いけれど、木の葉となつては何うもまづい、噛んでは見れど嚥み込めぬ、偖何うしたら善からう、斯うしたら善からうと思案してゐる中に氣が遠くなつて來た、嗚呼今死ぬのかと、一聲お念佛を唱ふれば、はや此の世の事は覺えが無い……。オーイ〳〵十太郎〳〵と、一里程先に呼ぶ者がある、さて佛か鬼かと少し氣をつけて聽けば、こはそも如何に矢張傳通院の中、數多の人が、醫者よ藥よと騷いでゐらるゝ。

これからと云ふものは、仕方が無いから、蕎麥粉と木の葉と混ぜて食ふことにしまして、其の後今の寺に墓

守同樣の住職となり、遂に現今の次第となつたのであります。

との長物語。余は實に其の困苦の經歷に深く感じたと同時に、何うして生きて居らるゝやらといふ疑惑が起つた兎に角請うて診察したるに、皮膚の色は何れも比較的善くて、筋肉は左程瘦せて居らぬ、一般に身体は病的で無い、唯胃は少し擴張してゐる、さうして呼吸が遠い、且心臟の鼓動は僅かの運動で高ぶる、視力は別に異なるところは無いが、長い時間見つむれば、ひらひらと雲の樣なものが見ゆると云ふ、体温は三十六度七分、脈搏は微弱細小で七十八を數ふ。

王子から小石川まで歩いて來らるゝかと問へば、來らるゝけれと、大抵汽車に乘り、其の外は歩く、馬車と人力車とには乘らぬ、その譯は汽車は苦しむ者が無いけれと、馬車と人力とは、其の馬の苦しみ、車夫の汗を流す樣を見れば、何うも乘る氣になれぬ。

余は又曰く、成程一通り理窟はある樣なれと、若し世人が皆君の如く言へば車夫は何うして妻子を養ふか、乘つてやるのも一つの慈悲では無いか。

さうかも知れませぬ、考へて見ませう。

全体君は何を樂しみ、何を恐れ、何を心配するかと又問へば、慈悲善根を積むのが何よりの樂しみである、恐るゝことなどは少しもありませぬ、假令狼が來ようと、强盜が這入らうと、それも唯天命であるから、それで死ぬことは私の罪では無い、ぢやに依つて、心配などは少しもありませぬ、如何なる饑饉があつても私の食ふ木の葉が無いこともありますまい、實に私は幸福な身分と思ひますと答ふ。彼是話してゐる中に時は早晩景に及んだから、互に再會を約して別れた。其の後今一度逢ひたいものと思ふてはゐるけれと、其の折が無い、併し眞珠院師より聞けば、相變らず丈夫ではあるが、少し耄碌したやうな事を言ふ ことである。

余は讀者方に、この上人を紹介したのは外でも無い、今この上人の心中を推察するに、光風霽月一點の曇り無く、常に平々淡々として、錢あれば施すのみ、白刃

を閃かすも恐れず、鉅萬の富を與ふるも敢て喜ばず、天命に安んじ自然に任す。今や高堂に坐し、綾錦を身に纏ひ、口教育を唱ふる紳士貴婦人の中に、一點の公共心無く、貪つて益〻貪り、常に他人の我を罵らんことを、ビク〳〵これ恐れてゐる奴がある、實に此の上人に對して、恥づべきの甚しきものと言はねばならぬ。

斯く上人は確固不抜の慈悲心が充ちてゐるけれど、之を余の診察上から評すれば、所謂道義狂といふ一種の精神病である、必ず一般に手本とすべき人では無い、故に余は左の道理を斷言するのである。

德行者の人を感化する力は實に莫大なるものである。

學問せぬ人の德行は其の價甚だ少し。

滋養物を食はぬ人の身体は、頻繁なる事業を取るに適せぬ。

滋養物を食はぬ人の腦力は、緻密なる道理を考ふる能はず。

されど心身は大なる關係を有するもので、心確ければ、現今の生理學者が論ずる理外に理のあるものである。

返す〳〵も、この上人の志は實に敬すべし慕ふべし、されど其の行は決して眞似すべからず、又眞似も出來ぬ。

木食上人の話



時事彙報

東奥飢饉の慘狀

世間慈善家の同情に訴ふ

我が女學世界の讀者諸君は近日の新聞紙上に於て東奥地方飢饉の慘狀を知り玉ひしならん。青森縣東津輕郡三の戸郡地方に於ては昨年の秋穫平年の半にも達せずして秋早々にして翌年の種米を食ひ盡し、穀物盡きて馬を食ひ、狗を食ひ、家畜も又盡きて、野花を掘り、山百合を掘り、蕨の根を掘り、糠を食ひ藁を食ひ今や野山をあさり盡して又食ふべきものなく、餓莩道路に滿ち極貧の窮民は坐ながらにして死を待つの有様は酸鼻の極といふべし、抑も飢饉は避くべからざる天災の一にして人力を以て是を如何ともすべからず、而かもその災難の區域は甚だ廣くして幾十百の村落一様にその災を蒙むるものなれば、鄕黨、隣里の間に於て緩急相救ふの方便を得ざるは勿論、區々たる一地方の經濟を以てこの限りなき窮民の生活を助くること能はざるは言ふまでもなし、況んや地僻して交通の不便を以てし、山間僻陬の地又產業を起すに由なく、茲に於てか無數の窮民今やその手を空ふして唯死を待つのみ、人生の慘事何物か之に如かん。吾人之を懷ふて惻々の情に耐へず、況んや天下同情に富めるの紳士淑女に於てをや。且夫慈善は同胞の急を見て之れを救ふより大なるはなし。東奥幾萬の窮民今や、食盡きて生命の旦夕に迫るものあり、天下慈善に富めるの方々は吾人の篤言を竢たずして業に既に金穀を義捐せられし向もあらんさりながら、地僻にして災害の事情は未だ普ねく江湖に達せざるものあり。且や千里地を隔つ、近世未曾有の大慘狀も實際の事情眼前に映せざれば、人の同情を動かすの力乏し是れ吾人の甚だ遺憾とする處ろなり、僅かに天下の耳目たる新聞紙のあるあり。その社員を災害地に派して被害窮民の實況を探らしむ、災害の事情は豫想よりも大にして一欄の通信文を讀むも酸

身の事情は歷々として吾人が腦庭を刺激するものあり。心ある者の是を見て奈何ぞ坐視するに忍びんや。殊に慈善はうるはしき婦人の同情によつて立つべきもの平素千百の事理を解するは異逆の場合に於て一事の實行を成すに若かじ。又慈善は資力の有無に限らず、富家翁が萬金の義捐貴としと雖も、貧女の一燈又輕ろんず可からず、たとへ些少の金錢たりともそこに全國の同情を傾けなば以て幾萬無告の窮民を救ふて餘りあるべし。されば諸君が、牛耕一掛の代金、香水一罎の代金、乃至は一日の晩餐に供する庖下の肴料を省いて之れを義捐さるれば、垂死の餓莩は以て數日の生命を維ぐに足るべし。あはれ世の同情ある淑女諸君、紳士諸君願はくはそのうるはしき家庭の餘裕を割愛してての無告の窮民に投せられよ。扨その方法は一個人として義捐金取扱を開始せる新聞社に托するも可なれども成宜くは一鄕一村に於て慈善救濟の團体を作りその團体にて集りたる金錢を直接に被害地方に贈與するを可とす、是れ專ら同情に富める婦人の事業として務むべきものならん、且つ這般の義擧は敢て今日に限らず、今後世に天災等不時の出來事ありたる時、いつにても此團体にて應急の手段を講ずる樣なしたきものなり。

東奥地方飢饉の慘狀其一

（東京二六新聞社石塚氏報）

予は路筋の都合に依り先づ東津輕郡より視察するの便利なるを認め今八日弘前行の第二列車に搭じて新城村に向へり同地は青森市より西南約一里半を隔て延長三里餘に亘れる帶の如き細長き寒村にして戸數四百三十餘、人口二千五六百を算ふ新城石江、戸門、鶴ヶ坂、岡町の各大字を以て一村を組織せり今年凶歉の尤も甚しきは鶴ヶ坂なりと聞くからに予は停車場に下車するや先づ村役塲に赴かんとせしがフト見れば「凶荒救濟副食物無料傳授」と大書せる一看板あり何事を敎ゆるにやと聞けば藁を寸斷せしものを曹達類にて煮沸め、其纖維を柔軟にして一種の餅を製するの秘法なりとかや予はそれより雪後の泥路を辿りつゝ頓て村役塲

に抵りたり（中略）

行くと約一里にして大字戸門に抵り助役相馬良作氏を訪ひしに氏は鄭重に遠來の勞を謝し爐邊に請じて徐ろに村内窮民の狀を語る樣此村方は畑地極て少くして村民は何れも皆米作のみに依頼し副業としては唯炭燒位に過ぎず、而かるに昨年の收穫皆無の所もあり又た近來炭の價値非常に下落して昨年の十月頃二貫俵十二錢位であつたものも今では靑森まで運んで六錢にも賣れません有樣さればとて炭を燒く木材たる楢棒等を官より拂下ぐるには六尺四方なる一棚が一圓であつて實際四十俵しか燒けません之に一俵に付木式が二錢五厘竈料が七厘、俵が五厘都合三錢七厘要ります之を更に山より下るのには一人八俵より持てませんから炭燒業の引き合はないのは當前です是とても賣れゝは可のですが今は賣れなくなりました、凶作の困難は全体に通じて居りますが就中鶴ヶ坂は酷いです全く飢餓に瀕し命旦夕を測られずと申す有樣ですと

爰處を辭して行くと里餘漸く鶴ヶ坂に着し總代人の案内にて先づ窮中の窮なる者を歷訪せり言ふまでもなく凶歉の慘狀は戰亂若くは海嘯其他の災害の如く直接的ならざれば見るもの聞くものさまでに感に打たれざれとも仔細に實況に立入れば痛はしや天の賦與せる玉の緒を自ら忍びてヂリ／＼に縮むる憫れさは我身に引き並べて愈々靑衫を濡ほせり今其二三を語らんに

同地に倉内寅次郎と云ふものあり今より四年前松前にと赴きたるまゝ雁の便りも音絶えて今は生死のほとすら定かならず家には五十六歳の老母三十一歳の妻女と二人の小兒あり家とし云へば立派の樣なれと實は見るもいぶせき藁小屋にて入口には古蓆を吊し裡は土間も座敷も差別なく僅に四五枚の蓆を敷きたるのみにて眼縁の爛れたる老婆は煙も細き爐邊に踞まりつゝ寒さを凌ぎ座敷の眞中には形容枯槁たる一婦人が襤褸を綴ひつ甲斐々々しくも井戸繩程の繩を綯ひつゝあり老婆は予に向ひて言へる樣老爺は死去てしまひ柱と賴む稼ぎ主は松前に行つたぎり音沙汰もなく、わしの腕はコレ此通り癰でしまい目は惡いし田も畑も何もゴヘンから

此嫁女にばかり繩を綯し小兒二人を合せて一家四人で活し來たのですが一日拂曉から黄昏まで綯て呉れても一丸しか出來ませんそれも以前は十錢位に賣りましたが今では七錢にて買つて呉れませんから兎ても食ふとが叶ひません米などは及びもよらぬとですから常には蕎麥粉に大根の干葉を混て食て居ますが其れすら最早食ふとも出來なくなりましたと袖もて涙の顔を拭ひつゝ破れ鍋の蓋取上げて己れが食物を示し僅かに殘れる數掬のものを指し此にて一家四人が今夜を過ごす積りです一人の奴はキナカラハヤ（昨日より）ハシカコ（痲疹）に罹つて寢て居りますと其臥床を指し示しつゝ又語り出して此間も役場から呼ばれましてお鞠間で御座りましたが今までも食つたり食はなかつたりで來ましたが藁だつてソウ貰ふとも出來ませんからドウして可いのやらモー〳〵死ぬより外に術はありませんと吁彼等は實に其言の如く今は既に生死の間に彷徨せり

饑饉の慘狀其二（時事新報社石濱氏報）

◎上北郡の慘狀　余は先づ沼崎停車場にて下車し夫れより順次視察して七ノ戸に至らんと志し徒歩國道に沿うて上りぬ立春以來當地は未曾有の暖氣にて道には既に深雪を見ざるも雪泥草鞋を沒して一歩も容易に着くべからず僅に十町が程の處を約五十分も費して辛うじて浦野館村字上野に達す冷汗背に浹ねし

●●●藁を食ふ　唯見れば道路より數間程横に入りたる處に今にも倒れ伏しなんとする藁葺の一軒家あり其模樣見るからに先づ哀れなり試に其家を訪へば折柄青黒き顏色の男二人古びたる手拭や首卷樣のものを頭部一面に卷き付け一見印度人と紛はれたるが板床に切りたる爐の火の氣もなきを打圍みて着のみ着のまゝ左も疲倦げに轉び居たり屋内には一個の武力罐の土間にぶら下りたるが見るのみ其他には目に礙ゆる物だになく蕭條の空家に似たり何を食し居るかと尋ぬれば板敷の一隅より灰色なせる餅やうの物を取出して是れなりと差示す

嗚呼讀者は此灰色の餅を何とか思し給ふらん是れぞ牛馬ならでは食ふまじき藁を乾し之を擣きて粉末になし扨蕎麥粉を混ぜて團く握り固めたるものにてありき餘りの事に余は霎時呆然たるのみなりしが男は頓て苦笑して此邊の者は之を食し居るなりと力なき聲にて附加へぬ此一事既に其慘況を說明して餘りあり余は復た多く問を試むるの勇氣なく此を辭して次の村に抵れば黑門嚴めしき一構へあり即ち浦野館の村役場なり乃ち刺を通じて畠山村長に就き窮民の事情を質せしに氏は余の遠來を喜びて諄々左の如く語り出でぬ

上北郡中第一の慘狀　此浦野館は新館、大浦、上野の三字を合せて總戶數五百八十七、人口四千八百二十四あり平年は田も畑も可なり出來中には米麥を他郡に輸出する者さへありしに昨年の稻作は四百何十町に對して僅に十四石ありしのみ又畑も平年なれば大豆二千餘石に上るの常なるが昨年は六十二石、其他稗も蕎麥も皆半作に至らず左れば農民は昨秋正に肝腎の種米を食ひ盡し地主も共倒れとなりて之を救ふの力なし又此邊の者は平生の日用品扨は飲食物迄も總て秋の勘定となし平素通帳にて一里先きなる七ノ戶より取寄することなるに昨秋よりは此便法も利かず已むなく物を賣らんとすれば買手のなきより彼等の苦痛困頓は日に〳〵增りて露命の旦夕に迫れる者今日にては新館に八十九人、大浦に四百六十七人、上野に七十五人合計六百三十一人に達し五月頃迄は兎も角も持ち堪へ得られんと思はるゝは新館に百十二人、大浦に八百四十四人、上野に八百四十五人合計千三百七十二人なり秋迄は大丈夫との見込ある者に至ては僅に百人內外もあるべきか實に此村は郡中第一の窮狀を呈しつゝあるなり

目下の食糧　以上の窮民を救助するの目的を以て目下村役場に用意しあるは寄附金五十一圓（其內の若干は既に稗買入の爲めに費されたり）稗五十俵に過ぎず尤も近々橫濱外人より金品の義捐ある手筈なるを以て尙は多少の恃みなきにあらざるも是れとて到底一面に行渡るべくもあらず

村役場に一文もなし　剩へ此村は數年前より赤痢の流

行を來し隔離室の新設等にて幾多の經費を支出したる揚句の果に昨年の凶作にて村税は少しも集らず已に財產差押に逢へる者總戸數五百の內三百以上に達しぬ以上の理由にて役塲には只千圓餘の基金ある外目下實に一文だもなし

學校敎員の俸給なし　左れば村費の多額を占むる學校費の中敎員の俸給は漸く融通して去月迄は定日に與へたるも本月は最早や其見込も盡きたり

慈善家を俟つ　斯る事情なれば差當りての救助法は切に世の慈善家に訴ふるより外に道なからんと畠山氏は語る

窮民の衛生　折から村醫後藤某來りて語りて曰く余は十數年來此村に住み農民の體格等をも一々よく熟知せり扨健康者の中には今日迄幸ひ一人の餓死者なかりしも顏色憔悴して神經衰弱に陷れるもの比々是れなり病人に至りては粗食の結果經過極めて惡しく死すましきに死する者頻々たり余の知る人に全家瘧眠せる者あり余は偏に此上消食器病の一時に流行し來らん事を憂ふるなり

飢饉の慘狀其二（中央新聞社員田民報）

◎一箇村內の窮民千三百餘人窮民の狀態は平地より漸く山手に入るに從ひ愈よ其困難の度を高め三戸郡五戸村の如きは國道に沿ひ可なりの塲所なるにも拘はらず右も左も山のみにて其間に僅田あるのみ且つ小面積の畑地あれども傾斜の度甚だしきと瘦土なるとに據り平年にありてすら收穫多からず况して昨年柄の凶作麥菽蕎麥等孰れも皆無ともいふべき有樣なれば之を上長苗代に比すれば慘害實に甚だし五戸は戸數一千五十一戸人口六千三百四十五人內男三千七十四人女千九百十五人なるが中に救濟を仰がざるを得ざる人員は實に一千三百十四人の多きに上りたるのみか日一日を經る每に五人十人二十人續々救助を村役塲に出願する窮迫の樣實に刻一刻に逼り來れるなり斯かれば餓死に瀕し全戸既に枕を駢べて動くも引くもならぬ憐れなる境遇に陷れ

るは

家族	戸主名	家族	戸主名
……	大嶋ひで	……	川崎なり
四人	川村留吉	七人	藤村爲松
八人	川村久吉	五人	川村巳之吉
五人	奥寺藤松	二人	西村富造
四人	猪森富之助	五人	立花爲吉
六人	太田勘太郎	五人	松坂清吉
四人	川村藤藏		

の十三軒なり一粒の米否稗一束の乾菜だになく松皮餅を食ひ藁餅とに忍び居れと夫れとて蕎麥粉若くは麥或はかけ菜等の配合なかりせば純粹の松皮や藁を食ふ譯には行かず强て食らはんか倏ち滿身水腫を來して斃る斯かれば父も母も妻も子供も彼所に此所に算を亂して眠れるが如く打ち倒れ少しも起つと能はず早や死を待つより外なく乳呑兒なとは呱々の聲だに出し得ずフロ〳〵虫の呼吸なるものあるは實に想像の外なり

然れば何人か之を救濟するか村役場及駐在所巡査等は窮民の慘狀を氣遣ひ日々各戸を巡邏し其摸樣を知り居るが故に夫々村内の有志と相談の上應急の手當を爲し救助米否粟稗若くは麥等を其日〳〵に分配し居れとも限りある醵穀は幾多の窮民を救ふ能はず左りとて成規の手續を履み救恤規則に依らんとすれば其取調の徒らに形式に流れて應急の間に合はざる故あらゆる手數を盡し餓兒の苦痛を免がれ居らしむる折しも横濱なる外國人の團躰より外國米二十五袋味噌十六樽を義捐し來りたる故ホツト一息を爲すに至れり然りながら之れも一時凌ぎに過ぎざる故日を出でざるに又々窮民を泣かしむるに至る必せり其慘憺たる狀況は實地を踏まざる人には知れざるなり、

飢饉の慘狀其四（時事新報社石濱氏報）

◎浦野館より七ノ戸　四日午後浦野館字大浦の視察を了へて七ノ戸に向ふ道は進むに從ひて險惡いよ〳〵甚だしく一歩一嚼備さに艱苦を嘗む、行くてと數町にして小字赤倉に差しかゝれる時數十名の壯俠何れも憔悴の顏色、枯槁の形容うら寂しく路傍に悄立して何事か

打ち語れるを見る、何事や起れると尋ぬればその中の一人苦笑して食ふ物もなければ爲る仕事もなし詮術なさの徒然に戶外のブラ〳〵步きを試み期せずして此に會したるなりと答ふ腹餓えて一事なく苦し紛れの散策とは何等悲痛の境涯ぞや余は其者の案內にて附近の一民家を訪ふ

藁の裡に潜む　屋內には耳順に近き老婆一人あはれ夫に死別かれ子には棄てられ寄る邊なきを人に傭はれて兎角して餘命を繫ぎ來りしに凶作の結果として被傭の途端と絕え食はず飮まずの苦痛を唯一人での陋屋の裡に忍ぶ者なりとぞ家に入るや案內者は直に余を暗き一室に導けり即ち老婆の寢室なり左れど室には人影もなく啻一隅に藁の堆く積まれたるを見るのみなりしが頓て案內者が二聲三聲婆さん〳〵と呼ぶに連れて不思議にも藁は搖き出しぬ唯見れば藁を排して先づ現はれしは白髮頭にて次には蒼白き顏面現はれたり案內者は語るらく此邊の人は藁を積み其上に莚を敷き襤褸をかけて臥すが例なれども此婆さんは一片の襤褸なく一枚の莚もなければ餘義なく獸の如く藁の中に潜り込み居るなり又婆さんは既に久しき以前より稗の糠にて露命を繫ぎ居れりといふ

◎七ノ戶の狀況　五日七ノ戶町長高橋氏と共に同町附近の窮民を視察す此日朝來細雪霏々、寒風怒號して其寒さ言ふべからず町長の語る所に依れば同町（總戶數約千）內に於て目下飢餓の旦夕に迫るもの約百五十人辛くも向ふ一箇月間を支へ得る者約二百人、秋までの見込ある者に至りては僅に指を屈すべきのみと

アモを食ふ　以上の窮民は何れも町裏に住む者にて容貌の甚だしく衰弱せる事、食物の貯へなき事總て浦野館に同じ但し此處の食物は全く浦野館と異なり多くはアモと名づくる蕨の根を食せり是より先き余は窮民部落に赴く途中七ノ戶川中に於て幾多の老若男女が列をなして木の根を洗ふを見次で橋を渡るに到る處の門前に鋸屑樣のもの丶堆積せるを見且つ板を打つが如き音響の凄まじきを聽きたりしが是皆彼等がアモを食物となす迄の手數を費しつ丶あるものなりき余は此附近に

て十餘家を觀察したるが其中或家にては頻に何物か炙て居たるを以て町長に向ひ其の何なるやを尋ねたるに彼は頓て一個の鍋を下し來れり觀れば矢張りアモの中に少許の稗を混せたるものなりしが偶々瘠せたる牛ありて食を求むる爲めにや余等の方に身を寄せたり町長は之にもアモを與ふるにやと尋ねしに家人は首を打振りてアモなんぞ牛は食ひませぬと何氣なしに答へぬ畜生だも食はざる物を人は現に食としつゝあるなり既にして家人はアモを製することの困難なる樣を語りて曰くアモを取るには毎朝二三時頃より鍬を肩に一里先きなる山に行き蕨のある下を五六寸程も掘りて其根を採り束となして持ち歸りたる後水にて土を落し次に吾家の板床に並べて槌もて微塵に碎き次に其碎きたる片々を槽（箱の形となし底には竹を張りて水を漉すやうに仕掛けあり）に入れて上より幾度となく水をかけ數時間を經て槽より引き出し更らに細末となして酢もておろし再び水をかけて干し漸く出來上るなりとぞ

馬、犬、鼠を食ふ　觀察を了へて歸宿せしに有志家の訪問頗る多く是等の人々の語る所に依れば窮民はアモところか實に非常なる物をも食せり唯何れも耻ぢて口外せざるのみ非常のものとは馬や犬や鼠の事なり此邊の者は牛にまれ鷄にまれ總て畜類を食ふを忌み又之を食ひし者を嫌ふの習慣なるに近頃は犬が馬の骨を咬へ來ること頻繁なる事、町には從來五六十頭の犬ありしに昨年は其數廿位に減じたる事是等の事實によりて察するに彼等が窃に畜類を屠りて之を食しつゝあると疑ふべくもなし又數日前町外の某家にて鳥なりと稱して炙り居たるは確に鼠に紛れなし現に翌日其附近に住む者は鼠の首の道上に棄てありしを發見したり云々

飢饉の慘状

（東京日々新聞社石塚氏報）

◎浦の館村民の窮迫　此村の大字は新館、大浦、上野でありまして戸數四百八十六、人口四千七百ばかりありますが昨年の稻作は全く皆無でして郡内第一の慘状を極めて居りますさうして露命旦夕に迫れるもの其他

を示せば左の通りであります

大字	人口	餓死且夕に迫れる者	五月迄支ふるもの	秋作迄支ふるもの
新館	三七九	八九	一一二	一二一
大浦	二、六八八	四六七	八四四	八八八
上野	八四五	一七五	四一六	一六八

平生の生活程度は至つて低いので米ばかり食ふものはなく粟、稗、蕎麦類を常用として居りました昨年は畑も至つて不作でありましたから雪降り前は山に行き蕨根、タラヌキの根、トコロ、薑に似た無名草を採收して之を稗の頭付と申します糠ぐるみの粉に混せ大根の干葉などをも入れて粥にして辛くも饑を凌いで居ます蕨根の花と申します澱粉は美味のものですが此は割合に少量より取れませんから早くも食ひ盡して「アモ」と申す糟屑やカトウ（水草）と呼ぶ蓮に似たるものや藁餅を食るやうになりました藁餅の製法には二樣あつて一は藁を細かに截り苛性曹達を入れ四五時間を煮とドロ〳〵に融けますから、之に蕎麦粉、稗粉、米粉類を混ぜて拵へるのですが此法は二升の藁餅を拵へるに八錢の曹達代がかゝるといふて是はやりませんモウ一の法は藁を寸断し鍋にて炮り臼にて叩き粉にして蕎麦其他を入れて普通の餅として食ひます降雪後は草根の採收は出來なくなつて困難に陷りました目下飢餓に瀕し居りますものは四百八十餘の内二百戸以上わり日を經るに從ひ倘百戸位は出來さうに思はれます、幸に横濱の外國人より救助品を義捐されましたから旦夕に迫れる極窮のもの六十戸二百三十人に米國米二合五勺味噌卅三匁宛毛布一戸一枚の割合にて夫々配與して居ります若しも之なかりせば今頃は全くの餓死を生じたので併かし被救助者の外にも略同樣の困窮者の多いには當惑致します

予は惣代人の案内に依り役場より程遠からざる一窮家に至る此は外國人の救助を受けつゝある分なりの言を聞き流して建家の割合に廣大なるを見廻はし縱み果てたる雨戸を押し明け屋内に入れば土間のみ廣くして板の間には一枚の蓆だもなく當年七十九なりと云ふ盲目の老婆は爐邊に蹲まりつゝあるも爐には大豆殻少し許

りを置き其上に蓋もなき茶鍋を吊しゐるのみにて今日此頃の寒さに何故火を焚かぬかと云へば此は今夜の燃料なり晝より焚けば夜が凌げませんと答へければ此邊は働けば薪炭は容易に得らるべしと問返へせしに否と、よ此處は山に遠いからさうは行きませんと答ふ少し低まりたる板間の一隅には四十位の一婦人が藁筵内にて泣きむつかり居る幼兒に力なき面地にて萎び果てたる乳房を當てがひ頻りに賺しつゝゐるを見、家内何人かと云へば入人でがすがオヤヂは松前に行き跡は此老婆と私と子供のみです、出稼ぎした時の金を如何にせしやと云へばソレで稗を買て今まで過ごしたですがハア此ベアー殘れりと二升に足らぬ稗粉（糠共細末にしたるもの）と厳のアモ數升とを持ち出し涙ぐんで此がなくなりやドウして可いやら分りません乳汁は出るかと云へば乳房を示し是れ此の通りで出ませんから泣て困まりますと附き纒へる他の三兒を叱りける更に老婆に何度凶作に逢ひしやと云へばケカチ（甚しき意か）い飢饉には三遍逢ひましたが死ねません前にもアモは食ひましたが今度ほとではありませんでしたと頻に何事か訴ふるも予のみか通辨役たる總代人にも斷々續々として遂に了解し得ざりしこそ憾みなれ

總代人に導かるゝまゝ同村佐々木某宅に至りしに家屋の構造は大同小異なりしが屋根も壁も一層古びたる内には三十に垂んとする一婦の二兒を擁して爐邊にゐるわり家内はと云へば四人にてオヤヂは他に手間取に出で不在なりと云ふ何を食し居るかと云へば稗と大豆とを混せたる粥を持ち來る上納は濟んだかと云へば食ひ物がないですから兎ても出來ませんオヤヂが時に手間を取つて來てもお上にベア取られて食ふとは出來ませんと答ふ

餓死の實況（三月部警士松尾氏の記）

昨秋作物凶荒を告ぐるや多數の小作民等は微に貯へたる穀槽をば忽ちに傾け盡して空乏となしトコロ（宿根草にして澱粉を含む）或は蕨の根を掘り或は草を刈

取りて穀粉と混じて食ひ或は馬、牛、犬、猫等を屠りて一時の飢を凌ぎしかども既に山野は雪を以て填められ地面は凍結して最早草根を得るに途なく犬、馬亦漸く盡きんとす是に於てか彼等は漸くにして身體的消耗を呈し來り今や是等の窮民は日一日に增し斯の如きの餓莩は刻一刻に迫り來らんとせり

然れども今日に至るまで飢餓によりて余が診察所を訪問したりしものは甚だ稀なりしなり今回と雖も余の見たるものは世に繪に見ることあるが如き羸瘦骨立亡者の如き狀を呈せるものとは異なる是れ如何となれば未だ絕對的に飢餓に陷りたるものにあらざるが故ならん是れ今は兎にも角にも食物として食するものあれば身體日々に消耗しながらも未だ道路に斃るゝものあるを見ざるなり

左れば余は是等の飢餓せる者の身體的症狀を述ぶるに先ち其日々食する所の食物の梗概を敍述し然る後一般餓者の症狀を述べ終に其の一例を示さんと欲するなり

◎食物　彼等の食物は多くは稗、粟等の糠を以て材料となす稗其他わも、藁、松皮等は重なる食物にして都人士の目より視ば殆ど牛馬だも食すること能はざるてと程甚だ粗末のものなり

一、稗、粟糠粥　是は稗若くは粟の糠即ち軟皮(第三皮)にして主に植物細胞膜及同纖維より成る微量の植物蛋白(クレーベルを含む香氣あり)に其の十分の一量程同樣の穀粒を加へ水を混じて煮沸し恖糜粥となす或は穀粒を加へず糠のみのものあり

之を食ふものは胸痞へ數日間便秘を訴ふるもの多し故に之に若芽(海藻にして昆布の如きものゝ類か)を混じて煮るときは食ひ易く且つ斯るてとなしと云ふ

二、わも(蕨の根にして澱粉を去りたる糟)是は植物纖維のみなり微量の澱粉を存す之に上等の側は蕎麥の粉或は多くは上記の稗粟の糠を混へて餅となす

三、松皮　是は松樹の軟皮を削り取り臼にて搗き細纖維となし煮てよく洗ひ絞り餅の基質となす

四、藁　是れ亦餅となすものなれどもわも稗糠等の如き常食となすにあらず本品及び松皮餅等は間食物なり

云はゞ彼等の御馳走なり又あも松皮餅等は古來より飢饉の食物として傳へ來れるものなれども藁餅は近來の發明品として大に喧傳せられ盛に製造し居れり殊に愚民より傳授料などを徴收して諸處を敎へ廻るものさへありたり是は藁を細く剉切し苛性ソーダと明礬とを加へよく煮てドロ／＼となし纖維のみとなしてよく洗ひ水より絞り取りて松皮の如き餅の基質となす即ち是等の基質に米のフカシ蕎麥の粉など二三分を加へて搗て餅となしキナ粉（大豆の煎り粉）を附して食す余も藁餅を食したることあるが紙屑を嚙むが如くにして中々に嚥下すること難し

五、其他の間食　として時と處により楢の實橡の實等を製して餅となし或は根餅と稱して蕨の根より澱粉を製して餅を造り食ふものなるが是等は何人も食するに足るべき御馳走にして從て其滋養價も高きものなり又楢葉の白煎などもあり

要するに常食として日々彼等の露命を繋ぐものは粟稗等の糠なればとて如何に多量を食すればとて是より身體を支ふるに足る丈の滋養分を吸收し得べくもあらず然れども如何にせん日々飢ては之を食ひ渇しては水を呑むが故に彼等は次第に血色薄らぎ行き皮膚の色艶失せて腹のみ膨れ上り果ては眼凹み顔衰へて歩行も難儀となり次第に手足顔等に浮腫などを起し來り斯くして數月を重ぬるに及びて漸々衰弱を來し甚しきものは骨と皮のみとなり或は斯の如きに至れば身體種々の機關は抵抗力弱くなり行き多くは腸加答兒に罹り下痢を起して死するものあり又或は傳染病殊に腸窒扶斯病等流行の爲め之れに罹りて死するものありと云ふ。

飢饉と仙丹

東京本鄕區駒込動坂町の靜松園に若樂を養ひ居る守田寶丹翁は飢饉の狀況の憐むべきを聞き輕便なる食物を製して自ら之を同地の窮民に致恤し又弘く世の篤志家に訴へ之を製造して授與せしめ大に窮民を賑はさんと思ひ立ち所藏の古書に黑胡麻と黑豆を原料となし之を蒸で蒸しする事一晝夜三回程に及び結局其二物を臼なり鉢なりにてよく突交ぜ拳大の形になし其一箇を一日の食料になす時は毫も饑を感ぜずとありしより早速黑胡麻三合に黑豆五合を前述の如き方法によりて突交ぜ之を一圓銀貨大に打貫き一個を三分して一食に充つる用意を調へしが食物の事なれば念には念を入れ自己が先此食物を實驗し他人にも之を研究し貰ひ過失なき證を得れば之を製して青森へ送らんとの事なりと

●大谷光瑞師の宗跡探險

眞宗本派本願寺新法主大谷光瑞師は宗跡探險の大志望を以て去る三十二年十二月日本を出帆し、爾來三年四ケ月を異境の空に過し、歐米大陸の宗務視察を始めとし、印度に於ける釋尊遺蹟を踏査し、幾多の險を冒して此の程漸く歸朝されたるが、其の間櫛風沐雨に浴し苦心以て探り得たる所の印度奇蹟談を左に紹介せん。

◎外人禁制の地　シャアラは古代佛教大乘の盛んなりし地といひ彼の大覺菩薩降誕の名地にて著名なる經卷は多くこの地にて記述され現に直徑百尺餘の石塔存せり隨行中の大多喜應師は英兵に擒せられて阿富汗斯坦に入らんとせしが同國は頑固なる鎖國主義を執りもし外人にして一歩を其境內に踏入るゝ時は殺害さるゝ危險あるに止を得ず思ひ留まりしが同國は大乘小乘兩教に關し有益なる地なり英國もこの國のみは手を付けず國王の招ぎと稱し一週に一回軍事通信を隷れて國內に入るを得るばかりなりとぞ

◎罪業消滅の碑　マルダンは有名なる古蹟なるを以て各僧分擔して數十里の四方を遍れく踏査し古趾古蹟を探りしに案外好結果を得て佛教史上に大關係ある阿育王（二千百年前）が暴虐を悔ひて幾十萬の蒼生を殺せし罪業消滅の爲め建立せし勅文を刻したる高さ三間巾七間の大石碑をも發見せり

◎前正覺山と鷄足山　猶此地には昔印度征討の爲め向ひし英將カンニバー氏の宗教を調査せし舊跡碑石等今に保存されありしを以て大に參考を得たるのみか時の俗間に名を知られし檀特山、マホメツト教を撲滅せし時代の古跡をも探り得たりこれより汽車にてラーホールに著し考古資料を以て滿とされたる博物館をも一見して少からぬ智識を得同地を發してガヤに至り四日間の探險の末彼の釋尊が入山して悟道を得んとして得ざりしといふ前正覺山をも發見し續いて二日間探險の結果鷄足山にも上るを得たり

◎二千年の古城　同地を出でナアメに至り一同象に騎して王舍を訪ひしが同城は二千年前の古城にて城趾十五六里四方の平野の中に在り雜草樹木一望果なきが中に猛虎出沒して物凄き地なり英國印度總督は虎狩の名所として屢ば同地に出獵するといふ

◎靈嶺の草木燒拂　この古城より二哩十四五間を距りて佛經に云ふ靈嶺あり非常の難所にて人の丈を沒する荊棘山を埋め古竹叢生して足を踏むのみか猛獸跋扈してこれまで何人も探險せし者なき程なりしが一行は是非とも同山を探らんと土地の人民を雇上げて道を切開かせ漸く一道の通路を造りしが何れが靈嶺なるか分らざりし爲其筋の許可を得て山燒をなし悉皆草木を燒拂ひたるに果して釋尊の說法せし祭壇等を見出したるが其困難非常なりし

◎夜中の警戒　探險の最終日は村民の男子百三十六人を殘らず雇上げ夜中は篝火を焚きて虎の來襲を防ぐなど警戒おさ〳〵怠らざりしがまづ無事に探險を終らしめたり同山の谷間には虎の餌食となりし牛、羊等の生首幾個も轉がり居り鮮血は所々に流るゝ等慘憺とて心を寒ふせざる者なかりしと

●康同璧女史の演說

康同璧といふは彼の有名なる淸國亡命客康有爲の息女にして芳紀正に二十歲、米國渡航の途次我國に立寄る、左に揭げたるは女史が去る三月十四日神田なる靑年會館に於て開催されたる第四回明治講話會の演壇

に立ちてなしたる英語演説の大要なり、

某今日來遊して貴國の狀を見て益々吾敝國の不振を慚る次第なり貴國と敝國とは唇齒の邦同文の國なり所謂「輔車相依唇亡齒寒」なるものか夫れ今者黃色人種の國自餘僅かに二國ある耳今又敝國の衰弱危亡に遭ふ豈に啻亡國を救ふの秋ならんや

敝國の病は全身にあらず一部限局のみ即ち僞政府頑固黨の拉條等の壓制の爲めに生じたる病なるを乃ち偶偶中風痰の病なり若し急に其風痰を開かば則ち立地に全癒すべきなり近く四五年の頃皇上を配謫し拳匪に通じ各國公使館を圍み外人を殺したるが如きは皆な榮祿の所爲ならずや茲に最も笑ふべきは昔日貴國及び外七ヶ國は其罪魁を求めて只脾將を得たるに止まる眞實の罪魁榮祿の如きは則ち依然として大柄權大に任ぜり噫何ぞ八國の大愚なるや蓋し各國の人敝國の情患に通ぜざるは猶ほ恕すべし只貴國人に至ては同文字にして而かも日々敝國の新聞紙を讀みて敝國の事情を知悉せざるは其愚を笑はざるを得ざるなり「中略」吾貴國が敝國の留學生を取扱ふの狀を以ても貴國が敝國を助くるを知るを以て甚だ感激す然れども但其病を審して其源を嘆ずる耳

彼の日英同盟は以て敝國を保護する所以なり敝國の國士大にして人民衆にして自から保つ能はず他人に依賴す其漸其恥又際に如何ぞや然りと雖も日英同盟して中國を助けば榮祿等益々益長せん榮祿は則ち口蜜腹劍各國其奸佞たるを知らず恐らくは將來又拳匪の如きもの起るを見ん敝國の憂は貴國の憂也

吾一女子たりと雖も實に國民たるの責任あり且つ家君曾て政を弼け嘗て朝に立ち敝國の休戚に任ず故に吾れ敝國の病源を知る他人より過大なりとす敝國病根は前言の如く中風痰に似たり風痰一たび消ければ立ろに全癒すべし況んや上捨身の聖主あり下發憤の國民あり人才漸く多く輝蓄亦漸く廣し今萌芽なりと雖も將に地下に布滿すべし皇上群を復し西后政を還し必らず須らく榮祿を逐ふべし日本の謀臣東亞を保たんと欲して投藥其病に中らず恰も天を仰で空を射るが如し故に深く嘆惜する耳

●博覧會と飲食物

博覧會觀覧の土產話なりとて此頃大阪より歸來せし人の語れる所を聞くに、館内の飲食物に就ては大阪警察署に於ても大に注意を加へ居るが如く數ある飲食物の内にて第一に輕便なるは模範牛乳店にて廣き會食堂を有し一人前三十五錢にて牛乳一合、パン、西洋料理三品、コーヒーを出し安價なる上直に持ち來る故非常の繁昌なりき又自由亭は五十錢にて食事を出し其他各所に信玄辨當と云へるあり十五錢と廿五錢なれども十五錢の分は量少なくして腹を肥やすに足らず鮨は十錢と十五錢なり又ゴタ羹と云ふあり薩摩汁に似たるものにて十五錢飯は四錢なれば相應の繁昌なり茶亭に休めば菓子とも五錢茲に京都なる虎屋の店などもあり其他ビール二十五錢コーヒー四錢位併し大阪人は大抵握飯を持ち來り構内のロハ臺にて食事を爲す樣子なりき云々

才媛詞藻

佐々木信綱先生撰

（天）柳　長門　春枝

江の雨しつかにくれて青柳の　けむりにこもる船歌の聲

評　平淡の景叙し得てよし、四句原作煙にやとる

（地）城　京橋　吉田竹子

老松に風をさまりて城わとの　蕗の葉さびし夕ぐれの雨

評　石堰のくつれなどに生しけるらむ蕗の葉の雨、音いかにしめやかならむ

（人）柳　大阪　田中松惠

その昔釣りにふけりしふる里の　小川のやなき今かもゆらむ

評　昔幼き時も思ひ出られて感深し

（人）柳　京都　氷室浪子

おぼろ夜を泣きて別れし故郷の　堤の柳今かもゆらむ

評　初句原作「おほろ夜に」結句原作「今もみどりか」

秀逸

城　大阪　仙田蒔

我が城の火の手を遠くうちみつゝ　稚子だける武者一人落ち行く

城　相模　葉山園子

糧も水も今はつきたりもろともに　城を枕にいさきよくしなむ

柳　青森　平山ちい子

ゆくら／＼柴舟くだる川添の　ひともと柳わめ靜かなり

城　河内　大矢たね子

崩れたるしろの石垣まはらにて
ところ／＼に藤の花さく

城　岐阜　岩間文子

國はろび城はくづれて跡もなし
松にのこれる矢叫の聲

柳　熊本　藤波むら子

門のへのやなぎに迎へ送られて
田くろの輿作今もひとり棲む

城　周防　石谷たづ子

六七騎追ひし聲切りふせて
見かへる城は煙とざしぬ

柳　羽後　菊地末子

奥都城の柳は又も芽をふきて
五年へたり姉亡せしより

初句以下原作「柳も若葉なせしかど柳になきし姉もあらすな」

城　長門　岩崎靜子

いかめしく築きし城も今はたゞ
茅はらかや原秋の風ふく

原作「鉄壁に築きし城も今は只見る影もなくあはれ由なく」

城　駿河　林すゞ子

石一つ城のかたみにとゞめおきて
見渡す限只麥の畑

二句以下原作「殘すのみ見渡し青き麥畑の中」

柳　膽振　河合春枝

苫船の夕餉の煙低う見えて
岸の柳に小雨そぼふる

上句原作「苫船に夕餉たくらむ煙見ゆる」

柳　長門　植村せい子

春の神入江の岸にたゝずらし
柳の糸の細くゆらぐよ

三句原作「たちませり」

柳　周防　大木國子

小徑つきて藪陰いでゝ一本の
柳ある家ぞわが乳母の家

結句原作「乳母の敬ゐき」

城　備中　本木まつゑ

もの丶ふの榮華の夢のあとやいつこ
秋風寒し高館の岡

原作「秀衡の榮華のゆめや高館の古城の跡に秋風寒し」

柳　　　　三重　吉村静枝

妹がすむ向岸の小村たそがれて
柳にわはき三日月の影

原作「妹すめる向岸の柳たそかれて畑を渡る暮鐘の音」

城　　　　埼玉　田島はるかせ

工場に通ふ破れ傘重い哉
父が失せたる城山の雨

初句原作「城ほりの面」

城　　　　北足立　三上常子

世は夢か主なき城の石垣に
ひかしてひしくすみれ花さく

下句原作昔しのひて菫さく也

柳　　　　弘前　平山ちい子

春の野の道の二筋青柳の
たてる方をやわけてゆかまし

原作「この道の末は二つにわかるゝに柳の道を右にこそゆけ

柳　　　　河内　櫻井喜子

糸柳の二筋三筋さはりけり
衣洗ふ子の白きおもわに

博覧會　　　　岩代　菅野和子

とりどりの花おもしろき難波津に
胡蝶の如く人つとふなり

下句原作「人並つくる春ぞにぎはし」

柳　　　　山形　野口菊子

あれはてし長者が門の糸柳
長き恨をくりかへすらし

初句以下原作「賤か門邊の糸柳さびし顔にも軒をうつ也」

城　　　　下谷　樂子

夕月は又たがために照るならむ
城は昔の姿ならぬを

博覧會　　　　美濃　波津子

とりどりの色をきそひて難波潟
花さく春のみゆきまつらし

改作

柳　　　　京都　十五少女

手向けつる柳の糸の長うなりて
はゝの奥墓苦むしにけり

原句「青柳の緑の糸の長き夜をいかにすぐらむたらちれの墓」

柳　美濃　向井富士子

青柳のけぶれる岸に釣る人の
　睡ゆたかに春風ぞ吹く

二句下句原作「匂へる岸に」「睡もよほす今日の長閑けさ」

城　大坂　篠崎もと子

このあたり名たゝる城の跡とかや
　茅原かやはら秋の風ふく

下句原作「無辜の蕎畑打てるとこ」

城　備中　村本たみ子

そのかみの名殘とゝめぬ古城の
　松の林に春風ぞ吹く

一二句原作「うちかへす波が千年を」

柳　佐賀　腹巻霜子

しめやかに春雨そゝぐ夕暮に
　君と別るゝ青柳のかげ

初句以下原作「別れ途にふる春雨に宿りて語る青柳の下」

城　弘前　三宅亮子

いかめしき昔の城もあれはてゝ
　桔梗野一里秋の風ふく

上句結句「やれはてし古城の森ほの見えて」「月すみわたる」

柳　上野　恒子

夕風のそよぐ柳の葉うらより
　宿りし蝶旅立にけり

上句原作「若柳の夕風そよぐ葉下より」

柳　山口　中谷音羽

賤のめは小鍬かたげてかへり行く
　野路の柳に春風の吹く

原句「夕日かげせになひて行く少女子の袖にもつるゝ青柳の糸」

柳　東京　上山すみ

しめやかに春雨けぶる柳かげ
　蛇の目行くなり川添堤

一二句原作「蕭々の雨そほぶりて」

柳　金澤　森美子

すなほなる春の女神の息吹かも
　柳のとかに春の風吹く

一二句原作「野に戯る若き二人か」

柳　和歌山　龜井きぬ子

道風のおもかけ浮ぶ青柳に
　春雨はれて月おぼろなり

初句以下原作「蛙しらべし糸柳靡いておぼろの月をやとしつ」

柳　　讃岐　みさを

流れ清き小川の岸のやなぎかげ
衣を洗ふ人なつかしき

下句原作「米とぐ少女の姿なつる哉」

柳　　河内　富田好子

吹くとても更にしられぬ春風に
なびく柳のすなほなるかな

原作「人の身に吹くともわかぬ春風になびくはかとの青柳の糸」

柳　　滋賀　日下のぶ子

父上はこの世にまさず植ゑましし
柳ばかりは青葉茂りて

上句原作「すぐる年うゑし父上いまさぬに」

柳　　静岡　宮城錦子

夕月の柳にほふ土手の上を
酒買ひ返る里の少女子

原作「おぼろ月の柳亂るゝ土手の上をひさごさげて急く子や誰れ」

城　　下總　しらゆり

父君の戰死の城とみわぐれば
やれし櫓に秋の風ふく

下句原作「高き城壁只春の風」

博覽會　　石見　青柳秀子

このたびは博覽會を見がてらに
とひ來ませよと乳母の玉章

下句原作「せひに來ませと乳母か玉章」

柳　　伊豫　谷川わさ

香華持つ翁や何處青柳に
春雨かすむ御陵のわたり

初句以下原作「翁は何處夕暮に青柳茂れる御陵のわたり」

城　　神田　たかくぼ

ものゝけのいてしと云ひし古城の
まつか枝すこし冬の夜の月

初句結句原作「妖怪の」「てらす月かげ」

柳　　神田　たかくぼ

たそまめのすかたとや見ん春風に
そよ〳〵なびく青柳の原

二句以下原作「青柳の川上遠く霞てぞ見ゆ」

柳　　佐賀　山邊菊代

漕ぎ下る白帆の影も見えずなりて
青柳烟ふる河添堤

上句原作「漕ぎ來る白帆の船の顯はれて」結句「河添の下」

柳　長門　安藤登世子

泣く雁を一人すかして旅にゆくわが背を見送る青柳の門

前句以上原作「三ッ四ッの稚兒の手ひきて背な見送れる人うつくしも」

城　甲府　かづさ子

遠つ祖のこもりませしと祖母君のきかせたまへる城あとの山

原作「つはものゝこもりし跡と祖母君の話なかばに椿の花ちる」

柳　千葉　小出文子

里川の川添柳打けぶり菜畑麥畑かせのどかなり

初句以下原作「青柳堤風のどかこゝろ靜に打けぶるなり」

佳調

城　岩代　齋藤苫子

男の子らが戰ごとすでに終りぬと城ふしおがむ飯盛の山

城　小石川　渡邊すみ

かすみたつ空はむかしのまゝなれど菜の花さけり大城のあと

柳　本郷　堀口きく

洲中に一本古き川柳昔はこゝも流れなりけむ

柳　神田　村瀬靜子

一もとの柳木かけまゝことのすみれしぼみて夕風ぞ吹く

柳　伊勢　白井きの子

夕暮の柳なはてに静なりぬさては我背子今今かへるらし

城　横濱　石川たか子

崩れはてしお城の跡に咲きにけり椿一と木昔ながらに

柳　神奈川　川井あさ子

手鞠つく子らはかへりて我園の柳しづかに春の雨ふる

柳　岡山　森　子

千鳥なく鴨の河瀬の夕風はちりて流るゝ青柳の花

柳　周防　中村てる子

若鮎つる里のうなゐの影たゑて川ぞひ柳雨になりゆく

柳　高木町　三上靜子

吹く風になひくと見せて中々に折れぬ柳の操高しも

柳　志摩　濱口しづ

[illegible]いて柳の枝垂くぐりてし亡き子の姿今も目に見ゆ

城　千葉町　小出君子

うなゐらはすみれ摘みにと今日もきぬ風のとかなる城あとの山

柳　岩代　菅野和子

春風にみだれてうつる水底の柳の木の間魚むれ遊ぶ

柳　日本橋　岡田照子

青柳のよれつもつるゝ下蔭に網なふおきな網繕るなれば

柳　相模　角田貴子

午の鐘遠く聞ゑて江の村の青柳堤風ゆるうふく

城　芝巴町　かれ子

霞れがちとききあくる空をきゝてほゝゑみしまゝに摘ねしわが友

城　岐阜　君岡文子

さきつゞくすゞなの末に城見ねて城の松か枝霞たな引く

柳　長府　大久保金子

宇治〳〵と長き春日を青柳のいとものどかにあそぶ子等哉

柳　中澤　野田貞

青柳のもゆる頃とぞなりにける友をさそひて逍遥びせん

柳　秋田　佐々木梅子

川ばたのしだれ柳のそよ〳〵と吹く春風に身をまかせつゝ

柳　弘前　浅田文子

春風まかせてなびく青柳は女の道のしなりなりけり

柳　佐賀　古賀信

佐保姫の恵みにのびし糸柳東風吹くまゝになびきぬるかな

柳　佐賀　副島スヱ

のどかなる小川の岸の糸柳春の光に今ぞ芽ぐみぬ

城　伊勢　森木さいち

守り居し主の慎もこもるらん松風さむし城あとの山

柳　石見　青柳秀子

姑の目傘一つ見ね行く川堤の堤の柳雨とぶるなり

城　大阪　島君代

朝にけに満洲大野露草すきてひとの話もつきぬ城かな

柳　芝　若園やへ

浜霧ものぼる旭に解け初て露の玉ぬくあた柳の糸

柳　下谷　藤原久尾

たつれつゝ我古里に来て見れば柳その儘君は世になき

柳　大阪　田中松嵐

波しよふ草もとたねて波し橋のやなきをぐらく春の雨ふる

柳　大阪　樋口益

春風ははや吹そめてさるさばのきぬかけ柳打けぶる見ゆ

城　千葉　すみ子

ますらをの草がたりもいつかたねてとゞしびくらき城の中哉

城　本所　和田すゑ子

うなゐらのまゝごとなせる此の野べは古き御城の跡とこそきけ

柳　本所　土田信子

いにしへの栄ね跡や今いつこ高かや繁し古城の興

柳　伊豫　山本千里

旅立の門出にむすぶ糸柳の心もとげず君をしぞおもふ

柳　群馬　花代歌子

病みませる君にみせたき青柳も惜しむ春風に手折り除れけり

柳　鈴木　原田伊津子

春来しも人こそ知らぬ谷川の岸の柳はめぐみそめけり

柳　和歌山　ふた葉

春風になびく柳のわかみどり花におとらずうるはしくして

柳　八王子　山上しげ子

春風の吹くたび毎にみたれつゝ庭にあや織る川柳かな

柳　長門　今藤ふじ子

停車場にかよふ夜路の老柳片枝は枯れて片枝めぐみる

城　陸奥　平山ちい子

武士がそゝぎし血汐に土こねてはる草あなし古しろのあと

柳　岐阜　仕南米子

渡守花にうかれて去りにけん舟すてゝあり青柳のもと

柳　　　　つゆ子

その青駒つなぎけんしろあとのかどに殘れる青柳の糸

柳　京都　角川まつの

雨止みて水音清し桂川岸の柳の色もまさりて

柳　奈良　みとり

青柳の風のまに〳〵まかせつる心を人の心ともかな

城　千葉　小出秀子

ときめきし昔の城はあれはてゝたゞ書にのみ今は見る哉

柳　茨城　山口すみ子

水底に生ひいでたりと見ゆるまでうつろふ柳の影しづかなり

城　麻布　樺子

大刀風に散りにし春もありぬらん血しほ色なる城の紅椿

城　美濃　莊加不二子

雨の降る夜半には靈に飛ぶならむ百舌が音さむき城跡の山

柳　岐阜　柴田清子

雨細う柳にそゝぐ風の橋蛇の目小傘の二つ行く見ゆ

柳　芝　吉田松枝

鶯のすさびにさしゝ青柳は駒つなく泣なりにけるかな

柳　美濃　莊加圭子

楓はかれ木々は黄りて古城の奥にはのあたり鳥のなく

柳　信州　原しづの

人もまたかくあれかしとなびくらん風にまかする青柳の糸

柳　尾張　森溪美代子

水きよきかきへ小川にくちけぶる柳の糸に春風ぞふく

城　津市　濱靜子

菫咲き少女集ふこの野べは城あととしもおぼえざりけり

柳　京都　松井せい

加茂川の水にさらせし青柳の糸のどかなる春は來にけり

柳　岐阜　すみれ

渡しよぶ聲にいらへて小舟漕く清き流に青やぎけふる

柳　和歌山　たもつ

春やきのみとりのかげに佐保姫は春のにしきをおり出すらん

柳　常陸　田村瀬子

みちのべになびきなびける柳かげ旅人いこふところなりけり

博覽會　信州　山本まつ子

めぐり〳〵所をかへて來てみれば昨日の人にまたあひに鬼

博覽會　東京　後藤ちか

世の中のくしき品々よせて見る御代の惠をなにたとへん

城　神戸　鷲山如雪子

秋深し訪ふ人跡たねはてゝ昔忍ばゆ城跡の月

柳　諏訪　林竹子

池のおもに垂れし青柳なびくなり吹くとも見ねぬ風やふくらし

柳　阿波　はる子

來ん年はともに生けんとさし植しやなぎもゆれど君は世になき

柳　麻布　松田しづ子

かりそめに亡き兄が植ゑし青柳の芽をふきそめぬ墓の畑に

城　大村　兒玉まき子

名殘なく昔のあとはあれはてゝ花のみのこる大村の城

柳　大阪　森崎光子

いつしかと池の氷もとけはてゝみぎはになびく青柳の糸
柳　八王子　佐藤こう子

若草のもゆる入江のかたほとり柳一もと芽をふきにけり
博覽會　埼玉　石井ふみ子

外國のその寶まで集めつゝもてはやし見ろみよとなりける
城　埼玉　石井ふみ子

年をへし城あとゝへば荒はてゝ見ろかけもなし畑にして
柳　神戸　田村榮子

ふくとなき風のまに／＼打なびく姿のとけき青柳の糸
柳　備中　大西政代子

見返れば母の姿もおぼろにてかどの柳に月淡く射す
柳　東京　伊東あふ子

春雨に柳の原の染められて下ゆく水に波のおや織る
城　麹町　うちだ政江

古城はあとなく荒れて奥庭の高かやかくれ鳥の音悲し
城　高知　高橋ゆき子

ものゝけのいつてふうはさてちそめて村人訪はぬ城あとの森
城　周防　富田のぶ子

しろといふしろはあれども實田の千代田の城そ尊かりかな
城　加賀　加瀬より子

おもかけのわつかにのころ大城の天守にすごき弓張のつき
柳　松山　鈴木そよ子

利に狂ふ人しづまりて門川の柳の梢月おぼろなり
柳　仙臺　新井まつ子

ゆうれいの古こと聞きし雨の夜は庭の柳もおそろしくして

女學世界懸賞和歌兼題

（〆切四月十五日）
（披露五月　五　日）

田家首夏
牡丹
都

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

女學世界懸賞文

▲**家庭日記**（二十四字詰四十行限）
▲**寫實文**（三十行限）
▲**雜文**（二十四字詰四十行限）

◎〆切　四月十五日
◎披露　五月五日
◎賞品　以上三種中より甲乙丙秀逸を選び十五名に呈す

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛させらるべし▲投書原稿一切返却せず

甲賞

春の野邊

周防　中谷登羽子

そよ〳〵と吹く春風の日々に暖氣を催し門邊にたれし青柳は風に靡きてゆら〳〵と。さながら我を招くが如くに思はれ。百千鳥のさゑずる聲にうかれ出で野邊の景色を見渡せば。畑一面は菜種の花の咲きつゞき恰も黄金のむしろ敷つめたらんばかりにていと美くしく。彼方の堤に一もとそだちしだり桃は色美くしく咲き出でゝ行きこふ人の手毎に折られ。床のかざしや小兒の「おもちや」又は書齋の机にかざゝれて文よむ人の心慰にもなりつらむ。あゝ彼の花の面白いかばかりぞとそゞろになつかしく我も一枝手折らんと歩みをはこぶ折しも小川のせゝらぎはさら〳〵と靜かに流れ。向ふの河岸に今を盛りと咲き亂れたる八重櫻或は此方の岸邊に集ねし老松の影も其間に水底にうつりて。手に取るばかりの美くしさ得も云はれぬ風情なり。あゝ花は紅柳はみどり。錦繍をこきまぜて花の錦の春景色。雲雀は空に舞ひ上り。彼方此方に乙女子は袖ふりはへて。嫁菜たんぽゝ土筆などとり〳〵に摘草なす。後ろの方を見やれば川岸のふとき岩に腰打かけ小さき籠を傍に置き麥藁帽を阿彌陀にかぶり身には手なりの田舎木綿の長羽織を引かけし中學書生と思しき若者二人釣さほたれて、しきりに水底を眺め居たるなり。折しも情なき風はいづこよりか吹き來りて櫻の梢にさはれば。美くしき花びらは。はら〳〵と落ちて流るゝ水に漂ひ行くあはれこの花いづこの岸にか止ぬらんと花の行へを眺めやる折しもふと水面に浮びし蛙等は中睦ましく樂しげに遊び戯むるゝもいと面白く。向もはるかに見渡せば。向の山の麓を薪かつぎし賤の男の三たり四たり家路を急ぐ樣は恰も一ぷくの畫の如く。峯にたな引白雲は散りにし花のかたみとも見ゑて。眺め見あかぬ春の野邊

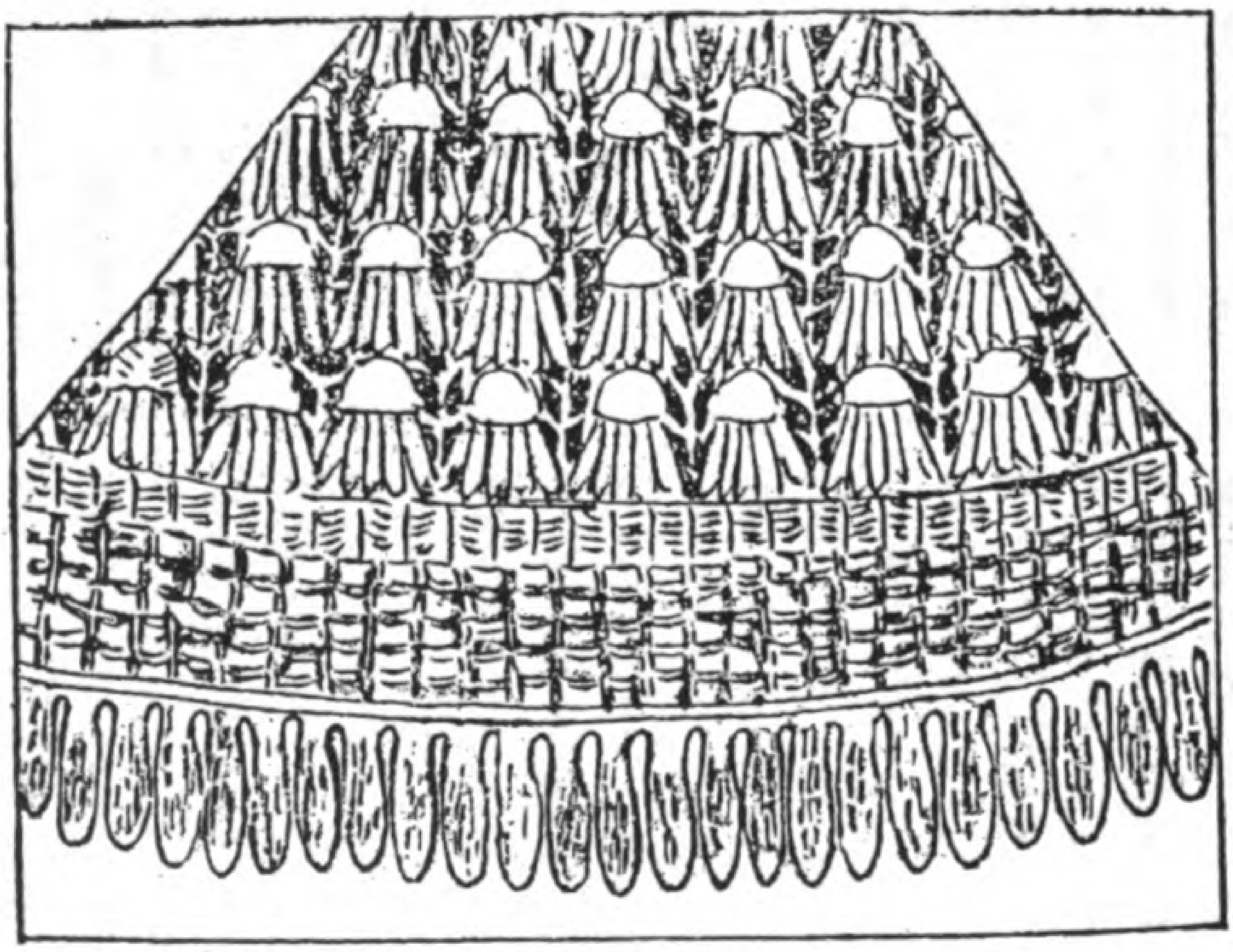
紅梅にそへて友の許に

麹町　齋藤花

かるた會の夜の御寒きにおじ給ひてか打ち絶ねてのみおはす君如何し
給ひし哉もあの夜を終りにて候べし
此頃折らし打ちしめり候春雨のしめやかなるに
朝な〳〵花の便りもちら〳〵見え初め候
此次の日曜日は必らずよ、など人の思ひ〳〵に打ちさはきおはしますも
多きを。また例の病おこし給ひてか
四季折々のうつり變るけしきおもしろしと眺むるもまた樂しとかこつ
も皆人のむこゝろに候を
廣さを云へばわずか三坪ばかりなれ共
金貨をかけて移し植にし名木もなけれどといつもわらはが願い
からしての自まんのそれ
あの折るさきなばとの給ひしそれ
雨の夜雨三日のうらゝけさに昨日やう〳〵南の方一枝二枝匂ひ初め候
眞におくれ勝なるやとに是のみはめづらしう
冬枯の破れ庭わずかばかり有る松もかしはも皆我ぞときはのいろと
ほこ顔の中にから紅のちら〳〵と木の間かくれにほゝゑみたる樣の

しほちしさ
誰れかあはれと見侍らざる可き妹にさい手もとられさせ申さゞるなれど我家忘れ給ひし御恨み言ひふくめて一枝おくりまゐらせ候
あけそのゝ朝御机により給ひての はかなき想ひより醒め給ひし時 此はなのやさしき口ひろより何事をか語るを君 さとき御胸にさとりまさば
御好きのあの詩集もち給ひて
春淺ければまだ此頃は月も冴ね渡り候
例のしぶ茶に 梅ぼし位は おはしまし候を
一日
花にかけて わたらせ給へそれに末の妹の今日住吉に上りしとて 今度來給ひし時打ちあはせんなど 花も人も先日いたゞき候からに人形までまちはび候に
あまり若き姉にせわやかせ給いぬ物ぞ
あなかしこ

肩掛意匠 たんぽゝ



し賞

春の田園

攝津 田中瑜璞子

春雨晴て後の一日病後の氣保養にと牧場の方へ散歩に出た。牧場と云つた處が別に營業として居るのでもなく只だ父の一の娛樂として 山羊が少し計り飼てあるので。然し場所は可成廣くかつ少し高みの爲に見はらしも一寸宜い。箕面山。池田山からづーつと六甲山、中山なぞの連峰が屛風の如に北から西へと取り圍で 前は一面の麥と菜花の畑、つひそこの池の水は青々として油を流したかの樣、ゆるく小波がうつてゐる。其塘には二三匹の山羊がもね立つ樣な若草をしとねとして 暖い 春の日のみ袖にいだかれて、すや／＼と眠てゐる。白い和毛がきら／＼と光る美さ 其はまばゆいばかり。

四山の麓には 薄霞がさつと一と刷毛はいた樣に棚引て 其中からは 如來寺の塔が恰も浮たかのやうに顯てゐる。此所より暮の鐘がポーンと鳴る時はやがて山羊は檻に入れられ田夫は一家の 業に終日の勞を慰むるべく三々五々牛を引つれ 家路をさして急ぐのである。

半町計りへだたつた 象棋の駒の樣な藁屋からはトーントーン、と眠むそうな藁うつ音が聞えてくる。すると其眠けをさますかのやうに 鵠が勇しく二聲三聲 なきつゞける。多分椿でゞもあらふ紅の花が其時風もないのに鵠の美しい羽の上へ一つ落ちた。

自分は此平和な彩色に心うたれて。いつの間にか若芝の上に座てしまつ

第参巻 第五號

た只だもうつとりとして幾度美しい雲にでも乗てふは々々と大空高くさまよい行くかのやう。

歌の聲にうちのせて君をば吾は運びてん。ガンケスの野に和らかく美しき地を吾はしる。とおぼねずハイチの譯詩を口ずさんだ。

不圖丘の下の灯を見おろすと三四人の女童が袂を背にまき紅の裳を掲げて笹舟を面白さうに流して居る、あゝ自分も一度はあんな無邪氣な時代があつたのだ。今から思ふとおかしいが切角流した舟が浮がおくれに時の悲しかつた事今に覚えて居る。それにいつゝしか、かつて下すつた、あの茂ざんや、千代さんは今は何處に入らつしやるだらう一度逢ひたいものだ、いや逢つた處で一寸互にわかるまひ……なぞといろんな事を想て居るとぐい〳〵袂を引くものがある驚てふりむくと仔羊だ！いつの間にか小山羊が出て來て餓てゐる餘り可愛のでかろくいだき取てまたも。やさしく賢き仔羊はあるは廻りつ舞ひつ、行手遙にきこゆるは清き流の波の音。と今度は聲高く啼ひつゝ牧場の扉をあちこちと、あてなく、さまよふた。

東北凶作を救ふを友にすゝむ

京都　氷室浪子

新聞で、見ますれば、此頃青森縣は、大凶作で、お米や麥が、少つとも無いので、住民は何にも喰べる物がなく、其れは其れは、哀れな有樣で、山へ行つて、草や木の根を掘つて來て、喰べたり、牛馬を殺して、喰べてたさうですが、それすらも、今日では、なくなりまして、手飼の犬や猫を喰べまして、漸く露命をつないで、居るさうです。其の上、衣服家財は皆んな、賣盡して、食物にかへまして、ないので、この寒いのに、單物一枚きりて、夜着も着ず、其のまゝ、寢るといふ有樣だ、さうです。あの邊は、御存知の通り、去年、凍死事件が、ありました地方ですから、此頃でも、きつと雪が五尺も六尺も降つて、嘸寒いとでしやう、その寒いなかに、食物もなく、たつた單物一枚の薄衣ではどんな人だつて、生きては居られませんでしやう。ほんとに、可愛さうぢやありませんか、妾しは、これを聞きました時、ふう氣の毒で氣の毒で、涙がこぼれました。幸ひ私達は、こんな天變にもあはず、安樂に暮らして居りますが、若し萬一、この哀れな人々の樣に、衣物も、食物も、なくつて、困りましたら、如何でしやうか、いくら泣いても叫んでも、仕方がなく、只世の慈善家の救ひを、まつより外ないでしやう。ですから、妾達の樣に、無事に、着物にも、食物にも、不自由のない者は、この難儀をしてる人々を、出來るだけ救ふのが、人の勤と考へまして同志の者五六人が、いくらなりとも、御小遣の内から出し、又不用の着物や足袋などを、出し合ひまして、遠い奧州の果で飢ゑて困つて居る同胞に、贈らうと存じます。もう昨日、先生の御許しを受けましたから、皆さんにも、御すゝめして、願つて居ります。

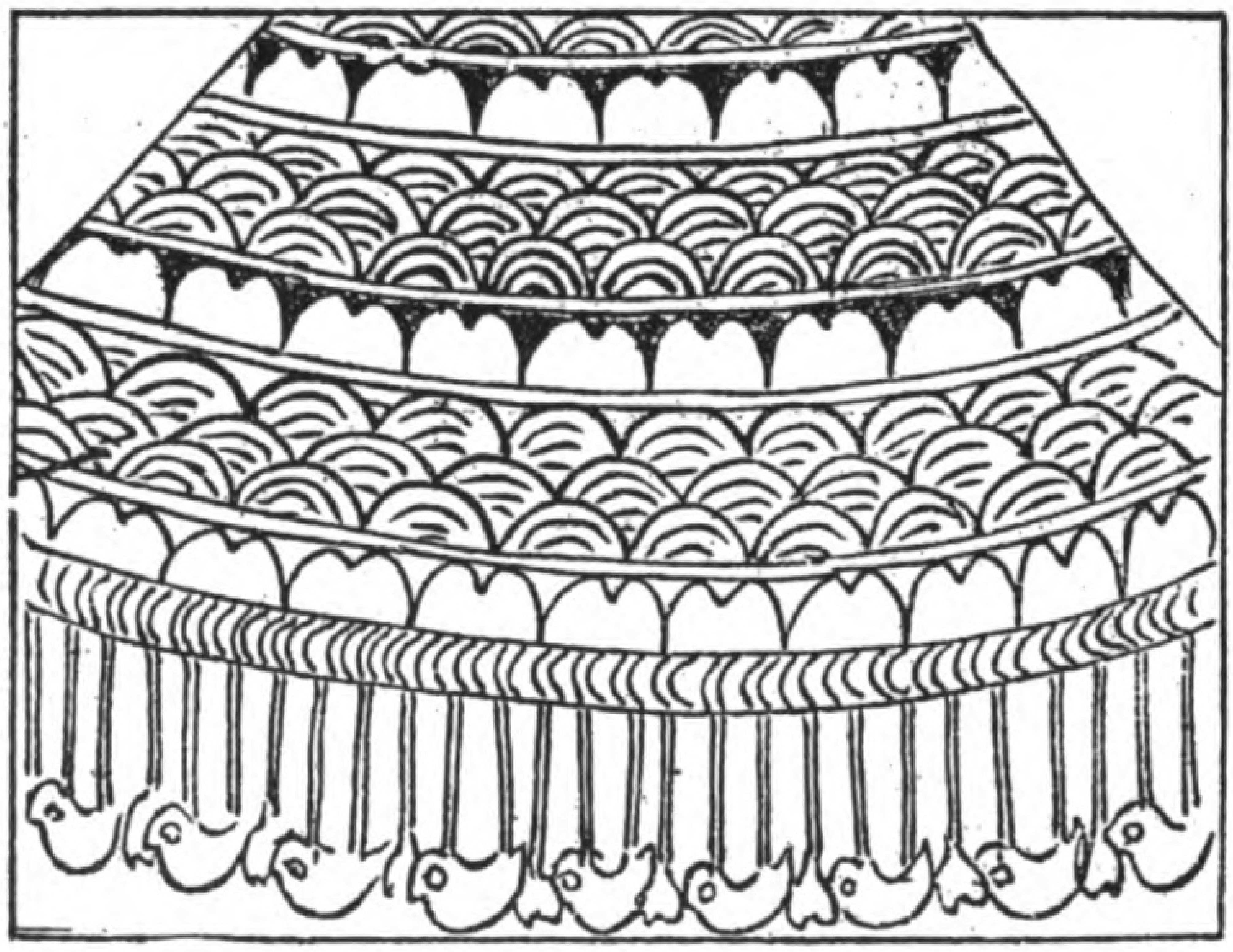
あなたも、この哀れな同胞を救ふ妾達の志を、御賛成下さいまして、假令いくら少しでも、よろしう御座いますから、御出し下さいまし。御返事は、明日、學校の歸へりに、御宅へ伺ひに出ます。何卒よろしう願ひます。草々。

梅の盛りの頃親しき友の許に

小石川 西川わかな

こぞは諸共にたのしく龜井戸のわたりに遊び候ひしも今年はいかなるまが年か庭の白梅盛りもまたで母はとこしなへにさめずなりぬひねもすうつしゑに語りくらしあるは墓參りでのほかたのしみなく空しき法の名に涙をそゝぎ候のみ今はしも母のめでたりし庭の花もま盛りにやれやの軒に匂ひ荒庭の風情をそへて候よそを見るにつけても母の事思ひいでられ日毎に思ひの深くこそなりまさり候へいつまでかくてあるべき血の涙をしぼるともいにし人はふたゝびかへりまさじなげきはよみぢのさわりとかや少しは心を散らせかしと家の人も遷りし所へ行きみずやなど申し候へだてなき君様にはいつか私が父母のおくつきにも詣でてむとのたまひしみことばもありかたがた我が宿の梅の折枝たづさへて母のみはかに手向けながらかへさには靜けきあたりに梅たづれしならばと思ひたち候やさしきみ心につけ入るにはあらねども諸共に御いで下さらば母もさこそよろこび候はん片田舎のつくろはぬ垣にかをる梅が香音なれぬ鶯のほけきやうの聲もあはれふかゝらむと存じ候 我がまゝなる御願ひなれども御心もあらばあすの日曜に朝のほどより御いで下さらばやかしこ

屑掛意匠　みやこどり



兩賞

病中都の友におくる

茨城 山口すみ子

うら淋しきこの磯邊も春の光のみち渡りて、立ちこむる霞は紅の色深う、鷗とびこふ海面の景色も長閑なる今日この頃を、眺める空もなくかきこもりて、いたつきの床にかひなく横たはれる妾の身、あはれとおぼしやらせ給ひてよ。扨も都の春風はいかに吹き渡り候はむ、戀しき君のほとりにさゝやきて妙なる初音をもたらせしか、文よむ窓におとづれてやさしう落花吹きよせては、限りなきみやび心をうごかしまゐらせしかと、只々御地の空のみ忍ばれて君戀しさのやるかたなくぞ侍る。あはれ常ならましかば、朝た夕べに袂つられてかたみにはげみつはげましつ、いよいよ文の林をわけいらんに、すこやかならぬ身の悲しさは、枕に通ふ濱の松風、磯うつ浪の音より外に語らん友なく、

嬉しき事を嬉しとかこちて、あぢきなうみ空の星を眺めいりては只々思ひみだるゝのみにて候。あるは思ひ出の夢路にやさしき君がみ手にすがりて、松原つゞきの磯づたひを、楽しく語りかわしつゝ貝拾ふと見て、濱の夜風にさめての後も、そのまぼろしにあくがれてむ、ありし日の嬉しき事どもそれよりそれと思ひいで候ものから、またと甲斐なき身のかこたれて、友よびかわす磯千鳥のなく音もいとゞ恨めしう思はれ申になん。されど兩三日前よりくすしの許しを得て、あたゝかき夕べ／＼心のまゝに磯づたひするに、松吹く風琴を調べて、春の海のいとのどけく夕榮の光水に落ちていはん方なく美しきに、その折は病と忘れ果てたる心地いたし、身も心もすが／＼しうおぼえ申候。御いとまもおはしまさば申露きこの身あはれませ給ひて、こゝなる柴の戸叩かし給はらずや、さらばいかばかり嬉しからんを、只空しう友よびかわす千鳥の聲にのみ泣かせなたまひそ。

おのゝく手におぼつかなくもこの手紙書き終り候折しも、白きねまきあげし寝室より、さしいる月は浮雲はれて清らかなるに、とく我身も病の雲霧はれよかしと念じつゝ、昨夕拾ひし貝の一片と共に、今宵の月影なもまきこみ封じいれ參らせ候、申上度事は濱の眞砂の數つきず候へど筆もつ手倦しうふるひて頭いたうおぼえ候まゝ、よろずは御たいめの折にこそと、まづはあら／＼かしこ

久しく音絶えし友のもとに返し

周防國佐波郡入野村　石谷田鶴子

別れまゐらせしより五年經たるに なほ御忘れもなく文給ひたる嬉しさよ何と申へまつらんか あまりの嬉しさに 打ち臥べし紙上に戯れしらず涙はら／＼とこぼし候思ひ亂るゝまゝに筆とればまゝでもあやなき我文のいや亂れんとする耻しさ何事もとがめ給ふなよ

扨いづれより引出さんか 心の絲の亂れに亂れて 一筆毎に昔戀しさとなつかしさのまさりて胸はあやしうも閉ぢられつ、君ならで誰かかくもやさしき文給はらんこの年月をこゝ山深く谷せまりたる里に起居軒端の山垣根の流友となす身も日として樂しかりし其かみの事忘るゝひまも候はず 昔の様を思ふと共になつかしき君の事まづ思ひ出でられてこよなう嘆ひ暮せしが 昨日今日深山ながらも春の光りに誘れて何となう心長閑に覺ねはすれど 妾はなどか樂しかるべきあゝ友もなく文も學ばず何か世に嬉しき事のおはすべき月に花になつかしきは褊城の空戀しきは君たちよいかに過し給ふらん 妾ははかなき運命に日毎／＼泣くものを其かみ君と別れし悲しき秋も 其後四度廻りしが 年は年よりいや思ひ出の數添ひて いやなつかしさもまさり侍りき あはれ其間嬉しき事悲しき事も數多かりしが 語るべき友もあらねば 只獨窓打つ風に洩らむのみ行末遠くはかなき望抱きしも今山里に眞柴こるべき身となりてはこゝ谷影の岩がれにかひなき命終ふべきや あはれかくなりし身も五年昔の頃は君と共に一つ机に文よみたるよ なほいつまでも忘れ給はずは他に願ひもあらじ且つ打ふしの消息美はしき 御文ども給はずや耽さんとする事此のみには候はれど いかにせん筆拙ふて 思ふにまかせずいつまでも昔の友を捨て給はぬ御情忘れはし侍らじよ 春とはいへど夜風まだ肌寒ければ心し給へ風をなめしぞ

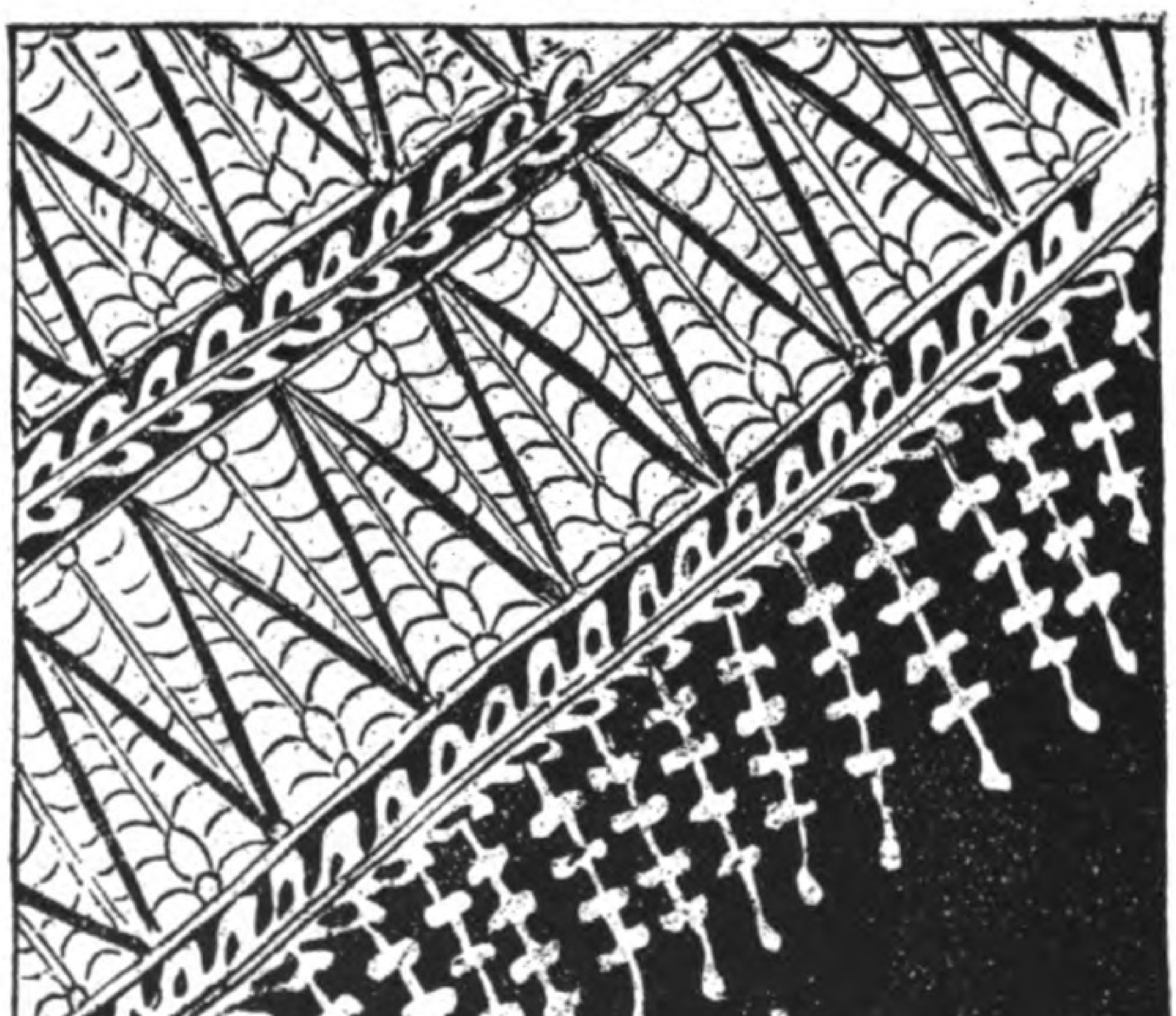
賞外

春雨のすさび

大阪　井上登美子

世はおしなべて花になりぬ、この頃の長閑なるけしきに、人の心も浮き立ちて、かしこの花壇こゝの花園とたどりてゆく、十里の長堤たゞかぎりなき匂ひにつゝまれて、綾の袖布の袂、さながら白雲をわくるに似たり、醉ひしれし人のあやしげなるさまして、ざれ歌うたひからく〳〵と笑ふなどむくつけく、むれつどふ人をかきわけて馬車をはしらせ、塵をけたてゝゆく人いと腹たゝし、女のあられもなきさましたるが、恥らへるけしきもなく、男と共にたはれありけるなどは、覺えず面のそむけられてなむ、あはれ花もし心あらば、いかにわびしとかこつならむ、折しも空の花曇りし雲を捲りたらむ如くなりて、一陣の風さとふくまに、雨ふり來れば、それ雨よ衣なぬらしぞと、今日をはれと着かざりし娘をかばひゆく親心のあはれなる、人々のさわぐを見て、手に持てる團子うち捨てゝ泣きまどへる幼子のいぢらしげなる、醉ひしれし人の雨ときゝて正氣づきけむ、蓑かぶりて足もそゞろに走り出づるさまの可笑しげなる、そのさわがしきいはんばかりなし。朝まだきよりふりつゞきたる雨の、なごりなく晴れて、夕日山の端に殘りいと花やかなるに、日もやうやう暮れはてゝ、霞の間より三日月の影、ほのかにさし出でたるは、玉だれの内より匂ひやかなる袖口のこぼれ出でたる心地ぞせらる。

旅の中なりとて、なつかしき人のとひ來たるに、四五日はとゞまり給へと人々のすゝむるをも、しいて翌日は出發せんとする夜若し雨ふらばとゞまり給へといひて、あすは嵐そふ雨だにふれかし、さらば出發ものびなんにと、星のそらを怨みていねたる夜あけて、うら〳〵と長閑けきことによき朝となれば、とゞめんと思ふ人々のいかに口惜しからまし、さなくて雨などふりゐたらんには、とゞまる人の心のうちいかにわびしからまし。



肩掛意匠ふじの花

春雨の幾日もふりつゞきて、今日もまた物淋しく暮れ行く、軒の玉水しめやかに、香の煙ゆかしく薫る園の内まで聞ゑきて、いと靜けき文などに、かゝる雨しめやかにふる今宵こそ、琴搔き鳴らして打諷かむは、いとゞ心のゆくべけれ、琴はあれども彈くべき人なきをいかにせむと、うらむ人の心はうちもしめりぬべし。

櫻見に友のもとへ

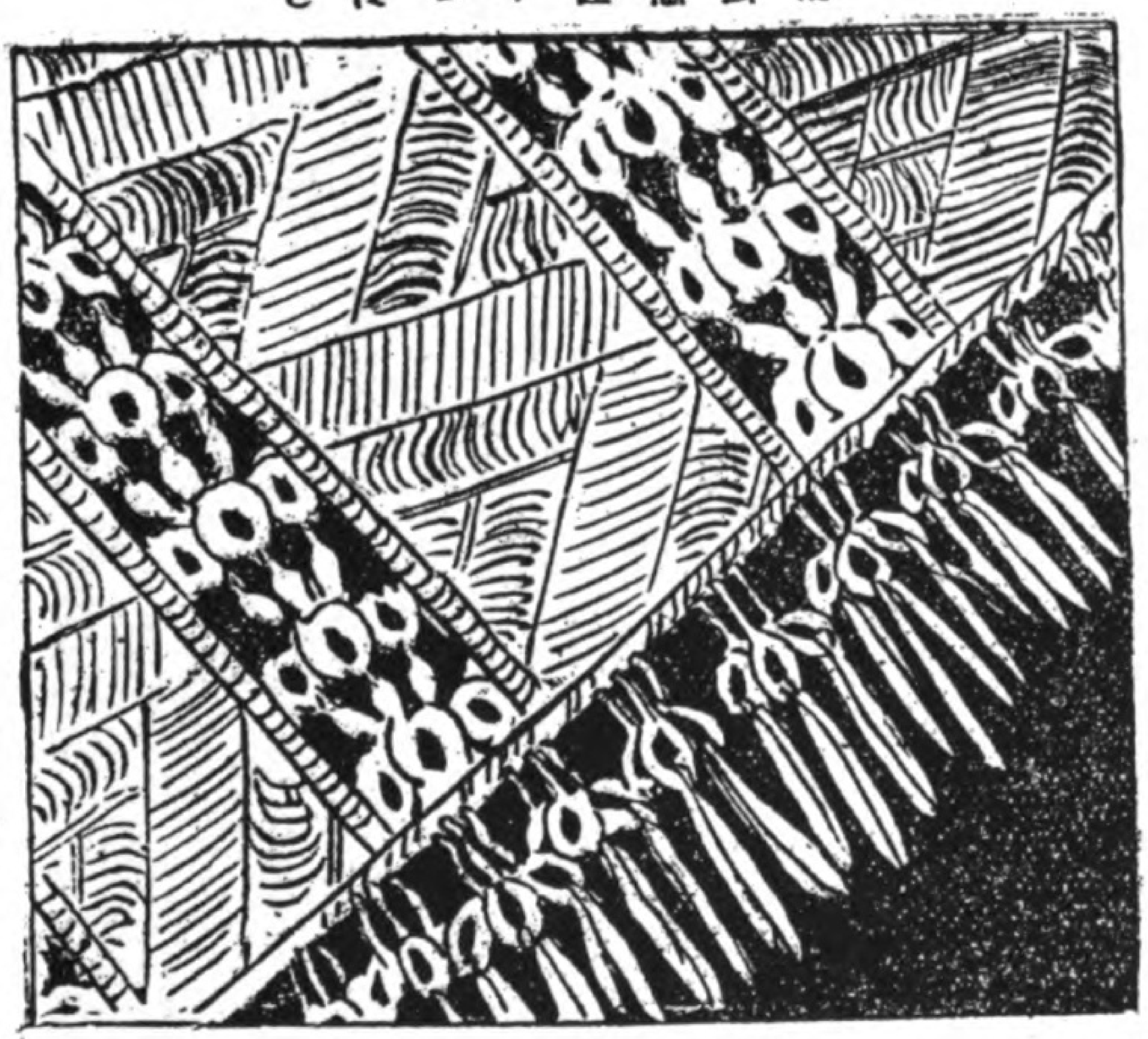
紀伊 米田時子

最後は一ひらの文もさし上げず打過ぎ侍るを、はや、匂ひぬる花も霞みとあやなし、いたらぬかたもなく、いと麗らかに物おもしろき空となり侍りぬる、

御許様には、この春を如何にながめさせ給ふらむ、定めし御二方を初め皆々様打揃ひ樂しく遊ばせられ玉ふらむ、

さて、日頃しめやかに音づれし春雨に催されて、をちこちの櫻花下紐ときゑみ樂しく咲きそめ侍る由、聞き侍り、誘ふ嵐あらば、やがて散りなんなどきくにつけ、心あわたゞしくなり、夜半吹く風に雲と降らぬまに訪はむと思ひ侍りぬ、

幸ひ、あすは日曜にて暇なれば、おさないもなど打つれて、根來あたりへものせば道のほどもよく、面白ろき話しつゝ、愛でしき草つみ又はよもの景色などを、例の優れる、御歌などあまた詠み給はゞ、あるじを初め、笑みし櫻まで、一きはの薫をふかめ侍らむと思ひやられ侍るまゝ、させる障こともあられずば、御伴致し度と思ひ侍るまゝ、御出のほどひたすらねぎ來る、必ずおぼしたゝせ玉はらめ、よろづは道すがらきこゑはべらむに、かしこ、



肩掛意匠　やつはし

春の一日

越後 小坂美壽子

春の夢路の心地よさに、曙をも覺えず。うまいせる床邊に近く、日頃愛せし籠飼の鶯の、さも友待ち顔に法華經と呼ぶ聲に、目醒され、あわれ臥床を打ち離れ、窗の戸押しやりつ。あたりを眺むれば、庭前の梅の梢より、さしもろ日影いとうらゝかに、井さら川に添ふろ青柳は、そよ吹く東風にゆら／＼と、緑くたれ髮も梳りあへず、水の面輪に姿移すなど、げにおかしき景色なり。わらはゝ日頃の怠りに、今日こそ幸ひ日曜なれば、學科の復習せんと、一人書齋に入りて、文机に向ひ繙とけど、何となく氣の浮き立ちて、文讀む業も身にならず。折しも妹の玄關より小走りに、「姉さま／＼あの春野の梅子さんがお越しだ」と云ふ聲に驚かされ、あはて出れば、なつかしや、日頃學びの窓にいとも親しき梅子の君よ、今日は緑りの黑髮、したゝる計りに美甘／＼と桃わりに結ひ、名も愛らしき蝴蝶のかんざしひら／＼と、縮緬の中形のお召物に博多の帶を立矢に結び、日傘を右に花籠を左りに持ちつゝほゝ笑みながら「毎日學びの業にのみ

たれこめいたらんも如何なれば、今日は氣晴らしに、近き野邊までお遊びは如何」と、誘ひ給ひし御言の葉に、飛び立つ計り嬉しく、讀みかけし文もそれぎりにして。其れより三人打ち連れだち、立こむる霞をわけ行く袂のいと輕げく、道すがらもえ出づる若草の青々と、こゝかしこ、菫、つばな、つくぐ\しなど摘みはやすわらはが聲を、森の翼しなれて、行きつもどりつ飛びかわすを、ふと手にもとらへつべくて、其の興あるまにやゝ進み行けば、黄金銀金織られたるやうに、百千花の今を盛りと色に出で、ゆるやかに吹き來る春風に、そよろなつかしき香を送り、餘りの美しさに思はず知らず、先つ頃師の君より教はりし野邊の唱歌を三人もろ共に、聲高らかに歌ふも、こよなき樂しみなり。むし野邊にあくがれて、歸りをも打ち忘れいたるに、ゆくりなくも黄昏を告ぐる鐘の音に驚かされ、ふとあたりを見やれば、いつしか日は西の山ふすまに入りて、塒にかへる鳥の一群又一群。吾等はやうぐ\暮れ渡り行く野路をいそぎつ。東空より姿やさしき春月の、吾等が名殘を惜みてか、影も淡くほのかにかゞりて、出でたるさま、げにおかしき。春の眺めに飽く者ぞなし。

雛遊び

赤坂　小林幹子

兼ては親子の君の、まねかせ給ふに、けふ午後より赴きぬ。親しきに、なれては、案内もよばで、入りぬるに、「母様きれいに、切れてよ、見て下さい。」聲は、ふすまの外に、聞ゆるを。さては君の先頃、のたまわせつるは、「御雛様には、御馳走して、御見せ申ますから、きつと、御出下さい」との御話し、思ひ出でては、御ありさまの見たう、勝手、知りたる身の、臺所へと、なしむきぬ。赤きたすきに、白き前掛けして、今しもくさぐ\の、料理して、居ますに「今日は有難う、さつそくまいりましてよ、」と「まあよく、御出くださいまして、」とは君なりき、「一寸御覧下さいよ」と、かいぐ\しげなり。母君の、うれしげなるさまに、「どれどれ」と、出で來給へり。女子のはや、十六にも、なりぬるを、何時までか、物作る事、知らでおるべき、今日こそは、出來そこれぬやう、料理して見よと、かつは、母君の先づ、庖丁取り給ひぬ。「かく持てゝ、魚はこうよ、」とのたまひつゝ、初見に教ゆる如く、持方より、しめし給ふ、御情けの、深かるを、見るにつけても、母持たぬ身の、今さらに、うらやましうも、涙ぐまれぬべし、やがて、小さき雛の、並べるに、五ッ六ッ七ッばかりの、をさなきを、はじめ、十二三の君たちの、かしこまり、居給ふもをかし、箸持つ所の、愛らしさ、かたみに、こぼさじと、ときそひつゝ、うれしきゑくぼの、かくしもきれず、居給ふさまの、あいらしとも、愛らし。やがて「桃から生れた桃太郎」と、聲ひとつに、歌ひつゝをどり給ふさまの、萬ず雛だんに、かざられし、くさぐ\の物に、なぞへて、かたちよく我れをわすれて、遊び給ふに、我さへも、をなじ心に、なりぬべきを、雛の君には、如何に面白う、おはしまさむと、思ふに心なき、桃の花さへ、こぼれ落ちぬ。色々の遊びに、手足も、つかれし頃には、はや歸るべき、時來れりとの、しらせに、まぶたこすりつゝ「いやぐ\」と母君等、困らし給ふ、さまこそは、

懸賞文募集

女學世界定期增刊 (六月十五日)發行

ひめゆり

投書〆切五月十五日限

才媛詞藻 夏の卷

我が女學世界は婦女文藝の進歩を圖るの目的を以て、來る六月十五日を期し、定期增刊『夏の卷』を發行せんとす『姬ゆり』即ち是なり、意匠の斬新なると資料の有益多趣味なるとは今更喋々を要せずされば先づ編輯の準備として汎く作品を天下の女學界に募る、懸賞課題等は下に記す如し時は是れ初夏の好時節滿眸の新綠映發して妍を競はんとするの時、乞ふ徐ろに錦繡の心腸を練り華麗の筆を揮はれんことを

文種

▲**小說**(文体隨意)
二十行二十四字詰にて紙數十枚まで

▲**和歌**(夏季雜題)
端書に一題一首の事

▲**新體詩**(題隨意)
三十句限り

▲**消息文**(言文雅文隨意)
二十行二十四詰にて紙數一枚限り

▲**普通文**
●女子と交際
●海又ハ山(寫實的美文)
二十行二十四詰にて紙數二枚限

賞品

特賞
金拾圓 壹名
金五圓 壹名

甲賞 金三圓(圖書切符) 六名
乙賞 金貳圓 仝 六名
丙賞 金壹圓 仝 拾二名
秀逸 金五拾錢仝 三拾名

注意

▲特賞は小說の優等者に限る
▲和歌の高點は別に乙賞以下にて相當の賞品を呈す
▲課題文はすべて寫實文に限る
▲原稿二枚以上は紙捻にて綴る事
▲封筒には必らず『姬ゆり』と附記すべし

笛の音（天）

（李白の詩を譯す）

名古屋市
木挽町六番戸　奥島ひで子

おぼろにふくる春の夜を
かなしき音に笛吹くは
いつこの家の風雅男か

柳なびしかし吹く風に
都の空はひろくとも
ひゞかぬ隈やなかるらん

ひとり靜かに耳とめば
更けゆく夜半の小枕に
きこゆる曲や折柳の

旅にさすらめふわれならば
思ひは多きうたゝ寐に
戀こそまされ故郷を

牧場の夕（地）

根室國根室町
彌生町一丁目　向井えい子

牧場もる星の子等
遠く遊びて未だ歸らず

日はくれぬ月出てぬ
春の野の邊に霞こめたり
詩にかわき歌にうゑたる
若き人世に棄てられて
今一人靜を見んとや
夕暮の星を數へぬ
戀ひの君もあもり來ずとか
み空には興味なし
のぞみに離れ力なくねたり
空しくもまたや歸らむ

第壹卷第了號

讀經（人）

橫濱市
老松町二　河野やま

哭く音の
細りまよふ
理に近う
澄りこき
紗のとほり
低く垂れたり
細き鉦の
音はたゆぬ

念珠の玉
つまぐりて
目を閉ぢし
僧ひとり
徐ろに誦す
經は何に
法華經か
あらず是れ
是れ佛說
阿彌陀經

香はつきて
僧は去りぬ
風なくて
灯ゆらぎ
水仙花
一ひら散りぬ

才媛詞藻

隣の稚子

伊賀國阿山
郡河合村　村尾倘子

例へは赤き林檎の實
それにも似たる頰の色
もの言ひたげに人を見て

ほゝゑむ顔の愛らしき
閨の稚子に何やらむ

汝を遺して汝が母は
冷たき土となりぬるを
また年行かぬ汝が姉の
守唄うたふ聲きけば
そゞろにものゝ悲しくて

夕ぐれ門の逍遥に
抱けばかろく我が腕に
もたれて小さき手をのべつ
口にふくみし鬼灯の
赤き色をばよろこびぬ

み空に雲の色はねて
鳥は塒かへり行く
暮れては風の寒かるを
いざ坊さんと姉の背に
渡せば稚子はすれて泣く

又も我手に抱き取れば
たゞうれしげにほゝゑみつ
姉る指さす夕空に
折しも出でし新月を
心ありげに見つめたる

其のまなざしよさながらに
盡きぬ泉のおもかげを
人の夕にほの見せて
み空にかゝる星のごと
清くすゞしくかゞやきぬ

心もうれひ身も愁ひ　悄然として眺むれば
夕べ空しく日は暮れて　牧場の草に春雨のふる

うれひ

静岡縣濱名郡新所村　鈴木なを子

ふと目はさめぬ五とせ　心の酔におどろきて
うきこの身を眺むれば　はや我春は老いにけり
あゝ我人の知らぬまに　心の色はあせやすし
胸う大ちふみぞり葉の　わかき今もいくばくぞ
黒髪われをおほふとも　血汐はわれを蝕むる共
花口びるをかざるとも　願ひは胸をいたましむ
理想も戀も浮ける雲　秀でし才はいづこぞや
涙も夢も草の露　流れて更に聲もなし
歎長くいなゝきて　勇める駒の狂ふごと
又は眼もむらさきに　青草原をおどるごと
わかき心のおどりては　韁も綱も捨てけりな
そは何故の心にて　こは何故のまぼろしぞ

武士

日本橋區濱町二ノ一
二嶺七五號渡邊方　岡田照子

編笠の武士一人、
經卷の桐に涙散る、
城落ちて二十年、
恩あり古城の跡。
夕照す墓の壁、
鐵衣倚明昧に、
旌旗か名殘のぞ、
肉の屍き所。
今は早游は還まし、
幽愁の空に一條、
燃る火、あらず流星、
いなとよ殿の魂魄。
住みし跡いで弔はん、
登りしは五層の樓、
紫の雲閃めく夜、
あなや、血潮迸る。

露

つゆ子

むら立つそのあした　花さく途に来てみれば
野山をかざるさほ姫の　涙のつゆかゞやきて
のべの草々光りあり、
暮につかれしその夕　尾花の許をとめ来れば
秋を色どる立田姫の　何に心の亂れけん
月に輝く露しけし、
君を忍びて堪へねとき　蟲の巣なきをかこつ時
朝日に月にかゞやける　その白玉を掬ひなば
胸の曇りは晴れぬべし、
朝は花に身をよせて　夕はつきを友となす
静けき露をさながらの　君の涙をみてしより
物のあはれをしりしみは。

助け船

神戸市　岡田美知代

船は礁にのり上げて、
天命のうちに人々の、
助を呼ばふ聲すごく、
狂風怒濤の音に和し。

あはれ悲しき破れ船は、
浪はたかくまたひくゝ、
暴風の拳によろめきつ、
人はほづなに固着して。

此世の終り来し如く、
怒濤に鬪へ喘きつゝ、
悲哀のうちに只一つ、
救のふれをまち望む。

見よ浪の上の一片を、
扨も勇々しき振舞や、
此の大浪に他の船の、
いかでやいかで助船。

勇に剛なる水夫らは、
衣はぬれて帆とべど、
腕のかぎりこぎこぎて、
只破船に道をとる。

やがて水夫は人々を、
死のあぎとより救取り、
陸の彼方に運び行き、
又もあやうき浪の上に。

そこに一人の殘る時、
うきつ沈みつ人の聲、
命惜までこぎて行く、
あゝ勇ましの助け船。

春里

大阪府泉北郡　北上神村　井上とみ子

西湖に匂ふ高楼の、
おばしま近く眺むれば、
烟霞は閉つる山々の、
麓に咲くや花の雲。
笑聲起り鳥歌ひ、
霞開きて花は咲く、
南山の西西湖の東、
春は織おる家々や。
濁る世知らず狷介の、
罵聲を聞かず鳥を聞く、
眠る世知らず厭世の、
泣く人を見ず花を見る。
春に楽しき此里に、
人はうれしき此春を、
知る人ありて人あらば、
世に憂やなからんに。

新編 女學案內

一名 女子處世法

中判洋裝美本
寫眞銅版數葉入
四月下旬發行
定價稅郵未定

此書は女學世界の責任者松原氏が女子教育に對する多年の抱負を筆にしたるものにて立言の根據は專ら婦人をして獨立自營の氣象を養はしむるに基き、文章は平易流暢を旨とし、丁寧親切よく利害のある處を辨識して聰明なる婦人の智識に訴ふ、書中々、諷諭諧謔の筆を弄して時弊を刺し、或は毒筆を以て單刀直入婦人の弱點をゑぐる處あり。世間未婚の婦女子は勿論、花嫁、主婦、母親、いづれも新日本の淑女たらん人は一讀して著者が萬斛の涙の如何なる點に向つて濺げるかを知りたまふべし。

目次

裁縫實習

女子裁縫高等學院長　小出新次郎

今回より本誌の委囑に應じて讀者諸君と相まみゆるに至りしは誠に余の光榮とする處である然しながら淺學の身にしあれば果して能く讀者諸君に滿足を與へ得るや否やを知らず唯責任の重きを知りて誠實に筆を執る考である

尚ほ讀者諸君に向つて御斷をして置ねばならぬ必要がある外ではない諸君の内には隨分斯道に熟達せし方々も多くあらふと考るがまた極めて初進の人もあるであらふと考ふるのである其れを一括して双互に平等の利益を與ふると云ふ事は隨分至難である因て少數繁雜の嫌ひを免れ得ぬ事ながら毎回極めて簡易なる事と又少數高尚なる種類とを擇びて記述し兼てまた教授法をも差し加へ以て兩者の參考材料に資せんと思ふのである諸卿幸に之を諒せられよ

●女兒五才袴

従來女子の袴には五才袴などは無きものであるが當今は大ゐに着袴を奬勵されまして幼稚園に通ふ四五才の幼兒迄着袴せられる樣になりたれば殊更茲に女兒五才袴を案じて記述する事にしたのである諸卿幸に之を諒せられよ

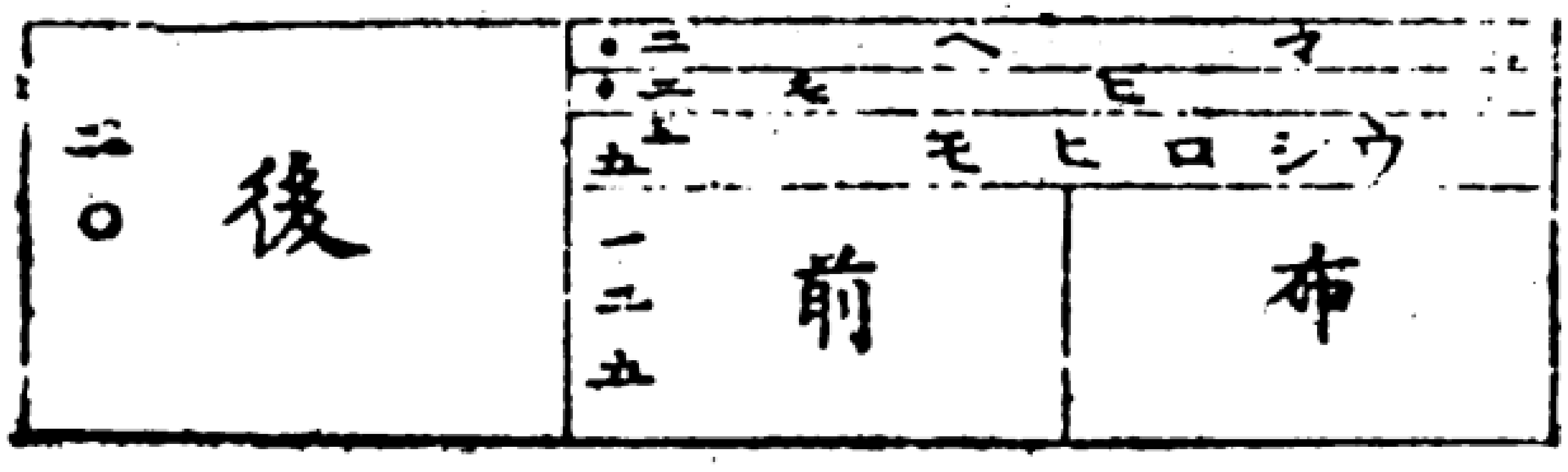
▲女兒五才袴積り方

貳尺巾の布を以て紐下一尺三寸上りの女兒五才袴を造らうとするには用布何尺を求むればよいので在ふか

方法

先づ紐下一尺五寸になりを八分加へ夫れに縮くけ代五分を加へ上の縫込貳寸ほどを加へたるものを後丈と看做しそして下の圖に示せる如く後丈の三倍にて全部の用布に

丈後163×3＝用布4830



足るゝのであるから算術の採り方は下の如くにしてよいのである

全裁方

裁方は先づ後丈を一尺六寸三分として一とたけとり殘り三尺貳寸餘りの端より貳寸巾に前紐を二たすじとり次に三寸五分巾に後紐一とすじをとり殘りを横に二つにきり前布とするのである

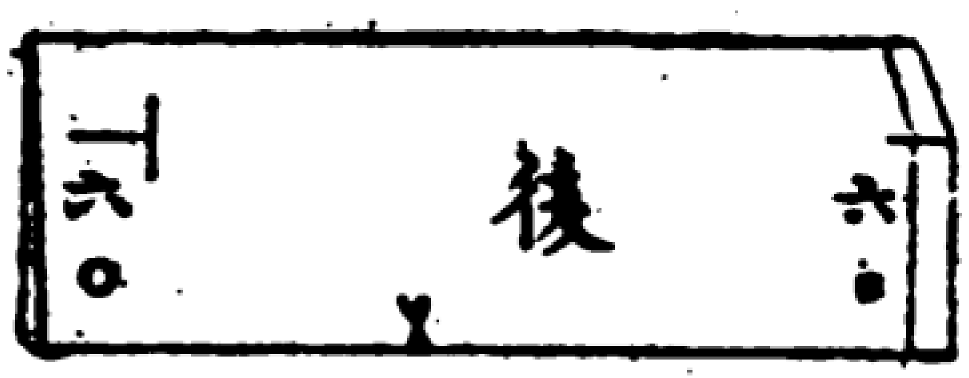
全箆附

先づ後布を中表に縦に二つにをり第一圖の如く輪を向ふにして正敷をき角は右の布はしの曲りを正しくして次に右の手前より向ふへ後巾六寸と極め箆印をつけ其の箆より向ふの端しにて三分切り下けの箆印をつけ其の箆と手前の大寸の箆とへ斜に引箆をつけ其の箆に習ひて裁ちきり次に第二圖の如く裾くけ代五分と各所に箆印をつけ夫れより左へ後丈一尺三寸八分と箆印をつけ其の處で又後巾を六寸ときめ次に手前の處で相引を裾くけ代より九寸貳分（後丈の三分の二と）極め箆印をつけるのである

第一圖



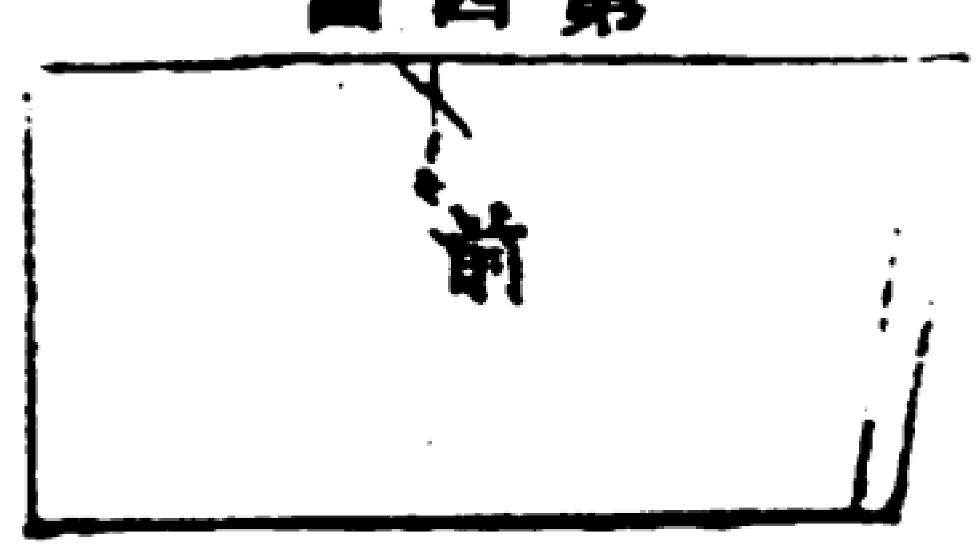
第二圖



第三圖

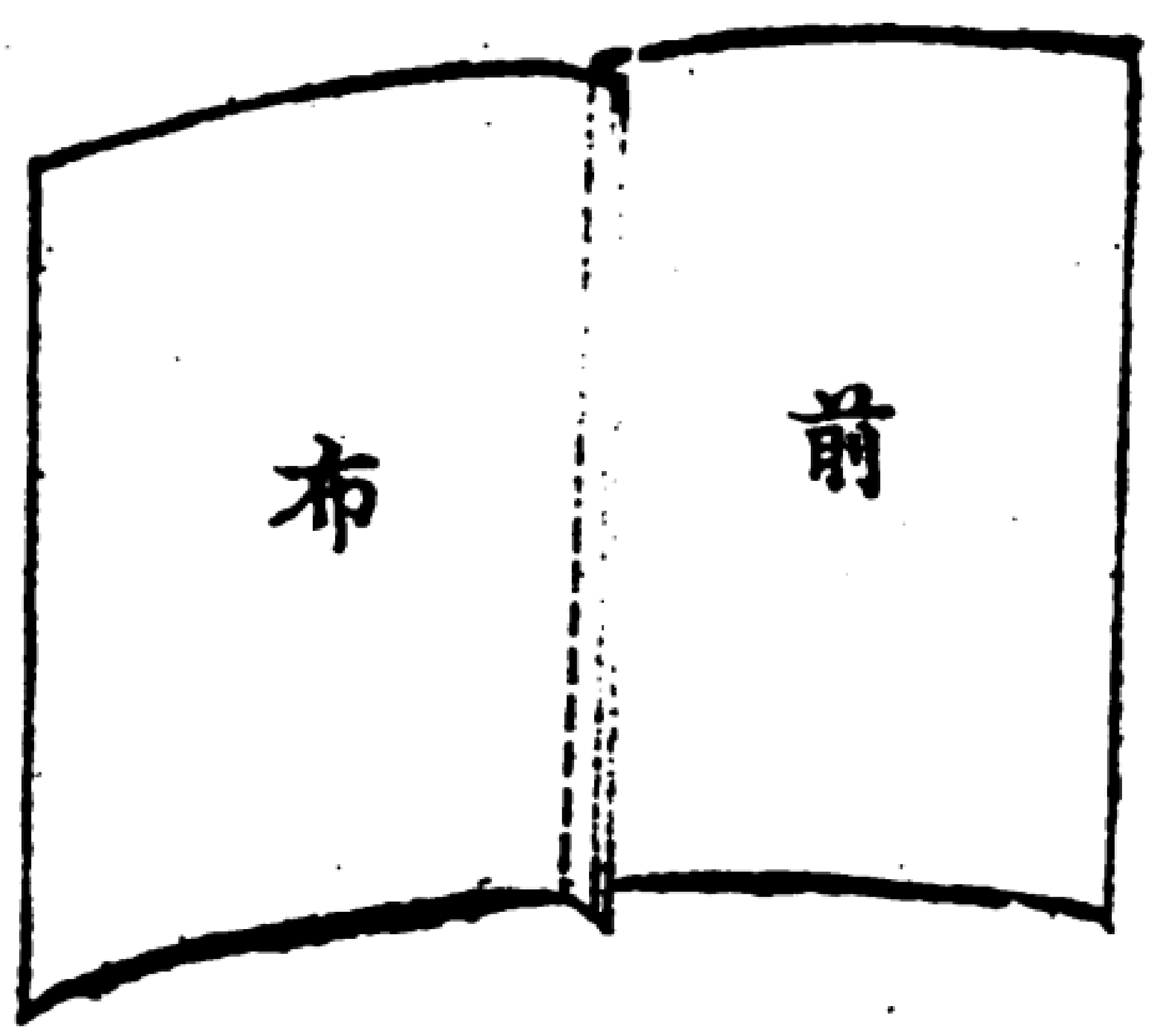


第四圖



次は前脇であるが前脇布は中表に二枚重ね右の布しはの曲りを正し然るのち右の手前にて六分と切り下けの箆をつけ其の箆より第三圖の如く引箆をつけ其の箆より裁ち切り次に第四圖の如く裾くけ代五分の箆印をつけ其の箆より向ふの

第五圖

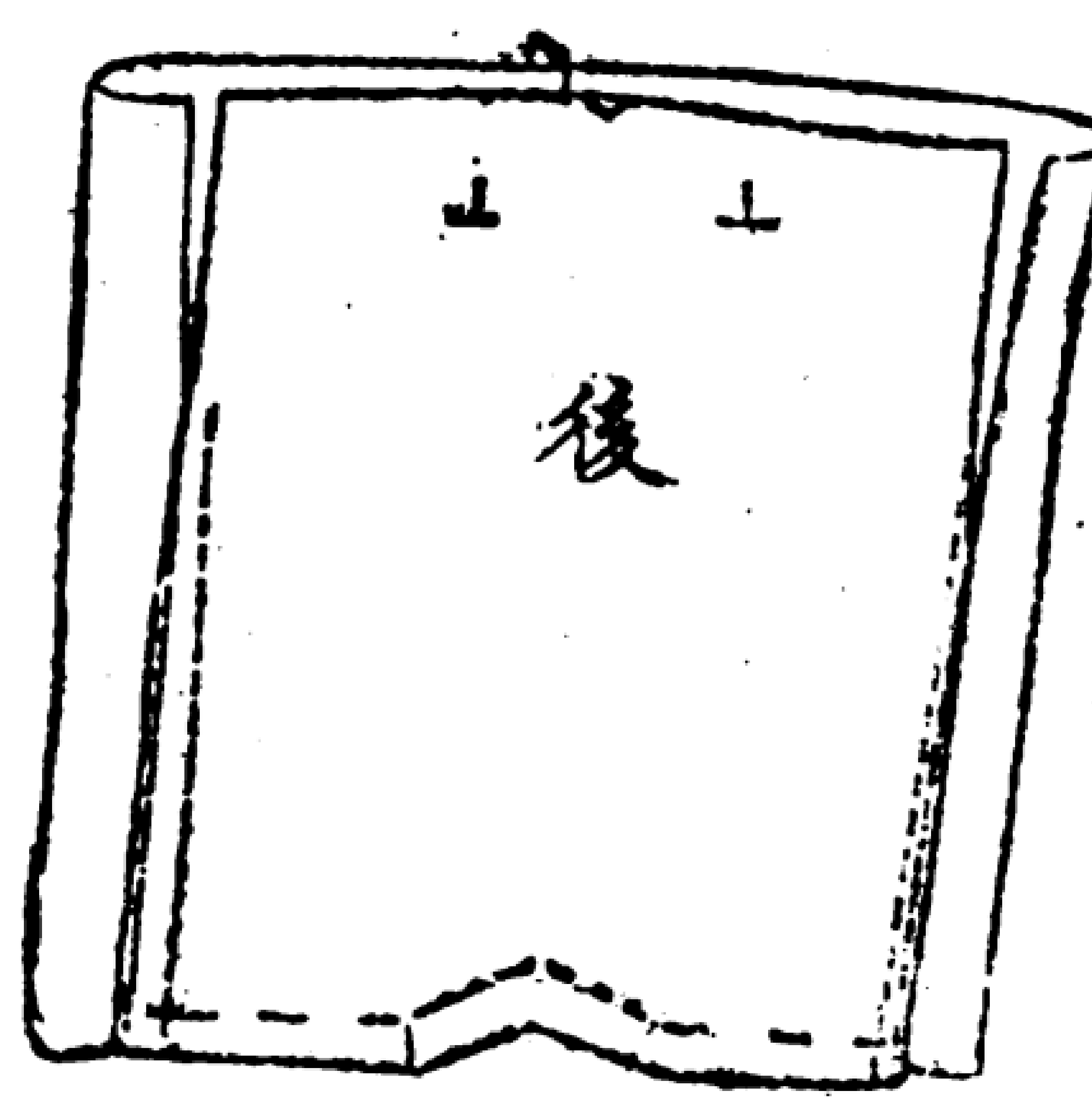


衽にて九寸二分と相引の箆をつけるのである之れで箆附は了つたのである然れば之れより縫方の順序方法に移り説明する事にしよう

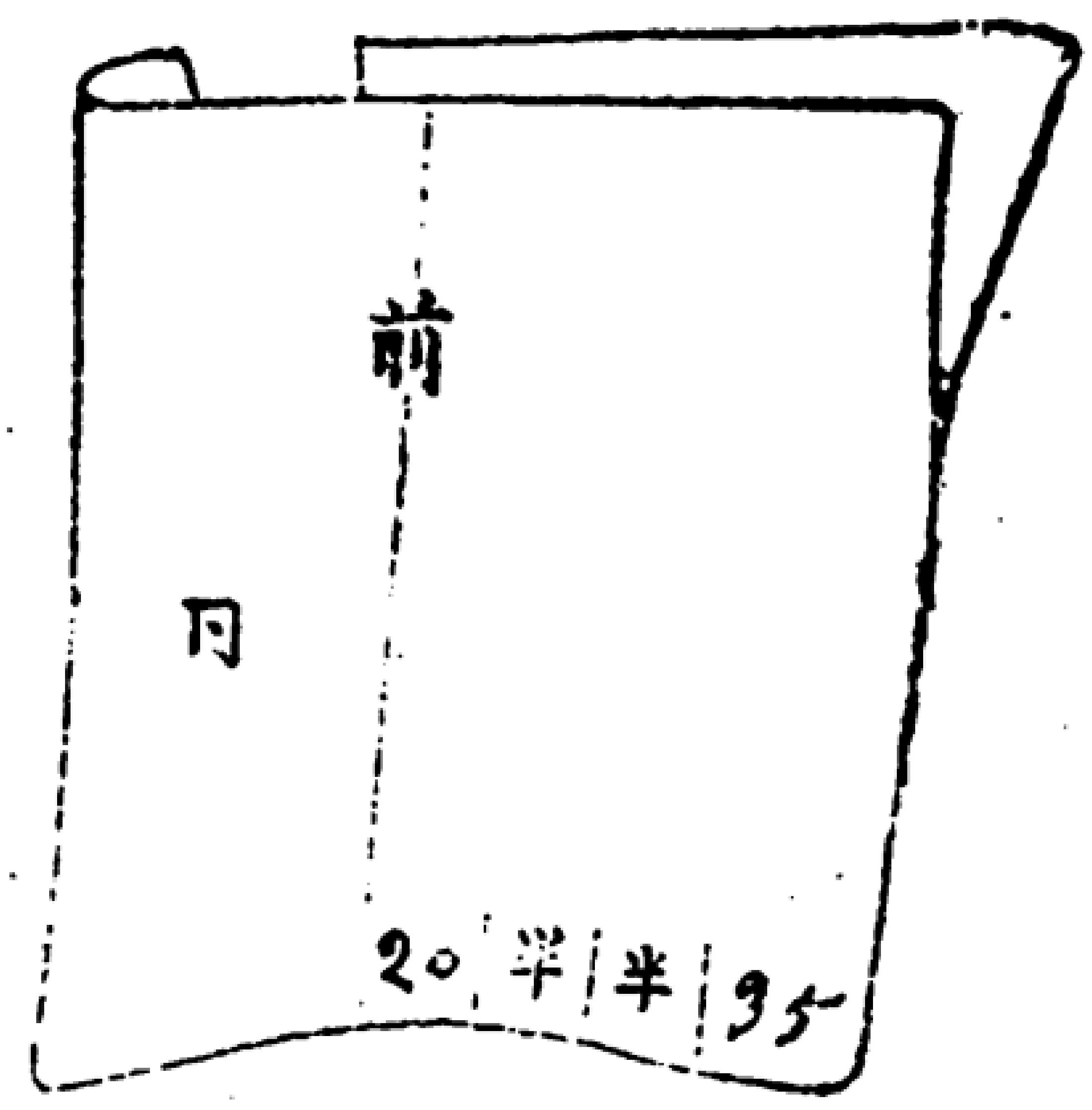
△全縫方

縫方は先づ前紐に眞を入れ中間八寸程を明けて左右をくけ凡そ七八分位ゐの紐巾に造り又後紐に前同様眞を入れ中間七寸程をわけ一寸五分巾に造り夫れより第五圖の如く兩前布を縫ひ合せ折目は上を右に持ち手前へ折り返し夫れに内

第六圖

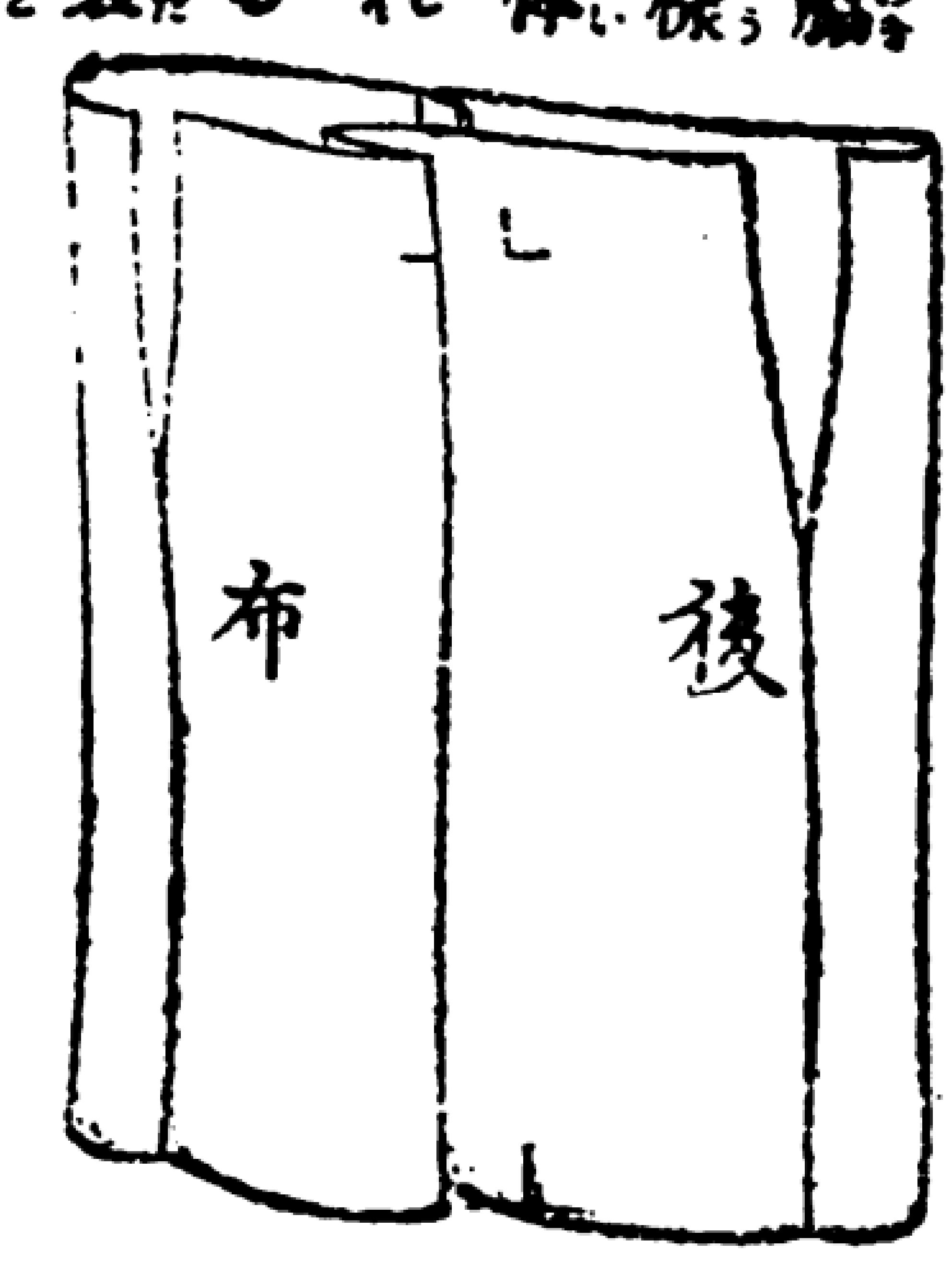


第七圖

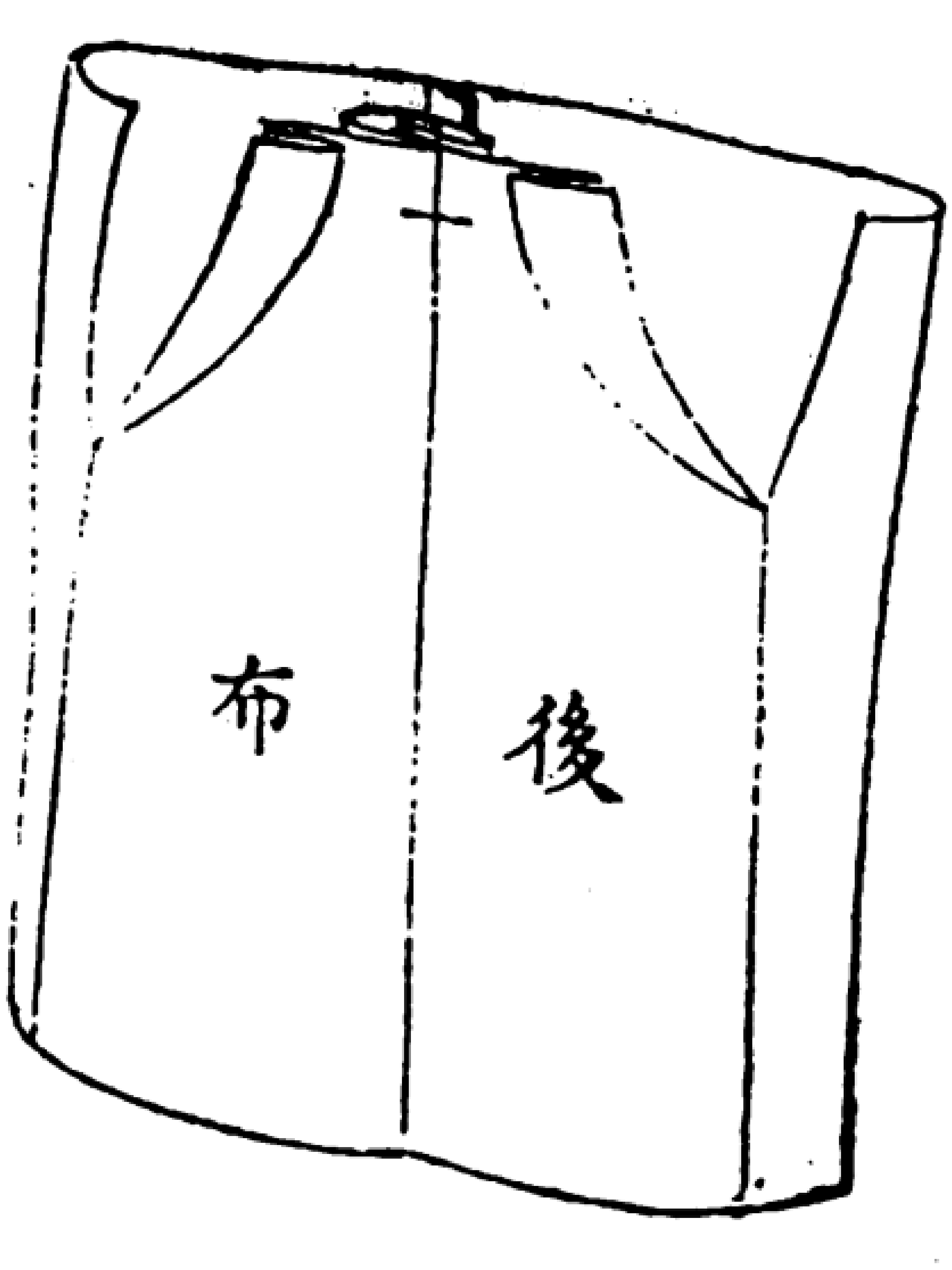


襞をかけ次に第六圖の如く双方の相引を縫ひ合せ折り目は脇布の方へ返し前同様内襞をかけ次に全体の裾くけをして夫れより前後の襞を折るのであるが先づ前襞の箆印は第七圖の如く相引の縫目より三寸四分又ふところの縫目より弐寸又其の中間を二つに割り二のひだの印をつけるのである又片方も同様にして夫れより後

第八圖

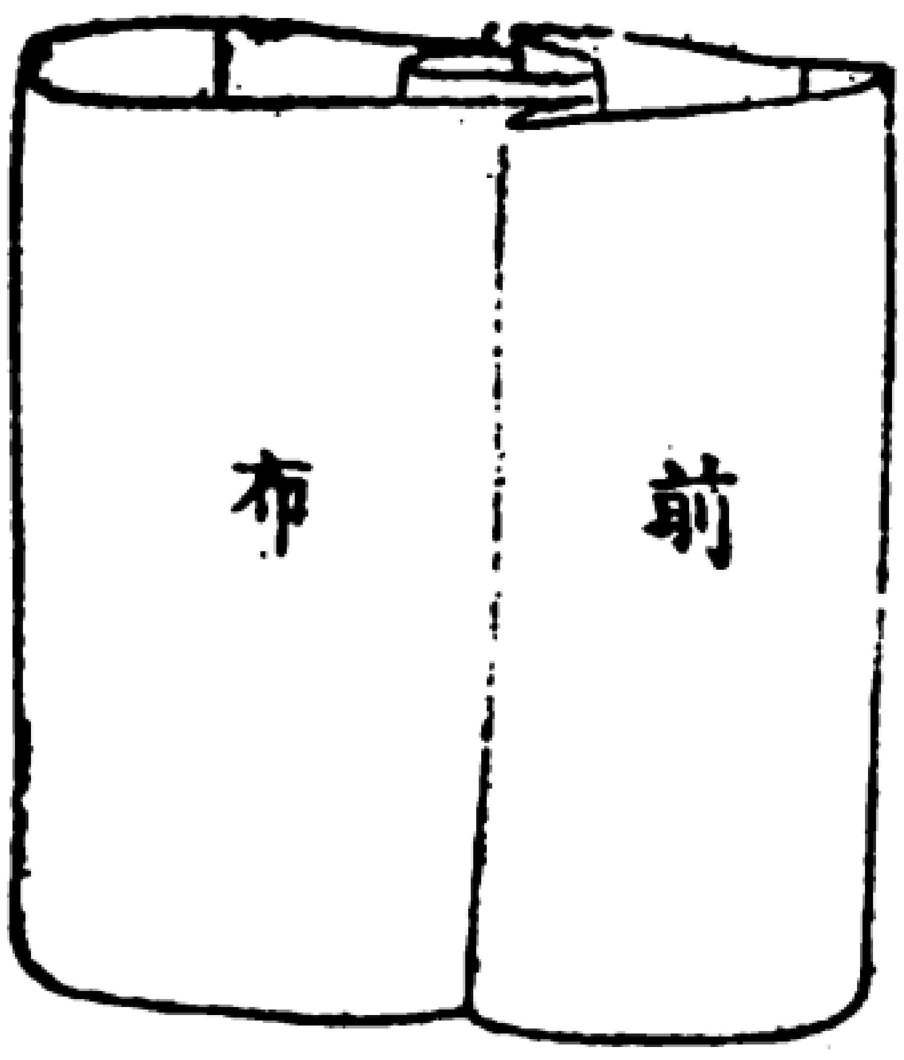


第九圖

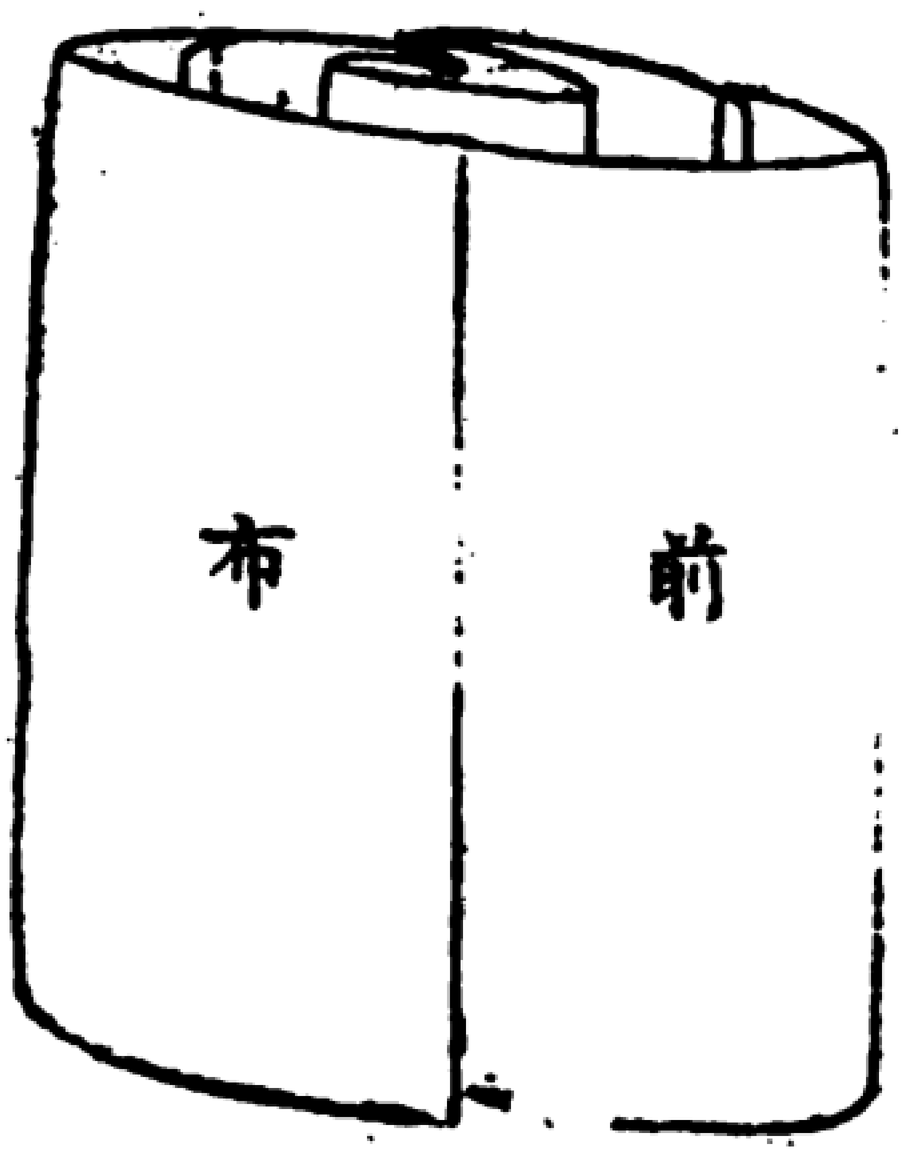


ろ前の襞を折のであるが後の折りは三角の角より三分計り廣く上は篦通りにして少しく出りて、折のである

夫れより襞のたゝみ方にかゝるのであるが襞のたゝみ方の順序は先づ後の上を右の手に持ち前身の上を左の手に持ち後を上に裾を右にして正敷をきめ夫れより第八圖の如く手前の折りを向ふの中間まで折り重ね次に第九圖の如く向ふの折りを手前へ持ち來り上で七分下で二分位ゐ合せ正敷して其の處に針を刺し夫れをとじつけ次に左右の傍襞を一寸二三分位ゐに造り後の腰巾を五分ときめ左右傍襞の奥を縫ひ

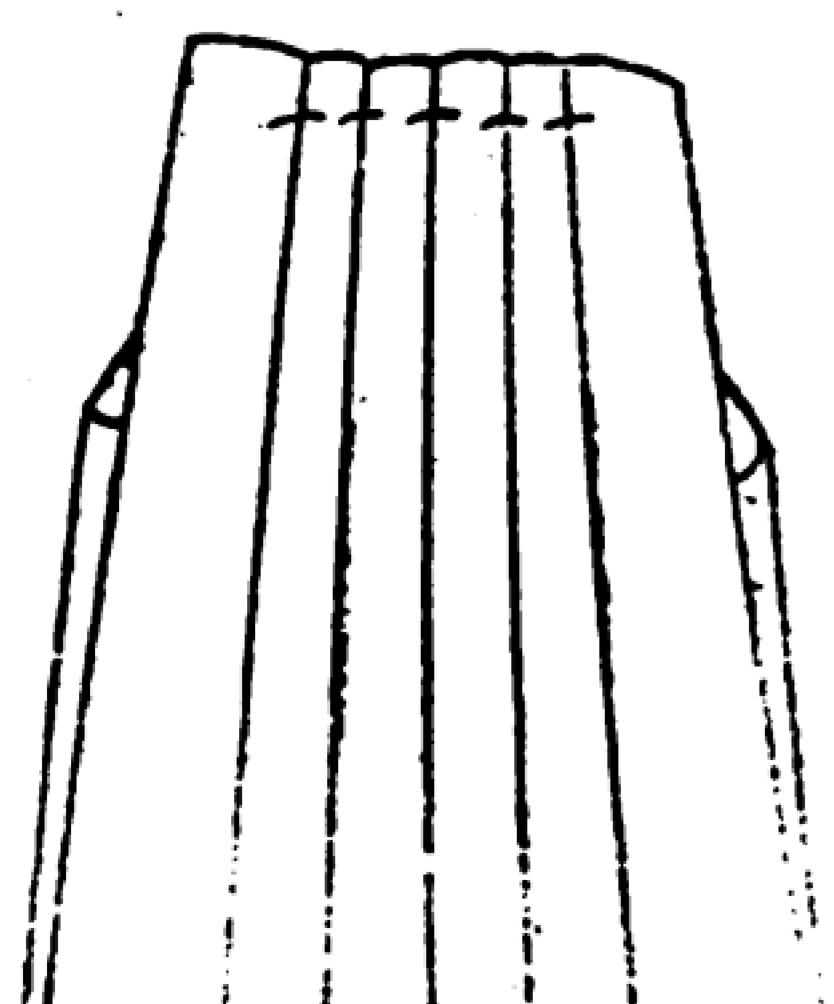


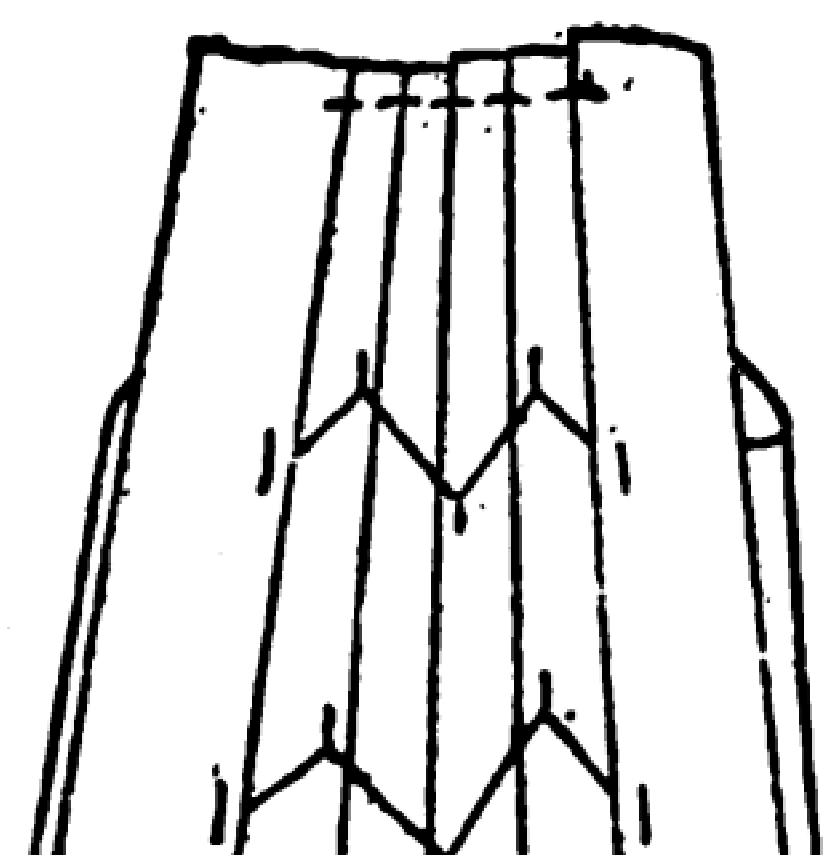
第十圖



第十一圖

次に端しをくけ更に引返して第十圖の如く前布を上に出し裾を左にして正敷をきめ夫れより向ふの三の襞を中間の縫目まで持ち來り又手前の三の襞を向へ折り重ね夫れより左右の二の襞一の襞ともに上を六分下を一寸二分ときめ一々上下に針を刺して正敷し夫より向の三の襞を中間の縫目まで持ち來り次に第十一圖の如く手前の三の襞を向へ折り重ね夫れより第十二圖の如く左右の二の襞一の襞ともに上を六分下を一寸二分ときめ一々上下に針を刺し正敷し夫れより

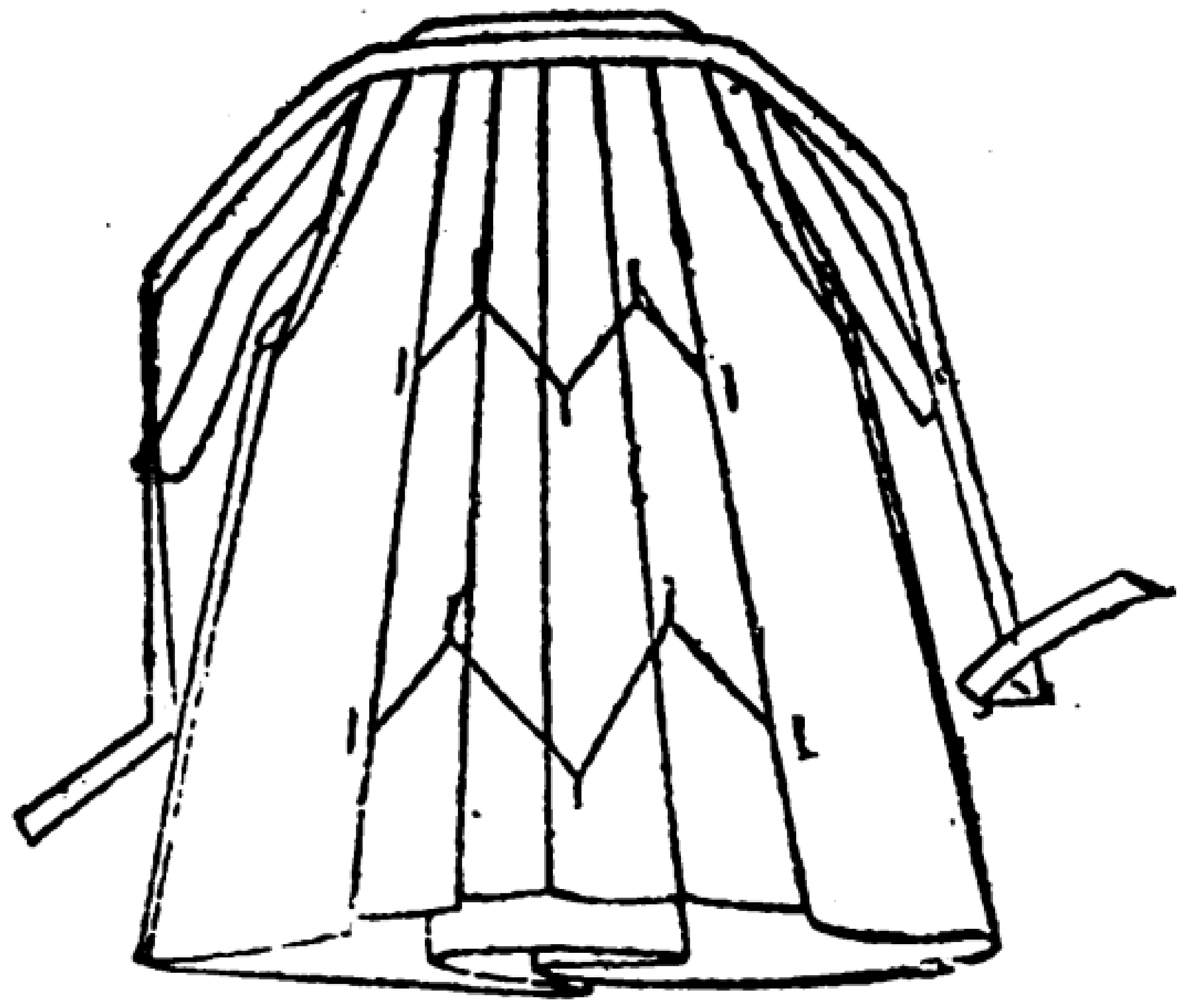

第十二圖


第十三圖

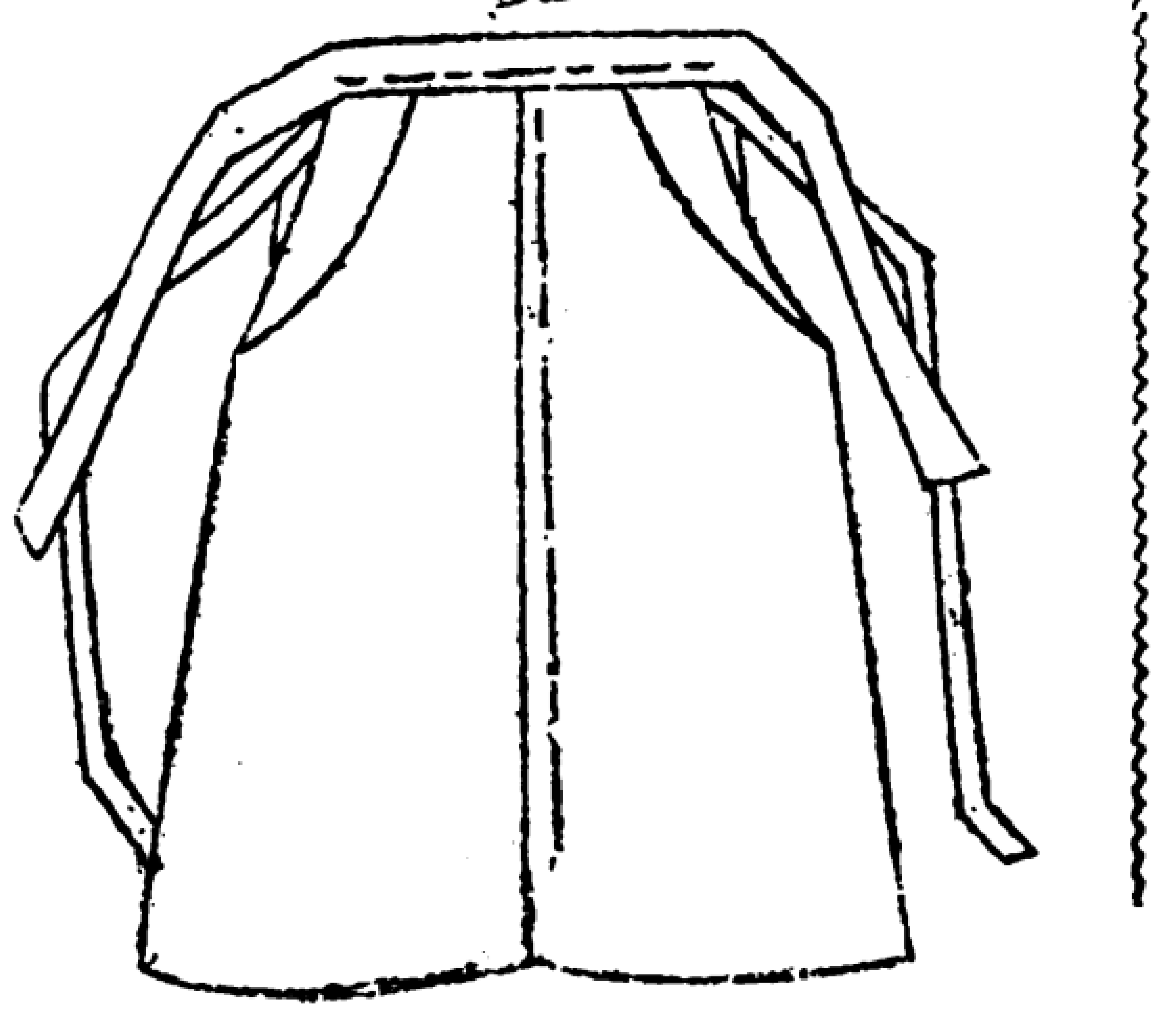
第十三圖の如く前の腰巾を六寸五分と極め左右の笹ひだを八分位ゐに造り其の奥を縫ひ繍しをくけ前襞にかさり躾けをかけ夫れより前後の紐を表より縫ひ附け裏にてくけるのである
次に左右の相引の處に蛇腹かゝりをして正敷たゝみ火熨斗を掛け紙〆をするのである

五才袴出來上りの圖

前



後



●流義に關する一節

流義改良の必要に附ては既に輿論にのぼり居る事故敢て多辯を費すの要なしと信ずゆへに其大略を説明する積りである隨分世の中には工藝上の事は澤山あるが此衣服裁縫の技術ほど流義が數派になつて居るものはあるまいと思ふ其内で之は感心であると敬服する様な理法に適應した方法を採る者が甚だ少ないのには斯道の

爲め嘆ずべきの至りである其れも仕立職人の方であれば其弊害の及ぶ處も誠に僅少であるから深く嘆息するにも及ばんのであるが我々の如く假りにも多くの子女を預りて教養する責任ある者に至りては自己の流儀の缺點あるにも關らず夫れを其儘應用して更に顧みる所無きに於ては其弊害の及ぶ處は實に偉大であらふと考ふるのである故に我々教職にあるものは餘程此點に留意して充分技術の眞理を探究して出來得る限り改善の策を講ぜねば其責任が立つまいと思ふ故に不肖新次郎の如きは何人のなさる事でも之れは宜い之れは理法にかなふて居ると信ずれば先づ其の方法を試みて彌よ眞理に叶ふて居ると見れば下つて夫れを採る事を躊躇せんのである皆さんも無論左樣の御方針であらふと思ふお互一層御奮發下されて斯道の爲め就中教職に從事せらるゝ諸姉の如きは女子教育の爲めとして考究せられたきものである

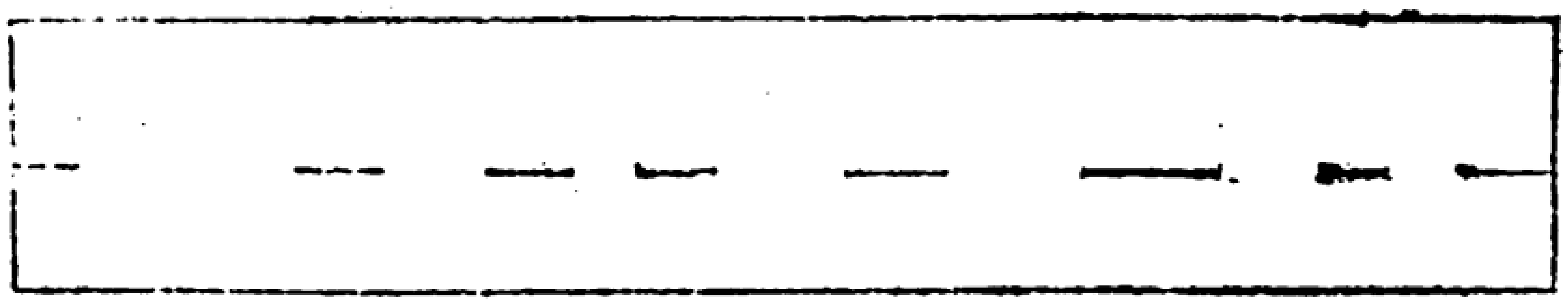
試に今回は一般社界に最も必要多く又弊害の多き羽織の衿の折り方に附て聊か述ぶる事と致さう

一羽織衿の折り方につき茲に說明するものは巾衿の方法である

(注意)此の折り方に關ては隨分幾く通りにも派れて居るが歸着する處は折り上げた結果折り表も折り裏も同寸法に折る者と折り表は折り裏より一分廣く折る者と二派に分れて居るが無論一分違ひに折る方が理法に叶ふて居るのである何故然るかと云ふに總て羽織の衿は鐵衿附即ち四つ縫にするのでも又折裏にて絎るのでも皆衿で身頃を挾みて縫ひ或はくけるのであるから夫れを殊更表身へ折り返すのには其の折り曲る餘地として一分の差をおくのは誠に理法にかなつて居るのである之れを他の工藝上の例を引て證するに被せ蓋の箱或は丸き筒を木工職工等が造るに當りては必ず外經と內經との差を明に立て造るのである然るに此の裁縫に限りては然やうの觀念を以て造るものは甚だ少ないのであるが之れが技藝の發達を害する一大原因に成て居るゆへよく〳〵心せられたきものである然れば茲に一分違ゐの衿の折り方

に附て左に説明して参考に供する事に致さう
假令ば二寸巾の衿を造るのには第一圖の如く四寸五分と各所に箆をつけ（又一寸七分巾の衿を造るのには三寸九分なるが如く）其箆より表を上に見て縦に折り
次に第二圖の如く巾を積めし方を下にして正敷をき夫れより第三圖の如く上なる布を下より五分去らして折りをつけ夫れより向ふの一枚の方を手前へ廻はしそして手前の一枚の方を向ふの輪より一分去らして正敷折り印を附けるのである

第一圖



第二圖

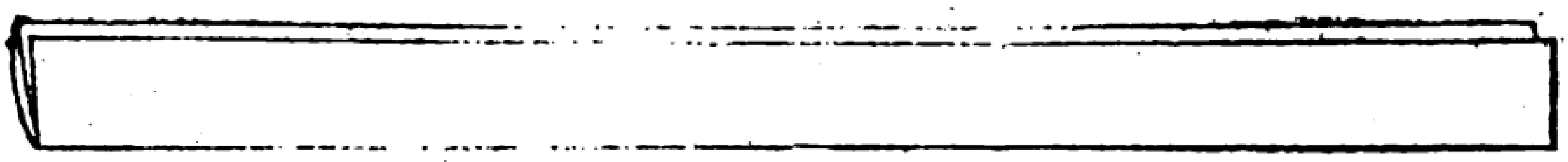


次に第五圖の如く輪を左にして二つに折り衿巾一ぱいに丈を斗り衿先を正しくするのである

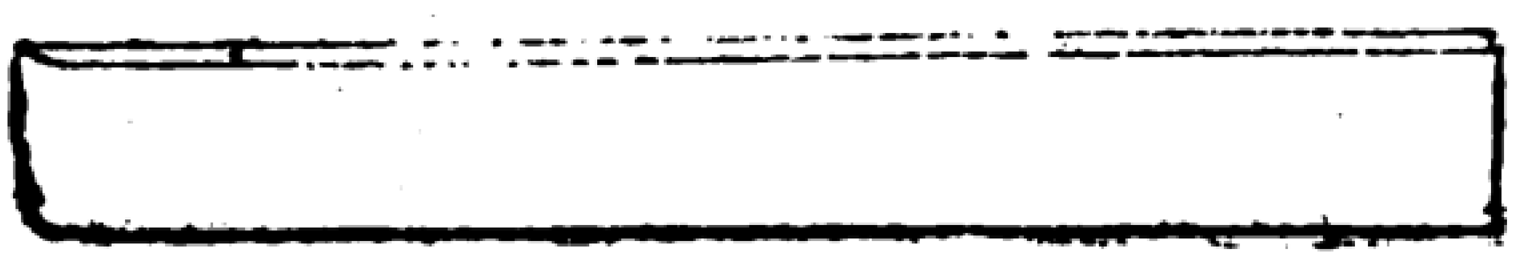
第三圖



第四圖



第五圖



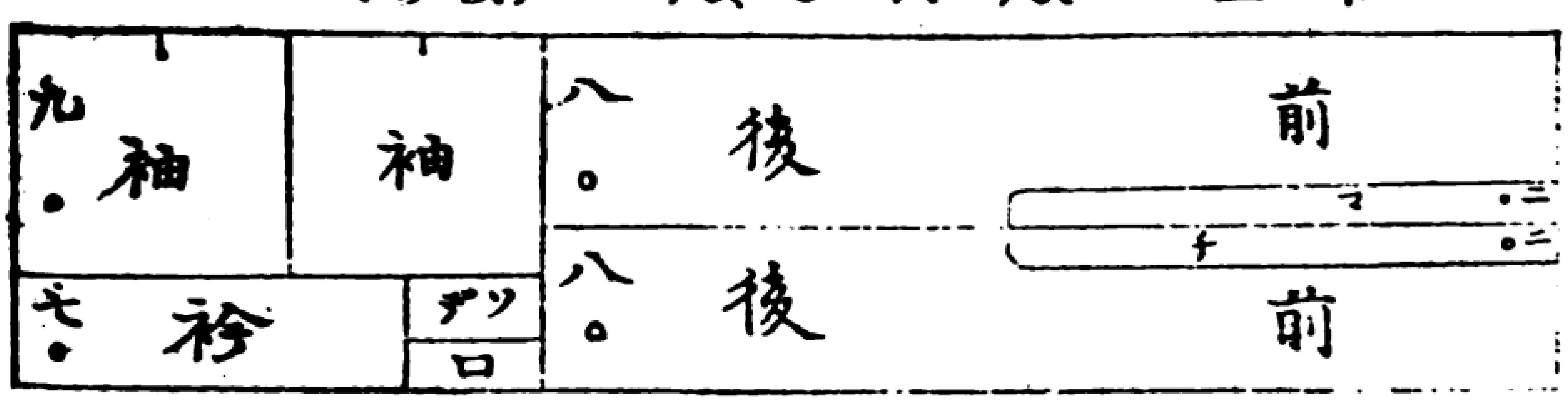
之れは衿先を縫ふ時の要意であつて折方と相まつて肝要の事である

先づ新様に折りわけて双方二分づゝの縫代にして縫ひ付けるのである

今一つ注意を惹起して置き度と思ふのは此の如き折方にしても其の衿附のゆるめ工合がわしく甚しきに至りては其のゆるめ場所を轉倒して附る樣な事ありては勞して効なしである然れば如何なる方法にするのであるかと云ふに御承知の通り衿肩の處に於て一番多くゆるめ次に其處より乳つけまでを可なりゆるめ乳附より下はしばらく身頃衿とも平につけ衿先の處五六寸を又々乳附の上位ゐにゆるめて附けるのである斯くすれば大変る違ちはなきものである

●試驗問答の一

（問）一尺六寸巾の布一丈二尺三寸を以て袖丈一尺六寸身丈二尺二寸あがりの四ッ身羽織を造るのには裏布何尺いるで在ふか裁方罫引及積方の算式を示せ



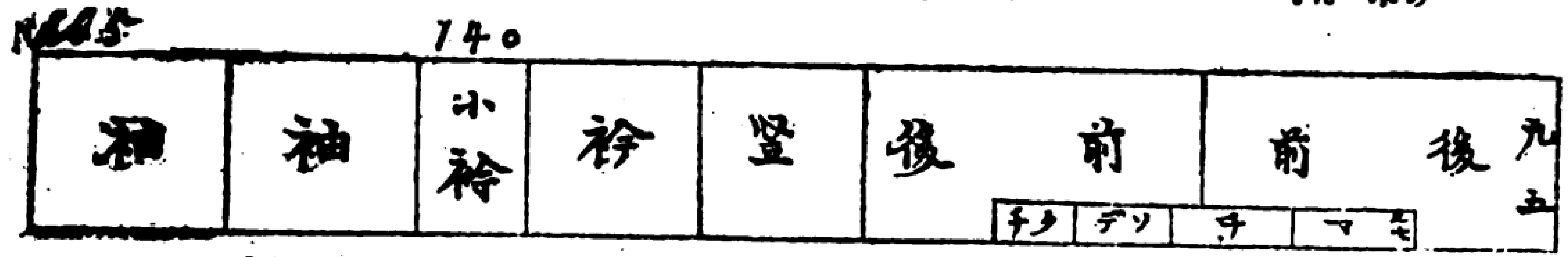
$$\overset{\text{用布}}{(1230}-\overset{\text{袖丈}}{165\times4)}\times2-\left\{\overset{\text{袖丈}}{(165\times4)}+\overset{\text{身丈}}{(225\times8}\overset{\text{下り縫代}}{+120)}\right\}=\overset{\text{裏布}}{}$$

解

先づ表袖丈を四ばいして夫れを用布より引き殘りの丈尺を二ばいして一旦細そ長きものと爲して更に裏袖丈を四ばいして次に身丈を八ばいして夫れに胴はぎ縫代と下りの寸法を加へ其双方を寄せ合せて其總体より先きの二ばいせし丈尺を引くときは裏布何尺と出るのである

●試驗問答の二

(問)並巾の布二丈七尺八寸を以て袖丈一尺六寸身丈二尺七寸わがりの小共衿の本裁被布を造るのには裏布何尺いるので在うか其の裁方斷引胴積り方の算式を示せ



表用布 袖丈 小衿 身丈 下り 縫代竪衿下り 裏布

$$2780-\{(165\times8+140)+(275\times10+90+120-120)\}=$$

解

先つ袖丈を裏表八ばいして次に小衿の丈を加へおき更に又身丈の裏表と竪衿の丈とで十ばいして次に下り縫代を加へ其の内で竪衿下りを引きたるものとを寄せ合せて其の總體より表用布を引くときは裏布何尺と出るのである

●裁縫教授に就て

凡そ衣服裁縫の術は總じて手藝に屬するものなるがゆゑに其教授方法の如きは個人的教授にまさるものなきは更に論をまたないのである然しながら現時の各小學校や高等女學校などの如く僅に一週三五時間に過ぎざる時間殊に技術も手頃も等しく同一なる生徒五七十名を一團體として個人的教授を爲さんと欲するも到底爲し能はぬものである唯に爲し能はぬのみならず二兎を逐ふものは一兎を得ずで殆んど一物だも完全に教授し了はる事は爲し得られざるものである折に前述の如く多數一團體の生徒をして一定の時間内に完全なる教授

を爲さんと欲せば須らく團体教授の方法によりて先づ寸六の要素と四十八の分子との部分教授より始め順次綜合練に亘らしむるの方針を採らねばならぬのである果して然らばこれが教授の方法に於ても或場合には掛圖の必要をも生じ或場合には裁切ヘラ附を教授すべき寫眞材料の必要を生じ或場合には標本を利用する必要を生じ或場合には勢ひ個人的教授をも採らねばならぬ事情も生じ來るものである然しながら、前述の寫眞掛圖標本等を應用するに於ては個人的教授を採るの不得止場合は殆と十中の一二に過ざるのである故に教場の管理も屆き自ら靜肅にして教師の説明する處一として生徒の腦裡に止まらざることなく從來の個人的教授に比して殆んど霄壤の差あり苟も斯道教授に從事せらるゝ諸君は茲に大に留意せられたきものである

○割烹新聞　家庭割烹實習會の機關紙にして、同會の目的とする家庭食物の改良を謀らんが爲に發行する所なりといふ調理及獻立、新案飲食、家事衞生、料理店、菓子舖等の消息記事を收めたれば家政當事者の好讀料とすべし

○少年世界文學　本編には淨瑠璃文學を少年に解るやうに極く簡易に話してあります、即ち其の中身には葛の葉姫（蘆屋道滿大内鑑）と先代萩（伽羅先代萩）と「熊谷直實」（一谷嫩軍記）との三編が收めてありますが、何れもよく呑込めるやうに噛碎いて在づて、中々面白う讀まれます。

○ミルトン失樂園物語　通俗世界文學の第一編として、有名なるミルトンの失樂園は栗野天來子の筆に依て紹介せられたり、校閲者坪内雄藏氏はその卷頭に序して曰く、外國の名著傑作が其の名のみ事々しう持囃されて其の實質の味はれざること我が今日の讀書社會より甚しきはあるまじ、之を歎かはしく思ふ心と、せめても名高き美人がおぼろ影法師なりとも見せて情を貪び美を慕ふ向上の緣を作りたしと望む心などがもとゝなりての本叢書の發刊は頗る時勢に叶ひたり云々と、據て讀みもてゆくに譯筆雄健文字精彩然かも通俗的にして理解に易く、よく原文の面影を髣髴たらしむるものあり、吾人はかゝる書の世界文學研究の階梯として我邦讀書社會に呈供されたるを喜ぶ。

素人看護法講義

◉病室のはなし

淑德女學校講師醫學士　佐藤恒久

病室は第一に靜かでなければならぬ、是は今私が改めて申上げるまでもない、なせ此病室が靜かでなければならないかと云ふに、殊にも精神が發揚して居る人は靜かな處に置きませぬと、兎角眠りつきが惡るいと云ふやうな事があつて兎に角精神がいつも安らかでないこれは甚だしく病氣の爲に惡るいのであるからそれを防ぐにはどこ迄も其病室は閑靜でなければならない、そこで其病室は、勿論往來に接して居るやうな處ではいけない、町家の往來に臨んで居る所の部屋などは、病室としては不適當である寧ろ少しく奥まつた處がよい道路に接して居ると表を通る人の足音は勿論、飴屋が來て喇叭を吹いたり、月琴を彈いて來る者があつたりまた、車の音がするとか、馬車の音がするとか云ふやうな、いろ〳〵な事が邪魔になる、それは町に接して居ります所の家の話ですしかし又た、表には門があり玄關の前も廣くあると云ふやうな宅でも、入口の近處は矢張りいけない玄關からじきに近い所の部屋は、お客樣が來て大きな聲を出してお頼う申しますなどゝ云ふ、すると直ぐと誰か來たと云ふことも分る、それが矢張り病人の害になる故に入口の近處の部屋もいけませぬ、それから御家族方が平生お居でになる部屋の近處も餘り面白くはない、其處は女中が來て何か用を聞くと云ふやうな事もある或はお子さんのあるお家であれば、子供が遊ぶと云ふやうな事もある、から矢張り病室としては不適當である、又た臺所の近所も矢張りごたつきますからして病室とする譯にはいきませぬ、先づ斯う云ふ風にいけない處だけを數えますから、此規則に觸れない所の部屋は病室として用ゐて宜からうと思ふ。それから今一つ、序にお話をして置くのは時計です、病室の中に大きなボン〳〵時計を置くのは餘

り宜くない、それも鳴るのを止めて置けば宜し、唯時計の音だけならば仕方もないが、一時間毎に大きな音をさせて鳴るやうにしてあるは餘り宜くない、それが爲に折角寢て居つた所の病人が眼を覺すと云ふやうな事もある。

▲日あたりの事

それから次に此病室は日當りが宜くなければならない故に其病室の向きはどう云ふのが宜いかと云へば、勿論東南向きか、或は南向きを選まねばなりませぬ、此方角であれば無論日當りが宜しいので病室には適當な部屋だらうと思ふ、併し此方角であるからと云つて又どの部屋でも宜いと云ふ譯にはいかない、それは東或は南の方に向つて大きな樹木があると、それが爲に日當りが惡るくなる、からして、强ち方角にばかり關係するものではない、それはなせての日當りが惡るいのは、病室として不適當であるかと申すに、日當りが惡るければ從つて其部屋が濕つぽい、此濕り氣のあるは矢張り病氣の爲に宜くない、殊に病毒の爲に宜くない殊に傳染病などには病毒があつて其毒が段々擴がつて爲に外の人にも傳染る、此毒は御承知の通り重にバクテリヤと稱する所の小さな動物が元であります、此動物はどう云ふ處に住んで居つて、どう云ふ處に發生し易いかと、申すに、多くはこの濕り氣があると、其濕りの水を一つの營養物として發生して來るのである、それから又日光である是が矢張り病毒に大變關係あるもので、日の光がぢかに當るとそれが爲にバクテリヤが矢張り死んで仕舞ふのである、それ故に或消毒法としては傳染病患者が居た病室の疊などは單に日向に干してさうして消毒をすると云ふ方法も既にある、斯樣に日光が病毒に關係を持つて居るからして、どこ迄も病室は日光が絶えずに當るやうな部屋が宜しいのであります。それから又日當りの宜い部屋に居るのと惡るい部屋に居るのとは、健康な人でありても無論心持が大變違ひます、健康な人でさへもさうであるから病人では勿論のこと、成べく清々した處に病人を置かなければならない、併し病人の寢て居る處へ直接に日が這

入つて來ては困るから、それは適當な方法で以て日をよけなければならぬ、直接に日が這入ると云ふのは詰り日向に病人が寢て居つては困るから、それは幕を張るなり何なり、相當の日よけをして之を遮らなければなりませぬ。

▲光線の事

それからこの光線のお話です日の光即ち明るい或は暗いと云ふことに就て申しますが日が能く當りますれば從つて其部屋は明るいことは勿論です、けれども夜になると暗くなり、日が這入らぬと暗くなるから其處には燈火をつけなければならぬ、此の部屋の明るい暗いと云ふことに就てお話をしまするど、無論人が中に住つて居り又は病人が寢て居りますれば、眞暗では事が濟みませぬから是非とも明るくしなければならぬ、夜は燈火をつけなければならぬ、併しながら其病症に依ては餘り明るいのも亦宜しくないけれども、前の部屋が朦々敷いのは困ると云ふのと同じやうに、矢張り明るいと云ふと精神が休まらないから病氣に依て精神を休めなければならぬと云ふ病人であれば、餘り明るくないやうにしてやらなければならぬ、さうかと云つて日當りの惡るい處は困るから日當りの宜い部屋で、光の餘りさゝないやうに、椽側の先へ黒い幕を張ると云ふ事も必要である、それから夜燈火をつけるにしても、並の部屋よりも幾らか細くして置くと云ふことも必要である、精神を休めなければならぬ者には暗い部屋が適當して居る、是はくどく申上げるやうですが、暗いと云つても決して日當りの惡るいのを言ふのではない日當りが宜くつて暗い處が宜いので、之を取違へまして日蔭の土藏の隅のやうな處では困ります、それに反して始終氣が塞ぐと云ふやうな病人であると、明るい處が宜いのであるからして晝は明放して置くとか、夜は燈火を餘計につけるとか云ふやうな事もなさらなければならぬ總て燈火が暗くなると精神が休む、從つて眠氣を催して來ると云ふのが大概當り前でありますから寐つきが惡るいなどゝ云ふやうな病人であると必ず夜燈火を餘計にして置くのは惡るい、成べく暗くして

置くと能く眠りつく即ち精神を休めるのです。それから今一歩進んで脳病の人或ち眼病の人は、殊更に醫者の注意に依て眞暗にして置くことがある、それはなせかと云ふに、明るいと物が見える、或は薄暗くとも同じことである物が見える、それが爲に脳病の人は、考へないでも宜いことを考出して、見るからして眞暗にして置く、さうすると其邊の物が有るか無いか全く分らないから、大變病氣の爲に宜いそれから眼病の人も閉じことで兎に角物を見ると云ふことが眼の爲には惡るいのであるから、其物を見せないと云ふのに眼を眠つて居る譯にもいかず、從つて繃帶をさして置く譯にもいかぬから眞暗にして置く、さうすれば物が見えない、是は殊に心得て置て戴きたい、總て此急性の熱のある病の人は明るい處を嫌つて、それから慢性の病人は明るい處を好くものであるからして、或は好きと云ふよりも病氣の爲にさう云ふ風なのが宜しいのであるから急性の病人は暗い處へ置き、慢性の病人は明るい部屋に置くと云ふやうな風になされたが宜からう

▲病室の清潔

次には病室は清潔でなければならぬことを茲にお話し申します、是は強ち新らしく又立派でなくちやアならないとか云ふ意味ではない、古い家でも奇麗に掃除さへして清潔ならば宜いのである、それには掃除が必要である、大概一日に一回づゝしなければならぬ、併し掃除をするのには極つた方法があつて、其方法を誤ると却て掃除と云ふことが邪魔になるからどう云ふ風に掃除をしたら宜からうか、或は掃除をするとなぜ害があるかと云ふことをちよつとお話しゝます、此埃と云ふものは部屋の中にある時には大概疊の上、或は道具の上、戸障子の棧の處などに落付いて居るもので、掃除をするとそれをはたき落したり、或は掃きますと云ふと、落付いて居つた所の埃を舞はせると云ふやうな譯であります、併し落付いて物の上にあります所の埃は別段害はしないので、此埃が人の躰に害をするのは或は食物と共に腹の中に這入つたり、或は空氣と一緒に肺の中に這入つたりするので、其埃をそーつとして

置てそれをいぢらなければ決して悪るいことはない、けれども能と掃立てゝ見たり、何かすると食物や鼻口などに這入るからいけない、それ故にこの掃除をするのには是非とも埃を掃立てゝも宜いやうな順序に依てしなければならぬ。

それで掃除の前に一言御注意して置きますが、今お話しゝた通り埃が畳の上にある間は一向差支ない、それ故に掃除でない時でも看護をする人の身のこなし方であります殊に歩くのと働くのが亂暴であると畳の上の埃が舞ひ揚つて害をするから歩き方と働き方にはどこ迄も注意をしなければならぬ、病人が其處に寢て居る傍を働いたりすることは、衛生の上からしても、どこ迄も禮儀は正しくして、矢張り小笠原流だとか何とか云ふやうに歩くにもしとやかに、身体の置き方を靜粛にするやうな事は、是は唯人に對するばかりではない衛生の上に於ても必要である、勿論御婦人方はさう云ふ所までを御注意をなさるも、唯あのお方は靜かで宜いと云ふて褒められるばかりでなく衛生の上にも宜しい、是は矢張り注意しなければならぬ事と思ふ、病室の中で以て働くと云ふことはどこ迄もしとやかに働かなければいかない。

▲掃除

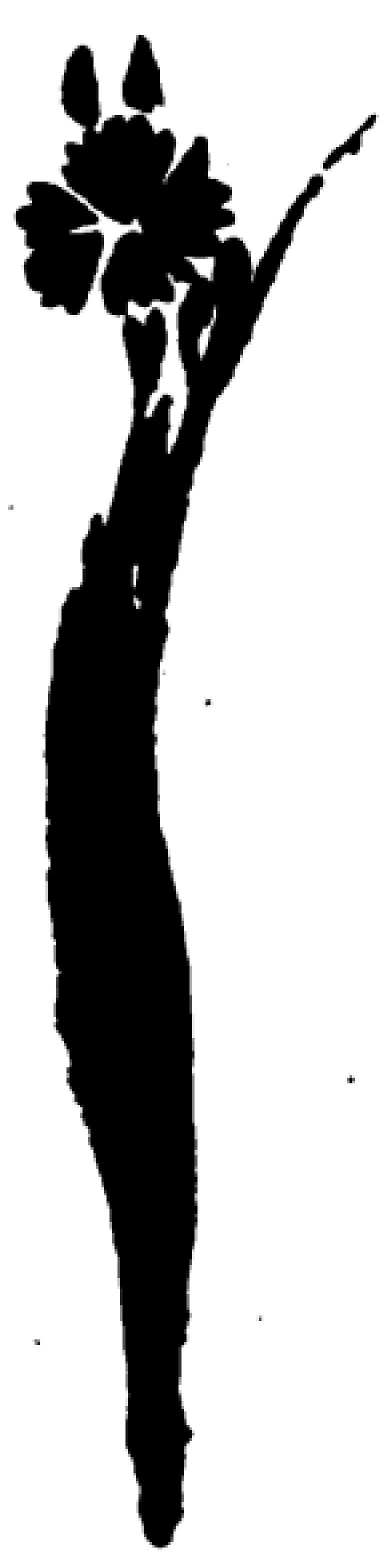
それから掃除の事であるが、今お話しゝたやうなことで、成べく埃はいぢらない方が宜いと云ふ日には、是は掃除をしない方が一番宜さゝうに思はれる、一日に一度づゝ病室を掃かずとも、いつ迄經つても掃除をしないでそうと埃を置た方が宜さゝうに思はれる、けれども埃と云ふものは外から這入つて來たりするので、そつとして置くと最初には少しばかりであつても終には一寸も積るやうになる、だから幾らしとやかになすつた所が、一寸の埃なら必ず立つに違ひない、さうなつては困るから矢張り掃除は度々なすつて、さうして成べく室内の埃は少なくして置くやうに心懸けねばならぬ、それには掃除が必要である、其病室の掃除の時には成べく病人を他の部屋に移して、さうして其留守の間に掃除するのが一番宜しい、それはもう一番手輕

である、病人が一人で以て兎に角歩けると云ふやうな人でありましたならば、次の間に暫く行つて貰つて、其留守の間に病室の掃除する、釆配と箒を以て掃きはたきをして、後とで雑巾をかけるそれで掃除が濟み、十五分或は二十分も經つと一旦舞揚つた所の埃が落付きます、勿論其中の幾分は掃出されても仕舞ひますがまだ多少殘つて居ます、其殘つて居る所の埃が前の時間を經ちますると、又下の方に段々沈んで來て、おとなしくして仕舞ひます、尤も掃除をして仕舞つたならば、周圍の戸障子はずつと締切らなければならぬ、さうして風の這入らないやうにする、風を入れると今の時間の中に沈まる譯には行きませぬそこで病人を又病室の方へ連れて來るやうにすれば、それが一番手輕でございます、併し病人に依ては中々ちよつと動くことの出來ないのもあるし又寢た儘で他の部屋に持つて行くことが出來ない事があるからして、さう云ふ場合には仕方がないから病室内に寢かした儘で以て病室を掃除するのであります。其時の掃除の仕方は、障子の棧或は器の上にある所の埃は、雑巾で以て拭ひ取らなければいかぬ、はたきで以てはたき落してはいかない、其處に病人が寢て居る時は、はたき落さないで、成べく濡れた物で拭き落すやうになさらなければならぬ、それから疊の上の埃は拭く譯には行きませぬから箒で以てそろ〳〵掃き取る、其の時に病人の顔の上に手拭のやうな物をかけて置く、それから病人には、眼や口を塞がせて置て鼻で息をさせる、けれども其鼻で息をさせる其鼻も開けつ放しでは困る、そこに綿を以てやわらかに栓をする、栓をすると少し苦しうございますけれども……呼吸には差支ありませぬ、鼻で以て呼吸をして貰ひ綿を入れて置きますと綿を通しては埃はとうしても咽喉の方までは行けないものであります、必ず綿で以て濾されて仕舞ひ其處へ殘りますから、埃が幾らあつても綿で以て栓をして置きますと、咽喉の方へは行きませぬそれで十分防げる、それで掃出して仕舞つて、十五分乃至二十分經ちました所で以て始めて鼻の栓を取る、是は隨分處置に困る方法ですから、成

べく隣の部屋に暫くの間行つて居て貰つて掃除をするのが一番宜いのです、尤も西洋造りだと又少し違ひますから、是ほど注意しなくとも宜い即ち西洋造りであれば疊の上の埃と云ふものが無いので、疊即ち根太板であるから、勿論絨氈などが敷いてある時には少し違ひます、其時には矢張り掃出さなければならぬが、此板の間の掃除は皆雜巾一つで出來る、拭取つて仕舞ひますると埃が飛揚ると云ふことはない、なぜかと云ふに水氣で以て取つて仕舞ふから上に揚らない、水がしみ込んで仕舞ひますれば矢張り落付いて居ります、假令殘つて居つても成べく拭取ると云ふ法は宜いのであります、西洋造りで下が板の間でありましたならば、下も矢張り拭取つて仕舞ふ方が宜しい、疊ではそれが出來ませぬから從つて箒を用ゐますが、箒であると今のやうな鼻へ栓をかはなければならぬ、先づ是が掃除の仕方であります。

それから埃でなく他の物で以て部屋を汚す事もある、たとへば或は疊の上に血が流れたとか膿が落ちたとか又大小便の如き物も或はどうかすると疊に落ちないとも言へない、さう云ふ時の掃除の仕方、それは湯で以て先づ拭取る、或は半分洗ふと云ふやうな事をなさらなければならぬ、それから傳染病患者の排泄物と云つて今の大小便の如き物、或は痰だとか唾だとか云ふやうな排泄物ならば、唯掃除するばかりでなく一定の消毒法と云ふものもある、此消毒のことは後にお話を致しませう。

それから尙茲で一つ附加へてお話しゝて置きまするが成べく病室の中には餘計な物を置かないやうに、要らない物を置てはいけけい、讀みもしない本を澤山積んで置くことは宜くない、病氣の爲に必要な物だけは仕方がないから病室の中に置きますけれども餘計な物はいけません。



次號豫告（五月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊
增刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。

明治三十六年四月五日發行　第參卷第五號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

明治卅五年度發行圖書

著者	書名	冊數	定價
岡崎國淵沖編	各傳比較 點茶活法	全四冊	正價二圓五十錢 小包送八百匁
松村理學士著	新撰解析幾何學	全壹冊	上製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
久保文學士著	四書新釋 論語	上卷	正價四十錢 郵稅八錢
永島長五郎君著	通俗昆蟲學	全壹冊	正價二十五錢 郵稅八錢
藤本藤蔭君著	烈女お藤	全壹冊	正價十三錢 郵稅四錢
柿山文學士著	シーザー	全壹冊	正價十三錢 郵稅四錢
上村左川君著	新撰日本地理問答	全壹冊	正價二十錢 郵稅四錢
村瀬工學士著	構造强弱學	全壹冊	正價六十錢 郵稅八錢
破竹居士著	健康と遠足	全壹冊	正價三十錢 郵稅六錢
坂正臣君書	女子用文習字帖	全貳冊	正價八十錢 郵稅八錢
中大路法學士著	チャーレス大王	全壹冊	正價十三錢 郵稅四錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

(後付の一)

明治卅五年

著者	書名	冊數	定價
石井研堂君著	●鐵道の卷	全壹冊	正價十五錢 郵稅四錢
濱田四郎君著	●實用廣告法	全壹冊	正價二十五錢 郵稅八錢
岡田文學士著	●解説批評日本文典 上下	全貳卷	上製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
島田法學士著	●衆議院議員選擧法論	全壹冊	正價四拾錢 郵稅六錢
門脇眞枝君著	●精神病看護學	全壹冊	正價五拾錢 郵稅八錢
飯田旗郎君著	●商業汎論	全壹冊	正價五拾錢 郵稅八錢
井上文學博士述	●巽軒講話集	全壹冊	正價七拾錢 郵稅十二錢
上野農學士 有卿農學士 著	●土地改良論	全壹冊	上製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
石井研堂君著	●水道の卷	全壹冊	正價十五錢 郵稅四錢
下田歌子女史著	●外國少女鑑	全壹冊	正價三十五錢 郵稅六錢
巖谷小波君著	●鐵の狼 附 藁の牛	全壹冊	正價七錢 郵稅二錢

（後付の二）

發兌元 東京日本橋區

度發行圖書

著者	書名	冊數	定價
菊池法學士著	●議會及政黨論	全壹冊	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
根本文學博士著	●老子講義	全壹冊	正價五十錢 郵税十四錢
水谷不倒君校訂	●脚本傑作集	下卷	正價六十錢 郵税十六錢
長谷川天溪君著	●塙檢校	全壹冊	正價十三錢 郵税四錢
熊谷文學士著	●フランクリン	全壹冊	正價十三錢 郵税四錢
重宗工學士著	●工場管理法	全壹冊	正價八十錢 郵税十錢
松林伯圓講談	●菅公	全壹冊	正價三十五錢 郵税八錢
恩田農學士著	●排水乾田稲作改良法	全壹冊	正價三十五錢 郵税六錢
小林鍵太郎君編	●互先定石集	全三冊	正價各十五錢 郵税各四錢
三好文學士著	●牛董	全壹冊	正價十三錢 郵税四錢
壇野法學士著	●國際貿易論	全壹冊	上製六十錢郵税十錢 並製四十五錢郵税八錢

本町三丁目 博文館

明治卅五年

著者	書名	冊數	定價
寒澤振作君著	商業文範	全壹冊	正價二十六錢 郵税六錢
岸上質軒君著	明治二百五十家絶句	全壹冊	正價六十錢 郵税八錢
松井廣吉君著	上杉謙信	全壹冊	正價二十錢 郵税二錢
宮田修吉君著	新撰日本歴史問答	全壹冊	正價二十錢 郵税四錢
青木文學士著	邦語獨逸文章論	全壹冊	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
石井研堂君著	瓦斯の巻	全壹冊	正價十五錢 郵税四錢
永井金升君著	狂歌の栞	全壹冊	正價二十錢 郵税六錢
飯島立峯君著	米國渡航案内	全壹冊	正價四十錢 郵税八錢
井上文學士著	甫水論集	全壹冊	正價五十錢 郵税十錢
松井文學士著	邦語佛蘭西文典	全壹冊	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
久保文學士著	四書新釈論語（下）	全壹冊	正價四十錢 郵税八錢

發兌元 東京日本橋區

（後付の四）

度發行圖書

著者	書名	冊數	正價	郵税
干河岸櫻所君著	●日本女子立志編	上巻	正價六十錢	郵税十錢
武田櫻桃君著	●新撰世界地理問答	全壹冊	正價二十錢	郵税四錢
石井研堂君著	●寫眞の巻	全壹冊	正價十五錢	郵税四錢
富塚法學士著	●土地法令大全	全壹冊	正價五十錢	郵税六錢
下田歌子女史著	●家庭の心得	全壹冊	正價三十五錢	郵税六錢
落合直文君著	●本居宣長	全壹冊	正價十五錢	郵税四錢
福地櫻痴居士著	●山中平九郎	全壹冊	正價三十錢	郵税六錢
中村法露君著	●高田屋嘉兵衛	全壹冊	正價十三錢	郵税四錢
江原春夢君著	●果樹草花盆栽庭造園藝全書	全壹冊	正價六十錢	郵税八錢
石倉翠十葉君著	●本派本願寺名所圖會	全壹冊	正價六十錢	郵税十錢
幸德秋水君著	●兆民先生	全壹冊	正價二十錢	郵税六錢

本町三丁目　博文館

（奧付の五）

明治卅五年

著者	書名	冊數	正價	郵税
木村小舟君著	●春夏秋冬理科手引草	全壹册	正價三十八錢	郵税八錢
松下憲三郎君著	●蠶体解剖論	全壹册	正價三十五錢	郵税六錢
于河岸貫一君著	●日本女子立志編	下卷	正價六十錢	郵税八錢
大槻如電君著	●大槻磐水	全壹册	正價十三錢	郵税四錢
山田富太郎君著	●及第者答案集	全壹册	正價三十五錢	郵税六錢
下田歌子女史著	●學校の心得	全壹册	正價三十五錢	郵税六錢
久保文學士著	●四書解釋孟子	上卷	正價六十錢	郵税十錢
幸田文學士著	●東洋歴史	全壹册	上製五十錢 並製卅五錢	郵税十錢 郵税八錢
佐々木信綱君著	●竹柏園集	第二編	正價三十五錢	郵税八錢
内田不知庵君著	●社會百面相	全壹册	正價五十五錢	郵税十錢
大島工學士著	●電氣工學一斑	全壹册	正價六十五錢	郵税八錢

（後付の六）

發兌元　東京日本橋區

度發行圖書

著者	書名	冊數	定價
大山五郎君 加藤勇君著	銀行法規 書式判決例	全壹冊	特製六十五錢郵稅十錢 並製五十錢郵稅八錢
森山法學士著	歐米商業實勢	全壹冊	特製六十錢郵稅八錢 並製四十五錢郵稅六錢
長谷川誠也君著	新撰西洋歷史問答	全壹冊	正價二十錢 郵稅四錢
幸堂得知翁校訂	種彥短篇傑作集	全壹冊	正價六十錢 郵稅十六錢
小林鍵太郎君著	近古名人打碁集	全壹冊	正價十五錢 郵稅四錢
福島陸軍少將著	四聲聯珠	全壹冊	正價二圓五十錢 郵稅二十錢
西海枝靜君著	實用露和會話	全壹冊	正價五十錢 郵稅四錢
日本鐵道株式會社	日本鐵道線路案內記	全壹冊	正價四十五錢 郵稅十四錢
小原法學士著	行政法汎論	全壹冊	上製五十錢郵稅十錢 並製卅五錢郵稅八錢
山口慶一君著	新舊對照刑法蒐論	全壹冊	正價八十錢 郵稅十二錢
石井研堂君著	紡績の卷	全壹冊	正價十五錢 郵稅四錢

本町三丁目 博文館

（後付の十）

度發行圖書

著者	書名	冊數	定價
石倉翠葉君著	●日光名所圖會	全壹冊	正價六十五錢 郵税十二錢
野口法學士著	●銀行新論	全壹冊	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
安部磯雄君著	●市制論	全壹冊	正價四十錢 郵税四錢
石井研堂君著	●活版の卷	全壹冊	正價十五錢 郵税四錢
小原法學士著	●行政法各論	全壹冊	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
小林鍵太郎君著	●近世名人打碁集	全壹冊	正價十五錢 郵税四錢
徳田實也君著	●蠶業經濟論	全壹冊	正價三十錢 郵税六錢
鷹野止水君著	●新撰國文問答	全壹冊	正價二十錢 郵税四錢
小林劍三郎君著	●通俗衛生眼のはなし	全三冊	正價十八錢 郵税四錢
血達磨著	●夢判斷	全壹冊	正價二十錢 郵税四錢
博文館編輯局校訂	●俊傑神稻水滸傳	下卷	正價六十錢 郵税十六錢

本町三丁目 博文館

明治卅五年

著者	書名	冊數	定價
町原工學士著	●動力發生及分配	全壹冊	正價壹圓 郵税十二錢
天城安政君著	●增訂商業讀本	全二冊	正價十五錢 郵税四錢
太田才次郎君著	●新撰漢文問答	全壹冊	正價二十錢 郵税四錢
眞水工學士著	●家屋改良建築法	全壹冊	正價四十錢 郵税六錢
著管緣蔭君著	●學生日記及通信用紙	全壹冊	正價二十二錢 郵税八錢
上野法學士著	●法律辭典	全壹冊	正價六十錢 郵税四錢
井上農學士著	●農學初歩	全壹冊	正價十五錢 郵税四錢
岡崎遠光君著	●銀行政策	全壹冊	正價壹圓 郵税十二錢
博文館編輯局校訂	●俊傑神稻水滸傳	全壹冊	正價六十錢 郵税十六錢
月田農學士著	●家禽學	全壹冊	上製五十錢郵税十錢 並製卅五錢郵税八錢
鳥谷部春汀君著	●明治人物小觀	全壹冊	正價三十八錢 郵税八錢

發兌元　東京市日本橋

度發行圖書

著者	書名	冊數	正價	郵税
高田法學博士 吉田巳之助君 譯	●政治學及比較憲法論	合本	正價二圓七十錢	小包送四百匁
桑木文學博士 關山富君 著	●論理學綱要	全壹冊	正價四十錢	郵税六錢
横山理學博士著	●天文講話	全壹冊	正價壹圓拾錢	郵税八錢
横山理學博士著	●地學概論	全壹冊	正價九十錢	郵税六錢
杉山重義君編	●英文演説集	全壹冊	正價四十錢	郵税四錢
永井法學士著	●社會經濟原論	全壹卷	正價壹圓	郵税十二錢
吳文聰君著	●經濟統計學	上卷	正價壹圓	郵税十錢
吳文聰君著	●經濟統計學	下卷	正價壹圓	郵税十錢
關如來君著	●明治之令孃	全壹冊	正價二十五錢	郵税四錢
津田梅子女史著	●グリーキ、ストリーズ	全壹冊	正價四十五錢	郵税四錢
ベーコン君著	●フエリーテルス	上卷	正價四十錢	郵税四錢

區本町三丁目　博文館

明治卅五年

著者	書名	冊數	定價
久保文學士著	文章軌範精義	中	正價四十錢 郵稅八錢
板倉中君著	經世危言	全壹冊	正價四十錢 郵稅六錢
島林瀧太郎君著	新美辭學	全壹冊	正價壹圓三十錢 郵稅十四錢
饗庭篁村君著	巢林子選註	全壹冊	上製壹圓 郵稅十二錢 並製八十錢 郵稅十錢
坪內文學博士著	英詩文評釋	全二冊	上製壹圓六十錢 郵稅十六錢 並製 上卷七十錢 郵稅八錢 下卷六十錢 郵稅六錢
本田增次郎君著	處世要訓	全壹冊	正價三十錢 郵稅六錢
信夫淳平君譯	歐州貨幣史	全壹冊	正價壹圓 郵稅十四錢
有賀法學博士著	國法學	上 下	上卷一圓七十五錢 郵稅十六錢 下卷一圓二十五錢 郵稅十四錢
諸井恒平君著	煉瓦要說	全壹冊	正價四十錢 郵稅六錢
桑木文學博士抄譯	哲學史要	全壹冊	正價壹圓四十錢 郵稅十四錢
杉山重義君解說	都市發達論	全壹冊	正價四十錢 郵稅四錢

發兌元 東京市日本橋區

(後付の十四)

明治卅五年度發行圖書

著者	書名	冊數	正價	郵稅
藤生金六君著	英文 高山探撿	全壹冊	二十錢	二錢
津田梅子女史著	英文 法螺先生	全壹冊	二十錢	二錢
吉田法學士 柴原法學士 共譯	實業之帝國	全壹冊	二十五錢	四錢
戸澤姑射君著	愛と心	全壹冊	三十錢	六錢
村山敏雄君編	ヘレワード	全壹冊	二十五錢	四錢
英學新報社校訂	英文 白百合	全壹冊	二十錢	二錢
英學新報社編纂	英文 學生日記	全壹冊	二十五錢	四錢
押川春浪君著	武俠之日本	全壹冊	四十錢	六錢
スワン氏著	イングリッシュシーンス	三	十錢	二錢
元良文學博士著	倫理及宗教	全壹冊	五十錢	六錢
淺野文學士譯註	奇々怪々	全壹冊	二十五錢	四錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

恐るべき腦充血を根治す

◉神經をしづめ數年難治の腦病を全治す

腦病にて平常逆上し通じ惡く精神鬱ぎ目かすみ耳鳴り不眠等の病症

頭痛・・・めまひ、腦充血、腦膜炎を患ふ人又婦人血の道にて逆上する病症

神經症にて僅かな事を案じ過ぎ其れが爲め腦を痛め搐搦等を起す病症

逆上一切に用ひて數年不治の難病を全治する世界唯一の良劑なり

農商務省登録商標



偽物あり此商標に注意

●健腦丸は實業家官吏神經家投機家學生僧侶其他常に腦髓を勞する人持藥として少量宛を用ひ賜へは胃を健康にし腦を强壯ならしめ血液の循環を能くす殊に大酒家には缺くべからざる藥にして婦人子宮病にて逆上する病症に用ひて大効ある●既に實驗患者の熟知する所なり論より證據二三週分を試よ

◉本劑の販路盛大なるを羨み類似藥を販賣するものあり御購求の節は上部の商標と丹平商會名義に御注意を乞ふ
◉賣捌所は全國到る處ろ藥舗に取次販賣せり
◉本舗への御注文は郵便爲替又は郵券代用一割增の事

◉健腦丸は常に持藥として連服すれば逆上を引下げ殊に中風卒中を未發に防ぎ身體强壯となるは健腦丸特有の効なり

●藥價表

	藥價	郵税
一ヶ月分	金壹圓	十錢
十三日分	金五拾錢	六錢
七日分	金參拾錢	四錢
三日分	金拾五錢	四錢

本家 大坂心齋橋八幡筋南 電話東九百〇一番 丹平商會本店

分店 大阪平野町堺筋北 電話東千〇三十七番 丹平商會分店

女學世界
每月壹回五日發行
第參卷第五號
(明治參拾六年四月五日發行)
(明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可)